TRAL REVIEW

明治三十年一月廿九日[illegible]
大正七年四月廿八日印刷納本
大正七年五月一日發行（每月一回一日發行）

中央公論

五月號

第三十三年第五號　第三百五十六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

英國・バーミンガム大學總長
ロッヂ博士著
高橋五郎譯

三版出來

死後の生存

オリバア・ロッヂ博士が無線電信可能の原理を發見せる最初の學者なることは、科學界周知の事實であるが、又**心靈學者**として現今世界を通じての**第一人者**たる事も萬人の知る所である。博士は科學界の泰斗で兼て哲學宗教の造詣深く、心靈に關するその**最新の學說**は**奇蹟の復興**を科學的に立證せる者と云はれてゐる。本書は博士の代表的名著であつて、其識見遙かに尋常科學者流の見地を拔くは勿論、洵に**新時代の豫言者**たる觀がある。いま高橋先生の忠實明快なる全譯成る。**死後の生存**即ち肉體の死後**個體靈魂**の**生存**は今や明確に立證せられたと云ふものである。尚**附錄**として有名なる「ワルレス博士の**靈怪實在論**」を添へてある。

四六判總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百十餘頁
正價壹圓七十錢
郵稅十二錢

新刊 製本愈々出來

英國 ジョン・ラスキン著
文學士 栗原古城譯

胡麻と百合

●王者の寶庫と女王の花園

四六判總布製
全一冊
價壹圓參拾錢
郵稅八錢

東京本郷西片町 **玄黃社** 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ニイチエ全集 第三編

黎明

別に題して『道徳的先入見に關する思想』と云ふ。著者の所謂『沒自我の道徳に對する戰役』の開始は、最も嚴密なる意味に於て、自由思想家フリイドリッヒ・ニイチエの勇敢なる第一歩也。乃ち『人間的な餘りに人間的な』に於て先づ理想的な餘りに理想的なものより解放されたる彼は、本書に至つて更に人間的な餘りに人間的なものをも、實證論的反動の乾燥と低調とをも超脫し、藝術家ニイチエ自身への健全なる歸還を表明せり。而して先に冷酷の否定を辿りしものは、其の否定の道を行き盡くして、漸く熱烈の肯定に向はむとす。これは是れ、大なる否定の後の大なる肯定への一轉機也。壯烈なる新生命の曙光也。

ニイチエ原著
生田長江氏譯

▼總洋布大阪極美本▼
▲定價金壹圓六拾錢▲
▼郵送料金拾貳錢▼

人と藝術叢書

一冊六拾錢づゝ
送料一冊六錢宛

海外近世の文豪思想家の日記書簡集または回想記の類を集め逐次刊行する新叢書にして裏面乃至側面より其の人と生活とを窺ふを得可く、何人にも興味多きことを信ず。

第一編 トルストイ書簡集

石田三治氏譯（新刊出來）

杜翁が全生涯の書簡中より最も興味深く價値高きものを選びて譯し詳密なる註解を加へたるもの。譯者は夙に杜翁研究を以て知らるゝ赤門出身の士也。

第二編 トルストイ日記

昇曙夢氏譯（新刊出來）

トルストイ日記中、その偉大なる心靈の高潮期に屬する部分を選びて譯出せるもの。彼が其の日常に於いて如何に生活し如何に思索せるかを覗ひ得可きもの也。

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

（前付の二）

有島武郎著作集 第四編 新刊

叛逆者

有島生馬氏裝畫

定價一册五拾五錢。送料六錢づゝ

有島武郎氏の作品の傑出せる所以、もとより一二にして止まらないが、思想的背景に富めるは、その最も主なる一つであらう。而して、『叛逆者』一卷は、氏の思想的背景を示した感想集として、最も注目す可きものである。近代的生活の創始者にして人生の未來に對して暗示深き教訓を與へたる近世の三大藝術家ロダン、ホイットマン、ミレーの三者に就きて語れる『叛逆者』『草の葉』『ミレー禮讃』の三長篇、いづれも單なる解說でもなく、評論でもない。實に著者の燃ゆるが如き感激をやるに、情熱的にして而も絢爛なる筆を以てせるもの。正に新人の一經典として、三誦四誦すべきものであらう。

既刊目次

■第一編 死 ■（六版）

■第二編 宣言 ■（六版）

■第三編 カインの末裔 ■（四版）

野村愛正氏著 ■ 北野恒富、島成園氏挿畫

大阪朝日懸賞一等入選小說

明ゆく路

『大阪朝日新聞』に於て、賞金一等壹千五百圓を懸け、露伴、藤村、魯庵の三氏を選者として、弘く長篇小說を募集するや、集るもの實に二百餘篇。中に於て其第一等の榮冠を贏ち得て天下の視聽を聳かしめたるものは『明けゆく道』なりとす。作者野村氏は文壇の新人、今や清新切實の作風を以て認めらるゝに至れり。氏の最大精力を傾盡せる本篇の、嶄として高く傑出せるものたるは、亦喋々を要せざる也。

新刊出來

大版特製美本 ■ 定價金壹圓 ■ 郵送料八錢 ■

東京牛込矢來中ノ丸 振替（東京）一七四二

新潮社

電話番町 長八〇九番 八九九番

□製本出來□

笹川臨風先生新著

江戸むらさき

▽定價壹圓　送料八錢　中判函入

水道の水にて産湯を遣ひ神田明神の氏子たるを誇とする著者の面目眞に躍如たるもの本書の如きは蓋し稀也。本書江戸の大盡江戸の通人江戸の女を語り、或は花見、納涼、夏祭、歳暮の今昔を述べ、料理の變遷を說いて江戸名物の一なる物の賣聲に及ぶ。江戸文化の俤、江戸趣味の香、紙上に澎湃して興趣無限！

名著六種

書名	著者	定價	送料
祖國を顧みて	法學博士 河上肇	一〇〇錢	八錢
軍談	故海軍中將 秋山眞之	一〇〇	八
文明の末路	イ・トネリー	一〇〇	八
現代の藝術	故文學博士 上田敏	一三〇錢	送料八錢
社會と自分	故 夏目漱石	一二〇	送料八錢
人性論	醫學博士 永井潜	一三〇	送料十二錢

東京南紺屋町　實業之日本社發行　振替東京三二六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京高等師範教官 水田光先生著

本田庄太郎畫伯裝畫

修身お伽噺

本書は尋常小學修身教科書に聯絡をとり、その中の主なる德目を選んでこれをお伽噺に仕組んだのである。その収むる處の修身例話は二十篇何れも内外の口碑傳説に材料を求め、清新なる内容に尊い教訓を含ませた、この種お伽書類中の白眉である。故に本書は、學校に於ては能く修身講話の資料となり、一方家庭の通俗的讀物としてこれを兒童に與へて、最適の良書たるを失はない。本書の趣旨とする處は著者の序文に見て戴きたい。

◈四六判・本文四號
活字振假名付
◈原色版口繪並に石版數度刷挿畵二十葉
入・函付

正價 金九拾錢
……（内地送料八錢）……

鹿島鳴秋先生著

細木原青起畫伯裝畫

お伽十五夜物語

現今お伽文壇にあつて、最も輝ける未來を有する著者の最近の創作集である。著者は在來のお伽噺の形式に慊らず、その取材、描寫に於て夙に一新生面を開いたことは、世に定評のある處である。本書収むる處の十五篇の物語は、何れも著者が心血を注いだ新創作であり、且つ少年の日の追憶の詩の結晶である。兒童教育家は一面兒童文學の理解者であらねばならぬ。批判者であらねばならぬ。この意味に於て本書をおすすめする。

◈四六判・本文五號
活字振假名付
◈石版數度刷二頁大口繪並に色刷挿畵十五葉入・函付

正價 金壹圓拾錢
……（内地送料八錢）……

◈版元・東京・神田 するが臺下 中西屋書店 電話本局四一〇一及二〇一九 振替口座東京二八一六



萬年筆の大暴落!!

▼五六圓の萬年筆が二圓餘で買へる

萬年筆が安く買へるやうになつた、萬年筆は最近非常に安く出來て居るにも不拘市場の賣値は從前通りで一文も値下しないで矢張暴利を貪つて居るのは實に不都合千萬である

本社は社會の爲めに率先して、茲に大調節をなし原價を以て最良品を提供する、尚萬年筆の製造等の内幕を總て詳細に公開して、從前の暴利萬年筆屋を征伐すべし、この詳細書はハガキにて申込み次第無代進呈すべし。

●正拾四金ペン、エボナイト軸大形最優良品市場價額四圓五拾錢以上六圓

原價金貳圓三拾錢（送料十二錢）

◎責任保證付

◎正拾四金ペン附市場價額金壹圓八拾錢

原價金九拾錢（送料十二錢）

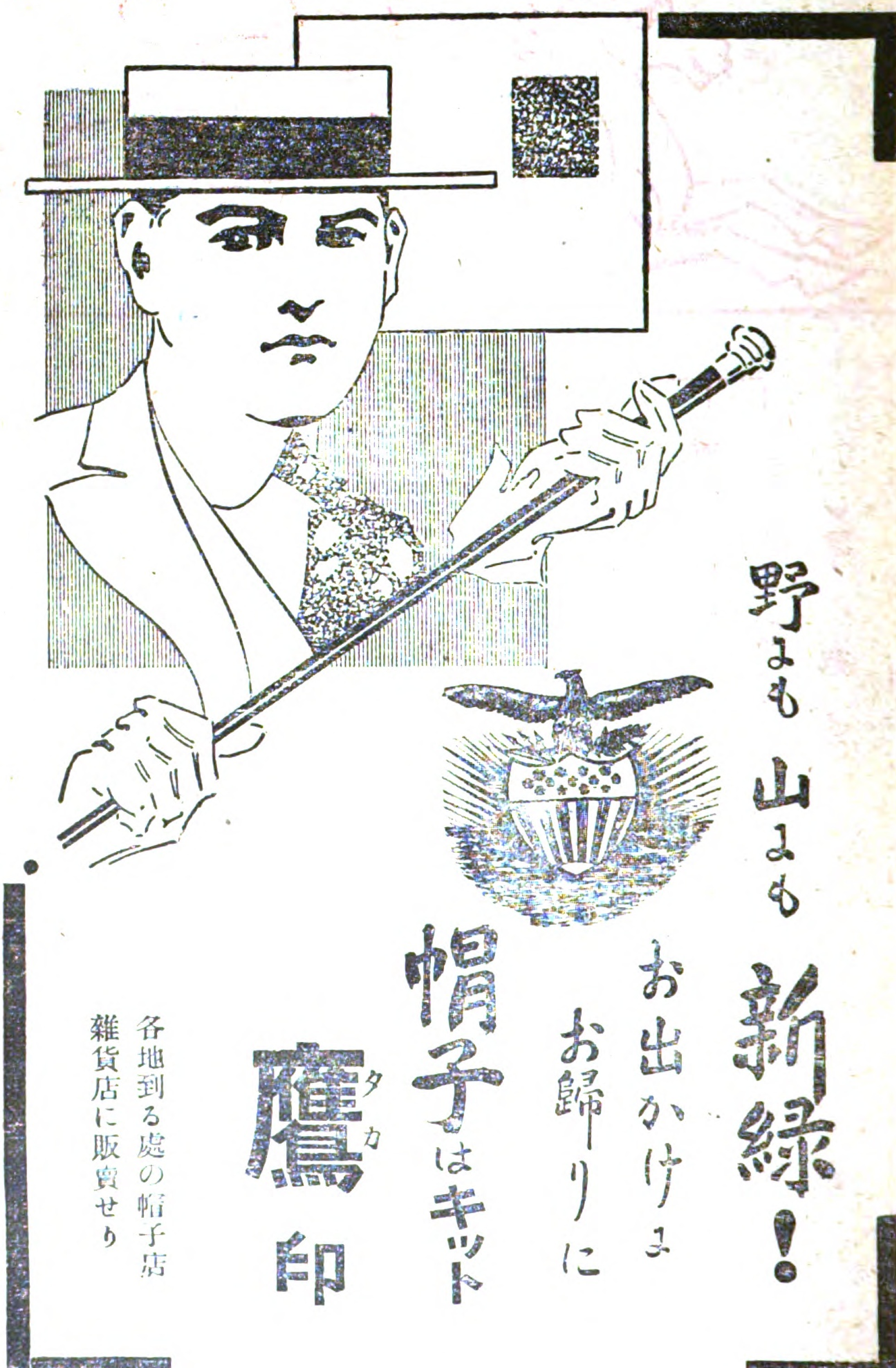
ホーマ萬年筆製造發賣元

東京市本郷區大學正門前

文成社

振替一九四六七番

電小石川 二〇一〇番 二〇一一番


野よも山よも
新緑！
お出かけよ
お帰りに
帽子はキット
鷹(タカ)印
各地到る處の帽子店
雑貨店に販賣せり



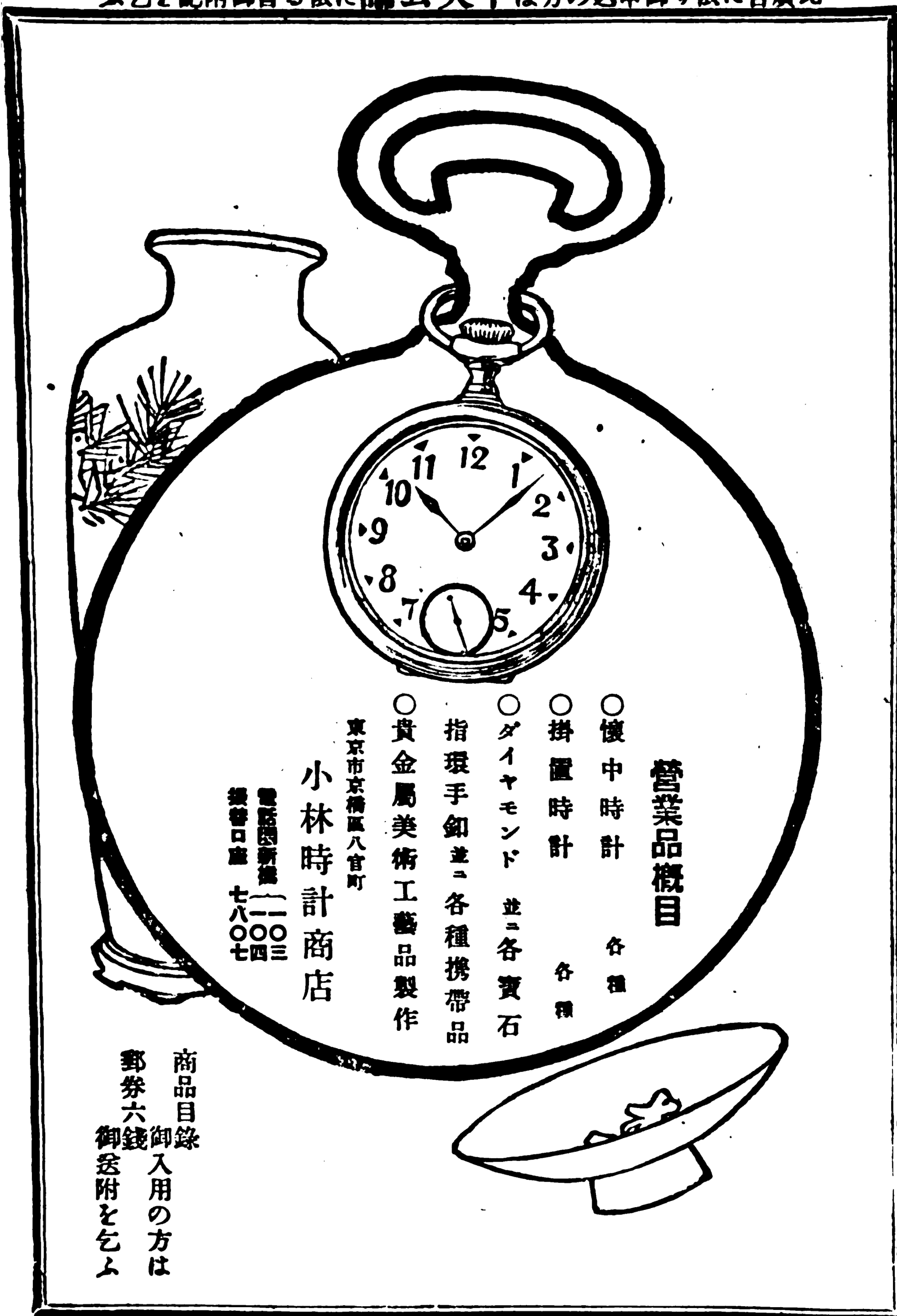
中央公論第三十三年五月號目次

▼公論

▼說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



A SUNDAY IN BRANDENBURG
BY CARL KAYSER-EICHBERG

中央公論



第卅三年第五號
五月號
第三百五十六號

露國過激派の實勢力に對する過小視と其政治思想の價値に對する過大視

大山郁夫

（一）政治と社會現象の現實相

事物を正しく認識する必要が、何時の世にも存在するものであることは、今更改めて謂ふまでもない。而して近代世界が殊に此必要を痛切に意識し來つたことも亦、一般世人の熟知して居る所である。さればこそ科學の價値は益す尊重せらるる傾向を呈し、而して又各個の種類の科學に於て、その研究方法が次第に重要視せらるるに至つた譯である。

政治学

現今に於て自然科學上の知識が、文化科學若しくは社會科學上の知識よりは、一般に遙に精確であり、從つて遙に多く適用性を有して居る樣に見えるのは、其原因が多々あることであるが、その中に就いて最も睹易きものを求むれば、前者が意思現象以外の自然現象を取扱ふに反して、後者が主として意思現象をその對象となし、從つて前者が實驗（エキスペリメント）を中心として研究を遂行することを得るに反し、後者が實驗（エキスペリメント）を行ひ得る場合が、極めて狹少なる範圍に局限せられて居るがためである。而してこの社會科學上の知識の精確を阻害する原因は、何時まで經つても、恰も影の形に副ふ樣に、斯學に附纏ふべき運命を有して居るものであるから、社會現象の說明は、永久に自然現象の說明よりも遙かに困難であるものとして殘らねばならぬ。

それにも拘はらず、一切の社會現象に關して出來るだけ精確なる知識を必要とする程度は、自然現象に關して同じ事を必要とする程度に比して、決して遜る所がないのである。殊に國家政治の運用の方面より之を見れば、社會現象に關する精確なる知識の所有に關しては、その出發點に於て既に極度にその必要を感ずるものである。蓋し政治はその最終の目的に於て、國家といふ渾一體の全般の向上發展（この用語は、功利主義者の所謂「最大多數の最大幸福」とは區別せねばならぬものである）を圖る技術であるから、無論あらねばならぬもの――即ち軌範に歸結するものではあるけれども、而かも此技術は無より有を生ぜんとするが如き幻術の類ひではなく、あるがまゝのもの――即ち現實に立脚して更に理想の方向へ進一步を策せんとする種類のものであるから、社會現象の現實相を討尋することが、軈がて政治の基礎的作件を構成するものでなければならぬ。

(二)各國政治家の煩悶

若し夫れ政治上の多くの軌範に至つては、恐らく現代ほど――殊に歐洲戰亂勃發以來の世界ほど――更に切言すれば、昨年の十一月に於ける露國第二革命以後の世界ほど、相場の激動したことは、前古恐らく多く類例を見ざる所であらう。素より第一には歐洲戰亂が、續いては露國の第二革命が將來した世界的變動は、一朝一夕に無雜作に準備せられたものではなく、幾多の世紀の進行のまにまに、久しく文明世界の社會の基底に於て醞釀せられて居たものが、曠古の大事變の衝動に依つて、一時に表面に爆發したものたるに過ぎないことは事實である。けれども、この爆發が餘りに突飛であつて、而かもその結果として生じたる一切の政治的、社會的軌範の價値轉倒が餘りに急激であつたことは、優に一般人の驚魂駭魄に値し、且つ各國の政治家をしてその進退去就に迷はしむるに十分であつた。現今に於ては、各交戰國の政治家の地位の安危は、實に一髮の機に懸り、その功罪の分岐點は、密雲重疊の裏に鎖ざされてある。由來盲目で通つて來た「運命」は、この際殊に盲目を極めて居る觀がないではない。

アングロ・サクソン系諸民族が古來勝手に誇り來つた財產の神聖及び契約の自由の觀念や個人的自由の思想の現狀はどうであるか？ 英米二國に於ける政府の權力は、各別にロイド・ジョージ及びウッドロー・ウイルソンの政府の下に於て、正さにその絕頂を極めんとして居るではないか。之に反して獨逸帝國の官僚的專制政治は、ベートマン・ホルヴエッヒ時代よりミヒヤエリス時代へ、ミヒヤエリス時代よりヘアトリング時代へと下るに從つて、次第にその箍が緩んで來る傾向を示して居るではないか。此際極東に在つても、今より約一個年半以前に擧國一致內閣の大薙刀を眞額に振翳して現はれ出でたる軍閥

内閣が、内治外交上の總括的失敗をば、纔に對議會策の部分的成効で蔽ひ得て、以て一時の小康を得たものの、無能外相の輕卒より出兵問題に躓いて進退の自由を失ひ、氣息奄々として例の大薙刀の遣り場に窮して居る現象もあるのである。併しながら、政治家が多少の程度に於て途方に暮れて居ることは、殆んど全世界に渉る出來事である。只そのために極端なる神經衰弱に罹つて、例へば無暗に過激派思想を恐怖しながら、却て自ら全國取引所の停止といふが如き過激派擬ひの政策を突拍子もない時に持出す程の政治家の現はれる樣な病的狀態が、此日本に於て最も進んで居ると言ふのならば、それも言へないことはなからうが、それにしても、孰れの列國と雖も、多少の程度に於て或る種の錯亂を感じて居ないものはない有樣である。強固なる軍事内閣（ウォー・キャビネット）の下に久しく忘れられて居たトーリースとホイッグスとの昔ながらの分界線が、動もすれば表面に浮び出たがる英國や、軍閥派と議會派との間に板挾みになつて居るバイエルン出の首相を魔誤附かせて居る獨逸も、この例しに漏れて居るものとは謂へまい。かの砲聲殷々の最中に講和の謎の掛合ひが始まつたり、一國の首相と他國の外相との應酬の間に、互に對手を虚言家呼ばはりする珍現象が起つたりするのは、直接間接にこの錯亂狀態を反映して居るものではないか。

（三）新舊混淆より生ずる錯亂狀態

右の如き錯亂狀態は、新生の事物と舊來の事物との混淆より生ずるものであるといふ道理は、今も昔も變る所はない。新物が一時に舊物を排除する狀態が忽焉として現出すれば、問題は比較的簡單であるべき筈であるが、斯の如き一足飛びの變化は、一搖りの大地震のために琵琶湖が掘れて富士山が隆起し

たといよ昔の記錄に見る樣な自然界の現象の上には起り得ることであるかも知れないが、人間の社會生活の上には、斯んな事は過去に絕えてなく、將來にも決して有り得べからざることである。一部分は將來の希望に活きると同時に、一部分は過去の記憶に活きる人間は、理想と共に傳統を持つて居る。この理想と傳統との平衡(バランス)が、何かの原因のために急激に崩壞する時に革命が發生するものであるが、革命の後には又或る種類の反動が到來するものであることは、第十八世紀末から第十九世紀へかけての革命の問屋であつた佛蘭西の歷史が之を證明した。而して斯の如き反動が革命の極端の進行を制止する力となつて働くのみで、全然その效果を破壞するに及ばざる程度のものである場合には、社會的秩序の恢復と社會的制度の進步とが、共に贏ち得られるのが普通である。この點に於て第十九世紀の佛蘭西は、幸福なる運命の享受者であつた。

けれども過激派の支配に歸した露西亞の今後の運命は、果してどんなものであらうか。過激派の惹起した革命の總勘定は、今尙ほ決して終了して居るものと見ることが出來ないのである。豹は竟にその全身の斑點を消すことが出來ないと同じく、過激派の革命の幻術も、全國人口の七八割を占めて居る無學の農民を瞬く間に賢明にすることも出來なければ、彼等の「暴力の福音」も、一朝にして全國の階級的差別の痕跡を掃蕩し去ることも出來ないであらう。永久の平和と人道主義とを絕唱する彼等と雖も、この福音の防禦と宣傳とのためには、舊時代の遺物たる武力を代表する赤衞軍に據らなければならなかつたのは、我等の注意に値することである。彼等のコスモポリタニズムも、彼等をして獨軍の侵略を平氣で看過することを得しめなければ、我國の海軍陸戰隊の烏港上陸をも冷靜に默視することを得しめなかつ

た。また彼等の虎の子同然の主張たる民族自決主義も、彼等が可なり強烈なる壓力をルーマニアや、ウクライナや、フインランドの諸民族の上に加ふるを妨ぐることが出來なかつたのである。

比較的舊物破壞に徹底したる露國過激派と雖も亦、希望と記憶とを同時に具有する人間の集團であるだけに、新事と舊物との間に介在して、多大の矛盾撞着に陥らざるを得なかつたものとすれば、過去に對する執着心が更に強き爾餘の列國の國民及びその指導者たる政治家が、新舊兩時代の繼ぎ目の上に立つて、始終暗中模索の氣味に陥つて居るのは、また無理もない話である。けれどもこの漆黑の闇の中にも、尙ほ微かな一點の光を認むることが出來る。而してこの光の方向を正確に見定めることが、各國の政治家の當面の急務であらねばならぬ。

「凡べての物皆流る」と昔の哲人が敎へた樣に、變化は人間社會の通則である。故に或る見方よりすれば、古來人事の上に於て、變らぬものは變るといふことだけであるとも謂ひ得られる。けれども各個の事物の變り行くには、皆それ〲特有の變り方があつて、外面に浮び出づるものが、必ずしもその眞相を表示して居るものとは限らない。されば急激なる變化と見えるものも、必ずしも急激なる變化でなく、停滯せる局面と見えるものも、必ずしも停滯せる局面でない場合が決して少くはない。此間の機微を察して之に應ずる途を怠らざることは、政治家に取つて最も重大なる任務とすべきものであるが、殊に世界に於ける事件の進行の上に表裏反復の變幻測られざる今日の時局に於ては、各國とも時勢を透視し且つ之に策應し得る卓拔なる見識手腕を兼ね具ふる政治家の出現を翹望して居るのである。

斯の如き着眼點の上に立ちて、我國の朝野の人士の露西亞に於ける過激派の實勢力及びその將來に於

ける影響に關する觀測に對すれば、遺憾とすべきものが極めて多い樣に思はれる。殊に我國の政府者が當初より過激派の實勢力を過小に見積つて居た結果、之に對する外交的施設に於ては、彼等が常に嘲笑の眼を向けて居た米國の外交家などに、着々先を越されて居るのは、單に誠に見苦しいことであるのみならず、我國の前途の利害より見ても、極めて容易ならざる事でなければならぬ。之と同時に我國に於ける一部の人士が、過激派思想の道徳的價値を過大視し、端的にそれが今後の世界を風靡すべきものと考へて居る樣に見えるのは、決して當を得たる見解と稱することが出來ないものであると思ふ。

（四）過激派の實勢力及びその前途

現今の所、過激派が露西亞に於ける唯一の事實上（デ・ファクトー）の政府を構成して居ることは毫末も疑ふべからざる事實である。ロマノフ朝家の覆滅以來、リヴオフとか、ミリユーコフとか、ケレンスキーとか、コルニロフとかいふ名が露國の政治舞臺の上に且つ現はれ且つ消え、泡沫夢幻の果敢なさを現前に示したが、去る十一月の第二革命以來は、レニンやトロッキーの名が次第に常住的のものとなるに至り、獨墺との單獨講和をも締結すれば、外債破棄の宣言をも斷行し、資産階級征伐をも始めれば、土地分配の布告をも發するといふ風に、對内對外の政治に於て大膽無謀に振舞ひ來つた。而かも彼等が高唱する物質的基礎に立脚する地上の天國の建設の福音は、素より附和雷同を特色とする無知なる街頭の群衆の時好に投ずるに十分であつたがために、彼等は今やその支持に依つて傍若無人に政權を行使して居るのである。無論反過激派の勢力も各地に散布して居つて、就中シベリアの一隅に割據して居るセミヨノフの率ふる軍隊の如きは、某國の軍事的援助をさへ受けて盛に活躍して居る樣なことのあるのも亦事實たるを失はないが、

それ等は未だ大勢を動かすに足るまでには至らないのである。此事實は正面より之に對立して、正當に之を認識しなければならぬ。而して此形勢を適當に計量して施設經營を行ひ、着々事實上の効果を收めつゝあるのは、年來素人外交家の名の下に霞ヶ關官人の嘲笑の標的となつて居た米國の當局者であつて、それとは反對に、此形勢を適當に計量することを知らずして、その結果、此方面に關して事毎に機宜を失し措置を愆り來つたのは、先頃の議會以來外交上の識見を餘程鼻先にぶら下げる樣になり掛つた病外相の麾下に集つて居る我國の當局者である。時務に通ぜざる一部の軍人連に誤られたのだ、と言つたところで、とても國民の前に申し開きが立つ筈のものではない。要するに寺內內閣が對露外交上に於て、今までに取返しの附かない失策を演じた經過は、その對支外交上に於ける成績――若しくは敗績と毫も擇ぶ所がなく、共に是れ時局の睨變（ダーク、チェンジ）の表裏を精細に徹底的に觀測することを得る明がなかつた事實に胚胎して居るものであらねばならぬ。

けれども露國過激派の實勢力に關する觀測を間違へたのは、獨り日本の當局者のみではなく、實はその先棒たる英佛等の聯合側諸國の當局者も亦その責任を頒たねばならぬものであつて、殊に駐露英大使たりしブキャナンの如きは、此點に關して最も重大なる過失に陷つたものである。而して此聯合側の違算に依つて最も利益を受けたものは獨逸であつて、此國が今日ポーランドや、クールランドや、クッアニアや、ウクライナ等に於て擁して居るその大勢力の如きも、之に負ふことの少くないことは、容易に想像し得られることである。殊に獨墺軍が現に西部戰線に於て占めて居るその優越地位は、最も直接に之に基因して居るものであることは、別に取立てゝ説明するにも當らないことである。孰れにしても露

國過激派の實勢力は、聯合側諸國の當局者が當初に於て推測して居た所のものよりは遙に强いものであつたことは、今日に於ては最早明瞭なる事實となり、而して此狀態は今後、少くとも諸外國の壓力が實際的に露西亞の上に加へらるゝことが出來る時までは繼續するものと見て差支がなからう。若し果して然らば、機敏且つ巧妙なる外交に依つて露國民の多大の歡心を贏ち得たる米國を除いては、聯合側諸國が挑發した露國民の反感は、今日に於て既に聯合軍が西部戰線に於て痛感して居るその直接的不利益の外に、その間接的不利益は更に永續的に殘存して、是等諸國の政治家の深き悔悟の種となり、一種の苦痛を以て反復的に想起さらるゝ運命を有するものであらうと思はれる。

（五）過激派式政治の將來

尤も右の如き事を言へばとて、今日過激派が行つて居る政治の樣式が、現狀のまゝ永久に存續すべき見込みがあると謂ふのではない。國家生活は何時までも渾沌無秩序の狀態の下に永續すべからざることは、人類が石器時代よりこのかた、幾千萬年の間に得來つた經驗に徵して之を卜知することが出來るものであつて、而してこの經驗は、過激派の「鎧袖一觸」の下にさうは安々と崩落すべきものとは考へられない。無論過激派「政府」の新實驗は、單に露西亞の政治に向つてのみならず、他の諸國家のそれに向つても同樣に、種々の貴重なる新らしき暗示と敎訓とを與へたことは事實である。けれども、過激派式の政治がそのまゝの形式では、縱令へ露西亞國内に於てでさへも久しく行はるるに堪へやうとは、到底想像し得られないことである。この事を確言するには、少くとも次に擧ぐる樣な根據がある。

第一に、過激派のプログラムは、分配問題に觸れることを主として、生産問題を閑却して居るから、

今日に於て見る如く、國家生活の物質的基礎の重要視せられる時代に於て、それが永續的に有効なる實績を擧げ得やうとは考へられないのである。無論彼等は、總べての男女は働かねばならねものであることを揚言して居るが、これだけの原則では、到底複雜なる現代の產業組織の要求に應ずることが出來ないことは明瞭である。また彼等は資產階級に對して挑戰して居るが、彼等が斯の如き階級鬪爭の勝利者となつて資產階級を剿滅するに成功した時は、軈がて是れ彼等自身がその惡果を收穫する時であらねばならぬ。蓋し現今の狀態の下に於ては、產業界に於て指導的地位を占め、その組織統括の任務を取ることに訓練せられて居るものは、大抵は此階級に屬するものであるのみならず、發明、發見、改良等の方面に於て優秀なる技能を有するものも亦、多くは此階級中のもの、若しくは此階級の勢力圈内に在るものである。されば露西亞に於ても此階級を薙ぎ倒すことは、直にその國内の富源開發を妨げ、運輸交通の機關の進步を阻止する結果に導かねば已まぬものである。過激派の連中とても、到底久しきに亘つて斯の如き狀態の到來を坐視することを得るものではなからう。殊に昨今の露西亞國内に於て見る如く、食料品や薪炭の地方的分配の不均衡の結果として、各處の住民が每日非常に制限的に給與せらるる黑パンを嚙ぢりつつ、その胃腑に砭する樣な飢餓を凌ぎ兼ね、また嚴冬素雪の候に在つても、爐に一塊の石炭を焚いて暖を取ることすら叶はない樣なことでは、益す此問題を閑却することが出來なくなる譯である。一時多量のルーブル紙幣を得て生來稀れに見たポケットの膨らみに得意滿面であつた民衆も、一たびそが殆んど購買力なき紙片に過ぎないことを悟つた時は、瞬間の喜悅が永久の不平と變はり行くものであつたことも、亦想像し得られるのである。斯の如き次第であるから、過激「政府」と雖も、早晚生產問題に

頭腦を絞らねばならぬだらうし、而して生產問題に頭腦を絞る樣になれば、資產階級と妥協せねばならぬことを悟るであらう。否、最近の外電は、過激派「政府」が產業上の專門家を求むるためといふ口實の下に、既に資產階級と妥協し始めたことを報ずるに至つた。此種の妥協は、過激派の特徵の消滅の第一步に相當するものであらねばならぬ。

次に過激派政府は、國際間の紛爭を以て一に之を資本家の罪惡に歸し、國際的鬪爭に代ふるに勞働對資本の鬪爭を以てせんとして居る。如何にも之は眼前の事實に立脚した精確なる觀測に出でたものであることは、何人と雖も之を爭ふことが出來ないであらう。現代の資本主義が幾多の醜惡相を備へて居ることは世人の熟知して居る所であつて、我等の如きも既に屢ば斯く如き醜惡相に向つて挑戰したこともあるし、又將來に於てもその必要の消滅するまでは絕えず斯かる挑戰を繼續しやうと思つて居るのであるが、斯の如き資本主義の弊害は、法制上の方面に於てはデモクラシーの政治組織を實現すること、及び聰明に考量せられたる社會政策的立法を制定することに依り、又道德上の方面に於ては社會的奉仕の觀念を鼓吹する等のことに依つて之を矯正する事の方が、資本主義の產業その物を破壞して、却て角を矯めて牛を殺す結果を見るよりは、餘程有效であり、且つ氣の利いたものであるべき筈であつて、而して過激派「政府」と雖も、實際政治上の經驗を積むに從つて次第にこの道理を悟るに至るであらう。否、前に一言觸れて置いた外電の通り、若し果して彼等が資產階級と妥協を始めたものとすれば、彼等が業に已に善く箇中の消息を諒解したものとも思はれるのである。

且つまた、資本家と勞働者とが宿命的に犬猿の間に置かれて居るものと見るのは、一般の人間の本性

の純眞に對する侮辱ではなからうか。寧ろ資本家對勞働者の鬪爭は、何れかの側の上か、若しくは兩側の上かに私曲若しくは不公正がある場合に起るものであつて、殊に現狀の下に於ては、何と言つても强者の地位を占めて居る資本家が、只單に强者としての權利を意識するのみであつて、毫も强者としての義務を體得しない事實に基因する場合が多いものと見るのが適當ではないであらうか。我國の政府者が抱懷して居る溫情主義の社會政策が此問題を解決するには甚だ不十分なるものであることは言ふまでもないが、さりとて單刀直入的に資本家征伐を斷行して、彼等の權利の正當不正當を問はず、皆齊し並みに無報償に之を掠奪することを提議する過激派の沒收政策は、その外債破棄の宣告と共に、不公正極まるものであることは、また言ふを俟たないのである。今日の世界に於て、如何な過激派の連中と雖も、斯の如き秕政を行つて永久に安全であり得るものとは考へられないのである。尙ほ資本對勞働爭議の緩和事業に關しては、開戰以來英國政府が資本家と勞働者との間に立つて行ひ來つた調停的施設及びその顯著なる効果は、多大の光明を投げ與へたものであつた。兎に角、將來デモクラシーは、此難問題を解決するために極力盡瘁する使命を帶びて居るものである。

更にまた、國家政治の上に於て、資本家のみの放肆なる專制的支配を許す政體——即ちプルートクラシーを存置することが非常なる弊事であると同じく、勞働者ばかりの亂暴なるその日暮らし的政治を認むる政體——即ちモップ・ルールを實現することも亦、之に遜らざる弊事である。若し前者がアリストクラシーの頹廢的變體であるものとせば、後者はデモクラシーの墮落的變體である。而して道德的腐敗は必然的に兩者に隨伴せねばならぬものであるが、若し夫れ文化の源泉の涸渇は、前者に於けるよりも後者

に於て更に甚しかるべき筈である。文化の源泉の涸渇せる國家生活の無味乾燥なるは、黑パンを噛ぢるにも增したものであるべき筈である。眞のデモクラシーは level up すべきものであつて、level down すべきものでないことは、理論家が常に之を唱道し、又健全なる近代國家が事實に於て辿りつゝある方向である。且つ夫れ道德的理想が缺乏し、文化的進步が停止せる國家は、その國民に對するインスピレーションの絶無なる國家であらねばならぬが故に、そは自然に放任して置いても、早晩自動的に解體するか、若しくは他國に併合せらるゝかの運命を免れないものである。

加之、各民族の國家的結合の基礎は、過激派の連中が假面的にもせよ公言して居る樣な脆弱なものではない。共同の歷史、共同の傳統、共同の文化、——そして多くの場合に於ては共同の言語及び詩歌の與ふる共同聯想で繫がれて居る民族の精神的團結は、資本對勞働鬪爭などの表面的風波の基底を貫通して居る力强き流れであることは、開戰以來、各交戰國に於て國民意識が目醒ましく喚起せられた事實に徵しても明白である。過激派連が講和の基礎條件に關して民族自決主義を認めたのは、一面に於ては、彼等が此事實の前に於てその本來の主張を裏切つたことを物語るものであるが、一面に於ては彼等の方便主義、妥協主義を標示するものである。此事といひ、又前に擧げた彼等の資產階級に對する妥協の一件といひ、將又、本篇の起首で述べた通りの彼等の多くの矛盾撞着といふものは、彼等の主張の如何に屈伸性に富むかを證明するものであると思ふ。彼等が若し何時までもその支配的地位を持續し得るものとせば、そは全く彼等の此屈伸自在性に負ふべき筈のものであつて、同時にその際には、彼等は過激派連としての特徵を喪失して仕舞つて、平のデモクラッツとして殘つて居る筈であらねばならぬ。

過激派の弱點の掉尾の傑作は、何と言つても、その軍隊解散の主張及び實行の一齣である。殊にそれ

が獨逸といふ大軍國を西隣に控へて居るので、手早く言へば、狼の側に小羊が立つて居ると言つた樣な、イソップの挿繪にでもありさうな圖を見せて居るから、一層その傑作味を增して居る譯である。そして減らず口に掛けては並ぶものなき過激派連は、獨逸の軍國主義が露西亞の上に下る前に、彼等自身が先づ自己の主義を獨逸に宣傳して、その軍國主義を根こそぎ掃ひ退けるのだと主張して居るのである。成る程獨逸國內の土地は過激派思想の種子を播くに適して居る所がないとは謂へない。且つ豫てより露國過激派と默契を有する獨逸の社會民主黨の獨立派は、その培栽を掌る園丁たることを辭するものではない。故に此實驗が愈よ執行せられるとなると、縱し過激派の注文通りの結果を見ない迄も、可なり面白い現象を生ずることだらうと思はれる。それは兎に角、此軍隊解散の一點に關しても亦、彼等の方便主義、妥協主義が、遺憾なく發揮せられて居ることは、十一月革命以來の赤衞軍の行動や、獨軍侵入當時の過激派連の新抵抗軍組織の計畫に就いて見ても、その間の經緯が容易に諒解し得られるのである。

要するに、過激派が後には反動的勢力に亡ぼされるか否かは、未來が解決すべき問題であるが、假りに現今の過激派が何時までもその支配的地位を持續するにしても、それは彼等が早晩必らず擡頭し來るべき反動的勢力と或る種の妥協をした上のことであらねばならぬ。而して此事が實現せられた時は、過激派は最早や過激派でなくなり、而して最良の場合に於ては、一個の進歩派若しくは改革派に化成して居る時であるべき筈である。過去に於て必要に遭遇する毎に、盛に方便主義、妥協主義を發揮し、一種の屈伸性を自由自在に行使して、今日に在つては既にその本來の立場たるマルキシズムより餘程遠退いて來て居る彼等過激派連のことであるから、將來に於ても亦依然として各場合の必要が命令する所に從つて、

その同じ特徴を盛に利用するものと推定しても、差したる違算に陷ることは萬あるまいと思ふ。

附記。　過激派が從來に於て臨機應變的に宣言した諸多の箇條のうちには、前掲の民族自決主義の外に、世界の永久平和に關すること、公開外交に關すること、無併合無賠償の平和に關することなどと言つた樣に、人道主義に立脚する種々の提案のあつたことは、我等の記憶に尚ほ新なる所のものである。けれども斯の如き思想は、獨り過激派の專賣物ではないことも、亦謂ふを竢たない。のみならず、過激派が永久平和を唱道することは、之を彼等の階級鬪爭の主張と併せ考ふべきものである。勞働者階級の立場より出發して、自階級以外の階級に對する愛を宣傳せず、之に對する憎惡を挑發して、永久平和を說き、人道主義を唱ふる所に、明かに彼等の矛盾がある。併し矛盾などを構つて居ない所に過激の特徴があるのである。過激派の消息に通ずる人々の記述する所に依れば、過激派主義の附和雷同者中には殘虐なる暴行を意とせぬものが多く存在するが、レニンやトロッキーを始め、その中心人物等は、單に學者的傾向の人々であるのみならず、物の解かりも中々よく、殊に彼等に接する人々に對して丁寧慇懃の好印象を與ふるものであるといふ。是に類することは、内田大使を始め、近來の露西亞よりの歸客の齊しく我等に語る所である。

過激派の中心思想は、どこまでも物質本位の勞働者の地上の天國の建設の一點に歸著する。故に過激派思想の道德的價値を批判せんと欲せば、その平和主義の主張とか、人道主義の題目に據つてではなく、此點に據つて之を爲さねばならぬものである。斯の如く、善く見ても唯物的道德觀の上に立つに過ぎざる過激派思想は、我等の立場より見れば、その理想としての價値が極めて稀薄なものであるが、それにも拘らず、それが多數の追隨者の上に一種の宗敎的勢力を及ぼし、之がために身命を惜ま

ざる點をさへ出だすに至つたのは、不思議といへば不思議の樣であるが、冷靜に考ふれば、一はその敎義が簡明であつて俚耳に入り易きためでもあり、一はその附加物たる平和主義人道主義に偉大なる魅力があるためでもあり、一はその中心人物の人格的勢力に因るものでもあり、一は之を謳歌する露國民の國民性に負ふものでもあらうが、同時にまた、一はそれが現代の國家制度及び社會組織の弱點に對して鋭利なる解剖刀を加へたためでもあらねばならぬ。

過激派の提議する勞働者の組合を基點とする政治組織は、餘りに空想的であつて、現代に於ては到底永續的に實行し得べきものでなく、殊にレニン政府が自ら隨時に之を裏切つて居るのであるから、今は之に對する細評を省くことにする。

過激派思想の道德的價値が乏しいにも拘らず——若しくはその道德的價値が乏しい理由に依り、敎育せられざる民衆の間に多大の傳染力を有することは、獨り露西亞に限つたことではない。而かも苟くも此思想が根本に於て不健全なるものである以上は、各國の政治家は今の內より之に對する對應策を講じて置くことが必要である。かの國家權力に依る苛酷なる抑壓を以てその傳播を阻止することが到底出來ないものであることは、その本家本元たる露西亞に於て十分に證明せられたる所である。自分は本篇に於て、我國の立場より見たる過激派思想防止策として、政治組織の根本的改造、社會政策の大規模の實行及び社會的新倫理の建設を提唱し、殊に最後の一項に力を注いで說述せんとする計畫を有して居たのであるが、未だそれに逹せざる內に、早くも豫定の頁數が盡きたのは、遺憾の至りである。併し、此點に關しては、本誌上に於て改めて讀者諸君に問ふことが出來る機會があらう。

（七——四——二一、大阪にて。）

新聞紙と國民教育

文學博士 谷本富

一 新聞紙の任務

凡そ世界萬國を通じて今や最急速なる進歩を爲し、種類に於て、數量に於て、非常に増殖して、千古未曾有の偉大なる勢力を逞くして居るものは新聞紙である。是れはそれ〳〵新聞紙の歴史を觀れば分かる事で、例へば米國に於ては稍舊い所では、フレデリック、ハドソンが千八百七十三年に紐育で出版した『千六百九十年より千八百七十二年までの合衆國に於ける新聞事業』F. Hudson—The Journalism in the United States from 1690 to 1872. N. Y. 1873. と云ふ書物がある。試に之れを吾が國の年代に直すと、元祿三年から明治五年迄で、隨分長い。又その後の事は書物も頗る澤山あるらしいが、ジエ・イ・ロージャースの書いて千九百九年にシカゴで出版した「米國の新聞紙」J. E. Rogers—The American Newspaper. Chicago. 1909 などが一寸は良い參考書であらう。各國の統計は煩を恐れて今一々列擧しないが、之れを吾が國丈けに限つて見ると最近の『新聞總覽』は大正六年末に於て全國日刊新聞紙の總數約三百八十種を掲げ、特に最近の計算では、最大新聞紙と稱せらるゝものは、既に發行部數五拾萬に達して居ると云ふことである、實に盛なりと謂はなければならぬ。

併し新聞紙の勢力が斯樣に偉大であると同時に、又其の一個人は勿論、社會國家乃至廣く世界人類の上に及ぼすところの影響は、善かれ惡かれ識者の決して輕々看過する事を許すべからざる筈で、或は政黨者流は之れを利用し、或は投機商輩は之れに由つて暴富を圖らんとするは言ふ迄もない。特に夫の獨逸のカイゼルの如きは、大戰勃發前より早く新聞政略を制定し、東西

到處私に新聞紙を買收して、これを自家の藥籠中に置き、盛に他を蠱毒して居た樣で、それは隣邦支那に於て夙に氣付いた事であるが、西歐に於ても西班牙などではその主要なる新聞紙は概ね獨逸人の勢力範圍内に在つたと云ふ事を聞いては、轉々寒心せざるを得ない。思ふに恐らく北米合衆國などでは更に甚しいものがあつたらう。否一時は英國にさへ手を伸さうとしたらしい。

此等の事も一々仔細に研究したらば頗る面白い事であらうと信ずるが、併しそれはそれとして、自分共の常に一層深く注意しなければならない事は、寧ろ此の勢力偉大なる新聞紙と國家前途の隆替由つて繫がるところの國民教育との關係であらうと考へる。而して此の事の左樣に必要なるに拘らず、所謂識者の連中も動もすれば輕々看過しがちに成るらしいのは、大に注意せねばならぬことで、尚且つ自分共の切に希望する所は、新聞紙業に從事せらるゝ人々も亦時には自から反省せられんことである。若し自己反省が出來難いとすれば、甲乙相互に批判するも宜しからう。何はともあれ新聞紙業者の自己反省なり相互批判なりは、是れ又一般的に看て非常に必要な事で、是非實行したい事であると思ふが、實際は時々競爭上商賣敵として同業者の惡口を言ふ事はあつても、大抵は魚心あれば水心と云ふ譯か、餘り無遠慮に直言するものは無い樣であり、それに各自々家勢力の偉大なるに慢心して、毫も世間を憚らず、自ら反省するなど云ふ殊勝の心掛の無いらしいのは、竊に遺憾に思ふところである。

○

斯樣な次第で、今玆に此の新聞紙と國民教育なる問題を論ぜんとするに方つて、先づ西洋の教育書類を繙いて見たが、トンと面白い記事もなければ議論も無いらしい。米人デキスターの『合衆國教育史』Dexter—History of Education in the United States N. Y. 1904. にはさすがに第十五章全部を擧げて特に新聞紙並に定期刊行物の事を敍述して居る。併し固より格別の事は無い。之れより先き自分は京都帝國大學文科大學教授在職中には、時々新聞紙の教育的方面といふ風の問題

を提出して、教育科の學生に演習を課した事があるが、その折にはフランシス・フェルトンと云へる人の曾て學位論文としてシカゴ大學に提出した『新聞紙記事の犯罪並に其の他の反社會的行動の發達上に於ける影響』Francis Ferton—The Influence of Newspaper Presentations upon the Growth of Crime and Other Antisocial Activity. Chicago. 1911.と題する學術的研究の小冊子などを參考に供したが、その後間もなくスタンレー・ホールの『教育上の諸問題』Stanley Hall—Educational Problems. N. Y. 1911.といふ洪瀚なる書物が始めて到來したので、早速一閱すると其の第二卷に『教育學と印刷物』と題する一章があつたので、是ある哉と大に感心し、確に良參考書であると認めた。併しそれとても固より多く言ふには足らない。尚ほその頃吾が國でも『讀賣新聞』か何かで、略ぼ似た樣な事項に就いて諸名家の意見を徵集し、幾週間か聯載したこともあつたと記憶するが、孰れも例の通り一遍の御挨拶で、今日迄も永く記憶に存する程のものは見當らなかつた樣だ。

○

それに更に一歩を進めて丁寧に論じて行くと、元來所謂國民教育といふ名辭からが實は太だ曖昧なものである。誰人も知る通り此の四文字は早く吾が國の小學校令上に特筆大書せられてある樣で、小學校教育の目的は兒童身體の發達に留意して、道德教育國民教育の基礎竝に日常生活に必須なる知識技能を授くと云ふ風に定められて居るとすれば、既に極めて明白に解釋されて居るべき筈であるのに、其の實今猶ほ往々議論の種と成り、別して斯の國民教育の四字が依然として、曖昧である樣なのはおかしい。現に斯く申す自分は十餘年前率先して此の小學校令第一條の全く書き改めらるべき事を主張し、朝野教育關係者から多大の注意を惹いた樣な次第で、それは拙著『新教育講義』(明治四十年)に載せてある、而して又反對論者の重なるものには澤柳博士の『實際的教育學』(四十二年)を始めとし、森岡小川など云ふ高等師範學校教授連の論文や著書がある樣に見受ける。

何はともあれ現に國民教育と堂々標榜したる上は、それに相應する明瞭の概念が無くては成らぬ。或る人は之れを頗る廣義に解して、國民としての特質即ち國民性國民固有のクルツールを培養し傳授するにあるので、その重なる資料としては國語と國史があるとし、又或る人は之れを狹義に解して、寧ろ國家と稱する法治社會の團體的生活に於ける公民即ち獨逸語のスターツビユルガー、英語のシチズンとしての權利義務を明に會得せしむるものだとする。

兩說の是非は暫く措つて論じないが、併し通例世人の口にする國民教育と謂ふ名辭には、自ら特別の意味がある樣で、それは又他の社會教育と謂ふ名辭とは明に區別せられなければ成らぬ樣である。是れは學問上では最も興味ある題目で、一體に國民教育と謂ふ言葉は、昔は英米流の教育學說上には無かつたのである。蓋し英米流ではすべて教育の目的は人をして人たらしむるに外ない、即ち眞の修養として英語固有のカルチユアを與ふることを期したのである。言はゞそれは極めて個人的である、否寧ろ人格的である。而して一國一社會は斯かる立派なカルチユアのある個人に由つて構成せられさへすれば、則ち自ら立派な國家と成り社會と成るとした。

然るに獨逸流では又這のカルチユアの代にクルツールと云ふ事を以て教育の眼目と立て來た。カルチユアもクルツールも其の本は一つで、孰も拉丁語のクルツラ即ち耕作といふ名辭より出でゝ居ることは明瞭であるが、然かも今日獨逸語でクルツールと謂ふときは全然別義で、英語のカルチユアには寧ろビルズングなる名辭を當て、それとは別にクルツールと謂ふ時は、頗る公共的で團體的で、獨逸國、獨逸民族特有の一切の文化を總稱し、此の文化こそ獨逸國家の國質で基礎で命脈で、獨逸國家は此の獨逸文化の權化であると共に、其の維持者であり宣傳者であるとする。是れは實に普魯西が第十九世紀の初に於て、ナポレオン大帝の蹂躙するところとなつて憤然蹶起してより、フヒテやヘーゲルの最も熱烈に鼓吹した所で、トライチユケも

ベルンハルデーも乃至クラウゼもハルトマンも、誰も彼も皆其の流派に屬して、層一層これを擴大し、特に現皇帝は其の最大權化と看做されて居る。

即ち獨逸の教育は獨逸國民一般に此の獨逸固有の文化を傳授し、これを體膺せしめ、更にその發揮に各自應分の貢獻を爲さしめんとするものであつて、それがやがて國民教育の目的であるとする。語を變じて申さば、教育は國家に對して、國家の爲にし、國家に由つてすると看るので、それが即ち國民教育であるとする。

社會教育と謂ふ方では又此の國家といふ名辭の代に社會といふ名辭を用い、社會に對し、社會の爲に、社會に由つてすると看るので、一口に社會教育と言ふ中にも實は此の三樣の區別がある。然かもそれは獨逸などでは主として社會に由つてする邊にのみ即いて看る樣で、言はゞ社會その者を教育上の一エジエント（動手）として看るものである。他の英米流とても亦固よりさう云ふ風に看る事もあるには違ひないが、併しそれと共に自ら社會に對し又社會の爲にと云ふ事を、陰に陽に高調する樣で、獨逸の何でも彼でも國家々々と謂ふのと相對して居る。從つて斯んな場合に獨逸では例の文化即ちクルツールを唯一無上の物と推立て居るのに對して、英米流では他の開化即ちシヴイリゼーションを標榜する。クルツールの純國家的たり民族的たるに對して、シヴイリゼーションは寧ろ世界的であり人類的である。斯くして英獨教育精神の相違はクルツールとシヴイリゼーションとの對峙に由るので、實は今回の大戰爭さへも概言したらば、又クルツールとシヴイリゼーションとの衝突から來て居ると云ふ者がある。此の事は昨今歐米學者の頻に喋々する所で。二月一日の『東亞之光』の海外思潮欄にも何から抄譯したか知らんが「カルチユアとクルツール」との題で、ヒユーザーといふ人の論文が載せてあるが、併しそれよりも一層分かり易く之れを説明したのは、最近着ヅ・オーヴル博士の『獨逸と英國教育の比較研究』De Hovre—German and English Education; a Comparative

Study. London. 1917. と題する一書であらう。

○

國民教育も社會教育も平たく同一に視て以て、新聞紙のそれに對する位置なり關係なりを通俗的に立論するのは固より容易の事業であるが、併し一旦斯ふ云ふ風に學術的に綿密に考へて行くと、それは一寸容易に云々することは許されない。

そこで又元來新聞紙といふものを社會學上より觀たらばどうなるだらうかと思つて、座右にある新刊の書籍二三に照して見た。而して驚いた事は、それがトンと閑却されて居る事である。先づブラックマー、ギリン著の「社會學大綱」Blackmar and Gillin—Outlines of Sociology. N. Y. 1915.は目下好評を博して居るが、新聞紙の事は無い。次ぎにエルウッドの「社會心理學序論」An Introduction to Social Psychology. N. Y. 1917. を見る、是れにもない。一寸轉じてホリングワース、ポッフェンベルガー合著の「應用心理學」Hollingworth and Poffenberger—Applied Psychology. N. Y. 1917. にも有りそうで無い。そこに成るとさすがに矢張りギッヂングス氏はギッヂングス氏だけあつて、其の名著の「社會學原理」Giddings—Principles of Sociology N. Y. 1896. 中には、新聞紙の事も相應に丁寧に書いてあるから難有い。

ギッヂングスの說では、新聞紙なるものを以て、輿論の機關と看るのである。即ち輿論と新聞紙との關係を斯ういふ風に述べて居る。曰はく輿論と謂ふのは、一の自覺ある公共團體が何事に由らず一般の興趣を惹く事項に就いて下したる判斷であると定義して妨あるまい。斯かる輿論の發生は明に智的接觸並に交通に由る。從つて概言すれば輿論の高く發達することは、人口の比較的に稠密なる處に於て見られる。而して之れと共に討論を始めることが各階級の權利であると認められて居る事も同じく大切である。公會がすべて只だ行政上の手續で以て召集せられる樣な所には未だ眞の輿論は無い筈である。されば政治的に組織せられたる各社會に於ては、眞の輿論は全く自由なる立憲的政體の維

持に由ると謂って可なりだらう。尙ほ又眞の輿論は教育の一般的普及にも屬し、且つは安易者と貧民との間に正義と同情との關係が好く成立して、正直なる發表がすべての階級の自然の慣習である樣に成つて居ることにも由る。略して言ふと、共和主義の形態よりも精神が必要である。乃ち眞の輿論は佛蘭西よりも英國の方で一層高く發達して居る。而して眞の輿論の爲に不幸なのは、夫の米國の諸都市を冐瀆し管治を過らさせた夫の半犯罪的民本主義であると云つて、合衆國に於ける輿論の狀況に就いては、ブライス・の『米國の政治』Bryce—The American Commonwealth の第四篇に最良く書いてあるㇳ註して居る。

今玆に自分が此のギ・チングスの説を抄錄するには、其處に微意の在ることを諒察して貰ひたい。それは讀つて吾が國今日の立憲制や地方自治制の實情に想ひ到ると、まことに情なくなるからである。萬機公論に決すべしとは、畏くも明治天皇最初の御誓文五ヶ條中の一つで、實に立憲自治の新政は此に胚胎して居るのである。然かも實際吾が國には今も昔も果して公論なるものがあるか、眞の輿論があるかと云ふと然りと肯定する者は誰もあるまい。別して近頃地方自治の腐敗亂脈は言語道斷である。半犯罪的なる形容詞も尙ほ足らざるかも知れない。嗚呼是れ果して何の爲であらうか。

ギッヂングスは更に一歩を進めて曰く、但し一公共團體の精神が共和的であり其の團員が賢明であつたとしても、其の輿論は幾分かは少數の指導者の心に由つて鑄造せられる事は爭はれない。地方では今も尙ほ僧侶とか、旦那衆とか、醫師とかㇳ郷士民の思想を支配して居るところがあり、又多くの場所では實業家が其の勢を逞くして居る所もある。此實業家の方はそれは每時良いとは見受けられない。更に大規模の輿論となると、それは公會や新聞紙で取纏められ組織される。併しそれとても少數の思慮ある人に指導せられ、或は少數の利口な人に捏ね廻はされて居る。今日は固より英雄崇拜や理想主義に反動する時代ではあるが、さり

とで思慮ある人の社會的感化を蔑視するならば、それは大間違であらう。米國で新聞紙が輿論の重要なる機關と成つたのは、奴隷廢止運動の時からである。而して今日では一般に新聞紙は日々其の匿名で誰人のと云ふことの分らない意見の汎濫で以て、一切の個人的感化を壓倒し去つて居ると考へられて居るが、それは大なる間違である。新聞紙が輿論の上に最も深酷なる印象を與へるのは、それが誰か或る堂々たる人格の議論を載せるからである。公衆は知るまいが、新聞社の黒幕の後には世間に隠れて而かも儕輩には夙に其の力量を十分承認せられたる思想家があり、幾度の儕輩の思想や事業の上に深く其の個性を印して居ることを忘れてはならぬ。但し新聞紙が輿論の主なる機關たるは只平時のことのみで、政戰の激烈なるに至つては、其の以前の機關たる演壇が再びその活動を新にする。新聞紙が全然演壇や講座を凌駕したと云ふは又明なる誤謬であると謂つて居る。此の一段新聞紙と人物との關係を說きたる所は、如何にもその通りであらうと想はれる。而して吾が國目下の操觚界を回顧すると、何となく寂寥の感はありはすまいか、新聞紙と演說講演との關係は、吾が國では雄辯が未だ十分振はない樣なれば、自ら別論であらう。

兎に角輿論なるものは自由なる社會に行はるゝもので、而して新聞紙は其の好箇の機關と成ることは、是れで明であらう。併し他のクルツールを喋々し國家を第一とする、曰はゞ官僚的の獨逸の樣な國柄では、其處に果して眞の輿論なるものがあるかどうか疑はしい。自分の今の考では、眞の輿論はシヴイリジエーシヨンの産物であり、之れに對してクルツールの發動は夫の所謂ツアイトガイスト卽ち時代精神であらうと思つて居る。此のツアイトガイストといふ名辭は純粹に獨逸語であつて、英語には恰好の譯字が見當らない樣だ。スピリツト・オブ・ザ・エーヂでは直譯で面白くない。獨逸には時代精神あつて輿論なく、英米には輿論あつて時代精神が無いとも謂へやう。從つて又獨逸などでは新聞紙は輿論の代に時代精神を表明するの主要

機關だと謂つても妨ない。知らず吾が日本はどうであるか。

以上陳べた所を一括して言つて見ると、新聞紙が國民教育或は又社會教育の上に最重大な任務を行ふとすると、それは輿論なり或は又時代精神なりの主要機關となつて、國民なり社會一般なりを指導することであらう。而してそれは卓拔なる人物があつて此の指導の任に當るべき筈だと想ふと、新聞紙の國民教育、社會教育の上に於ける位置は、指導機關として輿論なり時代精神なりの構成發揚に與かるにありと謂いたい。吾が國今後の新聞紙は右の國民教育と社會教育の孰を主とすべきか、その主要なる客體は輿論か將た時代精神か、それは後に論じやう。

二　新聞紙の現狀

新聞紙の任務の重大なる所以は、前段既に略ぼ說述し了つたが、然らば世界各國新聞紙の現狀は果して如何であるかと云ふと、遺憾ながら概ね決して立派とは

申されない。先年も浮田博士がぼろ糞に吾が新聞紙を惡く言はれたので、端なく激論勃發した樣だが、併し浮田君の方に多少の過言があつたかどうかは知らんが、大多數の新聞紙はどうも餘り立派とは云へない樣であり、尙ほ其の後も上田博士や芳賀博士などは頻に新聞紙の記事の文字文章などに就いて皮肉な事を言つて居られた樣である。

いつであつたか、英國の一雜誌の上で、斯んな風の論文を目にしたとことがあつた樣に記憶して居る。それは新聞紙が社會に對する態度は古今三變して居る。最初は大新聞紙の記者は高く地步を占めて、自ら天下の木鐸を以て任じ、一世を指導するの概があつた。然るにいつとなく一變して、只だ傍に立つて事々物々批評を下すに止ると云ふ風に成つたが、今日更に一變して社會大小の出來事を報道するに過ぎなく成つた。否單に有りの儘に報道して呉れるのならばそれで宜しいが、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しで、今日の實際は世に媚び權勢に阿附して、針小棒大は物かは、曲筆舞文

捏造虛構も敢て憚らず、只管多く賣れたならば好いと云ふ調子で、所謂操觚者の德義は地を掃つた。是は畢竟亞米利加流の橫行跋扈に由るのだと云つてあつた。自分は今茲に其の出典を明記することの出來ないのを殘念に思ふが、此の觀察は決して誤謬ではないと信ずる。自分の從來の印象を告白すると、英國の『ロンドン・タイムス』は勿論、佛蘭西の『ル・タン』とか『フイガロ』とかは如何にも上品であるが、同じ英國でも『ペルメルガセット』や『デイリー・ニウース』と成ると品が落ちる。佛蘭西の『デバー』なども同樣で第二段に屬する樣だが、米國の新聞紙は大小を問はず概ね第三段で、面白いことは面白いにしても頗る下品である。而して夫の『ニユーヨーク・ヘラルド』などが追々歐洲大陸に侵入せんとする勢のあるのを認めて、成る程亞米利加流の橫行跋扈は、啻に巴里の大劇場に於ける看客禮服着用の上品な行儀を破壞するばかりではないと竊に浩嘆したこともある。

獨逸の新聞紙の話は又自ら別途で、今茲に詳說するの暇がないが、概言すると是れは例の新聞政略の爲であるが頗る陰險で、一刻も油斷の成らない樣な氣がする。而して例のクルッール尊重から何となく指導の態度を取るにしても、決して上品でなく、批評をするにしても公平を得ず、報道を主とする場合も亦粗野で、毫も面白いところは無い。何となく理窟ぽくて嫌に成ることが多かつた。

處で吾が國の新聞紙はどうかと云ふと、それは明治初年のものはどことなく氣位が高くて品が良かつたことは爭へない。『東京日々新聞』や『朝野新聞』などは特にさうであつた樣だ。尚又それと稍々後れて『時事新報』の出來た時も、三田一流の平民主義で、自ら他と面目を異にして居るにしても、一種獨立自尊の犯すべからざる氣品の備つて居た事は掩ひ難からう。小新聞は暫く別として、大新聞が賣と云ふ事に重きを置きだしたのは、明治十七年であつたか、矢野龍溪翁が海外漫遊より歸られてから『報知新聞』の上に初めて著く見はれた樣に思はれる。而して之と前後して黑岩涙香氏の『萬朝報』

を創握するあつて、其獨得の探偵小說趣味と共に「エロー・ペーパー」調子が大に横從したと謂つてよからう。爾來幾多の變遷があつて、今日では何れの新聞紙も指導とか批判とは第二位に置き、寧ろ主として報道に力を用ひ、迅速と奇拔とを旨として競爭するところから、往々其弊に陷ることを免れないのは、又已むを得ざる事であらう。恰好の適例は日々眼前に續出して、決して之れを蒐集するに難くあるまい。社說は失敬ながら如何に名文達筆でも、左程に多く讀まれないのが事實で、而して批判と謂つても夫の「大阪朝日」の「天聲人語」とか「大阪毎日」の「硯滴」とか乃至「萬朝報」の「机の塵」とかいふ風の皮肉な惡口が喜ばれ、平生豪さうな顏をして居る御連中のゴシップとか噂話とかゞ一般に珍重せられる傾がある。その三面とか七面とかの社會記事が誰人にも愛讀せられるのは言ふ迄もない。

將た又別に英書で斯んな事を讀んだ事もある。凡そ新聞記者は或は無冠の帝王ぢやなどと謂つて威張つて居るが、併し其の內幕は必ずしもさうとは行かぬ。夫のヂスレリーの小說類に描かれたところなどを觀ると、昔の新聞記者はヰッグ黨にしてもトリー黨にしても、それは慘めな者で、貴族に追從し其の頤使に甘ずると云ふ風であつた。それが全然獨立して自由の身と成つたのは、實にグラッドストンの力に賴ると謂はなければなるまい。併しそれと共に又その後は新聞紙は大抵一政黨の所屬たる風を馴致して、議論公平を期し難く、操觚者の德義は自ら一變したが、最近には又、實業家に買收せらるゝことが少くない。是れでは尙ほ一層惡いとあつたが、現に米國などでは早く此の實業家の跋扈を逞くするのを見る樣だ。

吾が國は之れと少しく事情を異にする樣だが、最初は文筆の才あり議論あり識見あり詞藻ある者、舊幕の遺臣と謂ふ樣な事で志を官途に絕ち江湖に放浪して操觚業に從事した者が少くない。栗本鋤庵とか成島柳北とかはこれで、而してそれに加つたものは私學私塾で西洋民權の議論を叩込まれた人々である。由つてどちらかと云へば、政府當路者には反對で盾をつくと云ふ

有樣であつた。尤も『東京日々新聞』などが早く大政官御用達の看板を掲げたのは、必ずしも後の所謂御用記者、御味方記者といふものとは同一視すべき譯でなく、寧ろ只だ當時の公文公布機關として、政府の用達をして居たと云ふに止まるのである。而してそれが一變して眞に御用記者と成り御味方記者と成つたのは、全く該新聞の社長たる福池源一郎が帝政黨を組織して、他の自由黨や改進黨に對峙しやうとした時からである。從つて一時は各政黨それ〴〵機關新聞紙を持つて居た。否今日でも地方では尚ほ此の公布機關として府縣廳の用達を務めて居る者も少くはない樣で、而して又同一地方に二新聞紙のある場合は、各々政黨の機關として互に鎬を削つて居るのも普通の事實である。只だ自分共の竊に憾いて居るのは、由來公平無私不偏不黨を標榜して居る筈の大新聞が、近頃變な動機からして或る政黨の肩を持ち、殆んど其の御用新聞なり御味方記者たる樣な態度を呈して居る事である。然り而して又官僚筋では頻に黄白を散じて、新に尨大なる雜誌を起させて居る樣子だが、知らず新聞紙にして既に彼等に買收せられたものはあるかないか。將た又實業家特に成金に買收せられたものはあるかないか。想うて此に到ると何となく心配に堪へざるものがある。どうか眞に王侯威武に屈せず、政黨の從屬たらず、實業家成金輩の道具でないものが一つだけでもあつて欲しい。さなくば前途遠からず亞米利加流の横行跋扈を見ることは疑あるまい。

○

凡そ米國新聞紙の弊風に就いては、前掲のスタンレー・ホールが教育といふ立場から仔細に觀察して居る。それは先づロージアースの『米國の新聞紙』を依り所として、曰はく米國の新聞紙は人民の嗜好を形成せんとするよりも、寧ろそれに反響し應接することを務めて居る樣である。勿論それでもまだ讀者の多數よりは良いかも知れぬが、何はともあれ大抵種々の方面から拘束を受けて何等の自由がないのは氣の毒である。請ふ看よ、第一は富豪や富豪のシンヂケートに拘束せらるゝ

樣で、彼等は新聞社の株式の過半數を占有して、多大の利益を貪るのみならず、由つて以て自家の計劃を推行するに便にし、何等の批難を許さないではないか。新聞記者は一面確に大會社大トラストに對しては、唯々として其驅使に甘じ殆んど奴隷と擇ばない。而かも斯くして傷つけられたる自由の欲望は、他の方面に於て放埒を極め、由つて以て僅に慰めて居るから困る。第二は又主要なる廣告依賴者に拘束されて居る。蓋し廣告は各新聞社の收入の最重なる途であるとすれば、お得意樣は大切にして、御機嫌を損じてはならぬ筈で、新刊書籍の批評も控目にして、出板店が廣告の得意先たることを思はねばならず。演劇や興行物の評判も亦同じ樣で、皆トラストの意を迎へねばならない。實際今日の新聞紙は何はさて措き廣告を第一とする樣に成つて來て居るから、主筆も數々營業部より色々の注文を受けざる能はず、而して營業部は又持主の方から每に注文を受けて居るのである。第三には又主筆に拘束せられるので、新聞紙編輯の權は全く其の監督の掌握にあるとすれば致方ない。斯くて二重三重に自由を束縛せられて居ることは、やがて彼等が其の他の方面に於て放埒であり破廉恥を敢てして憚らざる心理的說明とも成らう。されば今後米國に於て新聞記者たらん人々は、何よりも大膽であり敢爲冒險の勇氣を持つて欲しいと、ロージャースは希望して居る。否良い新聞紙と謂はれるには、虛僞で以て阿諛してはならぬ。偏見を裏書してはならぬ。感情を激昂させてはならぬ。過激であるな。こせ〳〵するな。掻廻はすな。法律を盾にし過ぎ、自分の都合で誹謗律を改變さす樣では行かぬ。恰も公衆の要求して居るものばかりを献立するが主能ではあるまい。正誤さへすれば言譯は立つと高をくゝつて、勝手なことをするな。盗んで來た樣な通信を載せたり。すべて人の陰事を發いたり、姿を變へてそつと後から跟けるなどいふこともするな。折々は誤聞訛傳の爲に起る痛苦迷惑を考へて見るが好いと云ふ風に言つて居る。是等は固よりエローペーパーに對しての警告ではあるが、併し大新聞紙とても亦時には頂

門の一醜となることもあらう。

將た又スタンレー・ホールは曾て十七種の新聞紙の日曜號を點檢して、其の記事の非教育的なることの最甚しいに驚いたと謂つて、其項目を一々列擧して居る。それは家庭の亂脈、美人局、離婚の訴訟、良人の秘密、死刑の宣告を受けたる罪囚の獄中日々の生活、南部伊太利の毒殺事件、種々の自殺談、大犯罪の探偵、强盗、放火、森林中の捕物、南米の殘酷の私刑などを始め、少年强盗團が少女を襲つた事とか、淪落婦人と會見の記事とか、更に進んで謎の解答變裝女子の發見もあり、學校生徒の長距離必勝の秘訣もあれば、女優舞臺成功の内幕話などもある。又歐洲諸國皇族の濫行なども少くない。勿論その外にも或は聖書の金言を拔萃したのもあり、說教の大概を示したのもあり、懸賞論文もあり、鐵道事變の善良なる記事もあり、遊戯の詳細なる報告もあり、又學術上の發明發見談や、種々の珍奇の異聞を蒐集するもあり、婦人欄にも意匠や何かの新案を載せたのがあるのは、固より妨なしと雖も然かもその多くは餘りに想像を逞くして、奇々怪々の冒險談や動物譚などを載せたるは面白くない。是れでは各學校で資力の許す場合は、純教育上の立場から純正の新聞紙を作らねばならぬ樣に成ると謂つて、之れに關する種々の注意を與へて居る。又學校教師の一般新聞紙に對する注意も丁寧に說いて居る。

スタンレー・ホールの意見では、教育家と新聞記者とは常に相提携すべきもので第一、教師は自ら新聞紙の檢閱係を以て任じ、兒童並に靑年に取つて材料文體さては靑年欄の教育價値や廣告等の諸方面に渡つて、最非難少き新聞紙を推薦する樣にし、第二には教師は時々新聞紙を教室に於て教授の上に利用すべく、又第三には新聞紙を介して父兄と意見を交換することもあるべし。而して新聞記者の側にても亦各新聞紙は一定度は年少者に對する教育新聞たる覺悟を以て、成るべく學校の事、教育界の出來事を紹介する樣にし、學術上の發見發明は成るべく精確に而かも分かり易く報告し、新刊の著述や文學上の進歩成功をも一々報道し、

尙ほ便宜其の紙上に彼等年少者の爲にする一欄をも設くる程にして、すべて其の途に特別に堪能なる通信員を置く様にしたく、高等の學校では或は學生自ら通信員たる様にすれば、尙更に便多からうなど〻云つて居る。然り而して自分は又之れに因みて、新聞紙は當時の最信用すべき史料たる丈けの心掛あらんことを望むや切なりと申したい。

兎に角新聞紙とは如何なるものかと云はゞ、一言以て之れを掩はゞ一層高級の心が一層低級の心の上に日々働く事 The daily play of the higher mind upon the lower と云ふにあらう。一國民の印刷物は其の自意識である。之れに由つて人民の希望、畏怖、愉悅、悲哀、日常生活、經驗、思想、情操、向上並に沈低を映寫するの鏡面たることが出來る。從つて又各人種をして自覺的たらしむ效がある。其の毀譽褒貶は實に人民自身の聲である。從つて又男も女も其の實生活の大部分の間は、之れから主要なる教育上の感化を受くる筈で、それ當に自分並に世を知識するの媒介物たるばかりでなく、又一切の教化的働因の中で最も有力のものと看ねばならぬ。善惡孰れの途に向ふにしても、とにかく今日の世界は讀む世界である。而して書物よりは新聞紙の方が遙に多く讀まれる。又遙に多く印刷せられるとすれば、眞に今日の世界は新聞紙の時代であると謂つて宜しからう。新聞紙中には善い事もあり惡い事もある眞實もあれば虛僞もある、それを調べて新聞紙の內容如何を標識したらば、それはやがて其の時代其の國土を標識することに成る。新聞紙の改良はやがて文明人を一層改良する事に成る。新聞紙を理想的たらしめたならば、又やがて吾儕凡夫をして超人の王國の到來を急がしむる譯と成ると言つて、スタンレー・ホールは其の論文を結んで居る。尤も今茲には僅に其の一班を抄出したのに過ぎないから、原書に就いて更に一讀される事は、新聞記者諸君教育家諸君に取つて共に必要だらうと思はれる。

〇

此のスタンレー・ホールの論文は固より太だ有益で

あるが、併し實は常識的で眞に科學的たるにはまだ遠い。それは一面は新聞紙と社會との關係交渉の重要なる脈絡がハッキリしないし、一面は其の關係交渉の如何を調査する方法が立つて居ないのを見て分からう。畢竟それは同氏の論文の根據となつたローシャースなどのもの始めさう云ふ風だからでもあると思はれる。從つて一層精しく此問題を研究しやうと云ふには、尙ほ廣く米國で近時積出する諸雜誌上の論文などを涉獵するが必要である。それも新聞記者の立場から書れたものは固より都合が惡い。成るべくは社會學の方向から研究したものであることを望むのは當然であらう。例へば「フオーラム」第十五卷の七百五頁以下に載せられたるスピードの「新聞紙は今現に新聞を供するか」Speed—Do Newspapers Now Give the News? などは好い參考物であらう。それは即ち紐育市發行の四大新聞の記事に就いて、千八百八十一年と千八百九十三年と、中、十二年を隔てたる兩年度に於て、其記事の各種類の紙面を占むる區域の大小增減を調査したもので。

而して概言すると犯罪幷に犯罪人に關する事項の增加が著しいと謂つて妨ない。特に「ウオールド」紙などは前には此の種の記事は皆無であつたが、後には百分の六を占むるに至つたことを示して居る。次いでキルコックスなど云ふ人も亦二百四十種の新聞紙に就いて研究して居る。是れは「米國の新聞紙」といふ題で「米國政治學社會學大學年報」の千九百年七月發行第拾六卷中に收錄されてある Wilcox—The American Newspaper. Annals Amer. Acad. Polit. and Soc. Sci. XVI. その他まだ色々の人のものがある樣だが、併し此の點から看ると、前に一寸申して置いたフエルトンの論文などが最も進步した精確なものである樣に思はれる。

フエルトンは其の論文の表題の通り、新聞紙記事の犯罪幷に非社會的行爲の增長上に於ける影響を研究せんとした者であるが、氏は所謂非社會的行爲なるものを以て意外に範圍の廣いものであるとし、其の犯罪行爲に比して恐るべき點は敢て劣らざることを力說して居る。而して此の新聞紙と社會顯象との關係交渉の脈

絡は全くサッゼッション即ち暗示に由ることを證明し、凡そ暗示の群衆に對する影響感化の恐るべき事は非常に大なるもので、既に暗示と謂へばそれは無意識であることの多いのは贅辯を俟たず、從つて又新聞紙記事も必ずしも明言細說を要せず、只だ筆の使ひ樣一つで却て言外に無限の力を揮ふことがあらうと謂ひ、それより進んで此の關係交渉の調査方法としては、一面は新聞紙面に於ける此の暗示を與ふべき記事と認めらるゝ文字と全紙面との百分比例を算定する。それは固より必ずしも雜報種のみとは云はぬ、他の論文雜錄寄書など云ふ廣義のエヂトリアルスの方にも相應にあることは爭はれない。然り而して一面には公私各種の方面に就いて犯罪は勿論、大小の非社會的行爲と謂ふべきものゝ、直接間接に新聞記事の爲に暗示せられたのだらうと認められるものを問合せて取調べたのである。斯くして其の結果同國現時の新聞紙の記事は、豫想以上に社會に惡影響を及ぼしつゝある事を明にした樣だが、尙ほその救治法としては、一つは營業上の利害勘定を離れた新聞紙を作るので、それは相應の資金を別に据置き、且つ公有の物としてするなどが宜しからう。併し實際今日ではそんな風に一定の別資本が遊ばされて置いて、利益を計らないなど云ふ事は言ふべくして行はれもせず、新聞紙の公有など云ふ事も固よりむづかしいとすれば、今の場合では矢張り法律上の取締を一層嚴重にするより外ないと云ふ事に歸着して居る。而して公衆の輿論も亦成るべく斯かる法律の制定併に勵行を催進する樣にして貰ひたいと希望し、裁判官は言ふ迄もなし、夫の少年犯罪に關係ある人々は別して益々此の問題に留意せんことを望むと云ふ風に書いてある。

自分はこれを一讀して、其の新聞紙と社會との關係交渉の脈絡を暗示の心理に基づかしめた事に吾が意を得た。蓋し此の暗示と謂ふ事は近世社會心理學の骨髓である事は喋々を待たぬが、スタンレー・ホールは未だ十分これを力說して居らず、キッチングスも亦殆んど全然閑却して仕舞つて居る。それでは固より新聞紙の

社會的位置の半面しか見られない筈であらう。回顧すれば自分が吾が國に於て始めて夫の群衆心理なるものを『大阪毎日』の紙上に月餘に亘つて聯載し江湖の注意を惹起してからは、早十年に垂として居るが、爾來斯學は益々進歩しつゝある樣で、當時自分は質ばまだ群衆と公衆との區別を明にして置かなかつた。併し今日では兩者は固より嚴に相別つべきものである事は、既に定說と成つて居る。それを今玆に詳論する暇は無いが、略言すると所謂輿論なる者は公衆の聲であり、公衆の上に影響するが、それと同時に群衆を動かすものは正々堂々の輿論よりも寧ろ何か一種の暗示である。而し實際その暗示の最强いものは新聞紙の記事であると知つたらば、キッチングスの樣に新聞紙は輿論の機關であると云ふ點のみを見てぢつとして居る譯には行かぬ。凡そ此の群衆公衆の區別などは申す迄もなくタルド氏の著書を見るが第一だが、英文の著述にも追々ある。就中ロッスのものなど大に分かり易い。吾が國では京都の大道和一氏が此の書物などを本として編輯された『社會心理學』(大正二年金港堂)がある、自分不肖ながら丁寧に校閲して置いた。若しこれを一讀されたらば如何に吾が同胞國民の佛人否伊太利人に近くして暗示に動かされ易い次第も分からう。從つて吾が國新聞記者の責任は愈々重く成ることは是非ない事である。

三　新聞紙の將來

右述べたところで以て新聞紙の任務も分かり、又其の現狀も分かつた。然らば今後の新聞紙はどういふ風にして行くべきかと云ふ事は、自ら起つて來る問題と成らう。而して自分は今玆には固より主として敎育といふ立場の上から、これを論究して見やうと思つて居る。

蓋し新聞紙にも色々の種類があり階級があつて、一概には言へぬだらうが、夫のエローペーパー一流のものは暫く別として、苟くも大新聞紙を以て任じて居る者は、必ず此の敎育的方面をも念頭に置いて遣つて貰はねばならぬ。それには第一には記事に於て淫亂を誨へ犯罪を暗示し、非社會的行爲を增長させると云ふ

風のものは固より屹度警戒して避けねばならないのは勿論で、それと共に第一には教育界の事、學校の事、青年少年一般の事などに關する記事を增し、成るべく特別の一欄を設けて、愈々學校と相提携することを望み、更に又第三には學術文藝の發明發見進步成功に關する精確にして且つ趣味ある記事の續々掲載せられん事をも希望して已まざる次第である。而して此等內面の改良と共に外面にも亦十分改良を施されたく、第一紙質とか墨汁とか活字とが教育上衞生上から論ずれば隨分種々の要求も出ることであらうし、又挿畫などにも格別注意を要する事と信ずるが、併しそれよりも文體文字の上にも幾多論究をして見ねばならぬ點があるに違ひない。否文字は早晚羅馬字に變はる事は爭はれない所であると信ずるが、それは固より近き將來にはとてもむづかしからう。只だ文體は成るべく平易にして萬人の手にする事の出來る樣にするのは頗る必要で是れは教育上最大切の事である。

その上若し隴を得て蜀を望む事を許されるならば、自分は廣告欄にも教育上一定の取締を加へられたいことゝ思ふが、是れは何分營業上重要の財源であるとすれば、言ふべくして行はれ難いかも知らぬ。併しそれでも多少の手加減は出來るに極つて居る。大新聞社は權威として一番力んでお貰ひしたい。否廣告と固有の新聞紙とは成るべく嚴別せられんことを勸める。

但し斯くしたらば一般的に新聞紙としての教育上の必要なる注意はそれ〴〵出來たとしても、自分が本論文の冒頭に於て陳述した國民教育なり或は又社會教育なりの上からする新聞紙への嘱望は、まだ悉く仕遂げられる譯ではない。此に於て先づ問はるべき問題は將來の新聞紙は果して單に報道的たるに止るか、又批評を主とすべきか、それとも一番國民なり社會なりの指導者を以て任ずべきかを極めて掛らねばならない筈で、而して自分は報道も批評も固より必要であるが、それと共に必ず又指導者となつて貰ひたい。斯くして始めて新聞紙が一大教化機關であり一大教育者であるとの尊敬に副ふことも出來やう。

さて一旦指導者であると極めると、又其處に起つて來る問題は、將來の新聞紙は前に言つた樣に英米流のシヴイリジエーシヨンの催進を以て務とするか、將た又獨逸流にクルツールの發揚を以て旨とすべきか、前者にすればパブリク・オピニオン即ち輿論の指導が主であり、後者によればツアイトガイスト即ち時代精神の宣揚が主とならねばならぬ。而して此の問題に答ふるには、現に吾が國には果して獨逸流の所謂民族固有の堂々たるクルツールがあり、その發動して表現するツアイトガイストがあるかどうかを考へて見ねばなるまい。

○

勿論自分とても吾が日本民族に固有のクルツールがなく、又ツアイトガイストがないとは思はない。少くも金甌無缺の御國體や忠孝の教訓は是れは日本民族固有のクルツールであり、而して其の發動表現は明にツアイトガイストと看らるべきものであらうと云ふ事は異論は申さない。併し又一面に於て腹藏なく申すと、實は上古日本民族固有のクルツールなるものは太だ簡樸なもので、其の漸く發展して今日あるに至る迄には、或は朝鮮或は支那或は印度或は南洋或は歐米諸國と各方面から色々違つたシヴイリジエーシヨンを輸入し吸收し攝取して作り上げたものである事は爭はれない。先般も自分が拙著「感情の修養」中に吾が神道の事を、他の儒教佛教等に基督教や、さては西洋古今の哲學など丶相並べて、吾が國固有の神道は簡樸にして多く言ふに足らないが、然かも天眞爛漫にして何等矯曲する所あらず、只管萬物生々の主義を尙びて繁榮を旨とするは、或は幼稚の自然主義と謂つて妨なからう。神道には感情はあるが理窟は乏しい、其の散漫にして何等組織もなく體制もないのは、永く獨立してそれだけで以て人心を滿足させるには足るまいと云ふ風に述べて置いたところが、東京で發行する『普通教育』と稱する一雜誌の社長は新年號の開卷第一に大に喰つて掛つて來た。由つて自分は早速長い答辯を草して同社長に送つて置いたが、其の後はどう成つたか同雜誌の三月號は

まだ入手しないから分らない。成る程近頃は筧法學博士を始め川面凡兒とかいふ人などが出て、色々神道の上に面白い研究も出來、議論も發表された居る樣であるが、それにしても自分は固有の神道そのものは到底太だ簡樸なものであつて、それが古來儒敎道敎特に佛敎の感化を被り、又近時は陰に陽に西洋の宗敎や哲學などの影響を受けて、色々に組織されつゝあると云ふ事は爭はれまいと信ずる。

將た又ツァイトガイストとしても、今日實際吾が國の年若き者の社會に潛に流れ行きつゝある思潮は、どうも吾が國固有のクルツールを發揚して、以て他の外國から押寄せて來る潮流に對峙し、飽迄も日本一流で遣り通さうとするとは見えない。又それを如何程氣張つて見ても果してどれ程迄遣つて行けるかは疑はしい。蓋し社會百般の事物は今し皆動搖して變革せんとして居るが、それは早晩世界の大勢に歸さう、世界の大勢は寧ろシヴイリジエーションの方でクルツールではない。

○誠に家族制度を看玉へ、吾が國固有のクルツールは往年高山博士などの一時頻に唱道した生々主義で、從つて一夫多妻は必ずしも咎めざるのみならず、寧ろ美事の樣に考へる者もあつた樣だが、併し今日實際は上下一般に少くも理想としては一夫一妻と云ふ事に成りつゝありはしないか。尤も目下獨逸などでは大戰に由つて喪はれたる人口の大損失を補塡せんが爲、一夫二妻乃至數妻を公認し奬勵したらば好からうと云ふ議論もあるらしい。吾が國人は幾きには一家相續の爲には數妻を蓄ふることを許したと同じ筆法で、一國人口繁殖の爲には一夫數妻太だ可なりと云ふかどうか。夫の『上記』といふ似而非古典中には、神代に早く縊人法と謂ふものが行はれて居たと書いてあるから面白い。

次ぎに經濟上にしても、吾が國は今尚ほ一般には機械の使用太だ幼稚の境界にあつて、手工業行はれ、家庭工業行はれ、農事なども頗る小規模で只管舊式の儘に遣つて居る所が多い樣だが、併し今後は機械の使用

年々歳々に進み、電氣の動力盛に供用せられ萬事大規摸と成り、更に進んでは農業さへも面目を一變するのは當然で、さう成ると自ら種々の勞働問題が起り同盟罷業も續出し、恩惠恩誼の代に權利義務の爭が喧しく成つて來ることは免れない。其處には又自ら社會主義も出やう、共產主義も唱へられやう、乃至は隨分極端な過激な危險千萬な說も口にし筆にせられやう。困つた事ではあるがさう成つた時に、遲れながら昔の仁德天皇の御製や何かを擔ぎ出して、始めて元來吾が國のクルツールとしては云々と言ふ者があるかどうか。孟子の王政別して井田の說なども大に考へ物たるには相違あるまい。

第三政治にしても固より今日の樣な立憲とか自治とかでは誰も心ある者は滿足しない。官僚主義閥族主義は到底近き將來に於て地を掃ふに極つて居ることを信ずるが、今の貴族院の組織などは元來獨逸などに摸倣したもので、實は頗る時代後れである。又衆議院とても晩かれ早かれ普通選擧の時は來るに極つて居る。憲法は萬世不磨であると共に、その第七十三條には明に改正の手續が示されて居るとすれば、適宜改正の可能なることは固より論を待たぬ。實祚は固より天壤無窮にしても、其他の事柄に就いては、昨今隣邦の政變などを見ると、何だか恐ろしくて枕を高くして安眠を貪るに堪へない心地もする。一言以て之れを掩へば、到處デモクラーシー卽ち民本主義の汎濫は恐らく誰人も能く防遏する者はなからう。尤も上杉鷹山など云ふ人はさすがに二百餘年の昔に於て早く其の嗣子に遺訓して、一、國家は先祖より子孫に傳候國家にして、我私すべき物には無之候、一、人民は國家に屬したる人民にして、我私すべき物には無之候、一、國家人民の爲に立てたる君にして、君の爲に立てたる國家人民には無之候(天明五年)と言つて居るのを見ると、吾が國のクルツールは元來はデモクラシーである、民本主義であると公言しても差支ない樣であるがどんなものか知らぬ。鷹山公は現に學校に於ける倫理道德の教育上大立物で、畏くも朝廷からは早く官幣社として祭られて居る。

若夫れ道徳倫理にしても、封建的家族的の時代に出來た古風の教訓が、何時迄も其の權威を持續すると思つたならば間違で、どうしても各自人間としての人格を第一とし、思想に行動に將た享樂に相應の自由を要求する樣に成るのは爭はれない。それも俗諺に、老いては子に從へとあるから、日本固有のクルツールだと謂つて仕舞はゞそれ迄であるかとも思はれる。

宗教とても祖先崇拜などと云ふ動もすれば迷信がましく成る祭祀が何時迄續くかは疑問である。神社崇拜などは如何に當局者が曲解に務めても、到底進歩したる現代人の頭には其儘には這入らず、寧ろ只だ考古上なり文藝上なりに趣味の對象として珍重せらるゝ事は變らぬだらう。但し伊勢皇太神宮の御事は御國體上別とすると特に一言注意して置かう。佛教も十三宗五十六派各々多少の優劣はあらうが、概して在來の儘では所謂告朔の餼羊で何の爲す所もなからう。眞宗などは就中最有力の樣だが、併し是れとても在來の儘では斷じて將來の新時勢には適合し難からう。そこで自分は不肖ながら夙に宗教の革新を唱へて居るので、それは一言すれば日本在來の佛教を適宜近世化しやうとするにあると謂つても差支ない。併し又基督教そのものも固より今の儘では行かない。斯くして其處に時代相應の新宗教が追々興つて來る筈と想ふが、何はともあれ宗教の必要は一部の人々の想像に反して今後一層盛に成るに極つて居ると云ふ事を忘れてはならぬ。

其の他教育制度に就いても、劃一は止んで種々變化あるものとなり、徒に道徳倫理を喋々するよりも、寧ろヴオケーショナルに成るに極つて居る。役に立つ樣にする事が先きで、普遍的など云ふ論理主義はもはや古からうと思ふ。

斯くて愛國心は固より必要だが、さりとてショヴイニズムやジンゴイズムは惡るい。軍國主義は漸く不人氣であるとすれば、夫の近頃世人の口にする大亞細亞主義なども固より其の變形であるから、たとへ如何に形貌を變へても面白くあるまい。

何はともあれ今日既に世界大戰に由つて目ざめたる

者は、聯合側の諸先進國の大政治家が各々口に唱へて居る樣に、民本主義の發揮と云ふ事が將來の方針である事を想はねばならず、又やがて萬國平和の榮光が世界に輝き渡る事を理想境として期待せねばならぬ。各自其の實現に應分の貢献をせねばならぬ。

○

併し不幸にして獨逸が豫想よりも一層强勁であるのを見ると、獨逸が萬一勝つたらば大變、たとへ負けても實際は相引の形で、さう成るとさしづめ獨逸の再び起つて侵寇し來る時の防禦も考へて置かねばならぬ。海陸の軍備は固より忽にせられまいし、それに伴ふ軍事教育も亦一定度迄は必要と謂ふ事を認める。只だ軍事教育の爲に一切の自由獨創の民本的精神を滅却してはならぬ。

自分は開戰の初、獨逸の敗北を豫期して、而して之れと共にヘーゲル一流の國家萬能主義は崩壞し去るだらうと叫んで喜んだ。併し其後の戰爭の經過で見ると、豫期は急に行はれさうになく、戰後は却て國家萬能主義が一層盛に成るかも知れぬ。現にボサンケー氏などは其の近著『社會的幷に國際的理想』Bosanquet—Social and International Ideals. London. 1917. に於て、頻にヘーゲル一流の國家主義を鼓吹して居る。それもさうかも知れぬが、若しさうであるとしても、新時代の國家は必ずや民本的のものでなければなるまい。而して內國の政治上には成るべく所謂國家社會主義を行ふ事を務めしめなければなるまいと信ずる。

從つて吾が國に一種固有のクルツールがあるにしても、それが古來常に種々違つたシヴイリジエーションを輸入し吸取し攝取した事跡に鑑みて、今後も亦斷へず世界の大勢を觀察し、採長舍短日進月步を怠つてはならぬ。實際明治初年の五個條の御誓文は今尙炳として日月と比すべく、所謂開國進取は將來も永く國是とせねばならぬ。但し進取は固より侵略ではない、帝國主義ではない、大亞細亞主義ではない。

○

此の際に於て苟くも大新聞紙たる者は固より過激急

進は戒めなければならぬが、さりとて保守回顧は好い加減にして時代の進歩を看取し、徐に國民の思想を天下の大勢と適合する様利導して行くことを志ざゝねばならなからう。而して常に巍然として獨立自尊、上に阿附せず下に諂諛せざらんことを切望する。從つて眞の大新聞紙には政黨とは直接間接に何等の關係を持たぬ様にせねばならぬ。ウエルスが其の「來りつゝあるものは何か」H. G. Wells—What is Coming? London 1916. の中に於て、現に英國の政治を行ふ者は國王と貴族と紳董との三者であると思つたらば間違ひで、それは只だ外形である。今日實際の政治は法律家が政治家として掌握して居るのである。而かも之れに對立し之れを監視し之を制御する者は、政黨との關係なき新聞紙であると言つて居るのは、傾聽に値する。

尙ほ又ブリヤントなる人は近著「大學豫備敎育制度」Bryant—The Public School System. London. 1917. なる小冊子中に、英國の紳士敎育が科學の素養を忽にして居た爲に、今度の大戰になつてから英國の馬鹿を見たことを色々例證して、敎育制度の根本的改革を絶叫して居る。是れも法律家萬能に對して今後の大新聞紙の注意を促し置きたい。實際大新聞紙は科學の奬勵を急務とする。

右述べた所で吾が國大新聞紙の將來は略ぼ分かつたらう。そこで又自ら新聞記者養成は勿論、大新聞社の社員通信員などの編制方にも一瞥せねばならなく成つて來たが、もはやそれを評論して居るべき餘暇が無い。由つて今茲には暫く只だ吾が國にも米國や佛國の樣に大學に附屬し關聯して新聞學校と謂ふ風のものが設けらるべき必要があるとする。否私立大學には既に早く其の試がある樣に聞及んで居るが、それは一層大規模にしたい。將た又右のウエルスも言つて居るが、實際大新聞社には社會に於ける種々の方面の最優秀なる人と親密なる關係を繋いで、其の知識其の勸告を十分利用する丈けの事をせねばならぬ。勿論それには常住の者と臨時の者とあらう。然かも最後に最大眼目と成るのは、キッチングスの所謂新聞社の黑幕裡に眞に社會

の指導者たる大人物の居る事で、此くの如き人は敢へて出來ると云ふよりは、寧ろ生れ附くものと見るが至當だらうが、孰れにしても社主たる者は又常に心を配つてさう云ふ風の人を求めねばなるまい。自分の管見では、明治以後福澤諭吉翁などが眞にさう云ふ風の人であつたと思はれる。勿論どこの新聞社にも積年の情實はあることを免れない、秩序もあらうし階級もあらう、然かも又それを不斷に新鮮にするが肝要である。

終りに自分は今度此の論文を草するに方つて、偶々座右の雜誌にある米國有名の社會學者ロッスの『思想の組織』Ross,—The Organization of Thought (1916) と題する一文をも參考したが、その中に多數の市住の人の心が新聞紙に由つて養はるゝは、猶ほ蠶が桑の葉に依つて養はるゝが如し Most urban minds feed on newspapers as silkworms feed on mulberry leaves とあるのを見て、非常に面白く思つたから暫く借用して結語とする。

對露政策に對する國民としての希望

法學博士 吉野作造

（一）

出兵論は下火になつた。けれども我國は西伯利に出兵するだらうか否かとは、今日尚屢々聞く所の質問である。當局者でないから固より之に明答を與へ難い。又秘密主義の政府を戴く我々に取つては、容易に推測を下す事も出來ない。けれども國民としては困難ながらも、此問題に對して相當の見解を有つて居る事は必要であらう。依て暫く已に新聞などに表はれたる報道

やら記事やらに據つて、大體こんな所であらうかといふ所を述べて見よう。

此問題に就いて先づ第一に見ねばならぬものは、三月廿六日最終の議會に於ける本野寺内兩相の演說である。其中本野外相の演說は主として出兵問題に關する政府の責任を回避するを目的とするものであつて、我々の問題の解決には殆んど參考にならない。けれども出兵問題の發生に就ての說明である丈け、一寸注意して置くの必要はある。外相曰く、「……第一ニ此問題ガ恰カモ帝國政府ノ發案又ハ提議ニ基キタルガ如キ風說ガ內外ニ傳ハッタ樣子デアリマスルガ、之レハ全然誤報ナル事ヲ明カニ致シテ置キ度イト考ヘマス。政府ハ何レノ國ニ向ヒマシテモ、日本出兵問題ヲ發案又ハ提議致シタル事ハアリマセヌ……而シテ本問題ニ就キマシテハ、聯合與國ヨリ未ダ協同的提議ヲ受ケタ事ハアリマセヌ……」と。此說明に對して上院議員杉田定一氏は、更に出兵問題といふ事が一體何から起つたかを尋ねた所が、外相は「唯今杉田君ノ御質問ニナリマシタ事ヲ玆デ私ガ明白ニ申シマスレバ、今日マデ此問題ニ關シテ聯合與國ト帝國政府トノ間ニ、意見ノ交換ノアッタ事ヲ明カニ述ベネバ十分ノ事ハ分ラヌノデアリマス。然シ此事ハ今日此議場ニ於テ未ダ之ヲ發表スルノ時機ニ達シテ居リマセヌ」と答へて、兎に角帝國政府と聯合與國政府との間に、出兵問題に關する意見の交換のあつた事丈けは明白にされた。續いて若槻禮次郎氏は外國の新聞には日本の提議といふ文字が使つてあるとて、「提議或ハ發案トイフヤウナ程ノ事デ無クシテ、西伯利ノ出兵ニ就イテハ日本政府ハ何等カ積極的ナル行動ヲオ取リニナッテ……詰リ帝國政府ハ自分デ此等ノ事ニ就イテハ、何等カノ形ノ事ヲナサレタノデアリマスカ」と尋ねたるに、本野外相は明白に之を否認した。して見ると此問題に關してイニシアチーブを取つたものは日本政府では無いといふ事を言明された事になる。之が外國の新聞並に電報に表はれた所とうつかり符合して居ない點は、我々の特に注目を要する所である。何れにしても外相の之れ丈けの說明で

は出兵問題は何時如何にして何の爲めに起つたかが全然分らない。議員を初め新聞雜誌等が誠意無き說明として之に滿足しなかつた事は怪しむに足らない。

予輩が當時いろ〳〵の報道に接して得たる感じを率直に云へば、此問題に就てイニシアチーブを取つたものは、どうも帝國政府では無いかと思はるゝ。何となれば若し聯合與國に促されたものとするならば、一時あれほど意氣込んで出兵熱を煽らした當局者が終に有耶無耶の間に其鋒鋩を斂めた理由が分らないからである。且つ又政府は西伯利出兵の今にも實現すべきの豫測の下に、或る種の重大なる措置を取つたと信ずべき理由がある。三月下旬の內田大使の露都引揚げ並びに之と相前後する露國在留日本民の引揚げは出兵の前提であつた、少くとも引揚げる日本人も又之を見送る露西亞人も斯く考へて居つたといふ事は、最近歸朝せる片上伸氏の記事(東京朝日新聞所載)にも明白に表はれて居る。之に依て政府に出兵の意ありしと推定せられては、政府も困るだらう。けれどもさらでも斯くの如き推定の行はれ易い時機に於て、斯かる推定の行はれざらん事に何等苦心する所無くして、匆卒に在留民の引揚げを命じたのは、之を政府の粗漏とのみ斷ずる事が出來まいかとも思ふ。斯くして予は出兵問題に就てはイニシアチーブを取らなかつたとしても、之を取つたと同じ程度に政府は非常に重きを置いたと認むるものである。從つて又政府はもつと早く出兵を決行する積りでは無かつたらうかと疑ふものであるが、其後何等か故あつて出兵を急がざる事になつたものと見える。何が急速なる出兵を躊躇せしめたかは我々には分らない。唯明白なるは機到れば政府は決して出兵を躊躇するものでは無からうといふ事である。此事は寺內首相の演說に最も明白に現はれて居る。

同じく三月廿六日貴族院に於ける寺內首相の結び演說の末段は、深甚の印象を國民に與へたものである。曰く「將來時局ノ推移ハ今ヨリ豫言ハ出來難イノデアリマスガ、露獨單獨講和ノ結果、獨逸ノ勢力ハ漸次極東ニ波及シ、東洋ノ平和ヲ擾サントスル虞ガアリマス

ノデアリマス。政府ハ萬一帝國ノ安危利害ニ拘ハリ、又ハ聯合與國ノ協同ノ利益ヲ保護スル必要アル場合ニ臨ミマシテハ、斷乎タル機宜ノ處置ヲ取ル事ヲ決心シテ居ルノデ御座イマス……時局ノ進展如何ニヨリマシテハ、重テ近ク諸君ノ來會ヲ煩ハス事ガアルカモ知レマセヌ。此一事ハ豫メ諸君ノ御念頭ニ置カレン事ヲ希望致ス次第デ御座イマス」と。當時此演説は本野外相のそれと對照して、少からず物議を醸したのであつたが、要するに之に依て我々は帝國政府が、決して西伯利の出兵を斷念せるものにあらざる事を知ることが出來たのである。

(二)

然らば日本は如何なる場合に西伯利に出兵するであらうか。獨逸勢力の東漸、東洋平和の攪亂、其結果として生ずる帝國並びに聯合與國の協同利益の危險といふやうな事は、出兵の理由として寺内首相の演説中にも見えて居るが、之は餘り抽象的に過ぎる。此趣意から推して更に細かく考へて見れば、先づ第一に西伯利の秩序が大いに紊れて、支那は勿論日本も、現在並びに將來の安危利害の上に重大なる威嚇を蒙るといふやうな事が實現すれば、無論躊躇する所なく出兵を決行するであらう。四月五日我陸戰隊の浦鹽上陸は其一例である。無論之を以て所謂西伯利出兵の端緒といふ意味では無い。浦鹽に於ける秩序の紊亂が、我國官憲をして兵員の上陸を決行せしめたるが如く、同じやうな秩序の紊亂が西伯利の内部に起れば、政府は出兵に躊躇するものでは無いと斷定する事が出來ると思ふのである。併し乍ら西伯利の内部は果してそれ程亂離危險なる狀態を現出するであらうかは大に疑無きを得ない浦鹽の問題に就てすら、兵員の上陸を必要とせしや否やに就きて、世上に多少疑を存するものがあるやうであるが、西伯利の内部に就ての疑は、之よりも尙一層根據があるといはなければならない。此事に就ては予輩は已に本誌前號に於て稍詳細に説明したから、再び玆に繰返さない。唯其後新聞に表はれたる二三の報道に依て、予輩の前號の説を裏書するに止めて置かう。

一つは四月十六日の諸新聞に表はれたる墺の亡命客マサリック教授の談話である。教授は西伯利の秩序は豫想した程亂雜では無いと云ひ、且つ獨墺俘虜の武裝を否認して居る。二は露國よりの最後の歸朝者たる石坂陸軍少將の談として、四月十四日の新聞に表はれた報道である。少將も亦獨墺俘虜の武裝に關する報道を誇大に失すると明言して居られる。同じく十四日の朝日新聞に現はれた哈爾賓特派員の電報は、武裝せる俘虜と過激派との結托を報道して居るけれども、一つはクラスノヤロスク市に於けるもので、匈牙利及び羅馬尼人の俘虜が約一千名、一つはイルクック附近に於けるもので、獨墺の俘虜が約一千名とあるが、共に萬國社會黨同盟に席を有し、勞働者の敵に對し飽くまで奮鬪すべき旨を誓約して過激派に加擔したとあるから、若し之を事實なりとしても、之を以て直ちに獨逸勢力の東漸といふ事は出來ない。予輩は俘虜の武裝を信ぜず、又武裝する丈けの用意も無ければ、武裝して再び軍事に關係する事を俘虜自身が希望するとも思はないものであるが、假りに俘虜武裝の事實ありとしても、之が我々東洋諸國に取つて威嚇となり、危險となるのは、過激派其物が我々の敵となる場合に限るのである。姑く有り得べからざる事を假想して、彼等が獨逸政府の手先となるとすれば、過激派は決して彼等と提携する筈は無い。過激派を危險思想なりとして、一から十まで之を蛇蝎視する我國の所謂識者が、思想感情に於て多大の共鳴を感ずる獨逸の官僚の、安んじて過激派と提携して居ると認めて怪しまないのは、實に不可解の現象と云はなければならない。

西伯利内部の秩序がそれ程亂雜で無いとしても、獨逸該地方に於て勢力を占めつゝある所の過激派其物が我々に向つて現實なる敵對行動を取るならば、我々は亦自ら之に促されて出兵を斷行せねばなるまい。浦潮陸戰隊上陸に關して、露西亞本部の過激派政府が一時非常の憤激の聲を洩らした際には、我々は密かに出兵の端緒茲に開けざるべきかを怖れたのであつた。日本に對する彼等の誤解は固より未だ十分に解けない。け

れども四月九日莫斯科勞農政府の布告を觀るに、日・英・米・佛四國委員より、日本に何等侵略上の野心無しとの說明に接したる旨を說き、「勞農政府外務省は日本並びに聯合與國の委員を信賴し、一點非難する所無き慇懃なる此通知を諒承せり」と云つて居る。尤も末段に「目下露國領土の東部に於て、十分秩序の確立せざる所はある……本政府は其實狀を國民の義心に訴へ、共奮鬪に由つて近く浦潮に於ける軍隊上陸の口實を一掃し以て終に外國の侵入を拒絕すべきを期す」といふやうな事を云つて居るけれども、兎に角彼等が我々に對して無謀の處置に出でざるべき事は疑を容れない。四月十一日の電報に據れば、過激派政府は、外國の侵略に對して領土を防禦するの新必要に應ずるが爲め、プレスト・リトヴスク單獨講和條約中の動員解除に關する一項の一時的中止の認諾を伯林政府に求めて居るといふ報道があつたが、之れ恐らくは日本に敵對するが爲めの目的に出づるものではあるまい。之より先き流石の過激派も獨逸の横暴に憤慨し、國防軍の組織を計畫して密かに援助を佛蘭西に求めたとか、又は米國に求めたとかいふ報道があつた。彼等が從來の對獨態度の迷夢から覺醒しつゝあることは、固より當然の事柄であり、而して彼等の所謂日本の侵略的野心が、彼等の此計畫に利用されたと見るのも强ち牽强附會の說と貶し難いやうにも思はるゝ。何れにしても今日までの所過激派政府には當初の宣言に似ず、飽くまで日本を敵とするの何等の態度に出でゝ居ない事丈けは疑を容れない。將來はどうなるか分らない。唯今の所我より强いて挑發する事無き限り、彼等は決して我國の西伯利出兵を促す事實上の原因とはならないやうに思はるゝ。

(三)　は全部都合により削除、筆者及び讀者の諒恕を乞ふ（編者しるす）

(四)

尤も西伯利に於ける反過激派の結束を後援する事の可否は、帝國政府の對西伯利政策の一として、之を問題とするの價値が無いではない。少くとも英佛兩國は、

我々の推測する所に據れば、確かに此方策に出で居るらしく見える。日本も英佛の同盟國として、他に之に反對すべき重大なる理由無き以上、同様の態度に出づるも亦深く尤むべきでは無い。然らば英佛側は何の觀る所あつて反過激派の結束を希望し且つ後援して居るやと云ふに、之れ畢竟獨逸を牽制するが爲めである。彼等は日本の勢力を利用して遙か東方より獨逸を少しでも牽制し得る爲めには此外に良策は無いと認めて居るのである。要するに英佛の最も希望する所は、獨逸勢力の牽制である。殊に今日の危機に方つて這般の希望の强烈なるべきは、之を想像するに難くない。此根本の希望あるが故に、日本の西伯利出兵を無條件に希望せざる一般民間の輿論は、日本軍をして烏拉爾邊まで若しくはヴォルガの邊りまで出兵せしめようと望んで居る。四月十三日の新聞に表はれた倫敦電報に據れば、英國の輿論は日本の西伯利出兵をば、(一)聯合國側の軍事委員(露國代表者をも含む)を伴はしむる事、(二)憲法會議を召集し之によつて鞏固なる中央政府を建設するを待つて速かに撤兵すべき旨を豫め明確に宣言せしむべき事、(三)日本の受くべき報償は前以て決定し置く事の條件の下に實現せしめたいといふ希望であるとの事である。英佛官憲が反過激派の結束を希望するのも、又民間の輿論が日本の歐露出兵を希望するのも、畢竟其基く所は少しでも獨逸を牽制せん事を欲するからである。併し乍ら日本の歐露出兵の言ふべくして行ふべからざる空論たるは、固より言ふを俟たない。反過激派の結束を後援するの目的を以て出兵する事は必ずしも不可能ではないけれども、併し乍ら反過激派を助くるが爲めに、正しく過激派を敵に廻す事は日露兩國の將來の爲めに果して得策なりや否やは大に愼重なる攻究を要する點である。此點に關して米國の立場は正に予輩の觀て以て英佛の見解と爲す所に反對して居る。大阪毎日新聞華盛頓特派員の四月十三日發の電報に據れば、米國政府は日本陸戰隊の浦鹽上陸を以て機宜に適せる行動なりと承認せるも、「一方莫斯科政府の日本の行動に對する反感たるや、此際若し一

歩を誤らば時局をして危殆に瀕せしむる怖あるを以て西伯利の狀態が絕對的必要を生ずるに至らざる限り、聯合國軍隊が露國の領土に對して現在以上に軍事的行動を發展せしめざらん事を希望しつゝあり。」と云つて居る。前記三月廿六日議會に於ける本野外相の演說にも、「…萬一帝國ガ西伯利地方ニ於て必要ノ行動ヲ執ルノ止ムヲ得ザル場合ニ至ル時ト雖モ、固ヨリ露國ヲ敵トスルノ意思ハ毫頭アリマセヌノミナラズ、彼ノ獨逸ガ現ニ歐露方面ニ於テ採レルガ如キ侵略的政策ハ帝國政府ノ斷ジテ取ラザル所デアリマス。又一般露國人民ニ對シテハ、帝國ハ飽クマデ深厚ナル同情ヲ寄セ絕エズ之ト和衷提睦ノ關係ヲ維持セント欲スルモノデアリマスル事ヲ玆ニ誠實ニ表明スルヲ憚リマセヌ」と云つて居る。露國民全體を敵とすべからざるの根本義に於て、外相の觀る所正に米國の立場と符節を合する事斯くの如きものあるが、更に進んで反過激派の結束を後援する事の事實上の結果如何の觀察に於ても、兩者は果して其見解を同うするや否や。

最近の電報に據れば、過激派政府は獨逸勢力の露國侵入に對抗せんが爲め國防軍の組織を計畫し聯合各國に對して援助を求め來りたりとの事である。予輩は斯くの如き事實の過激派政府の思想と容易に兩立し難きを思ふが故に、輕々に之を信ずる事は出來ないけれども、萬一之が事實とすれば、反過激派を援助せる英佛は大に窮境に立たねばならぬ事を反省せねばならない。若し夫れ一部の小心なる保守思想家の如く、過激派の跋扈成功を以て精神界の一大危機と爲すに深き確信を有するならば、自ら率先して聯合與國を率ゐ、露國に對する神聖戰爭を發起すべきである。此處までの決心が無い以上、**我々は露國の將來の斯くあれかしとする希望に執着せず、露國將來の如くあるべしとする見込みの上に對露政策を打ち建てなければならない。**露國の將來が過激派の手に收りの着くや否やは姑く別問題とするも、今日の所差當り我々の最も憂慮する獨逸勢力の東漸を確實に妨ぐ目的から云つても、過激派を敵とする事は決して正鵠を得たる策略ではない。

米獨の西伯利亞發展に對する我經濟的對抗策

▽米獨の西伯利亞發展と我經濟的對抗策

法學博士　神戸正雄

（一）

日本は東亞の主動者であり、東亞は日本の經濟上の活舞臺であらねばならぬ。今少しく進んで之をいへば戰後にも亘つて東南洋の天地は日本の經濟的勢力範圍でなくてはならぬ。此が我日本の當分の處の理想であり、不取敢此れ位の事業は日本で完成しなくてはならぬ。其以上の事は前途遼遠の事でまだ成功の覺束なきものである。日本に於ても世界を統一するが如き空想もあり、東亞を併呑するが如き妄想もある。が何れも實行の至難なるのみならず、抑々又時代錯誤の僻見である。將來の世界は平和的活動の世界であり、又日本としては日本にとり最發展し易き近隣地方に向はなければならぬ。其も武力的でなくて平和的に働かなくてはならぬ。武力無用といふことはないが、此は單に後援としてのみ依るべく表面は飽迄も平和的發展を標榜しなくてはならぬ。武力を用ゆること多きに過ぐるに於ては到底幾多の支障に遇ふて實功を收むることを得ぬであらう。日本の西伯利亞發展は此意味に於ける日本の東亞又は東南洋發展の一部でなくてはならぬ。日本人も此西伯利亞發展の重要は皆な能く了解して居るけれども、其の之を爲す手段につきては間々誤解があり、動もすれば我は彼の虚に乘じて兵力を以て此に影響を及ぼし、此に基礎を立てやうとする所である。其は誤つて居る。日本は即ち此西伯利亞に平和的發展を策することを忘てはならぬが、其と同時に武力的發展を策すべきではない。今日は同地も混亂の際中ゆへ、此に乘じて事を爲さんといふも其は全く過つて居る。今日の世界の時世は最早左樣なことが公認さるべき時代でない。斯かる時にも尚ほ兵力を以て他國の領土を侵さず、唯だ正々堂々と平和的に發展すべきの時代である。

（二）

日本が西伯利亞に勢力を及ぼすべく出兵問題を評議しつつある間に、外國就中、米獨二國は着々として西伯利亞に平和的發展を策しつゝある。獨逸は最早露國と和議を遂め、有利なる通商條約を定め獨逸の商人工業者は續々と歐露へ更に西伯利亞にも入込み來り、獨逸產品は益々此

に普及しつゝある。夫の一時獨逸品の缺に乘じ其缺を補ひたる日本品は益々其影を潜めることゝなつて來た。それで他方米國は最近になりて此地に領事館を新設し、露國に對して友情ある關係を宣言し、先づ鐵道の管理權を收め之を基礎として各種の事業に着手しやうとして居る。そして米獨ともに露國に對する投資をどし〳〵進捗しやうとして居る。與之、日本は唯だ〳〵出兵に腐心して他を顧みるに暇なく、僅か許りの貸金の回收難を心配して、振つて更に其上の投資貸付を爲すことを躊躇して居る。官民とも徒らに彼國民の感情を不良にする言動を爲すも、又大に進んで彼と和親し、彼の困窮を救援することを爲さず、益々彼をして我に遠からしめやうとして居る。洵に長大息すべきことで、此勢で進んで行けば、米獨の勢力は此處に着々動かすべからざる根據を作つて、日本は却て益々排斥せられて其立脚地を失ひ、斯くて日本は益々煩悶し、飛躍せんとして能はず、遂に益々悲況に陷るであらう。そして日本が東亞の主動者たらんとし東南洋に其經濟的勢力を振はうとするも、到底其實果を收る能はざることとなるであらう。

(三)

斯くの如く日本が西伯利亞に活躍しやうとして却つて成功する能はざることゝなるのは、畢竟するに日本の政策の根底に動もすれば領土慾の存するからである。我が此野心を拋棄するでなければ世界をして我態度を承認せしむることが出來ないのみでなく、露人をも我に和親せしむることが出來ない。そして露人と眞に和親するでなければ到底此地に於て日本人が十分なる發展の出來る譯はない。世界の承認を得なくては日本人も到底安心して此にて平和的事業に着手することを得ぬ。で日本の此地に發展する最要の前提は、日本が此に寸毫の領土的野心なく、單に此と經濟關係を密接にし、此に出來るだけ多くの經濟上の地歩を占めんとするもの也といふ方針を確立することである。啻に西伯利亞に對してといはず支那に對しても南洋に對しても然りで、日本が此點につき從來旗色を不鮮明にして居ることが、日本の發展に不利となり又支障となつて居る。日本は即ち之を鮮明にして正々堂々と押進むが良い。時代の傾向は當さに此に進むの外なきことを示す。日本も最早迷はず惑はず速かに時代風潮の向ふ所に進むべきである。

(四)

此根本的態度を定めることが出來れば良し。然らざれば日本は到底此地に於て米獨と競爭することを得ない。態度の不鮮明にして、動もすれば危險なる野心を包藏する所の日本に對しては露人が爭んぞ近づくことがあらうや。初めより公明正大なる態度を宣明する米國、危險なれども巧妙なる策を弄する所の獨逸、此二國を敵に廻はして活動するのには、人種からいふても相去ること遠く、意思の疏通を缺き易い日本としては公明正大なる態度に依らずしては到底太刀打が出來ない。而して既に此大方針を定むるとして日本の彼に對して採るべき方策は、寧ろ現在の多

軍民心を支配する勞兵會政府を尊重し援助して、之をして其秩序を回復し且つ其平和的發展を計らしむるに如くはない。彼等が外債破棄を宣言したりとて、直ちに之を敵視するは尚早である。却つて彼に同情して彼に援助を與へ、少くとも外債の償還利拂の途を講ぜしむることに導くべきである。そして彼等が此後とも爲すべき施設には我が剰れる資力を以て十二分の援助を與へ、特に鐵道の敷設、鑛山の開掘其他の殖産興業の爲めには出來るだけ多くの投資を爲し、彼我共營事業を進めて相互利益の趣旨に往くべきものである。で予は日本としては露國に對し又西伯利に對して先づ公明正大なる態度を明かにし、そして彼の現政府に對して和親の關係を堅くするが爲めに有らゆる努力を爲すことが、米獨に對抗して我經濟上の努力を此地に扶殖する根本策であると思ふ。爾餘の細目に至つては此根本策確立の上にて計畫するも遲しとせぬ。たゞ此根本策が果して我朝野の一致決意することとなるや否やが疑はしい。予は速かに其の此に一致の意せんことを望んで已まない。

▽我對西伯利策の根本を經濟的利權に置け

早稻田大學教授 ドクトル　服部文四郎

（一）

最近我國に於ては西伯利出兵に對する可否を論ずる者が鮮くない。政府も或は將に出兵せんとするの氣勢を示し、又或は恰かも中止するの狀況を示して居る。而して之れには外國との關係が極めて複雜な狀況に進みつゝあるとの事である。抑も此西伯利に對する出兵は、軍事上或は國防上から之を決行しなければならぬ必要に迫まられて居るか如何か。人或は西伯利には少からざる獨逸の俘虜が居るが爲めに我國は危險を感ずるとか、或は飛行機や潛航艇の非常なる發達進歩によつて、若し獨逸軍にして漸次東漸し、浦潮から潛航艇を放つて我近海を脅かし、或は飛行機を飛ばして我國の上空から爆裂彈を投すべしといふやうな危險もあると考へて、一部にはそれが爲め我國は此場合兵を西伯利に出さなければならぬといふ者もある。併し乍ら是等の心配杞憂は果して事實上危險なりや否や。是は一つの問題である。何故かなれば飛行機の發達進歩は極めて著るしいものには相違ないが、今日の發達の程度では、漸く浦潮から我帝都の上空に達し得るの距離を飛行し得るに止まつて、一旦我帝都

を襲つても再び飛び還るだけの能力を有つて居ない。我日本人ならば決死隊を組織して飛行機を飛ばさんとする者が、必しも無いとは云へないが、獨逸人が、何うせ生きて還る見込の立たぬ飛行機の襲擊を企て得べしとは考へられない。飛行機の襲來は極めて危險なものである。殊に我日本の如き、其家屋が直ちに燃燒して了ふやうなものであれば、敵の飛行機にして我帝都を襲ひ、數十個の發火爆彈を風の吹き荒む日に落下せしめたならば、我國の家屋否な帝都の一切は直ちに全燒の災に遇はねばならぬ。其場合我東京市の水道は其埋沒が甚だ淺いから、其消火の用を爲さざるに至る恐れがある。從て危險は極めて大なるや敢て申す迄も無い。併し獨逸が現在に於て飛行機を以て我國を襲ふが如き事は、到底考へられない。潜航艇亦然りで、若し潜航艇を我近海に放つを得たならば、我國の經濟上の存立は非常なる危險に陷つて、其損害や殆んど筆紙に盡くす事を得ない狀況にならう。殊に最近潜航艇の發達は極めて著るしく、其最大なるものは二千四百噸程度の潜航艇を作り得るやうになつて、根據地を出て二週間の間自由に潜航する事が出來、深さは二十五呎を航行する事が出來る恐るべき狀況ではある。が、而し之れも亦現在に於て獨逸が我國の近海に浮べる爲めに組立つる場所を有つて居ない。且又歐洲戰場又は海上に於て、一隻たりとも多く飛行機や潜航艇を使用せんが爲めに大に努力しつゝあるの狀況なれば、其潜航艇や飛行機を東洋迄にも使用すべしとも思はれない。捕虜の危險に至つても亦然りで、西伯利に於ける獨逸の捕虜は漸次露國の戰場より歸還するものより武器を買入れ、武裝しつゝありとの事實はあるやうである。而して其數も亦十萬餘に達すると云はれて居る。從て之が完全な軍隊組織を爲して西伯利に横行する事になれば、固より大なる危險茲に伏在して居ると云はねばならぬ。併し是等の捕虜が斯く我國の利益を脅すまで完全なる組織を有するを得るに至るや否や。現在は到底左様なものでは無く、彼等が一個の組織せられ訓練を有する軍隊と成るまでには、前途甚だ遼遠と云はねばならぬ。如何にも浦潮には我國及米國より輸送したる武器少からず停滯しつゝありとの事なれども、交通の極めて不便なる西伯利に在る是等の武器が、直ちに捕虜の手に渡るべしとは思はれない。捕虜の危險が全然無いと云ふ譯ではないが、彼等が直ちに我國の利益を害し、我國より之が爲めに出兵しなければならぬ程度に在るものとは思はれない。且つや歐洲の戰場に於て、今や國を賭して死活の爭ひを爲しつゝある獨逸か、其餘力を東洋に分割すべしとも思はれない。又縱令其餘力ありとするも、獨逸が日本の恨みを買つてまで效果の少き攻擊を敢て爲すべしとも思はれない。獨逸も賢明なる政治家によつて導かれて居る以上、妄りに輕卒に東洋に對して出兵を敢て爲すべしとも思はれない。

（二）

斯くの如き狀況であるから、現在に於ける西伯利の出兵と云ふ事は、吾人固より軍事には門外漢で、極めて正確なる判斷を爲す事は困難であるが、單純な素人の判斷から見て、我國の出兵が我國を脅かして居る處

の危險から免かる丶爲めに、國防上軍事上必要であるとは思はれない。若し西伯利に對する出兵の必要ありとすれば、之れは軍事上の理由に存するのでは無く、更に眼を轉じて西伯利と我國との實利の關係・利害の關係に注意を施さなければならぬ。言ひ換れば此問題は軍事上の問題でなくして、經濟上の問題ではないかと思はれる。既に世上唱へられるが如くに、米國は我國の出兵に對して抗議を申込み、反對の態度を示しつ丶ありとの事である。惟ふに之が理由は、恐らく米國のことなれば露國の現政府は共和政治であるが故に、ロマノフ家の仆れた事を悲しむよりも、世界に新たに一共和國の出現したるを喜ぶを一理由として居るのではないかとも思はれる。又日本の出兵は露國を敵とするものと誤解せらる丶の恐れがあるとの理由を附するであらう。併し乍ら日本が出兵すればとて、それが直ちに露國を敵とするものと何人も考へる者はあるまい。是等は丁度昨今日本の陸戰隊が浦潮に上陸したる時に於けるが如く其理由を明白にすれば、直ちに世界に周知せられる事である。日本の出兵は敵國である獨逸の勢力の東漸を塞ぐ利益こそあれ、直ちに之が軍事上露國並に米國の利益を害するものとも考へられない。然るに米國は日本の出兵に對して反對の態度を採つて居る。之れ恐らく經濟上の根據でなければならぬ。米國は既に此戰前より西伯利に注目する事甚だ深いものがあつた。米國の利益に取つては、西伯利は彼等が屢々日本と紛紜を生じた滿蒙と殆んど同じ程度である。而して米國は單に西伯利に注目したと云ふ位の程度に止まるものではない。其資本を或は鑛山に或は鐵道に或は森林伐採に或は開墾に注入し、多々益々扶植せる富を之に利用せんと計畫しつ丶あつたのである。現に又此戰爭破裂後露國が其軍需品に缺乏を告ぐるや、米國は直ちにルートを派遣して資金の貸與を申込み、それによつて種々なる利權を獲得せんとした。其の事は當時識者の夙に認めた事情である。特にルート一行の顏觸れを見れば、米國のルート派遣に對する眞正なる意のある處は伺ひ知れる。彼の一行中直接米國の經濟的利益に關係を有して居ないものは殆ど無い。シカゴに於ける有名なる機械商始め露國に其販路を擴張せんとする者、露國に其經濟的根據を据えんとする者の團隊であると見ても少しも差支へない。それから又戰爭の進行と共に西伯利に於ける露國の鐵道に注目して、機關車、貨車の供給を引請けたのは勿論の事、少からざる鐵道技師を今や露國殊に西伯利に入込まして居る。是等の一行二百名が一時我が長崎附近に滯在しつ丶ありし事は人の能く知る處である。今や是等の技師は一名も長崎に滯在して居る者が無い。已に悉く西伯利に入込んで了つたのである。彼等が何を計畫しつ丶ありや固より言ふを俟たない。斯くの如き狀況で、米國の日本出兵に對する反對も、之れ亦經濟上に在りと觀なければならない。殊に米國は今や事實上歐洲に出兵して、少からざる、寧ろ莫大なる軍費を使用しつ丶あるが、それでも尚米國人は其經濟的利益を少しも等閑に附して居ない。寧ろ其利益の獲得に熱中して居る。而して戰後東洋と同樣に西伯利に對して益々其歩足を伸さんとして、少しも其努力を怠つて居ない。

（三）

それから又日本の西伯利出兵については露國自ら存外強硬なる反對的態度を示して、少からず我日本人を驚かして居る。露國は今や自ら其國を守るだけの實力を有つて居ない國である。而して露國の動亂が西伯利迄にも及ぶと云ふ事は、決して露國の利益ではない。寧ろ日本の出兵を或る程度まで歡迎して、其國内の靜謐に歸せん事を希望すべきであるのに、却つて強硬なる抗議を申込み、之を好まざる狀況である。之れは何故に然るか。惟ふに國家の獨立を害せらるゝと思ふのでもあらうか。日本は侵略的帝國主義の國であると或は誤解して居るかも知れぬ。併し乍ら露國に於ては今や極めて夥しき獨逸兵を其の本土に侵入せしめつゝあるではないか。殆んど獨逸に其獨立を侵害されつゝあるではないか。而して獨逸帝國は世界に於て最も恐るべき帝國主義、侵略的帝國主義の國家である。一方に此獨逸を許して居りながら、他方に日本が露國の秩序維持の爲めにする出兵を拒む理由は無いと考へられる。惟ふに之は必ずや獨逸が露國の背後に存在するものと思はなければならぬ。獨逸が露國に注目し、其手を西伯利にまで伸さんと努力しつゝありし事は、之れも亦世界に隱れなき事實である。獨逸は露佛同盟の關係あるにも拘はらず、盛んに露國に資本を供與して露佛の關係を阻害せしめ、露國の歡心を買つて、其意を露國に伸べんとして居つた。單に資金を露國に貸與せしのみならず、獨逸は露國の銀行業の實權を殆んど其掌中に收めて居る。それについて獨逸は、如何にも獨逸式の甚だ巧妙を極めた遣り方をやつて居る。それは露國に於ては其の銀行にして純然たる露國の資本のみを有つて經營しつゝあるもの、固より之れ無きには非されど、其多くは英國の資本、佛蘭西の資本及び獨逸の資本を以て經營されて居るのである。而して其中最も有力なるものは、實に獨逸の資本を以て經營されつゝあるものである。然るに人も知る如く、銀行は多少の信用を得れば、預金を吸收するもので、其預金を資金として銀行業を經營するものである。其資本金は縱令之を利用する事あるも比較的微力で、銀行の本質はリカードも云へる如く、他人の資本を利用するの點に在る。それで獨逸は三億餘の資金を露國の銀行業に入れ、之を以つて露國銀行に於ける獨逸の勢力を維持して居る。然るに此三億の資金を注入したる銀行は、其十倍三十億の預金を吸集して居る。而して此三十億位の資金は、獨逸が實權を掌握して居る銀行に預け入れされるのであるから、獨逸人の自由に利用する處となる。して見れば三億の資金を注入して、三十億の外國即ち露國の資金を獨逸に利用する事になるのである。露國自ら三十億の内三億の資金を有つて銀行を經營したならば、其資金悉く露國人の權力の下に置き得るのであるのに、露人が之れをなし得ざるは、露國人の經濟的に幼稚なる所以で、同時に獨逸人の甚だ拔け目の無い、又利口な遣り方である。之れは吾人自ら曾て使用した言葉で云へば、露國の資本に獨逸人が其自己の國民性を帶ばしめるやうに絡さしむるものである。

更に又此銀行業を通じて獨逸人が露國に其勢力を扶植する事に努めて

事は豫想の外である。是等の獨逸の銀行は甘言以て露國人を誘惑し、而して最初は低利なる資金を給供する事を約して露國人と取引を初める。一旦獨逸の銀行と取引を初めたならば、銀行は直ちに取引先の秘密を探り、其取引先の狀況、營業の狀態を悉く探つて、而して其時將に至れりと思ふ時には、獨逸人の主催してゐる一つの商館に、自己の集め得たる秘密を與へて、以て露國商人と競爭を爲さしめる。露國の商人は此競爭に得堪へないで、遂に獨逸人に漸次驅逐される。玆に於て乎、或る英國人は、「英語には "Trade follows flag." といふ語があるが、獨逸の商業は銀行に從ふといふことが眞理である」と云つて、獨逸銀行の活動を賞讃して居る。斯くの如くして獨逸は露國全般に其勢力を扶植し、而して勢ひ又西伯利にも其商權及び經濟的利權を握えんと狙ひを定めて居る。獨逸人にして西伯利に移住して或は開墾に牧畜に從事して居る者も少くないのである。斯の如き獨逸が、日本の西伯利に對する勢力の扶植を恐るゝの甚だしきは言ふまでも無い。之れ恐らく獨逸は露國の背後にあつて、日本の出兵に對して强硬なる反對を爲さしめんとするのではあるまいか。して見ると之れ亦軍事上の問題でなく、純然たる經濟上の問題に基くものである。

（四）

斯の如く米國並に獨逸等が露國及び西伯利に注目して居る事は、實に豫想外のものであつて、之れは最近に至つて初めて起つた問題では無い。而して是等は悉く經濟上に根據を有して居る。此點に於て最も迂闊なのは日本人である。今日西伯利に關して今更の如くに騷ぎ立てるなどは、固より時の問題ではあるが、實は時機大に遲れて居る。但し以上の如き狀況に在る西伯利に對して、我國は如何なる態度に出づべきか、之は實に重大なる問題である。單に西伯利の問題に止まずして、直ちに滿蒙にも其影響を及ぼし、滿蒙に影響を及ぼすのみならず、直ちに日本の全部に對して非常なる影響を齎らすものである。而して此場合極めて簡單なる方法は、我一部の人士の說の如く軍事の上から我國の主張を通さんとするのも一つの方法であらう。併し乍ら問題は之れが果して永續的の見込ある方法なりや否やと云ふ事である。我國は過去に於て屢々經驗したるやうに、軍事上には相當の成績を收めて、其勢力を扶植し得ても、常に經濟上に於て劣敗者たるの地位に陷る。此場合最も恐るゝ所は、今若し日本にして西伯利の利益を擁護するが爲めに假りに出兵するとしても、之れには少からぬ軍資を必要する。而して現在に於て一旦兵を外國に出せば、青島のやうに直ちに其目的を達して、其兵を我國に歸還せしむる事は出來ない。西伯利は廣漠たる範圍の領土である。之れを我國の勢力の下に置いて維持するには、僅かな數の軍隊では堪へ切れぬ。而して歐州戰亂の繼續する限りは、其出兵も亦繼續しなければならぬ。之れに要する費用は莫大のものと覺悟しなければならぬ。我國は今次戰爭破裂後夥しく正貨を蓄積し國富を增したと云ふものゝ、正貨の增したのは僅か十億圓に滿たない。之れ位の僅少な金は、一旦我國にして出兵すれ

ば間もなく消滅して了ふものと覺悟しなければならぬ。若し此の資金を悉く消費し盡さば戰後平和的なる經濟戰を如何にして行ふべきか。我國は其資金に窮する恐れがある。縱令戰爭に勝つても、戰後の經營に於て劣敗者たるの地位に陷る恐れがある。何の役にも立たぬ。此點は我が日本の現在及び將來に取つて甚だ重要な點である。獨逸及び米國が西伯利に對して其勢力を扶植するは實に經濟上に在るが如く、我國も亦經濟上に其の根據を据える事に注意しなければならない。之れは即ち我國の資本を投ずる事である。同じく金を使用するにしても、出兵の爲めに資金を利用しては、經濟上何等殘る所が無い。之を經濟的に利用すれば、其效果は永久的なものである。幸に今や我國は國內に於て資金充實し、金融は緩漫で、之を利用するに苦んで居る狀況に在る。それが爲めに成金式の奢侈浪費を奬勵して、國內の物價は騰貴する一方で、國民生活を壓迫せられて居る事は甚だ少くない。之れは未だ我國の資本家が、此褊狹たる島國に齷齪して、其眼界を廣くせざるに基く。宜しく資金は之れを外國に放資すべしである。而して其主なる處は固より支那であるが、支那と西伯利とは經濟上同一のものである。我資金は玆に之を利用せんが爲めに朝野俱に心を一にして努力したいと思ふ。

▽西比利亞に對する我經濟的發展

慶大教授　阿部秀助

吾人が西比利亞出兵論を非とする理由は極めて簡單なり、即ち其一は戰後の日本にとりて最も必要なるものは「肉彈」にあらずして「金彈」なり、故に現時、之れが集積作用に對して障害を來たすが如き行動は出來る丈け之れを愼むの必要あること、更に第二の問題としては吾人は既に對外的發展の一大要素としての支那を有す、此際西比利亞方面に其手を擴ぐることは、世の諺に「二兎を逐ふものは一兎を得ず」とあるが如く、徒らに我對外的活動をして散漫たらしむるに至る可きこと、況んや西比利亞其者に於ける交通機關殊に通路の不完全と、勞銀の高價なるとは果して我邦投資家又たは企業家の期待を滿足せしむるを得るや否や之れ亦た疑問たらざるを得ず、吾人は以上の理由よりして、我對外發展上に於ける西比利亞其者の意義を第二位、第三位に置かんとするものなり。

蓋、東、太平洋より西「ウラル」に及ぶ全長六千哩の西比利亞は極東の加奈太として、久しく米人の渴望する處なり、而して此富源が果して如何なる意義又たは價値を我國民經濟上に有するや否やに就きては次に舉ぐるが如き二個の見地即ち（一）原料及食料品供給地としての西比利亞（二）我工業品需要地としての西比利亞の點より考察せざる可からず、先

づ前者の方面より見るに其第一は「サヘレン」島にして、同島に於ける鑛領は千九百五年以來、一萬五千三百四十七哩に減ぜるも、然かも、全島到る處に石油、石炭を產し、前者は同島の北部「ウルタト」「チャイヴォキンスキー」兩灣附近に露出し、後者は西部方面に於て殊に品質佳良のものを產せり、只だ同島に於ける是等の事業が從來、極めて遲々たりし主要なる原因は良好なる港灣を有せざりしによるものなりとす、蓋、以上の兩者中、石油其物は戰後の鑛產物として最も重要なるものにして、既に獨逸の如きは此問題を解決する一方法として最近歐州に於ける石油の產地たる羅馬尼に向つて九十九ヶ年間之れが油田を租借し、且つ若干年間は之れを軍事的に占領するの權利を保留せりと、又、英國の如きも之れが國防上の立脚地よりして戰役前の活動を繼續して世界に於ける油田の獲得を務むるに至る可し、我邦の如きも今日に於て出來る丈けこれが生產額を增加せしむる方法として他に補給地を見出すこと必要なり、更に第二の問題は「カムチャッカ」方面の漁業にして、同方面は沿海州方面に比して交通不便なる結果、其獲得せる魚類を歐露方面に輸送すること困難なり、故に此方面に對して我勢力を扶殖せんか、一面、我邦漁村の疲弊を救濟する一端たると共に、更に低廉なる魚類を我國民の食膳に上すを得可し、斯くの如きは我邦の社會政策上一擧兩得の事業にあらざるか、其他、西比利亞は鑛產物豐富にして、殊に「トランス、バイカル」州の如きは金、銀、鉛、鐵、滿俺、錢石等を產せり、只だ之れが採掘事業として多少見る可きものは金鐵のみにして、其他は不振の狀態にあり、斯くの如きは交通機關の不充分なる結果、運搬費を要すること大なると共に、殆んど一年間を通じて土地凍結せる結果、之れを熟土と化せしむるために木材を燃焼せしめざる可からず、斯くて生產費は著しく高價となれり、若し、此方法にして改良の緒につかんか、同方面に於ける鑛山事業は必ずや發達をなすに至る可し、又、西比利亞一帶の北氷洋沿岸地方にして此後、人口增加し、海陸兩方面の交通にして多少、成立するに於ては、彼の瑞西に見るが如き「チース」製造業の發達に好個の機會を與ふ可しと云ふ、其他、製材業の如きは今日にては交通の不便と勞銀の高價なるため未だ充分に發達せざるも亦た將來注目す可き事業の一つたるを失はず。

轉じて工業品需要地としての西比利亞に就きて觀察するに、同地方は農業上に使用せらるゝ機械器具の輸入地として最も有望なるものにして千九百八年より千九百十一年に至る四年間に於て「チェリアビンスク」を經て輸入せられし額は約六千四百萬留餘に達し、之れが主なる供給者は工場を「モスコー」附近の「ルバーチイ」に有する「インターナショナル、ハーベスター、コムパニー」にして、同會社は其本店を米國に有す、而して此米國會社は西比利亞内に約二百の販賣所を有せり、更に以上の外、浦港方面より齎らさるゝ米國の農具は同方面よりの輸入額の七十「パーセント」に達せり、故に戰後、米國が露國との政治的接近を利用して自國と浦港との間に於ける直接的交通を頻繁ならしめんか、西比利亞其者に於ける米國方面よりの商品は益々多きを加ふ可く、從つて我邦の工業品にして此方面に輸入せらるゝものは玆に一大競爭者を見出すに至

る可し」

之れを要するに「サハレン」の石油「カムチャツカ」の漁業、其他、西比利亞內地に於ける鑛山業の如き大兵を動かすにあらずんば、果して之れを獲得すること能はざる事業たるか、余輩は斯くの如き行動が一種の帝國主義的思想を有する露國民の感情を害し、其結果、却つて所期と反對の結果を生ずるに至らんことを恐るゝものなり(四、二一)

▽對西比利亞經濟策

法學博士 堀江歸一

一

獨逸が西部戰場に於ける英佛聯合軍の勢力に對抗しながら、東部戰場に於て露國を擊破し、其內政を攪亂し民心の戰爭に倦み、講和を思ふの念熾烈なるに乘じて單獨講和の擧に出でたる手腕の辛辣なるは、世人の驚嘆する所なり。西部戰場に於て、目今獨逸軍が聯合軍に加へつゝある攻擊は如何なる結果を生ずるや、獨逸軍の頑强なる能く英佛兩軍の聯絡點を擊破して、中央突破の勢を成すを得るや、將た又曠日彌久後援に乏しきを告げて、退却の已むを得ざるに至るや遽に之を知る能はずと雖も、其孰れの場合に於けるを問はず、獨逸の勢力が露西亞に及ぼものゝ戰爭前に比較して、更に大なる可きは疑を容れず、但し其勢力が歐羅巴露西亞に限らる可きや、或は西比利亞其他の方面に及ぶ可きやの問題に就ては人の見る所必ずしも一ならず、種々の意見行はるゝが如し。

近來我國に西比利亞以西に我國の陸軍を簡派するの說を唱道する者もり。西比利亞の秩序紊亂し、邦人の生命財產の危險なる狀態に居るの事實はブラゴエチエンスク又は浦鹽斯德に最近發生したる事實に依て、之を知るに難からず。是等の危害に對して、我國が邦人を保護する爲めに、兵を出す可しと云はんか、外國人の生命財產を保護するの義務を負はざること今日の如き露西亞に對しては、一個の主張たるを得べしと雖も、論者の出兵論なるものは斯る純理に基けるものに非ず、漠然獨逸勢力の東漸を架空的に想像し、之を邀擊するの目的を以て、西比利亞に出兵せんとするものゝ如し。獨逸が西部戰場に於て、聯合軍に一擊を加へ、得たりとするも、最後の講和條約を締結し、又占領地に於ける自國の地步を安全ならしむるまでには、爲さゞる可からざるもの多々あり。然るに其勢力を分ちて、其一部を西比利亞の遠きに移し、求めて新銳の日本を敵とするの必要は果して之を何れに見るを得べきか、又假に獨逸が總ての算當を逸して、西比利亞に派兵したりとして、日本が之を邀擊する爲めに同じく派兵するに就て事の容易なるを得るや否や。今や露西亞に革命政府成りて、政令を布くと雖も、其權力洽く全國に及ばざると共に日本政府亦之を承認するに至らず、殊に露國民の日本に對する感情甚だ穩ならず、纔に浦鹽斯德に碇泊する軍艦が陸戰隊を上陸せしめたるの故を以

て、直に露國官民の激昂を惹起するが如く、日露國交の疎隔したる際に、日本が兵員を露國に送り、西比利亞の廣野を横ぎりて、或る地點に達するは、非常の難事たる可く、日本軍は獨逸兵と戰ふ以前に、先づ露國兵と戰ひ、露國民と爭ひ、物資の購入徴發共に困難なる爲め、又到所住民の反感を買ふ爲め、種々の危險と不便とを冒さゞる可からず。一國が外國に兵を派するや、外國人をして王師を迎ふるの態度に出でしむるを要す。日露戰爭に於て、滿洲に於ける我陸軍の行動の極めて有利なりしは、此一事に基くものにして、西比利亞出兵に至つては、全然之に反するものとせざるを得ず。

或は以上の困難あり、又危險ありとするも、西比利亞に於ける擾亂に依て、我國の利益の傷けらるゝもの大ならんか、兵力に依て之を防衛せざる可からず、唯一部の論者が獨逸勢力の東漸を架想し、日本人の生命財産が露國暴民に依て毀傷せらるれば、直に獨逸人の煽動に出づるものなりとし、西比利亞に於ける獨墺土の俘虜が今にも武裝を整へ、武歩堂々西比利亞を横行して、蒙古を侵す可しとし、獨逸禍の襲來を誇張するに就ては、別に意義の存するものある可しと雖も、吾輩は其故なく民心を騷がすの罪大なるを責めざるを得ず。今日獨逸勢力の東漸を恐るゝは恰も日露戰爭の當時露國波羅的船隊の東航を憂ひたると趣を一にするものなり。波羅的艦隊は其歐露に在るや、一個の勢力として、動かす可からざるものありしと雖も、萬里の航海を經て、日本に近づくや、兵員艦船共に疲勞し大なる威力を發揮する能はざりしと同じく、獨逸の陸軍は歐洲の戰場に於てこそ强猛の稱あれ、不完全なる交通線を擁して、本國を距つる數千哩の西比利亞に派出せられんか、必ずしも强兵猛卒たるを期する能はざるに似たり。獨逸の陸軍が西比利亞に於て、本國に於けると同様の活動を爲すを得るが如くに確信し、早く之を邀撃する爲めに、日本の派兵を說くは歐洲に於ける獨逸兵の行動を以て總て他の場所に於ても然る可きものあるが如くに斷じたるの誤に座するものとす可きなり。

二

歐洲戰後獨逸又は合衆國は必ず經濟上の權勢を西比利亞に擴張す可きを以て、日本も亦之に對抗する爲め、今日より西比利亞經營の根本政策を確立し、西比利亞の秩序恢復後直に其實行に着手す可しと云ふの說あり。獨逸が如何なる狀態の下に交戰諸國と講和條約を締結するやは戰後に於ける獨逸經濟的發展の針路に重大なる關係を有し、前者の不定なる今日、後者に對して斷案を下す能はず。唯吾輩の今日に於て推測を試みて大過なかる可しと信ずる點は(一)獨逸は戰後に於ては戰時に内國經濟社會の蒙りたる種々の傷痍を治癒するに忙はしく戰時に壯丁の死亡し、癈疾と爲れる爲めに生じたる勞働者の不足を補ふに機械力の利用を以てすると共に、壯丁の外國移住に對して制限を加ふることある可く(二)假に白耳義又は塞耳比亞若しくは歐露の一部分が獨逸の領土と爲り、又は其勢力範圍と爲らんか、此方面に向つて、經濟的勢力を發揚し、以て本國との聯絡を密接ならしむるを必要とし、隨て本國と隔離し、然も不完全なる

一條の鐵道に依て交通を保つ西比利亞に投き資本、費んず可き努力を投入することを信ずる能はず。彼の過激派は獨逸の政治家軍人と聲息相通じて、以て革命を計畫したるものにして、獨逸が彼等に援助を與ふるを辭せざりしと雖も、此事たる過激派を使嗾し、國民の戰爭を忌避する感情を煽揚するを以て、獨逸自身に有利なりとしたればこそ、獨逸帝國の爲政者と過激派と相狎狃したるに止まり、前者の軍國主義と後者の共和主義とは根柢に於て相容るゝを許すものに非ず。果して然らば戰後に於て、過激派あるが故に、又之を通じて、露西亞に獨逸の勢力の横溢するを信ずるは聊か輕卒の斷定に非ざるか、況や獨逸の勢力が西比利亞の遠きに及ばんとするの議論を唱うる者に於てをや。

然らば合衆國は西比利亞に對して、戰後如何なる經濟政策を樹立せんとするや。元來合衆國と云はず、獨逸と云はず、或る程度まで國內に工業の發達し、又今後之を盛大ならしめんとする國が戰後に於て留意せざる可からざるは、原料品供給の道を安全ならしむるの一事にして、天然資源の分配に就ては、國際間に劇烈なる競爭を惹起せざれば已まざる可し。此點より云はんか。西比利亞の如き、列國環視の焦點たるが如しと雖も、元來一國が本國以外の場所に就て天然資源の供給を仰がんとする場合には、其場所が本國と極めて近接せる地點に在り、本國に對する交通の最も安全なるを以て、必要の條件とす。然るに合衆國と西比利亞の關係に就て云はんか、前者が後者の富源を開發する爲めに、如何に努力し、又其努力の效果を實際に發揚し得たりとするも、斯く開發せられたる天然資源を本國に輸送するには、日本の領土權力範圍、沿海を通過せざる可からず。日米兩國の關係は固より親善にして、近き將來に於て、兩國の間に國交斷絶の不祥事を見るが如きは絶無なりとするも、猶ほ天然資源の供給に就て、合衆國として安全の道を選びたるものと云ふ能はず、寧ろ南米、中米を開發して、全米主義を實現し、加奈陀に對する經濟上の關係を密接ならしむるを以て、策の得たるものと認めざる可からず。若し夫れ白令海峽を經て、西比利亞に直通する通路の設けらるゝ日來らんか、合衆國は之に先だつて、アラスカを開發し、西比利亞に劣らざる天然資源供給地を自國內に見出すに至るに非ざるか、吾儕の疑問とする所なり。

三

故に日本にして西比利亞に對して或る經濟上の關係を結び、之を利用するの必要ありとすれば、日本獨自の必要に依て之を定む可く、特に獨逸合衆國に對抗するの意義に於て、之を爲すを要せざるなり。單に西比利亞と云はんか、面積四百八十三萬平方哩に及び、一千三十七萬人の人口を抱擁し、頗る漠たるものありと雖も、林業漁業鑛業は實に西比利亞全土に横はる富源にして、我國が斯業に資本を投じ適當の經營を講ずるに於ては、是等の企業に依て、天然資源を產出し、以て我國工業に對する原料の供給を豐富ならしむるを難しとせず。唯此政策を施すに就て、其將來に三個の疑問の存するものあり。第一我國の資本市場は西比利亞に

資本を放下し、然も利益の回收頗る遲緩なる事業に放資するに堪ゆるや否や、第二我國民中、相當の知識あり、又企業の才能ある者が西比利亞の如き有形的快樂の缺けたる地方に定住し、永く原始的事業の開發に一身を傾倒するの境遇に滿足するや否や、第三我國は西比利亞に天然資源の開發せられたる曉に、其供給に依賴するを可なりとする經濟政策を採用するや否や、共に疑問とせざるを得ず。

歐洲開戰以來、我國の經濟社會は容易ならざる影響を蒙り、如何なる邊に運命の定着せんとするや、遂に之を知る能はず、一方に歐洲交戰諸國の經濟社會を見れば、其動亂の甚だしき殆ど夕に旦を測る能はざるの概あり。茲に於てか、我國に於て戰後の經濟政策を論ずる者は遑々として安んずる所を求むる能はず、時局の變動に對して種々の應急策を主張する間に於て、一の政策と他の政策と枘鑿相容るゝ能はざるが如きものあるは、甚だ滑稽と云はざるを得ず。西比利亞に向つて、我國の經濟的機勢を擴張せんとするが如き、支那若しくは滿洲に於ける富源の開發のみを以てして、未だ我國に工業上の原料品其他天然資源を供給するに足らずとし、西比利亞開發に依て、其供給地を擴張せんと欲するものにして、要するに原料品の自給主義を打破するの結果を生ずるや、論を俟たず。然るに社會の一部には今回の戰爭に於て、我國が從來外國に供給を仰ぎたる原料品の杜絕したる事實に顧み、一切の原料品に向つて、自給主義を適用するに非ざれば、我國經濟生活の安全を維持する能はざることを絕叫する者あり。然らば西比利亞を開發して、我國に原料品を供給せしめんとすることゝ、原料品の自給政策を講ぜんとすることゝは大なる矛盾ありて、二者を併行するは到底之を望む能はざる所なるに、我國の論者中前者を主張し、殊に出兵に訴へて、目的を達せんとしながら、他の一面に於て後者を必要とするは奇怪の沙汰とせざる可からず。

自給主義者の見地より云はんか、我國が支那に天然資源を求むることすら危險なり、更に之を西比利亞に及ぼすに於てをや。自給主義の論者は斯く外國に天然資源を求むることを危險とし、之を回避せんと欲しながら、何故に西比利亞の富源を開發せんとするものなるか、之を開發する目的は我國に對する天然資源の供給を豐富ならしむるの事に存す可く、既に然る以上は、此事たる、自給主義の要求と相容れざるや、論を俟たず。吾儕は我國民が自給主義と云ふが如き鎖國的陋態を脫し、露國民心をして我國に倚賴せしむるの政策を講じて、戰後の西比利亞經營に遠算なきことを望む者なり。思想感情の上より、過激派を忌むが故に、全露國民を敵とするが如き、日本人として甚だしく機略に缺くるの譏なきを得ざるなり。



マツダランプ製造元
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎町
販賣部
東京
銀座尾張町一ノ一
大阪
西區阿波堀通一ノ
電話新町
六三〇
八九九、八九八
門司
西本町三ノ二九
電話
四六、六八二
出張所
名古屋、福岡、仙臺、札幌、上海、大連。
半間接照明器
投光器



南國小品

五月雨夜話

田中貢太郎

この小品は、『楊梅の話』『仲直り』『墓場』『地主の家の小話』の四篇からなつてゐる。南國のある海岸の風俗習慣を題材としたもので、この物語の中には、私の血の通つてゐるものがある。『五月雨夜話』の題意に對して、しとしとと降る五月雨の夜の無聊に書いたものだと云へば、甚だ詩的に聞えるが、實際は、あなたがたの五月雨の夜の伴侶にもと書いたもので、筆を執つた時分は、花曇のなやましい日が續いて、裏の崖には、虎杖がのび、土筆があぎて、散り殘りの吉野櫻の花片が胡蝶かなんぞのやうに、ガラス窓の外に飛んでゐた。（四月廿日）

楊梅の話

余が郷里又楊梅有り、今方さに其候也。楊梅に二種あり。一は朱色にして一は銀色なり。而して其銀の者尤甘美、漢土に在ては荔支龍眼肉に亞ぎて尙ばるゝもの實に楊梅とす。葡萄梨柿の屬は輿儓のみ、皂隷のみ。——兆民著「一年有半」——

すこしの遲速はあるが、六月になると、その村では楊梅が熟した。苺のやうな、中に核のある木の實で、

いぶし銀のやうになるのと、黒みがかつた朱のやうになるのとの二種類があるが、多いのは朱色で、銀色のは珍らしかつた。村の百姓は、一番草が濟んでからそれをとる事になつてゐた。楊梅のある所は、村の背後に屛風を立てたやうに續いた山の中であつた。灰色の幹をした高い梢に登つて、楊梅をとりながら見ると、濃い潮の色が直ぐ眼の下に擴つてゐるのが見えた。

もと楊梅は、女や子供の手で、「お銀がちぎつた楊梅は、」などと賣り歩かれて、附近の人々の口に入るに過ぎなかつたが、この頃は阪神方面へ汽船便で送られるやうになつてから、楊梅を持つてゐる農家は、好い小使にありつけるやうになつた。木の多くは控山へ自然に生へたものであつたが、自然生では實が小さいので、好い親木を見付けて、接木をした。

正吉は毎日正午過ぎから楊梅をとりに行つたが、自分の控山へ行くには、二町ばかり他人の控山の中を通らねばならなかつた。其所にも楊梅の木がぽつぽつあつて、若い娘が妹を連れて何時も實をとつてゐた。

その娘はお崎と云つて、小學校は正吉より二級ほど下であつた。その邊の風習として、夜になると若衆が娘の許へ遊びに行く事となつてゐるので、正吉もたまにその家に行つて、お崎とは好く知つてゐた。妹はお玉と云つて、それはまだ十二三歳の子供であつた。正吉が何時も其所な控山についた小徑を通りながら見ると、お崎は白い手拭を姉樣冠にして、赤い襷をかけ、黒みがかつた楊梅の實の一面になつた枝をひかへて、それを靜にとりながら、枝に釣してある籠に入れてゐた。その手には淺黄の甲掛をしてゐた。枯枝や落葉を踏む足音がすると、注意深さうな眼で、下の方を透して見て、顔を合せるとにつと笑つて、「とりに行きよるけよ、」と云つて挨拶した。お玉は筒袖を著てゐた。籠に入れるよりは口に入れる方が多いといふ風に、口のまはりを紫色に染めて、枝から枝を猿のやうに傳つて騷いでゐた。正吉を見かけると、「ひ、ひ、ひ、ひ、」と云つて變な聲を出したり、舌を出したりした。楊梅の實をばらばらと投げる事もあつた。

正吉は何時ものやうに楊梅をとりに行つて、お崎の家の控山を通つてゐた。竹子笠を冠つて、のらに行く時のやうに紺の股引を穿き、手首をコハゼで締める襯衣を著て、大きな籠を腰につけてゐた。お崎とお玉の二人は、その日は、徑から離れて、上の方の木で楊梅をとつてゐたので、聲ばかりして姿は見えなかつた。

正吉は何か物足りないやうな氣になつて歩いてゐた。と、草履の下に踏みつけたものがあつた。俯向けにして二つ重ねてあつた菅笠を踏みひしやいでゐた。それはお崎お玉の置いてあるもので、直ぐ傍の山梔の葉の蔭には、風呂敷に包んだ辨當包が二つと、赤い土瓶が一つ見えてゐた。正吉は惡い事をしたと思つたが、言葉をかけて云ひ譯をするのが極りが惡いので、そのまゝにして、こそこそと逃げて行つた。

控山に著いて、木の下に竹子笠を脱いだ正吉は、手拭を頬冠にして、蛙のやうに大きな幹にあがつて行つたが、踏みひしやいだ笠の事が氣になつてたまらなかつた。ひと言お崎に云つて、直して來ればよかつたになどとも思ゐた。しかし、何處となく滑稽に感じられる所もあつた。そして夕方になつて、陽の蔭になつた谷間の小徑を歸つて來た正吉は、針のやうなものを思ふさま踏まされて、其所に立ち縮んだ。手にしてゐた楊梅の籠もその拍子に取り落さうとしたが、やつと取り止めた。針のやうな刺のあるじやけつの枯枝を二三本合せて、路へ横にして置いてあつた。刺は草履を透して、おや指の裏を傷づけた。足首もひと所ひつ搔いた所があつた。確にお崎お玉のした事である。正吉は痛いのを忍へて、枯枝を撮んで足から離しながら、「畜、糞、糞」と云つて怒つた。

あくる日、正吉は山の方へ向いて歩きながら、どうしてお崎とお玉とを困らしてやらうかと考へてゐた。熟して黄ろになつた麥や、胡瓜などを作つてある畑の間を通つて、路が雜木の中に這入つて行くと、正吉は耳を澄まして、二人が來てゐるか、ゐないかを知らうとした。

お玉の笑ふ聲がもう聞えて來た。來てゐるぞ、どう

してやつたものであらうかと、正吉は又考へて見たが、二人の笠を何處かへ持つて行つて隱すと云ふより他に好い考へも浮ばなかつた。その中に正吉は二人のゐる處へ近くなつた。お崎とお玉は、徑ぶちの高い木へ二人一所にあがつて、何か話しながら楊梅をとつてゐたが、正吉の足音を聞きつけると、ぴつたり口をつぐんでしまつた。微にある風に木の葉のかさかさと鳴るのが聞えた。

高い灰色の幹には、正午過ぎの赤味の強い陽がさして、それに掛けてある梯子が眼についた。正吉はその梯子を見ると、いきなり手にしてゐた空籠を足許に捨てて置いて、梯子に手をかけて横に倒した。頭の上でお玉の罵る聲がした。正吉は籠を拾てゝ、ちよと木の上を見ながら、何か云はふとしてゐるお崎と顏を見合した。「昨日の事を覺えちよるか、横著女性。」

お崎とお玉とは、木の上から何か云つて罵つてゐた、正吉はそれを聞きながして、塔山へ行つて、楊梅をとりながら、根本から枝のある所まで一丈以上もある高い木の上で、二人の困つてゐる顏を想像して好い氣持ちになつてゐた。

その中に何時もの歸へる時刻が來たので、正吉は木から下りて、笠や草履を脫いてある所に行つた。笹と羊齒とが交つて生へた黑松の根本であつた。見ると、草履はあつたが、笠がない。風に飛ばされたではあるまいかと思つて、そのあたりを探して見たが見當らない。正吉の頭にお崎とお玉の事が浮んだ。「糞、糞、又やつたぞ」と云つて、正吉はいまいましさうに舌打ちした。

笠はどうしても見當らなかつた。正吉はいまいましくてたまらないので、明日は何か仇を打つてやらねばならんと思ふて、その方法を考へながら歸つたが、あくる日、何か思ひ付いたのか、朝、海岸の胡瓜畑に肥料をやりに行つて、十時頃歸つて來ると、そのまゝ空籠をさげて山の方へ出かけて行つた。

お崎とお玉とは、毎朝辨當を持つて山に來て、二時の八つ飯を喫ふ時刻になつて歸つてゐた。その日も何時のやうにやつて來たが、正吉に惡戯の仕返しをせら

れる恐れがあるので、正吉には見えない、徑から上の方の傾斜のはげしい所へ行つて、お崎は低い下枝の澤山ある木にあがり、お玉はその傍の幾等か高い木にあがつて、靜に實をとつてゐた。お崎の紺飛白の單物と赤いメリンスの帶の端とが青々した葉蔭から見えてゐた。お玉の小さな顏には、明るい陽の光がさしてゐた、

　がさがさと云ふ音がした。お玉はいたづらな眼を尖らして、下の方を見た。正吉が蹲んで、羊齒の生へた土の窪みに置いてあつた二人の辨當を手にしながら、辨當をとる拍子に轉がり落ちた赤い土瓶を擱へやうとして、周章てゝゐる所であつた。

「正吉の盗人、盗人、」と、お玉は叫びながら木から滑り下りて來た。

　正吉は辨當を投り出して立つた。お玉は走つて來た。

「盗人、辨當をとつてどうしたものなら、」

「なにが盗人なら、」と、正吉はもう本當に怒つてゐた。

「盗人よ、他人の辨當をとる者は、盗人よ、」

「何、」

　正吉の手は、ぴしやぴしやとお玉の體に當つた。お玉は大聲を出して泣いた。氣違のやうなお崎の手が正吉の體にまつはり付いた。

　山の下の胡瓜畑には、一人の爺親が胡瓜に肥料をかけてゐた。爺親は三人の爭ふ聲を聞きつけて、柄杓を投げ出して、山の上へ走つて行つた。

　三人は互に嚙りながら、叩き合つたり、ひつ搔き合つたりしてゐた。爺親はその中に割つて行つた。

「若衆と娘さんとが喧嘩しちやいかんぢやないか、」と、爺親は正吉の肩を押へながら云つた。

　正吉は氣が付いて恥かしくなつたので、爺親に押へられたなりに立つた。右の頰ぺたはひつ搔かれて蚯蚓脹れがしてゐた。お崎は爺親の右の方に立つてゐた。銀杏返しに結つてゐた頭髮をぐじやぐじやにして、齒からすこし血を出してゐた。お玉は、お崎の背後に立つて顏に手を當てゝ泣いてゐた。

「一體どうしたぞ、」と、爺親はお崎と正吉の顏を見くらべて云つた。

「路へばらを置いて私に踏ましたり、笠を隠したりするきに、私が辨當を隠さとしたら、お玉さんが、私を盗人と云ふきに、それで私が怒つた。」と、正吉は泣くやうな笑ひを浮べた。

「正吉さん、自分の宜えやう事ばつかり云ひな、一番はじめはどうぜよ、私らァの笠を踏んだやないか、」と、お崎はきめつけるやうに云つた。

「踏んだことな踏んだが、ありや有意し踏みやせん。」

「有意し踏まねや、何故もとの通り直して置かんぜよ、」

「もう宜え宜え、皆串戯がかうじた事ぢや、それでお前の隠された笠はあつたか、」と、爺親は正吉に向つて云つた。

「無い。」と、正吉は力を入れて云つた。

笠はお玉が知つてゐた。お玉がそれを取りに行くと、爺親は胴亂を抜いて、煙草の火をつけた。

お崎は頭髮を掻いてゐた。お玉が竹子笠を持つて歸つて來た。お玉はもう笑つてゐた。爺親は笠を受け取つて、それを正吉の手に渡した。

「これから若衆と娘は仲好うせにやいかん、……正吉さんも山へ行た。」と云つて、爺親は煙管をくはへたまゝで下りて行つた。

正吉もその後から續いて下りたが、その日からお崎とお玉に顔をそむけるやうになつた。正吉は世の中が急に變つたやうに淋しかつたが、喧嘩までしたものが二度と好い感情を持ち合ふ事が出來るとも思はれないので、此方から機嫌をとらうといふやうな氣にもなれなかつた。

一ヶ月ばかりある楊梅の期間は、次第に終に近くなつて行つた。それと共に何時のやうに雨が繁くなつて來た。

二日ほど續いた雨が綺麗に晴れた日、正吉は、空籠を持つて山にあがつて行つた。お崎とお玉とが近くで楊梅をとつてゐた。正吉がその下を通らうとすると、

「正吉さんちつと物をいひや、」と、お玉が笑つて云つた。

正吉はそれで頭に一杯になつてゐた黒い物が剝げかけたやうな氣がして嬉しかつたが、きまりも惡いので、自分でも分らないやうな事をひと言云つて、逃げるやうに、山の上に行つた。

あくる日、正吉は又徑を通つてゐた。『正吉さん、休んで行きや、』と、お玉が又頭の上で云つた。

そのあくる日、正吉は今日も又お玉が何か云ふだらうかと思つて、其所を通つてゐると、お崎が一人、徑ぶちの灰色の幹に凭れてゐた。『正吉さん、』お崎はうらみのある眼をしてゐた。正吉はその所に立ちどまつて、もじもじした。

仲直り

町内の人々は、村の大通りにある駄菓子屋へ集つて來た。戸外(そと)には暮れたばかりの薄暗い夜があつて、一體に冷々する晩であつた。店の菓子臺の背後になつた狹い室に釣した小さな洋燈のまはりには、十ばかりの頭がぼんやり並んでゐた。

その日は、黄ろな陽が海岸の村を照らしてゐた。村の中程になつた五十軒ばかりで一つの町内をこしらへてゐる所へ、世話燒の一人は廻つて行つた。

『今晩、絶交(ぜつかう)を直してしまふ町會をするきに、絶交をしちよる所があるものは、來(こ)いでもかまん。』

それは五六日前、町内と川田屋といふ呉服屋との仲直りをした席で、極つた事であつた。それは夏の事であつた。その村に赤痢の流行した時、町内の者が交代で衛生委員になつて、病家の世話をしたり、町内の家々へ石灰汁を撒いたりした時に、川田屋の亭主の安太郎は、病氣だと云つて代人を出して置いて、自分では裏の入江へ行つて、撒網(とあみ)を打つてゐた。龜背(ねこぜ)になつた肥つた男は、腰に魚籠(びく)をつけて、遠淺になつた磯の薄濁りしの所で、スイスイと泳ぎながら、すばしこく藻の中へもぐり込んで行く鰡を追つかけてゐたのを、運惡く町内の者に見付けられて、絶交せられてゐたが、やつと話がついて、川田屋で費用の牛鍋、町内でその牛鍋を持つて、村の倶樂部を借りて仲直りの酒宴をやつた。その席で、町内の者同士で絶交してゐる者が多いやうだから、それも順々に仲直りをさせやうと云ふ事になつた。

洋燈のまはりの頭は、多くなつて來た。『米治が來さうなもんぢや喃(のう)、』と誰れかゞ云ふと、『あれも喜馬さんと宅地(やぢ)の事で、やつちよる、やつちよる、』と云ふ者がある。『左様ぢや、左様ぢや、ふとい喧嘩よ、喜馬さんが楞を持つて來ると米治の祖父(ぢんま)が唐鍬を振り上げるものねや、己(おら)ア止めるに困つたきにねや、』と、それを證明するやうに笑い聲で云ふ者があつた。

「小母さんも來んか、」と云つて、若衆の一人は、振り返つて茶の間の方を見た。

赤い膳箱を控へて、酒を飲んでゐたお婆は、此方を向いて、村の人から犬神持ちの眼だと云はれるちかちか光る眼を動かして、「いこか喃、」と云つて笑つた。老婆と向合つて、胡座をかいて飯を喫つてゐた伜も、茶碗の手を控へて、若い人の好きさうな顔をにつとさした。

「此所は鶏ぢやア、鶏ぢやア、」と云つて笑つた者があつた。

駄菓子屋の裏口に茶園畑を拵つてゐる百姓が、茶園を荒らしたと云つて、其所な軍鶏の雄を捕で叩き殺した記憶が集つてゐる人人の頭によみがへつた。陽にやけた胸に濃い胸毛の生へてゐた貧しい頑固な百姓が、殺した軍鶏を投り出してある畑の縁に立つて、片手に鍬の柄を握り、片手に突き出し突き出して、老婆と云ひ争つてゐた容を思ひ出した者もあつた。はじめの若衆は、其所な裏庭の紫色の嫩葉の出ただかりの葡萄棚の下に、羽毛がばらばらに抜けて、背から首筋にかけて血みどろになつた軍鶏の置いてあつた事まで知つてゐた。老婆に聲をかけたのは、と婆をからかふ爲であつた。

集まつた者は、二十四五人あつた。二時間ばかりも協議した後に、五人の委員が出來て、それが各々絶交し合つてゐる家へ行つて、一切の苦情を貰ひ、絶交に關係のある方で半額、關係の無い方で半額と云ふふうに費用を出し合つて、川田屋とやつた時のやうに仲直りの酒宴をやらうと云ふ事になつた。

五人の委員の者は、町内の半數が絶交に關係があつて、とても一晩や二晩では廻り切れさうにもないので、今晩も廻はれるだけは廻つて置かうと云つて、連れ立つて出かけて行つた。そして最初に行つた所は、丑松といふ小百姓の家であつた。暗い庭さきには、薪束と、薪にする枯枝を積んであつた。庭の隅になつた土用竹の垣根の所には、高い樅の木が一本あつて、その上に星が二つ三つ光つてゐた。

五人は焚火の射してゐる土間の口から這入つた。うす痘痕のある骨組の大きな女房と、十七八になる娘とが、物を縫つてゐる傍で、瘦つぽちな丑松は、胴亂を枕にして横になつてゐた。

「おしまひかよ、」と、五人の者が挨拶して這入ると、丑松は起き上つて、笑ひ顔をしながら、「お世話ぢや喃し、」と云つて、皆の來るのを待つてゐたやうに云つた。

娘が丸火鉢へマッチを添へて出した。煙草を喫ふ者は、腰から煙草入を抜いて火をつけた。

「おまんくと、重吉さんくと、絶交ぢやアさうなが、それを町内へ貰ひに來たが、おまんも云ひ分が有るぢやらうが、町内へ任してくれんけよ、」と、竹村と云ふ村の有志家になつてゐる委員の一人が口を切つた。

「左樣か喃し、なんのおまん、絶交ぢやア云ふても、もう古い事ぢやきに、私にはもう何も云ひたうないが、先方はどう云ひよるぞ喃し、」

「おまんくが初めぢやアきに、まだ聞かんが、おまんくに任してくれりやあ、先方でも任して貰ふが……」

『方様か唱し、あれは私んくのこれが……』と、丑松は女房の方を顎で指して、『これが來る時に、丑は懶怠ぢやアの、こせかきぢやアの云ふて、邪魔をするきに、それで喧嘩をしたが、……私の方は、どうでも宜えきに、そんなら宜えやうに遣つたらうせ。』

次に五人の者の行つた所は、[illegible]焼をやつてゐる家であつた。其所は女主人で、一人ある男の子供は背後の方に寢かしあつた。琉球莚を敷いた狹い所で、カンテラの火をつけて、糸車をせつせと廻はしてゐた。

五人の中の三人はあがつて、二人は上框に腰をかけてゐた。女は赤黒い煤けた顔を魚油の光に浮かせて、隣家と絕交した譯を話しはじめた。

『私んくの方は、直つても宜えが、あんまり邪ぢやありませんか、二三度續けて香の物をくれたり、芋をくれたりするきに、どう云ふもんぢやらうと思ふちよると、私んくの犬神が憑いたきに、それでくれると云ふ事が分りました。私は別に立ち聞きする氣はなかつたが、妙なきに、ある晩、隣家の嫁さんが病うて、御祈禱すると云ふきに、裏の家添に行て聞きよると、あこなお婆が、早う香の物を出して持つて行けと云ふぢやありませんか。』と云つて、女は三四年前の事を今の事のやうに云ひ出して、口惜しさうな顔をした。――犬神と云ふのは、昔からこの地方一體にある精神病的の迷信であつた。怪しい犬神と云ふ靈があつて、それが人に憑ると、憑られた者は病氣になつた。その犬神は、眷族を連れて野を彷徨うてゐるものと、村の中のある家に昔から附いてゐるものとの二つがあつた。犬神を持つてゐるとせられてゐる家は、最近まで緣組を嫌はれた。

『眼をみよ、あの眼が犬神持ちの印だ。』などと云つたものだ。犬神に憑かれたと思ふものは、行者とか、佛教信者などの祈禱を商賣にしてゐる者に賴んで、祈禱して貰つた。祈禱の時には、病人はそのまゝにして、他によりと云ふ代りの女を雇つて、それに紙でこしらへたしでを持たした。祈禱者の祈りが進んで來ると、よりの女は顫ひ出して、手にしたしでを上下に振りはじめる。顫ひ出すのが犬神の憑いてゐる印だ。さうなると祈禱者は祈禱を止して、『どこから來た。』と云つて聞く。よりの女は顫ひして、來た家の名を云ふ。其所で『何故來た。』と聞くと、妬ましかつたから來たとか、欲しい物があつたから來たとか、可愛かつたから來たとか、又、門口で子供(犬神の子)を遊ばしてゐたら、前を通つてびつくりさせたから來たとか、野の犬神になると、あすこの畑へ子供を産んであつたら、麥を刈りに來て踏み殺したから、その恨みで取り殺しに來たとか、それは種々な事を云つた。祈禱者は叱つたり、なだめたりして、『もう歸れ。』などと云つた。直ぐ歸ると云つて、手にしてゐたしでをぱつと投げて、よりの女が仰向けに倒れると共に、病人がけろりと癒る事もあつた。どうしても歸らないので、幾晩も續けて祈禱する事もあつた。又、歸る犬神と約束して、門の前や、四辻などに握り飯などを置いた。物が欲しくて來てゐると云ふ所へは、その欲しいといふ物を何喰はぬ顔をして贈つた。それが爲めに隣家同士で喧嘩などをする事があつた。

五人の委員が三軒目に行つたのは、松二といふ唖の倅を持つた百姓の所であつた。村では中農の部になつてゐる家で、門の入口の右側には、

畜小屋があつて、牛と馬とを飼つてあつた。其でもあらう暗い中でコトコトと音をさしてゐた。

もう可成りに夜が更けてゐた。松二の家では、伜の嫁が一人起きて、ねんねこ半纏のやうな物に綿を入れてゐたが、五人が行つたので、松二は起きて來た。これは町と絶交してゐた。

「小父さん、一つ町内へ任して貰ひたいが、」と、山田と云つて質屋をやつてゐる委員の一人が云ひ出した。

「折角のお言葉でございますが、それはかつりは、どうもお任せする事が出來ませんきに斷し、」と云つて、老人は煙管の吹殻をから銘の火鉢のふちへ叩きつけるやうにした。

「そりや尤もぢやが、其所を一つ腹をさすつて貰ひたいもんぢやが、」と、竹村が口を出した。

「他の事なら皆さんのお顔を立てますが、まア聞いてつかはされ、私が淺田の甘藷の中で、百舌を鳴かしよりますと、隣の子よりや百舌の方が鳴くだけでも宜えと、私に聞えよがしに小池の要次さんに云ふがどうでございます。伜に嫁が來た時も、嫁の里から來た者と喧嘩して、嫁も立派、婿も立派ぢやアと云ふて、惡口を吐くがどうでございます。私は、あの時、あんな不具の伜がなかつたら、彼奴を殺して、自分も死なうと思ひました。」と、老人の聲は次第に激して來た。

五人の者は手の着けやうがなかつた。五人の中で春吉といふ若い男は、背から斷ちもくもく痛むのと、用水の事で一度松二老人といさかひをして好い感情を持つてゐないのとで、片手のお中指で右の顔の所を押したなりに、老人の尖んがつた鼻から、しつかりと力を入れて結ぶやうに見える口元の筋肉の動きを厭な眼で見ながら、はじめから默り込んでゐた。

山田の持つてゐた懷中時計は、もう十二時を過ぎてゐた。五人は仕方なしに其所を出たが、門を出ると、春吉が怒り出した。「松二さんの云ひぶんはどうなら、町内の者があんなに云ふても聞かんやうぢや、町内の相談がないぢやないか。」

「不様ぢや、彼所が一軒殘りや、今度の仲直りは何にもならん。」と、山田が云つた。

小さな四辻へ來ると、誰れが立ち止まるとなしに立つて、其所へ蹲んでしまつた。暗い中に風が動いて、弱さうな蟲の聲が何處かでしてゐた。

その時、竹村の頭にふと浮んだものがあつた。それは赤痢が出來た時分、竹村が町會の席で、何か意見を出すと、傍にゐた松二老人が、「今の若い者は新聞に書いちやアる理窟を云ふきに、事が面倒になる、」と云ふて、竹村に當てつけた言葉であつた。竹村は、今、その言葉を思ひ出した。「あんな自分勝手ばかり云ふて、町内の云ふ事を聞かんやうな奴は、町内同士の交際が出來んぢやないか、私は、あんな者は、絶交をかけても宜えと思ふ。」

「不様とも、松二さんは、何時でもあこちや、絶交をかけても宜えとも、」と、竹村が云つた。

翌晩小學校で町會が開かれた。それは松二を町内から絶交する爲

めであつた。『仲直りに行て、又絶交か、』と、嘲けるやうに呟く者もあつたが、竹村と蔡喜が固く取つて動かないので、町會では委員の云ふ通りに松二を絶交する事にした。そして竹村と蔡喜とが、その事を松二の家に通知する事となつた。

墓地

松原の共同墓地へ集つた二十人ばかりの者は、一坪ばかりの地面を取り圍んで砂を掘りはじめた。石油醤油などの小賣をしてゐる家の、利作と云ふ老人が長く中風症で寢てゐて亡くなつたので、町内の者が穴掘りに來た所であつた。穴をすこし離れて、松の浮根が蜘蛛の足のやうになつてゐる所には、角帶を締めた紺屋の亭主が腰をかけて、半紙を縦に二つ折にした二三枚綴りの帳面を膝に置いて、穴掘りに來た人の名をつけてゐた。『つけておらせ、』と云つて傍へ行くと、亭主は眼鏡の上の方から透すやうに見て、矢立の筆を動かした。

もう秋の末で、夕陽の射した松原の兩側の畑には、薩摩芋の葉が黄ばんで、中には堀られた所もあつた。沖の方を見ると、夕陽に染められた海の所々に、白帆が浮んで、それが右の方にでつ張つた岬の手前の港口へ這入つてゐた。

穴は三尺ばかり堀り下げられた。若衆の一人はその中に這入つて、鹽取のやうになつた鹽取道具で、黄ろになつた濡れ砂をしやくつて、投りあげた。まはりに立つて居る者は、手にしてゐる鍬でそれを掻きのけた。砂の中には朽ちた松の根なども交つてゐた。

『彌作さん、やんわり遣つておくれ、眼に砂が入る。』と誰れかが云つたので、皆が笑ひ出した。利作の父親の彌作は、遍路伽をやつて小金を溜めた男であつたが、遍路に病死する者でもあると、村役場から幾等かの手當を貰つて、それを埋めたものだ。口の悪い村の人は、彌作は手當の金が欲しいので、まだ死にきらない者を埋めたので、ある遍路の如きは、靜かに埋めてくれ、さうしないと眼に砂が入つて苦しいと云つたと云つて、云ひふらした。『彌作さん、やんわり遣つておくれ、眼に砂が入る』と云つたのが、それだ。陽に焼けて黒く光つてゐる人々の面に、のんびりした笑があふれた。

四尺ばかり堀ると、穴の中にゐた者は出て來た。穴はそれで十分であつた。まはりにゐた者は、紺屋の亭主を中にして、砂の上や松の根に腰をおろした。火打ちで石をコッコッ打つて、煙草をつける者もあつた。

『冥途へゐても、跛(ちんば)曳いて行ちや、足がすくむぢやらうねや、』と、前齒の二本抜けた顏の小さな男が、火のついてゐる吹殻を掌にあけながら云つて、その吹殻をころころ轉がして掌の焦げないやうにして、あとの煙草が煙管に詰まると、それに吹付けた。

跛でちよんぼにしてゐた肥つた佛の話しが一頻皆の口にのぼつた。『まだぢやらうかねや』と云つて、突然起ち上つて、大きな欠伸をしながら人家の方を見る者があつた。『ぼうずは禮が宜えと見ると、早う斷るきに、どもならん。前の鍛造爺が死んだ時にや、口の裏で、二三度うじやつし

や云ふたかと思ふたら、はや済んだ。」と、禿げた頭に鉢巻をして老人が云つた。

白張の二つの提灯が芋畑の頭にあらはれた。續いて四人擔の白い寢棺があらはれた。棺の後には、晒の忌中笠を著た者と、白い晒木綿の手拭を冠つた者とが、十二三人ばかりも從いてゐた。

いつの間にか穴の傍には、一束の薪が燃えてゐた。それは埋葬が済んで穴掘りの人が歸る時に、持つて來た鍬の刄をかざして、不淨をきよめるものであつた。人々は焚火のまはりに集つて、棺の近付いて來るのを待つてゐた。

棺は穴の前に來て、臺の上に据えられた。青い衣を著た若い僧侶の讀經がはじまつた。讀經が濟むと、燒香がはじまつた。穴掘りの人々の眼に、利作の娘と甕子を迎へてゐるお鹿の赤くなつてゐる眼が見えた。燒香が濟むと、供の者は皆歸つて行つた。

何時の間にか陽が落ちてゐた。棺は穴掘りの人々の手で穴の底に入れられた。「今度こそやんわりおやすみ」と、小聲で云ふ者があつたが、誰れも聲を出して笑ふ者がなかつた。

棺の上に[illegible]たカハラケなどを投げ込み、それから土を被せて饅頭のやうに盛りあげ、それに寺からもらつて來た戒名を書いた二寸角ぐらゐの卒塔婆を立てた。

あたりが薄暗くなつて、焚火の光が明るく見えた。人々はそれに鍬をかざしながら、逃げるやうに歸つて行つた。

地主の家の小話

島本といふ地主の女主人は、裏庭の隅にある物置へ行かうとして、土藏の口で、草履をつくつてゐる痩せからびたやうな下男を見て云つた。

「おぢい(下男の代名詞)、今晩、濱口へ行かにやア不可ぜよ。」

繩を四筋にして、それを木でこしらへて足の格好をした草履織に引かけて、藁を横にせつせと織り込んでゐた下男は、やつぱり手をやめずに、俯向いたなりに聞いた。

「町會でございますか。」

「あゝ、芳吉さんが、西町の銀造の娘と關係が出來て、貰ふてくれと云ふさに、その町會をする云ふて、松[illegible]から知らしてくれた。」

「さうでございますか、それや行かさ。」

女主人の肥つた肩幅の廣い體は、物置の口に消えた。其所には春の夕陽が明くさして、入口の柱の下には、

背の黒い小犬が體を圓くして寢てゐたが、別に頭をあげやうともしなかつた。

下男はその後で、芳吾の關係のあるといふ銀造の娘の、額の廣い、垢拔けのした女の事を考へて、水兵になつてゐる自分の伜にも、あんな嫁が欲しいと思つた。この中に、手に小さな紙包を持つて物置を出て來た女主人の、かア、かアと云つて、唾を吐く音がしたので、下男はそれに氣が付いて、『それや、宜え娘でございます喃し。』

『……宜え娘ぢやア喃し。』

『しかし、町内で貰ふちやるは、面倒な事でございます喃し。』

『さうぢや喃し、やつぱり他の町内のやうに、かたぎやかたがしたら、面倒はない喃し。』と云つて、女主人は笑ひながら勝手口へ這入つて行つた。

島本では、一人しかない男の子供は、京都の大學に行つてゐるので、家には女主人と、女中と、下男の三人しかゐないが、何事にも大まかな、話上手な伯母を慕うて、何時も甥や姪が我家のやうにして來てゐた。

その晩も、暮れたばかりの所へ小學校の教員をしてゐる甥が來たので、奥の六疊は賑はつた。靜かな夜で、家の下のげんげんを蒔いてある田では、蛙がほがらかに鳴いてゐた。

甥は横になつて、片手で頰杖しながら、枠の大きな眼鏡をかけて、新聞の續物を讀んでゐる女主人をつかまへて、若い女先生の話をしたり、女主人のものらしい袷を解いてゐる女中をからかつたりした。

『お前は、近頃、近藤先生と一所に學校から戻るつちやないか。』と女主人は時々こんな事を云つた。

『そんな事があるもんか、誰れがそんな事を云ふぜよ。』

『誰れでも宜えぢやないか。』

『そんな事を云ふものは、政ぢやらう。』

『誰れやら分らん。』と、女主人は長い煙管を持つて煙草の火をつけながら、『ほんまぢやろがの。』

『あはふ云ひな。』

其所へ下男が歸つて來て、臺所の方から上つて來た。

「今もどりました。」

「たまらざつた喃し、……どうなつたぜよ、貰ふてやる事になつたけよ。」

「明日、濱口さんと六太さんと、それから浦さんとが行く事になりました。」

芳吾と銀造の娘の梅代との事が、遲くまで繰返された。このあたりには、女房かたぎと云ふ掠奪結婚の遺風とも見られるものがあつて、正式に結婚の出來ない事情のある者は、女を連れ出して結婚しようとするので、何時も面倒な事件が起つた。それが爲めに、その町内では、女房かたぎを禁じてあつたが、その代りに結婚したい女があるなら、町内で世話をしてやると云ふ事になつてゐた。芳吾の事件はそれであつた。

その夜をはじめにして、島本の下男は、夕方になると出て行つた。そして歸つて來ると、種々の報告をした。女主人はそれを面白がつて聞いた。四晩目に歸つて來た下男は、女主人の顏を見ると、もう笑つてゐた。

「娘と關係があるなら遣つても宜えが、關係がないきに、どうしても遣る事はならんと云ひ切りますきに、今晩は芳吾を呼うで、關係があつた座敷の間どりを聞いて、それを浦さんが繪に書いて、明日持つて行く事になりました。」と云つて、下男は一笑して置いて、「その又繪といふもんが、面白いもんちやきに、皆が突きまはつて笑ひました。」

その晩は姪のお政が來てゐた。小學校が濟んで裁縫科に行つてゐるもので、顏の大きな頭髮の濃い娘であつた。お政も女主人も、笑ひころげた。

翌晩下男が座敷へ上つて來ると、待ちかねてゐた女主人は、下男が坐らない中に聞いた。

「繪を書いて行きや、分つたらう喃し。」

「それが、あちらは、どうしても知らんと云ひますきに喃し。これはつかりやどうも印のない事でございますきに喃し。」と、下男は何か考へ出して笑つた。

それから三日ばかり經つた。何時より早く歸つて來た下男は、「もう、あくそが盡きたか知らんが、芳の方

て諦めると云ひ出しましたきに喃し。くつろぎました。」

「さうけよ、それやよかつた。芳吾さんも、まだなんぼでも宜え嫁さんは、あらア、」と云つた女主人は、船大工をやつてゐる芳吾が、法被を著て、夕方隣村から歸つて來てゐる姿を、ちらと浮めて見た。

田尻市長及現代政治家の警句駄句

鐵　拳　禪

一

蝙蝠坂の徒歩博士と云へば、蝙蝠坂の蚊喰鳥にまで記憶され、親しみを持つて居た。薄明の坂路を、長靴を穿いた親爺が石突の減つた蝙蝠傘を杖いて、少し及腰になつて、登つて行くと、何時も待つてましたと云はぬ許りに、蚊喰鳥が博士の頭の上を掠め去つたものだ、まさか同類の蚊喰族と思つた譯でも無からうが、其の毛色の變つた所に、興味の眼を瞶つたのかも知れぬ。鳥なき里の蝙蝠と云ふが、博士も人なき里の猿のやうな格好であつた。有りもせぬ著換を有るやうに見せたい爲に、質屋から日借をして帝劇見物に出掛ける人間の居る世の中に、人並外れた穢い服裝で濟まし込んで居た。自身は著のみ著の儘で著換を持たないと云ふ樣な顏をして居たが、古くはあるが金ピカの大禮服も、フロックコートも、一通りの服裝は持つて居た。唯みえ坊のやうに無用な著物は拵へないで、詰襟の稼ぎ服を專用して居たのであつた。代議士が開院式の日に際して、前の晩に質屋から出した燕尾服の格好の崩れて、肩の邊に夥しく質皺と云ふ一種の特調ある皺の寄つてるのを著込んで、綱曳の腕車などを飛ばすに比べると、

綽々として餘裕あるものであつた。其の餘裕のある博士が、會計檢査院長の榮職に在つて、そして子爵の殿樣であり乍ら、著のみ著の儘で、徒歩るのが感心だと、先づ世人の好奇心に投じたのだ。論より證據、區役所の受附や、砲兵工廠の職工等が、博士より以上乃至より以下の服裝をして通るが、蚊喰鳥は一向に注意しない樣子である。蚊喰鳥の居ない時分は、雪蟲が能く飛んで居るが、これは博士と職工との見境が付かないと見えて、誰の鼻先にでも平等にやつて來る。「へん、蝙蝠坂の徒歩親爺が何だい、俺にはみんな一樣に人間に見えらあ」と云つた風である。

處が春になつて、犬がくん／＼鼻先を土に付けて、屎の古跡を嗅ぎ廻すとやらになると、博士の姿が蝙蝠坂から消えて了つた。あれ程根氣よく徒歩つた、膝栗毛の名騎手が何うした事かと、博士の長靴に踏まれたり、蝙蝠傘の石突で突かれたりした石ころ共が、心配さうに眉を顰めて居た。徒歩博士をもじつて、徒歩泣かせなど云つた人もあつたが、其の惡評に省みる所あつて、てく休めをやつてるのでは無いか、と云ふ説もあつた。博士は豆飯を食つてるだけに、手まめで足まめで、そして肉刺も出さずに、健康で居て、職務に忠實に立ち働く人だから、虚病を使ふ筈もなし、はて面妖なと云ふ者もあつた、石ころでさへ會議を開いた位たから、博士の會計檢査院長の椅子を滑つた事に就ては、世間でも一寸意外に思つた。曾て勅選議員になつた博士が、職務の關係上それを辭して、今度復た勅選議員になつた。おまけに樞密顧問官に祭り込まれる所だつたが、それは體よく辭退した。此の親爺、後進の爲に進路を開いたの、修養團の爲に畢生の努力をするだのと云つてるが、樞府入りを固辭した所を見ると、却々野心があるらしいと睨んだ人も尠くなかつた。

役人も飽きた、肩が凝つて不可ん。最う登る所まで登つたから、之から一つ死花を咲かせるやうな仕事をやつて見たい。――然うした考が、土筆のやうに淋しい胸の土に頭を擡げて來た。梅干入の握飯が玄米パンとなり、玄米飯が豆飯となるまで、四十年間劇職に在

つたが、劇職を退いて見ると、心に一分の空虚を生じた、何か仕事をやつて見たいと云ふ事業慾が、書齋の研究のみでは物足らぬやうに感じた。其の時、彼れの眼の前に突き付けられたのが、七個月もあいて居た東京市長の椅子だ。詮衡委員まで擧げて人選して、而も行き惱んで居た東京市長の椅子だ。其の椅子に就て、一つ腕を揮つて見ようとする心は、自信のある者なら何人でも起つて來るに相違ない。博士は幸に自信もあり、勇氣もあつた。そして死花を咲かせる機會を得たとも、私かに思はざるを得なかつた。『二百萬市民が一致して推すなら、市長の公職に就くを辭するもので無い。』然う云ふ肚の裡には、『人のやれない事を、俺がやつて見せる』と云ふ確信も有つたらう。あの頑固な、徒歩親爺の事だから、乾度肘鐵を食はせるに違ひないと思はれたが、早速、無條件で快諾した。市長選擧の少し前に、彼れは『市會の或者から交渉されて、内諾したやうな事を新聞で書き立てたが、俺はまだ一度もそんな交渉に接しない。なに、犬養や高木などが來たと云ふのか、俺は犬は飼つてるが、そんな人は來ないよ。』と例の警句を吐いて居た。澁澤男が話した所で、しぶしぶ引受けるか何うかも疑問だと云はれたが、『推薦された以上、徳義に反する事は出來ぬ。』と出廬したのは、案外だつたが、併し勇氣ある行動だ。

薩派の復活！　そんな事を云ふ者もあるが、まあ何うでも可いでは無いか、蝙蝠坂の徒歩博士が、市民の休戚を背負つて立つと云ふ所に、買つてやるべき面目味がある。

二

若し執こく、詰將棊の積りで徒歩博士を追ひ詰めて、『貴公の東京市長たる、薩派の復活なりと云ふが、果して眞か。』などとやつたなら、乾度『俺は薩摩の芋畑育ちだが、そんな事はさつぱり知らん。』と眉間に立皺を寄せて、『そんなに根掘り葉掘りするよりも、君の脚下の芋でも掘つたら何うだ』と浴せ掛けるに相違ない。博士は頑固だが、又飄逸な所があつて、容易に向つ腹を立てぬ。大抵の事は洒れのめして了ふ。

洒れの重いのを駄洒れと云ふなら、博士のはそれである。言葉その物の關係かも知れぬが、大阪人の洒れのやうな輕い所はない。厭味はない。喜劇役者の臺詞のやうな、野卑な所はない。考へさせてから、笑はせるやうな仕掛になつてゐる。洒れと駄洒れの輕重を問うた序に、も一つこじつければ、博士の駄洒れは、禪味ある地口とでも云はうか。聽いて、直ぐ笑ふよりも、考へて笑ふことが多い。無意味な諧謔では無くて、片言隻句にも何か意味を持たせてゐる。諷刺的分子を多量に含んでゐる。あつと笑つただけでは濟まず、味はつて見なければ、その諧謔の眞髓の分らぬやうな事が往々ある。毒づくと云ふ程でもないが、何しろ輕快味よりは、暗黒味に富んでゐる。諧謔ながらに舌鋒が鋭くて、辛辣味を帶びてゐるので、皮肉と思はれる事が多い。だから、博士の駄洒れは印象が深く、そして忍はず痛快を叫ばしめる、さ湯を飲んだ時のやうに、喉元過ぐれば熱さを忘れて了ふやうなもので無く、冷酒を呷つた時のやうな亢奮が、長く殘つてゐるのが、その爲で無からうか。

和田垣博士は、縄暖簾通として、滑稽家として、夙に一家を成した人である。文學博士を貰へば、然う法螺も吹かなかつたかも知れぬが、法學博士を頂戴したものだから、盛んに吹き立てる。法螺垣博士とさへ綽名された程、左様に吹くことに堪能である。吹くと云つた所で、此の人のは自畫自賛では無く、滑稽突梯の才で以て、總てを洒れのめして了ふのである。駄洒れに掛けては、天下一品の稱あるが、法螺の音量が尠からず手傳つてるやうに思ふ。一體ユーモアは善良な意味を持つたもので、些の惡意を挾んだものではならないと云ふやうに、博士が何かに書いてあつたと記憶するが、博士は可なり現代の大家を痛罵する。そして無遠慮に、處嫌はず法螺を吹き立て、向ふ者を皆吹き飛ばすと云つた風である。豪放磊落、些事に頓着しない所を、看板に賣出してゐる。徒歩博士の著のみ著の儘の一枚看板とは違ふが、矢張服裝などは何でも構はぬ。隠すべき所さへ隱せば、それで可いと云ふ主義のやうに見

える。ポッケットに大きな銀貨一枚さへあれば、何處の縄暖簾にでも飛び込む。飲んで氣焔を吐く。駄洒れを云ふ。不平を酒に遣ると云つた風の無いでもないが、確かに毛色は變つてゐる。が、徒歩博士に比べると、著しく不檢束である。到る處に借金を拵へ、それで平氣でゐる。ぼろ服に諧謔を包んでゐる、利口な田尻には、それが出來ない。十錢銀貨一枚を持つたと假定すれば、和田垣はそれをおでん屋で遣つて了つて、夜が夜中でも徒歩つて歸るが、田尻は五錢で片道の電車賃を拂つて、五錢だけポッケットに殘して、歸るべき時間には屹度歸るに相違ない。それ程二人の性格は違つてゐる。而も博士中で、駄洒れの兩大關と立てられて居る。

板垣伯の自由民權論の流行つた頃、法螺垣博士は、品川で牡蠣に舌鼓を打ち乍ら、『世の中はかきの味こそ好かりけれ板垣伯に和田垣博士』と奇句を吐いた事もあつた。又、日露開戰論で鯁骨を廣告した金井博士と、其處に落ち合つて洒れ競べをしたが、到頭金井を吹き捲つて、『僕には叶ひえん（金井延）だらう』と云つたやうな話もある。又、萩原守一が外交官試驗に應じた時、彼れは英語の試驗委員だつたが、例の奇問を發して、守一を苦しめた、すると、守一も少し自棄氣味になつて、『貴問は蟬の聲に妨げられて能く聽き取れなかつた』と云ふ意味を、流暢な英語で答辯に及んだ。流石の駄洒れ博士も、この奇答に哄笑して、即座に滿點を與へたと云ふやうな、噓のやうな、誠の事實もある。徒步博士には、こんな奇行や、奇句はない。奇行と云つても、大抵型のやうに極り切つたものである。十年一日の如く、奇行を奇行として繰返してるに過ぎぬ。風變つてるので、奇行家の奇名を博したが、其の奇行も儉約を基調とした道德的なもので、常識のレールにちやんと載つてゐる。謙三のやうに脫線的の興趣は、到底彼れに見ることが出來ぬ。それに文學思想が無いから、狂歌とか川柳とか云ふものを駄句るだけの風流に缺けてゐる。田尻の駄洒れが、何處かに倫理的臭味があつて、頽廢的傾向の無いのも、然うした所に原因する。それだけ稻次郎の諧謔には、洒脫な輕快味は乏

しい。ユーモアとしては、決して上乘なものでは無いが、警句としての價値は相應に有る。

三

法螺垣博士が大法螺侯と親類だと云へば、別に不思議は無いが、徒歩博士が大法螺侯の縁戚だと聴いては、それは本當ですかと反問したくなるのも無理はない。無責任と云つては失敬かも知れぬが、責任の障壁を撤廢して、自分の言論を無制限に開放した大隈侯と、駄洒れにさへも憂國の至誠を織り込まうとする田尻博士とは、其の責任觀念に於て非常な距離がある。口には税金の掛らぬものと極めて、得手勝手に法螺を吹く重信は、口にも税金を掛ける積りで喋舌つて、その駄洒れで以て他をあつと云はせる稻次郎とは、その様式に於て煙に捲くの法を異にしてゐる。侯は黒縮緬の紋附羽織などを着込んで、華美な生活をしてる貴族であり、博士は倅の著古した鈕のとれた洋服などを著て、寒素な生活を樂んで居る學者である。それほど趣味傾向の兩極端にある者が、縁は異なもので、ちやんと結び着いてゐる。博士の細君のよし子は、三枝守富の長女で、侯爵夫人とは叔姪の關係である。從つて、稻次郎は重信の甥に當る譯である。その大法螺吹きの叔父さんの養孫光子――信常夫人――は、守富の三女であるから、之も侯爵夫人の實の姪だ。侯爵夫人の綾子は、即ち守富の妹である。こんな込み入つた關係に於て、大隈三枝兩家は水も洩さぬ仲となつてるが、田尻大隈間は縦令それ程で無いとしても、立派に縁戚關係が出來てゐる。芋畑育ちでも、その芋蔓の隙間に絡み著いて離れない者とは違ふ。侯と交友淺からざる澁澤男や中野市會議長などの、思を彼れに寄せたのも、決して底も蓋も無い譯では無いんである。併しそれを觀破したから、反對派は意固地になつて政友會系の阿部浩を擔いだのだと云ふも、多少の偏見であり、邪推であらうか、氣を廻せば然う廻す事の出來るやうな經路になつて居る。假に博士は大隈系に推されたとしても、黨派を眼中に措くやうな偏頗は敢てすまい。彼れ自身も俺の眼玉の黒い所に映つてるのは、東京市ばかりだと云つて

るでは無いか。

その理想通に行けば結構だが、小姑の多い市會は、高潔な人格だけでは、何うも調和を保てないやうだ。澁澤男なども、「博士は今少し俗化しなければなるまい」てな事を云つてゐる。まだ一度も市會に當つて見ない博士は、警句も吐かないが、そろ〱自分自身の態度に朱書を加へて來たやうだ。先づ徒歩を廢して、腕車や自働車を飛ばすやうになつた。長靴が短靴と變り、詰襟が背廣と變つた。玄米パンの晝飯が中央亭出張所の洋食となつた。必要の前に態度を改めるに躊躇せぬ、怜悧な遣り口は之でも分るが、奈然田尻式を改造するやうな事は無からう。併し幾分でも讓歩する間に、名物の徒歩博士が、濁りに染まなければ可いが、と云ふ懸念もあり、即ち「てく」が濁れば「でく」となり、遂に市會の木偶坊となるでは無からうか。然うすれば、博士の貫目が全く無くなると云ふものだ。豆飯の普及や、牛肉細切の利用を説いてる間は無難だが、本人が細切と同格になつては、市長としての博士は至つて心細い次第である。

登廳第一日の新市長は、四十年古のフロックを着て、市政記者に接見した。某新聞は、一同を引見したと書いてるが、引見は殿樣が家來に對するやうで面白くない。まさか田尻は、記者連を隷屬視した譯でもあるまいが、洋服調製の年代を問はれたに答へて、「これは四十年前だ、諸君がまだ生れない時分のものさ。」などゝ云つてる所を見ると、まるで子供扱ひにして、人を飲んで掛つてゐる。又その體量を問はれて、「俺は粹の肉がないから至つて輕い。」つまり貫目が無いんだ。牛肉のロースに當る處の肉の無いのは、人を喰はないからさ。」と警句を吐いたが、餘り人を飲み過ぎるからかも知れぬ。井上市電局長が逸早くも自邸に訪問すると、博士はいきなり「やあ神鳴の親方、能くやつて來て與れた」と挨拶したさうだが、隨分人を飲んだ話だ。井の敬と云へば、自由黨以來の策士で、星亨の子分として聞えた男だが、正に一本參つた形であつた。一體博士は北雷と號してるから、彼れ自身が神鳴の親方を氣

取るべき筈だが、彼れのは電氣の雷では無くて、著たなりの北雷である。市電局長と馬力比べが出來ないので、其の機先を制して、警句を電光石火的に飛ばしたと見るべき理由がある。

博士の黄ばんだ顔色を見て、豆飯を食ふからだと云ふ者もあるが、あれは風雨寒暑の別なく、著たなりで徒歩つたから、日に焦げたのである。一寸焦げたのなら直ぐ癒るのだが、何十年來焦げたのだから一朝一夕に原色に復すまいが、腕車に乘つたり、自働車を驅つたりするうちに、其の色光澤も何程か善くなるだらう。すると、徒歩博士が、北雷卿と呼ばれて、其の名稱にだけ舊時の面影を止めるやうになるかも知れぬ。

田牛庵北雷卿！　誠に博士には相應しい稱呼である。夏になると、彼れの門から玄關までの通路が、南瓜の棚で隧道のやうになる。玄關には、『高盤經濟。取次を乞はんと欲する諸君は、之を以て頭上の木鐸を敲かるべし。』と書いてある。木鐸には、田牛の銘が彫刻されてゐる。田牛は『賴まう』の意で、牛を『まう』と訓ませるのは、其の鳴聲に由つたのである。この木鐸は、臺灣の生蕃の警戒木で、柳生臺銀頭取が贈つた物ださうだ。飽くまで我田引水をやつて、人を飲んで居る態度が小面憎いが、茶氣があるので、多少の反感も『あはゝゝ』の哄笑に消して了ふのである。こんな處にも、博士の眞面目で、ぶつきら棒と見えて、而も人を反らさぬ如才なさが露はれてゐる。

四

博士のまだ大藏次官であつた時、貴族院の或委員會で、議員の質問に應じて、立板に水を流するやうに辯明をやつた。彼れの頭腦は明晰で、如何なる難問題と雖も容易に理解する。それに記憶力がよく、豫算面の數字を記憶して居て、何の澁滯なく語り續ける。この點では、流石に記憶力に富んでゐる大隈侯も舌を捲いてゐる。處で、彼れの辯明を聽いた議員は、『本當にあなたは多知（田尻）さんだ』と云ふと、彼れは『否零（稻次郎）です』とやつたので、謹嚴な貴族院の連中皆噴き出して了つた。此の調子で市會を茶化せば、案外面白く

治まつて行かぬとも限らぬ。奥田前市長のやうに、議員の懐柔や狩り出しは下手でも、數字の記憶と駄洒れだけで、あつと云はせる才能はある。それに禪的飄逸で以て他を魅惑し、社會政策を實施して多數市民の信用を贏ち得ようとする樣にも見える。胃腑の問題から入つて、市民生活の改善などを企てようとする所が、少し二宮宗にかぶれてるが、其の手腕は、役人上りの割には『否否』では無いやうである。

博士の盛んに警句を飛ばしたのは、帝大の講座に於てゞある。彼れは何時でも始業二十分前に出勤し、石突の減つた蝙蝠傘を黒板の後に立て掛け、黒繻子の風呂敷包を机の上に擴げる。エヘンと黄色い咳拂を一つすると、田螺のやうな眼玉を光らせて、講義を始める。奇句警句、口を衝いて出る。會心の所に到ると、無邪氣な微笑を洩す。何うかすると、元老を片ッ端から扱き卸す事がある。彼等は丁髷だの、チョンなどゝ云つて、自分は天晴の新智識を以て任じてゐる。又、遞信省は所謂低信省で、信用が低くなる許りだなどゝやる、ハイカラの註解を試みては、今のハイカラは首が刎らぬだけだが、段々カラが高くなつて、到頭目まで隱すやうになる。お先眞暗、向ふ見ずは、ハイカラの特長だなどゝ皮肉を云ふ。面白くもない經濟學の講義を面白くやるから、學生には受ける。今度市長になつて、努力を市政に集中するの必要があると云ふので、帝大、早稻田、專修の三校は御免を蒙つて、高商だけの講義を受持つ事となつた。市政に對する抱負や、市會に對する不滿(若しあらば)なども、其の講義の際に、ちよい〳〵駄洒れ若くは警句となつて現はれるだらう。少し注意して聽けば、市政に對する反映を玆に觀取することが出來る。

こんな風に洒れのめす人間だから、職務の方は何うかと云ふに、却々よく仕事を行つてゐる。國債局長から次官になる迄に、其の除任毎に何か一つ宛効績を殘して來た。西南戰後の財政計畫を樹て、正貨準備と紙幣整理をやつたのも彼れである。國債を整理して、公債の利子を五分に引下げたのも彼れである。各省の分

補的豫算を大藏省に纏め、其處で統一して編成する事にしたのも彼れである。他の反對を排して、金貨本位制を主唱したのも彼れである。煙草專賣法を立案したのも彼れである。彼れは帝國財政の基礎を築き上げる事と、大藏省の權威を高める事の爲に、非常な努力を拂つた。會計檢査院長となつて、愈よ其の手腕を發揮し、旭川兵營事件乃至百三十銀行破綻救濟問題に對して、斷乎たる處置を執つた。それが、どんなに博士の鼎を重からしめたか知れぬ。田尻あつての會計檢査院だと云はれたのも、彼れが毅然として節を屈せず、內閣の壓迫を手强く跳ね付けたからである。

先帝は能く稻次郎の爲人を御存じであつて、第二次桂內閣の時、(藏相の適任者が無いと云ふので桂自身が兼任して居たが、)田尻を大藏大臣にしたら何うかと仰せられたさうだ。それは田尻自身も仄聞して居たと見え、何かの儀式に參列する時、大禮服の上に紙鳶の尾を紐にした銀側時計を持つてゐたが、檢査院の某書記官は「今日は其の紐は少し酷い」と注意すると、「陛下は臣の平生を御存じだから構はぬ」と、其の儘で參內した。由來、田尻と桂は反りが合はず、又强ひて合はせようともしなかつた。何時であつたか、博士の南瓜棚の中に、桂公の頭に似た南瓜を發見した時、早速それに桂太郎と書いて、書生共と一緒に手を拍つて笑つたさうだ。

博士はあれで、却々よく人を見てゐる。綽名を付けることも上手だ。日外「勝田はシケウケ(旅の方言)だから、やる事がみんな濕つて了ふ。バカツキ(若槻)の方が餘程うまく遣るよ」と云つて居た。勝田よりも若槻は莫迦だが、それだけ遣り口が周到だと、云ふ褒貶の意味が含んでゐる。市長就任承諾の際にも、「木挽が良材を挽く時は、先づ墨繩を打つて標準を極めるが、焦燥つて仕事をやると、其の標準線を外れて了ふ。人生の事も亦然うだ。僕のやうな微力な者でも、誠心誠意事に當つたならば、十個の理想に對して一二を實現する事が出來ようかと思ふ。」と言外の餘韻を撈せよと許りに、禪的にやつたものだ。理想を電燈のやうに個

數で勘定したり、實現率を數字で示したりするのは、何處までも經濟學者の殼を脱せぬ。他の嗜好を度外に措いて、豆飯の滋養率に拘泥するも、矢張この筆法である。

五

北雷卿が早稻田の講義を終へての歸途、能く山吹町邊の安理髮床に這入つたものだ。餘り穢い床屋なので、或人がそれとなく注意すると、卿は毬栗頭を叩いて「こんな頭は斯う云ふ所で澤山だ」と濟まして居た。それに就て思ひ出されるのは、外山天狗と稱された外山博士の事だ。博士は非常な潔癖家で、顏を洗ふにも、冷水には黴菌が居はせぬかと心配して、常に熱湯を用ゐて居た。だから、床屋の如きも一等清潔な所で無ければならぬと云ふので、常盤橋附近の庄司と云ふ理髮床まで出掛けて行くのであつた。そして口癖のやうに、『頭は僕の唯一の財産だから、大切にしなければならぬ。それで、遠路を厭はず、高い料金を拂つて、保護して居るのだ。』と云つて、鼻を高くして居た。卿と全く違つた意見を持つてるのも滑稽だが、それ程までに潔癖で、大切にした頭の所有者が五十三でころりと斃れたのも、人生の皮肉である。

これも過去帳の人となつたが、西鄕從道侯は頓智に長けて居た。人間が茫漠として居て、馬鹿だか利口だか分らぬが、何となく重味がある。田尻の所謂人を喰つたせゐか、ロースに當る所の肉も、可なり豐富だつた。つまり貫目があつた。田尻のやうに喋舌らぬが、不意に駄洒れを云つて、人を笑はせたものだ。何時か閣議のあつた時、侯は『成程々々』と合槌を打つて、伊藤公か誰かの説明を聽いて居たが、突然『團子坂の菊は何うで御座んせう』とやつた。今まで甲論乙駁の難局に遭遇して居た席上も、此の一語で和解して、みんな笑つて袂を別つたさうだ。侯の調和劑として重んぜられたのは、斯樣な無邪氣な言動――頓智頓才と云ふ樣なものであつた。薩摩人には、然うした頓才なり、駄洒れなりの系統があるのかも知れぬ。長州人は智的で、大した粹物は無いやうだが、同じ地口にしても氣の利

いたことを云ふ。山縣公は今こそ謹厳一天張だが、以前は風流韻事を解して、「女房が馬鹿では家が治らぬけれども、妾は馬鹿の方が可い。」などと警句を吐いたものだ。侯の頓才で以て茶化すのとは違つて、ちやんと動きのない所を云つてゐる。餘程壺中の味を知つた者で無ければ、斯う云ふ穿つた事は云へないのである。頓智と云へば、中井櫻洲が英京に遊んだ時、知合の英人に或友人の家を問はれたが、彼れの貧弱なる語學の力ではそれに答辯の自由を得ず、止むなく「今日明日、明後日の家」と云つて、其の三軒目なる事を知らせた事がある。同じ頓智でも、西郷侯のよりは餘程智力が働いてゐる。

寺内首相は一癖あるだけ、ちよい／＼駄洒れを云ふ。それが怖い叔父さんのやうに云はれて居る伯の口から洩れるので、一層滑稽に聞えることが多い。日清戰爭の時であつたか、威海衛を辭去する時、「えかい御世話になりました」と云つて、諸將士を笑はせたと云ふ話もある。つい此頃も、内外兩相の缺席を詰問された時、「内外多事で…」など地口を叩いて居た。それと對抗して、代議士の方にも輕妙な洒れを云ふ者が有りさうなものだが、何れを見ても山家育ちのせゐか、重苦しい皮肉ばかり並べてゐる。押川方義の「現内閣は政友會の忍耐に由つて保たる」は、一寸垢拔がしてるが、齋藤隆夫の選擧法改正案討議の際、「大臣以上に聰明なる水野君に質問します」とやつたのは、毒が利き過ぎてゐる。齋藤珪次の鈴木梅四郎を揶揄つて、「如何にビスマルクでも襁褓の中から社會政策を叫びはすまい」と云つたのは、何程か振つてゐる。それよりも彌次連の飛ばす短語の中に、往々警句を發見する。松本五時半を彌次つて、「時計には發言の資格なし」とやつたのもそれだが、小久保喜七の何かくどく述べ立てた時、「城南(冗談)云ふな」と駄洒れを浴せたも、他を笑はせるには十分だ。城南は、小久保の雅號である。

後藤内相は駄洒れの一つも云ひさうな顔をしてゐるが、淡婆氣が有り過ぎて、兎角威張りたがる。衛生局長の椅子から轉げ落ちて、浪人して居た時分のこと、

石黒男の電報に接して、大本營所在地の廣島に赴き、野戰衛生長官陸軍々醫總官石黒忠悳閣下を吉川旅館に訪ねた。新平の見窄らしい樣子を見た女中は、彼れの言葉を疑ふやうに、何遍も『石黒閣下ですか』と訊き返して、取次がうとはせぬ。新平直ぐ向っ腹を立て、『石黒が閣下なら、吾輩は閣上だ。』とやつた。輕く云へば駄洒れとも聞かれるのだが、怒氣を含んだので、他から見てのみの滑稽となつて了つた。徒歩博士が曾て彼れを指して、『後藤象二郎の一だけ足らないので、象一郎位なもんだ。』と云つた。『ぢや、彼れの將來は？』と反問すると、『しんぺい(心配)だ』と笑つた。その新平男が、先日、水產學校の試食會に臨んで、『僕の國にきんこと云ふ海鼠があるが、それは却々旨いものだ』と自慢した。誰やらが、『嘸日向が喜ぶだらうよ』と蔭口を叩いたので、ぷいッと噴き出して了つた。後藤の話は、誰か混ぜッ返す者さへあれば、乾度滑稽になる。それに頃日は、最愛の夫人を喪つてしんぺいしたせゐか、だいぶ物忘れをするやうになつたと云ふ說もある。併し老い込んで了ふには、まだ早過ぎる。腐つても鯛ちふ事があるが、その昔今業平と云はれた新平男、縱令頭に霜が降つて、晩酌の相手をなくしたからとて、然うしんぺいしたものでもないよ。國家の爲、自愛が專一だ。

犬養木堂の皮肉は有名なもので、其の皮肉さへ云へば、何處の演說會でも大向の喝采を受ける。が、偶には氣の利いた警句も吐けば、間の拔けたやうな駄洒れも云ふが、槪して棘が有り過ぎる。江木千之も貴族院の辣辯家で、つむじ曲りと云はれてるが、犬養などよりは洒脫な事を云ふ。能く『諸君は二本足だが、私は一本足だから、一足先に失敬する』てな洒れを云つて、政友を笑はせる。彼れは片足は丈夫だが、片足は義足で、隻脚侯と同病相憐んでゐる。その跛の埋合せをする積りか、却々靜く喋舌る。けれども、侯のやうに大風呂敷を擴げず、鼻息荒く、氣焰を擧げるだけのものである。

元田肇は然う大して旨味のある男でも無いが、閑恭

をやると、まるで別人のやうな駄洒れの一つや二つは云ふ。日外政友會本部で、陣笠を相手に烏鷺を鬪はして居ると、廣岡宇一郎が岡目八目の格で、「こりや恰度勝田藏相のやうだ、方針も何もなく遣つてゐるんだねえ。」と横槍を入れた。「なあにしんぺい（心配）するな、之でも追々整理をやつて行く積りだ。」と元田は碁盤を見詰めて、パチリ〱遣つて居た。實際碁ばかりは妙なもので、盤面の興が湧いて來ると、どんな無口な者でも、無意識に駄句つたり、皮肉つたりする。傍で見て居て、滑稽と感ずることが多い。だから、駄洒れの一つも云つて、生命(いのち)の洗濯をやらうと云ふには、烏鷺の閑日月を弄するも面白からう。が、警句は白と黒の鉢合せに由つてのみ生れるもので無い。徒歩博士のやうに、てくてくやり乍ら、駄洒れの修養をやつた人もあるのだから。——

山川と田尻似合の夫婦(めうと)なり博士長屋の稲健次郎。

著たなりの市長（四丁）博士は碁を知らず妓(をんな)を知らず豆飯を食ふ。

豆飯のまめに働く人を得て死制（市政）も茲に息吐(いきつ)くらんか。

日本人の理想的保健食料としての脱脂豆飯

田邊玄平

全世界人口増殖の率と食物生産の率とが、今日のまゝで推移し行かば、五十年後に於ては、食するものが無くなるであらうとは識者の等しく懸念する所であります。殊に本邦の如き地積の割に人口の夥多なる國で、一日も忽がせにする事の出來ぬのは食料の問題であります。私は此問題を解決する一手段として、麵包食普

及を唱導すると同時に、自ら製麵包業に從事して居ります者であります。丁度昨年の三月頃でありました、海軍經理學校の方からの紹介で、或る人が豆腐粉なるものを持參して、之を麵包に製造する事を依賴しました。同時に北米合衆國政府農務部告示四三九號を置いて行きましたが、其内の一節に吾人の食用としての脫脂豆と云ふ事がありました。之が私の脂脫豆食用法研究に志した動機であります。爾來豆粉の製法と、豆麵包の製造に腐心して居りますと、昨年秋の初め化學工業博覽會が、不忍池畔に開かれました。其時深川佐賀町の日本豆粕會社出品の揮發浸出法で出來た豆粕を見ました。そこで直ちに會社を訪問して、之を食用に供する研究をして見たいと申込んで見ますと、同會社の中川支配人も同感で、試驗用として豆粕を呉れましたから、夫れを粉にして麵包に製造したり、焦がしてコッヒー等に代用して見ました。コッヒーは意外に風味が宜敷ので、至る所に好評を博し、中には此の豆コッヒーを製造販賣して見よふかなど云ふ人も二三ありました。

或る日田尻新市長に脫脂豆食用の事を話して見ましたら、非常に國益になる事だから、研究して見ろとの事でありましたから、灰分と蛋白に不足して居る米に混用したら、理想的保健食料の得らるゝ事と思ひ、脫脂豆餅を搗いて見ました。所が事情を委細話して賴んだにも拘らず、餅屋の不都合から餅に白米の粉を混入したから、思ふ樣な美味の物は出來ませんでした。夫れから今度は知人の處で臼を借りて自分で搗いて見ました。色々工夫して三四回目に漸々、理想的の餅が出來ました。で其所此所で試食して頂いて見ますと、何れも好評で、中には田邊パン屋を廢業して、豆餅屋を開業しろなど云ふて呉れた人もありました。

元來時々刻々に消耗さるる吾人の筋肉は蛋白質であるから、之を補足するには蛋白食が必要である。然るに吾人が常食として攝取する白米は、其成分が水分一三・九一。蛋白七・七二。脂肪〇・七七。含水炭素七七・〇四。灰分〇・五七であつて、蛋白が含水炭素の十分の一しか無い。歐米各國の學者は、吾人は含水炭

素四に對し蛋白一を攝るが宜敷と云ひ、本邦の學者は含水炭素五に對し蛋白は一で宜敷と云ふて居るが、何れにしても白米は蛋白が不足して居る。又た一方には本邦の特有病たる脚氣は、灰分が不足する白米の飯を食する爲めだと云ふ說もある位で、玄米を食用したり骨粉を嘗めるのは、皆灰分の不足を補ふ爲めであります。でありますから、此の不足せる成分を補ふ爲めに、吾人は副食として魚鳥獸肉を取ります。又た禁肉の僧侶輩は大豆で出來た豆腐や味噌等を肉の代用として居ります。彼の炭燒や木挽職人が山籠りする時、白米と鹽は有つても味噌が盡きれば山を下りて求めねばならぬと云ふのは、何れも蛋白食を必要とする證據で有ります。斯く蛋白は必要であるのに、我國には肉類や玉子や牛乳等の供給が不充分で有りますから、何とか蛋白食の安價なるものを得るの必要があります。古來より我が國で煮豆や煎り豆は非常に滋養分が有ると云ひ傳へられたのは、豆が蛋白質に富んで居る爲めであります。

茲に大豆の成分を申し上げて見ますと、
水分九・八五。蛋白三四・七〇。脂肪一八・〇〇。
含水炭素三二・八一。灰分四・六四であります。

右の通りで大豆は吾人に必要なる蛋白と灰分とに富んで居ると同時に脂肪にも富んで居りますが、此脂肪は一種の臭氣も有り消化も餘り宜敷ないので、大豆を食用するには大概脫脂する事に成つて居ります。彼の豆腐に鹽汁を差すも脫脂する爲めで有り、味噌を造るに小麥や糀を混ずるのは、脂肪率を低下する爲めであります。醬油の如きに至つては、醸造後に全部脫脂する事に成つて居て、醬油を分析して見ますれば、脂肪分は全然無いのであります。斯くの如く吾人は大豆を食用する場合には、脫脂を必要として居りました。然るに輓近工業上の必要から、豆油の需用が起り、其豆油を大豆より搾出する際に生ずる殘留中に、偶然吾人の求めて居る蛋白と灰分に富んだ脫脂豆を得る事が出來ました。でありますが、大豆の含有する滋養分は脂肪に有ると誤解し、蛋白質の効用を知らなかつた本邦に

ては、此の脱脂豆に豆粕なる名稱を附し、肥料の外何の役にも立たぬ滋養の少なきものと思ひ、食品として是を研究する人無くして今日に至りました。隨つて豆油搾出の際にも其大豆を土砂に混合した儘使用しますから、豆粕にも土砂が混入して居て、食用に適せぬ樣に成つて居りました。處が揮發浸出法に依る豆粕は、揮發油で洗滌しますから、作業工程上自然清潔に成り、直ちに採つて食用する事が出來るので有ります。でありますから自分は之を白米に混じて飯に炊いて見ました。なれども初めての試みであるから、餘り美味(うまい)とは思ひませんでした。次に醬油や鹽で調味して見ました。併し是も好成績は得なかつたのです。が自分は牛乳でも納豆の樣なものでも、第一回は美味を感ぜぬが、吾人の食料に適したものであるから、三四回續食すれば茲に美味を感得し、遂に嗜好品の一となる事實を知つて居たから、脱脂豆飯が果して吾人の食料に適するものなら、三四回續食すれば必ずや美味を生ずる事と思ひ、三日間續食して其翌日白米飯を炊ぐ事にしたら、子供は正直なもので明日(あす)は豆飯を炊いてくださいと、妻に願ふ樣な都合であつた。であるから自分は豆飯が優良食品で有ると思ふた。併し此豆飯は主要食料改革であるから、注意の上にも注意して發表するのが當然と思ひ、學問上の成分配合や米國政府の告示等の事は單に參考に止め、二ヶ月ほど家族一同に食用せしめて、其健康を注視した。其間に妻は男子を分娩した。自分は奇貨措く可しとして、出來得る限り細心の注意を拂ひつゝ、嬰兒の健康狀態を監視した。幸に嬰兒には何の異狀もなきのみか、灰分に富む豆飯を妻に攝らせる爲めか、是迄の小供よりは、骨格が逞ましく發育する樣に思はれた。それに是は神經の爲めかも知れぬが、是迄乳不足で有つた妻が、今度は乳も充分であるのは事實であります。斯ふして種々の方面から研究して、脱脂豆飯は白米飯に勝る食品で有るとの確信を得たから、之を廣く發表する事としました。

米國農商務省食料實驗所が布告を發して、大に豆粕の食用を奬勵した時の調査に據ると、小麥粉七割に豆

粕二割五分を混じた物が普通健康體の食量といふ事になつてゐます。併しこれは米國人の保健食量から割出したもので、日本人には自ら日本人の保健食量から割出されたものがなければなりません。米國人に比べて、日本人は脂肪と蛋白の量がやゝ少く、含水炭素を多く攝るのが保健食量になつてゐます。その割合から二に一の比で米と豆粕と混じたものが丁度良い譯です。即ち米一升に豆粕五合といふのです。炊き方は全く普通の御飯同樣で極く手輕に出來ます。副食物に就いては二の說がありまして、一つは田尻市長の主張せられるやうに、豆飯に胡麻鹽を振り懸ければ充分で、外に何も要らぬと云ふ說と、矢張り魚肉などを併食する方が可いと云ふ說とあります。精神的な仕事をする人と肉體的な勞働をする人によつて、副食物との關係も變つて來やうと思ひますが、此邊の加減は未だ十分研究して見ませんから、慥と斷言する事は出來ません。唯豆飯に胡麻鹽を懸けただけでは、食物的に見ると纖維質が不足してゐますから、澤庵漬とか菜漬とか云ふ香の物を副食物にした方が宜しいと思ひます。

最後に御願ひして置きたきは、鳩豆と稱する脫脂豆を、廣く紹介して頂きたいので有ります。實は其初め一般の注意を喚起するの必要から、豆粕ならどの豆粕も食用されると申しましたら、早稻田の學生勞働團では、豆油脫取後數ヶ月經過した陳豆粕を購入し、食用して味の宜敷ないところから、一時食用を中止し、豆飯に對する人の質問に對し、餘り美味でないと云ふ樣な事を吹聽しまして、脫脂豆飯普及に一頓挫を來たした樣な事が有ります。尤も此方も其後鳩豆を購入し、再び之が食用を開始し今は食用して居ります。兎に角何れの豆粕も肥料を目的として造つて居りますから、種々の點に於て食料とするに面白からぬ所も有ります。併し幸に日本改良豆粕會社は自分の主張を齎しと見て、玆に鳩豆商會なるものを起し、豆油脫取手續にも多少の改善を加へ、一方では在來叺入であつたものを布袋入とし、美觀を副へる工夫までして居ります。斯くして豆飯が廣く普及する事となれば、玆に食物自

給の問題も容易に解決が出來ると同時に、蛋白食不足から減退して居る勞働能率も高かめられ、灰分不足から來る脚氣病の如きも撲滅する事が出來やうと思ひます。

大正七年五月場所

東西十豪力士評論

水谷竹紫

「一」

瀧田樗陰學兄

引越の眞最中、新宅の塵堆き中に、兄の來襲を辱ふしたる事は、頗る恐縮に堪へない。なまけなまけて、いつしか締切の過ぎたのも忘れてはてゝ居た處へ、貴下の偉大なる赭顔を突き出されては、僕たるもの青くなつて奮起せざるを得ない。卽ち萬年筆を探し、原稿紙を探し、獺の祭の如き紛亂狼藉の間に、大速力の筆を呵して讀者諸賢に罪を乞ふ事とした。云ふ迄もなく雜然騷然たる火事場氣分である。いや角力場氣分である。拍手の雷鳴、怒叫の嵐は聞へずとも、物を叩く音、投げる聲、瀨戶物の割れる音、手傳連中の鼻唄なんかは間近に渦を卷いて居る。場合は異れど、是等の騷音は角力場に居て、力士の事を考へて居るやうな調子、此の場合、却つて此の文の執筆に應はしいかも知れない。

「二」

樗陰學兄

貴下の御話では、此の場所に於ける十豪力士を選べとあつたのですね。つまり、云ふ心は、此の場所の花形として、最負〳〵の洞厭聲を彌が上にも絞らしむる當代の十人氣力士を列べて此の誌上の土俵に四肢を踏

ませろと云ふ事であらう。さうなると、退隱に間もない西の海や、少しく影の薄い伊勢の濱對馬洋や、出沒常なく、やゝもすれば人氣の焦點を脫れ勝な朝潮などは、此の土俵入に加へかねる。なぜならば、是等の力士は豪は豪なりと雖、どうも此の文の目的、すなはち讀者興味の埒内に入れ難いものがあるのだから。

そこで、こゝでは東の方より

栃木山……大錦……九州山……兩國……源氏山

(補缺として常の花)

西の方より

鳳……千葉崎……大潮……三杉磯……錦島

(補缺として大鳴門……矢筈山)

選び出すことにして了つた。異議があつても致し方がない。さう云ふ場合は、僕の獨斷として肩を怒らすまでの事だ。

「三」

栃陰學兄

此の場所の人氣は新横綱栃木山に集中することは辯を容れない。新聞角評家の說によれば、彼は太刀山以來の横綱ださうだ。つまり角界の第一人者として、今日の日下開山に應はしいと云ふのである。僕に於ても決して之れに異議を挾まない。彼の風格彼の角力振は、確に現在に於ける角界の第一人者である。横綱土俵入の雲龍樣に尚武式の雄麗な趣はないだらうけれど、取口の實質に於ては、現在の四横綱中で最も堅確壯重で、また頗るナチユラルである。

思はずここで「自然」と云ふ言葉を使つたが之れには多少の說明を要する。

太刀山は久しい間、角界の第一人者を以て見られて居て、統計的にも確に日下開山の最優者であつた。しかし彼の角力振は、僕が常に稱したるが如く、或る意味に於ての理智の角力である。聰明なる彼の頭腦から捻出された作戰本位の角力であつた。即ち巧に自己の弱點を陰蔽して、その長所のみを發揮すると云ふ風の角力振であつた。故に彼の角力が見て居るとその强大に驚嘆しながらも、尙一種のギコチナサを感じない譯には行かなかつた。人工味が勝つて自然味の乏しいギコチナサである。理智が勝つて味の乏しいギコチナサである。

此のギコチナサは同じ第一人者たる栃木山には見當らない。無論栃木山にも弱點は頗る多い、四つ身に乏しい事、土俵際に力を緩める事、腕のバネを殺されると進退自在を失ふ事などは、彼の體格の弱點、横綱力士としては少し小さ過ぎると共に栃木黨の氣になる點である。しかし彼の努力は近來に至つて、これ等の弱點を淺薄し、殆んどその跡を認め

させぬまでに至つた。即ち蔽ひ隠されたる弱點ではなくして、『解滅』されたる弱點である。端的に云へば弱點がなくなつたのである。そして固有の强味(長所)が、何等技巧の痕を見せずして自然に發揮するのである。

自然の强味、粉飾せざる强味で角界の第一人者となり得ること、これが古來よりの横綱の理想であつた。栃木の角力振は此の點に於て實に横綱としての理想の一部を髣髴させるものである。

しかし、茲でまた云つて置かねばならぬ事は、理想的な横綱だからと云つて、必ずしも負けがないとは限らない。成程昔の横綱は『負けない力士』の名稱であつたらうが、今日の如き機會本位、偶然澤山の新角技にあつては、『絶對に負けない』と云ふ事はむしろ理論的に虚假である。如何に强い横綱だと云つて、土俵の上の懸引は別問題だ。『横綱だつても負ける場合はある』と云つた方が新角技の理義に充當する。であるから栃木山が今日に於ける第一人者であるとしても必ずしも土俵上の失敗がないとは限らない。縁起でもない事を云ふと憤る贔負客もあらうけれど、から云つた方が、却つて事の眞相を談る所以である。

さあ、さう云ふ事が假りに可能なりとした場合、何人が栃木山を危くするであらうか、昨場所で未曾有の大角力(あの角力は慥に年代記ものとして後の世に傳はる名勝負である)を取つた鳳であらか、大潮か千葉ケ崎か、果た又新進の三杉磯であらうか、僕は何れとも斷定したくはない。また斷定出來るものではない。正面から計算すれば何れも栃木の方が優勢である。危險から云へば、アマイ様でその實苦味のある三杉磯の土俵際に何となく妖氣が漂つて居る。錦島の如き、これ迄栃木に勝味のない様に云はれて居るが、取り方に依つては必ずしも絶望ではない。即ち錦島の慣用手段たる立上り瞬時の叩込は、栃木の如き敵に對してこそ最も有效なる武器である。但し固より此の場合九死に一生をも豫期してはならない、絶對に死に身となる事を要する。今は光も褪め果てた玉の川が、からやつて彼を破つた前例がある。玉と錦とは角力の柄が違ふが、それ丈に今日の場合虚々實々式の利目があらう。

栃木山に對する唯一の對等取組は、此の話に擧げた西方の五雄でなくして、むしろ朝潮その人である。從來の栃木は朝潮に對して悪かつた。今日は栃木の實力彼の上に出て居るのは無論であるけれども、朝潮の取口が放膽で大きい丈に栃木の一本調子を昏迷せしむる公算がある。鳳、千葉は、彼の好敵手と云ふよりむしろ大錦の絶好敵手である。

「四」

楞陰學兄

小生が大錦に對する研究はこれまで屢々發表した處に、今日の場合何處を捕へても多少の重複は免れない。だから彼の角力振に關する評論は避けて、唯最近に感じた事柄と彼の對敵豫想を少しばかり述べて見ようと思ふ。

大錦は昨場所の後に、講道館に正式入門して、柔道の理義を學んだ。尤も彼の柔道は内田信也氏の道場で多少の經驗にあつたらしいが、此度

は嘉納先生直接の指導で高橋五段が正式に教導の任に當つたのである。

此の事實が新聞に傳つて、或る角評家は、此場所に於ける彼の角力振の變化を期待して居るものがある。無論多少の變化があるには相違ないが、その變化は大錦本來の變通自在性に依つて然るので、新に研究を初めた柔道の影響と云ふ迄には未た未だ時間が足りない。前にも云つた事がある通り、大錦の角技は先制本位から機會利用本位に移つた。機會利用と云ふ事は「柔克く剛を制し、最少の力で最大の効果を擧げる」柔道の極意と一致する。大錦の角力は柔道稽古以前に既に柔道の本義と一致して居るのだ。それから以上は唯柔道の初歩的實際的方面、云はゞ末節に過ぎない。そして柔道の初歩的實際的方面が、角力に及ぼす影響は唯足腰の働を輕くし、敵の剛力に對する抵抗性を弱める丈で、却つて角力から云へば不利益の結果に陷るものである。彼の聰明は決して此の事實を見逃がす筈はない。故に新聞角評家が云ふ如く、柔道稽古が彼の角力振を變化せしめる筈はないのである。

とは云へ、彼は體格的に自己の不備……例へば腹が出過ぎて、前に落ち易い傾向等に對する戒心を怠らぬのは必然である。場所毎に變化する彼の角力は、柔道を抜きにしても、慥に好角家の興味を繋ぐに足ると思ふ。

大錦の此の變化は彼の不斷の研究と苦心とに由來する。しかしそれは太刀山と等しく後天的の理智的作戰動作で、苦心の痕餘りに歴々、自然味の乏しい恨は止むを得ない。

此の事實は、後に記す個と彼との對比を一層興味あらしめ、その取組が本場所第一の好取組たらしむる所以である。結果は敢て豫斷しないが、昨場所を見た人の思半に過ぐるものがあらう。大錦に對しては何時の外に千葉ケ崎と云ふ好敵手がある。角力から云へば、大錦よりも千葉ケ崎の方が堅確であり圓滿具足てある。しかし此の場所に於ける勝負け、前場所の復讐がある丈に大錦の研究心を誘ひ、所詮は千葉の方が研究負をするに過ぎないと思はれる。大潮は大錦に對する最も難敵である。大錦の長所は計算の上からは不思議にも大潮の特長に破れて了ふ。然し大潮は土俵が神經質である丈に大錦の機會利用に乘せられて了ひはすまいか。もし大潮にして土俵に焦らず、大錦の氣合に釣込まるゝ事がないならは、此の角力また決して見逃し難い。

その他、大鳴門と云ひ錦島と云ひ、三杉磯と云ひ、大錦に對しては何れも多少の疑問を勝負の豫想家に抱かしむる取組だ。實際大錦の角力振なり實力なりを正面から考へれば、何れも頭を掉る種とならざるを得ない。しかし彼は容易に『負けざる力士』である。そしてその負けざる所以は太刀山の場合と等しく彼の聰明に歸する。『聰明』は近代角技の勝負法に於ける秘訣で、『自然味』は最近角技の實質上に於ける理想である。

「五」

大錦の後天的な變化自在に比べて、鳳の先天的な變化自在は、また大正力士の特色を誇るものである。此

の風の變化は一つは彼の「速力」に由來する。風ほど勝味の早い力士は、從來には類がなかつた。彼が駒を倒し常陸に勝つを得、今日の地位に榮進したのも、全く彼の「勝味の早い」ことに歸する。しかし高速度の飛行機の安定率が少い樣に、餘りに速力の高いのは危險を伴ひ易い。特に風の高速力は無計劃に無指導に、出た所勝負にほんの自然のまゝに發揮せらるゝを常とする。だからそれが順境に進むときは、効率を現はす事は大きいが、一たび蹉跌するとなれば始末が惡い。

横綱に新任して、その奔放な角力振を棄てたときの彼はみじめなものであつた。最近にまた固有の高速度を試みんとした昨場所は、何となく土俵の見當がつかないと云ふ趣があつた。彼の神經が靜つて、その速度が頭と釣合を保つた場合、彼の自然的の變化自在性は、大錦と趣を異にした味を示すに相違ない。

此の意味に於て大錦との對戰は慥に刮目に價するのは前に云つた通である。

しかし彼の對敵として、大錦の外に、栃木山、源氏山、兩國、九州山、常の花、對馬洋がある。對馬洋のみは御出入でもあらうけれど、その他は何れも角力にならぬと云ふ人々ではない。特に同じく速力を以て特色とする常の花との對戰は、常が新進氣鋭な丈に勝負はともかく興味を惹くに價する。源氏山とは毎場所危い角力を勝つて居るが、いつも〱同じ淵に同じ魚が居るかは疑問である。

此場所は九州栃木大錦の三者の内、一人は必ず喰へるであらう。押宿ではない僕の直覺が、何となくさう動くのである。角力から云へば三者に對しては何れも五分、天秤は一毫の塵にもその平衡が破れる筈、所詮は立合と偶然の動機で得失その地位を異にする譯だ。

【六】

九州山と千葉ヶ崎は何れも新大關の新威を以て新樹譽る靖國神社の新土俵に立つ筈だ。しかし此の大關何れも前場所に多少の手傷を負つた爲、その大關昇進が世俗の滿足を買ふに足らなかつた。しかし世俗は不滿でもその實質は確に大關に相叶ふ代物たるに論はな

い。

中にも千葉ヶ崎の角力振は如何にも圓滿具足せるものである。突張りもあれば、投も利く、寄身もあれば、土俵際に敵の止を刺す足癖の藝當もある。體格と技巧と力量と如何にも釣合を保つて、打見た處、之れと云ふ指摘すべき缺點がない。何となく往年の國見山を想起する節がある。それ丈にまた彼の角力には鋭さが乏しい、精悍な氣合が缺如して居る。小敵に對しては無事であるが、大敵に對してもまた無事である。從つて栃木の如き敵手には一寸勝味が乏しくなる。大錦との昨場所は、彼の差手の幸運で、あの角力、殘つた後にどうなつたかは一寸疑問であつた。兩國常の花に對しては分はあれど危險味も多く、源氏山とは昨場所に於て妙な角力となつたけれど、取組としては五分の好敵手であらう。

かう數へて見ると、彼との絕好取組は、角力の合口(あひくち)は異れど矢張り新大關九州山に歸する事となる。

「七」

九州山はその體格的弱點が少しく暴露しかゝつた樣で、何となく、噴火口上に立つて居る感がある。腰以上の過度の發達が、腰以下の發達に伴はなくつて、三角な肉塊を倒に立てた樣な安定を缺いだ感である。しかし從來は彼の猛烈な練習で、よくこの先天的弱點を支へて居た。しかし彼が大關と云ふ成功に安じて、この「練習」と云ふ支柱を取り去つたなら、大事は玆に生ずる。僕が噴火口に立てる九州と云ふのは實に此の故である。

とは云ふものゝ、彼の「寄身」は近頃の角力で特筆すべき名物であらう、あの廣い肩幅を左右に振つて、敵に支へる力を失はしめ、鋭く重く寄る巧味と强味とは一寸過去にもその類例を見ないもので、出羽の海部屋一流の寄味は彼に於てその極致を示したものと云ふ事が出來よう。

しかし、彼にはこの重砲射擊の攻勢は得意だが、守勢に立つ場合にとんと、たわいがない。大潮に寄られて無策に終つた昨場所の如きはその好例であらう。近

頭は土俵際の小手捻などをよく稽古場で見受けるが、之れは決して彼に望むべき手ではなからう。

彼と千葉との對戰は全く差手の得失、寄身の後先で、結果には興味はあらうが、經過は甚だ單純であらう。分合から云へば、云ふまでもなく五分で、九州に凄味の多い丈の勝味がある。

大潮との對戰も千葉同樣で、之れは凄味に於て大潮が優れて居る。鳳とは鳳が捨鉢的戰法に出ない限は九州の勝であらう。鳳から云へば、九州に對して正攻法を捨てゝ奇襲式に行かねば嘘である。その他に私は錦島と九州との取組に興味を惹いて居る。

「八」

樗陰學兄

大潮の面構は如何にも特色がありますな。今の佐の山即ち先代朝潮の顏も鬼瓦が鹽辛を嘗めた樣な奇怪なものであつたが、朝潮は何處となく一種の篤實味とも云ふべき「優しさ」があつた。先代大蛇潟の容貌も矢張鬼瓦式であつたが、あれには一種の俳味が存して洒脱の趣が泛いて居た。大潮に至つては、何等の優味も、俳味もない、凄味一方の鬼瓦面である。そしてその角力振までが、如何にもそれに應はしい。大潮の角力は北海の波にも似通つて居る。陰鬱で荒く、しかも底に粘があつて、如何にも物凄い。大根拔きの臂力が如何にも強く、敵を引張り込んで制へつける威力は素破らしい。

しかし彼は本場所の土俵に極めて神經質らしく、從つて、不用意な弱點がフイと現はれる虞がある。特に先制の利を占められたときの彼は、著しくその威力が減殺されるらしい。曾て幕下時代に或力士は彼に對したとき、逆に彼の二本を深く引張り込んで、樂々と勝を取つた實例があつた。敵の武器で敵を制するのは角技の原則の一つだが、から云ふ場合に於て敵の妖氣に脆く破れて、ある意味のたあいなさを示すことがある。要するに未だ彼の角力は研究の餘地があるので、圓熟は一二場所以後にあるであらう。

小生は彼に對する絶好の敵手を源氏山とし、次を對

馬洋に置く。大錦との取組は、前場所休場の歴史付で無論興味の上には絶好、勝負の上から云つても疑問である。しかし角力の合口(あひくち)として絶好取組と云ふ譯には行かない。常の花の如きは、その速力と先制の利を占め得る丈、彼にとつては難敵だ。いや計算の上から云へば、何となく常に利分がありさうに思はれる。

「九」

楞陰學兄

亂筆を書き進めて、漸く兩國と錦島を論ずる段取となつた。此二人に就ては、既に屢々評論の筆を取つたから、今更云ふ種も甚だ少い。しかし此兩力士を精密に論ずれば、角技に就て幾多の實例が轉り出る。つまり角界に取つては何れも缺く可らざる模型で、その意味に於ける興味がいかにも深い。

兩國と錦島は同じ郷地の出身で、しかも思ひ切つた背中合(せなかあはせ)の兩極を示して居る。兩國は小さく、錦島は巨大である。兩國は力の集中の迅速に不思議な奇蹟を示し、錦島は、それと反對にも如何に遲鈍な不思議を見せて居る。兩國は技巧に凝つた奇趣家の如くに見えて、しかも無作戰な出鱈目なズボラな角力振を示し、錦島は鈍重無技巧に見えて、しかも繊細な苦心を現はすのが常である。

兩國を敵として安心な對手と云ふは一人もない。怪我負の危險でなく正

當に敗戰する恐怖である。彼の擲投は鳳以上に執拗で實効があるし、小手振の一曲は敵の突進を先づ牽制するの役に立つ。だから鳳以下何れの敵と雖、必ず兩國に勝ち得ると云ふ自信のある力士は一人もないが、また都合によれば如何なる敵も兩國を喰ふ希望のない人もない。彼は此の意味に於て、ともかくも角界の奇蹟的人物である。昨場所は突指(つきゆび)の怪我で、彼の最も長所たる敵の褌を引く事が出來ず、負が込んで野狐負(やけ)に負けて了つたが、此の場所は前敗を恢復して餘があるであらう。

兩國の長所は敵の褌を引いて左差の四つ身になつたときで、その弱點はトントンと突かるる場合と提げらるゝ場合である。けだし小兵の止むを得ぬ處、是非もない事柄である。

錦島は速度の迅い敵が禁物である。或る程度まで時間を經ねば固有の力の出ぬ彼は敵に應じて變化する事に資格を缺いて居る。だから彼の爲に作戰すれば、何でも一本調子の作戰をつけるに限る。錦島が鈍重だからと云つて消極的な退嬰的な方法を講ずるのは却つて彼を誤るものであらう。

錦島の好敵手としては、何と云つても大錦が第一だ。今日では位置が懸絶したとは云へ、地道に取れば錦と雖、決して侮るべき敵ではない。對馬洋も亦彼と趣を同うする丈に面白い取組である。兩國との取組が、の大と小との對照に世俗の興を惹く樣であるが、その實決して興味ある取組ではない。僕はいつも兩國が彼に對して大力士的の角力を取り、彼が兩國に對して少力士的の角力を取る事實に、苦々しい淺ましい感が起

こゝを禁じ得ない人である。

「一〇」

柳陰學兒

最後に、前場所で優勝旗候補を爭つた源氏山と常の花、それに附隨して三杉磯の事を云つて見たい。

源氏山は立合が鈍いのと、その容貌のちやむさいとで、何となく花形の列から除かれ勝の力士である。しかし、彼の實力、新進氣鋭の鼻息は、何と云つても十大豪の列から省く事は出來ない力士に相違ない。

源氏山の角力は確に機敏だ。こゝに機敏といふのは、大錦式の機會利用を云ふのではなく、むしろ常の花式の高速度にイブシをかけて、常より更に一層の圓熟味を加へた意味である。源氏山は作戰に思を凝らす人には相違ないが、その作戰は機を見て變する流の方ではない、どちらかと云へば一本調子で、唯驀進の度合が強い丈である。

彼の三本差は東西力士を通じての最強で、嚴は二度この爲に九死の域に陷つた。大汐との希待は前にも云つた通で、千葉崎とも五分の實力、大鳴門錦島に對してはむしろ樂な方であらう。但し僕は此場所三杉磯との對戰に興を繋いで居る。

常の花は單純な速力の力士である。云はゞ輕快な巡洋艦の樣なもの丶用途によつては、頗る華々しい成績を擧げる事が出來る。以前は櫓投の一點張であつたが、近來では管の寄身を覺へ込んだ樣だ。かうなれば速度が高い丈に大湖風などの對戰に興味がある。しかし合口としての絶好取組は矢張三杉磯であらう。

三杉磯は、未成品だがいかにも純な角力振で、どこにか偉大な影が伴ふ。大鳴門の取口に似てそれよりも單純な、しかしそれよりも一種の効果ある辛辣味を有つて居る。此の場所どれ丈の働を現はすかは問題だが、東方の五豪に對して一人にも勝てないと云ふ程ではない。僕は此の人の對常の花の外に對兩柳、對釋迦ヶ嶽に興味がある。九州山との對戰も一寸注意して置く必要があらう。

田尻新東京市長論



▽田尻市長論

文學博士　三宅雪嶺

東京市長が長い間缺けて居つたのは不思議な事で、遂に田尻子と極つたのも不思議な次第と云へる。餘り人の考へ及ばない所である。何にしても市長が段々好くなる傾向があるのは、聊か祝すべき事とする。松田に次いで尾崎、次いで阪谷、次いで奥田、他の事は兎も角、市長としてさほど適して居る。田尻子は市長として未知數に屬するが、從來の經歷より觀て、比較的最も適つて居る。唯年齢が六十九歳と

あつて、今後何程の成績有るやが疑はしい。予が市長に選ばれたのは、選んだ者も遙かな思ひ付きであり、選ばれた彼自身も固より意外であらう。市長の詮衡委員は隨分いろ〱と候補者を考へ、成つて欲しいのは承諾せず、承諾しさうなのは成つて欲しくなく、あゝでもなくかうでもなしで日を送つた揚句、一方に餘り評判の香ばしからぬ阿部氏を推し立てたので、何でも之を抑へるに足る者を持つて來ねばならぬといふ事になり、偶々田尻子が會計檢査院長を罷めたので、當つて見る事になり、首尾好く承諾を得たのである。田尻子は後進の爲めに道を開くとて院長を辭したので、院長より劇職なる市長と成るなど、少しく順序が違ふやうであるが、其處は變り者の非常の事、成りさうにない所で成つて終つた。成つた所で申分が無く、之れでこそ帝都の市長たるに恥ぢぬと思はれて居る。之れでは大阪市長も何とか爲ねばなるまいし、他の市長も好いころにして置く譯に行かなくなる。田尻子の東京市長と成つたのは、東京市の爲めのみでなく、全國の市に反省させる所がある。先づは芽出度く祝賀し得られる。

けれども今は看板が出來上つただけで、看板に僞り無しといふ事に成るかどうか、其處が疑問である。何にしても明年古稀といふ齡で、餘り先が長く無い。矍鑠たる老翁とてユックリして居る譯には行かぬ。仕事が無ければユックリも勝手であるが、仕事は有り餘る程有り、いくら急いでも悉く成し遂げるのは六づかしからう。先づ繼續事業として其基礎を作るべき役目であるが、其役目は檢査院長の職の如きものでない。仕事は規模に於て檢査院よりも小さいが、檢査院は要するにお役所の仕事、極り通りにして行けば可い。東京市の仕事は寧ろ混沌たる狀態で、之を物に爲ると爲ぬとは、一つに市長の手に在ると云つて可い。嫁は出跡に行くが良く、死に跡に行くが惡いとの諺がある。離緣の跡に行けば、夫が先妻に反感を有つて居るだけ、同情して呉れるし、死んだ跡では夫が先妻に心が殘り、それだけ後添ひに思ひの足らぬ所がある。奥田男が引續いて職を執つて居つたら如何の成績であつたかは分らないが、苦心慘憺たる所で歿し、大に同情を得た。曾て官吏として官海游泳術に巧みだと云はれた者が、市長として人格をまで稱揚せらるゝに至つた。電燈に就いて伊東子との關係も忘れられて居る。而して何故市民に受けが好かつたかと云へば、種々の事情ある中にも、自分の俸給を減じたといふ事が與つて居る。市の爲に十幾萬の借金したとかいふのは、其通りに受取るべきでは無いが、市から金を得るよりは、市の爲めに盡力するといふ所が見えたので、賞めずに居れぬ。市に對する心得方を呑込んで居つたのである。險を承知して職務に膺つたかどうかは追求せぬ方が可い。順序から云へば田尻子は奥田男に似て、幾分か勝るべき筈であるが、いよ〱事に當つてどうであるか。奥田は試驗が之れからといふ所で歿したのであつて、懸案は凡て其儘に殘つて居る。電車は値上げしても、未だ改良といふ事になつて居らぬ。戰時鐵の不自由な所もあらうが、隨分車掌に無理をして居る。何とか改まらねばならぬ。下水が中途半端になつて居り、築港に至つては歩同様である。郊外生活が盛んになり、大東京

市の經營の避くべからざる狀態となつて居る。後日何等の悔の無いやうに爲るに餘程骨を折らねばならぬ。市區改正が進行するかと思へば、後から〳〵と不都合だらけになる。改正委員の眼が利かなんだのである。大東京市を如何にすべきか。寧ろ市民の力に待つべきであるが、市長の責任の最も重しとするは疑を容れぬ。田尻子は計畫が綿密で、事を苟くもせぬ。必ずそれ相應に着手するであらう。然し子は勢を見るに敏、思ひ切つて斷行する方でもない。大藏次官として議會に答辯した時、平素の持論と違つた事を云ふて居る。自分の意見は自分の意見、次官として大臣の意見を云ふのであるとの調子で云ふ。市長としても、自分一個の考は斯く〳〵であるとしながら、現在の狀態でさう行かず、先づ相應の事をして置かうといふ事になるかも知れぬ。問題は迫つて居るけれども、何とかかんとかしてゐる内に歲月が過る。無事に過ごして行かうと思へば、餘り六つかしい事でない。尾崎氏は何もせずに七年を過した。何もせぬ方が無難である。何か成さうと思へば面倒が起る。田尻子は事の起らぬのを望むか、事の起つても、現在の爲め、將た將來の爲め、帝都の經營を完うしやうとするか。看板は立派だが、看板倒れといふ事になつては面白くない。看板は立派であり、事實は看板以上であるといふ所で、田尻子自分の爲めになり、東京市の爲めになり、帝國の爲めになる。豆精飯でお茶を濁すとなつては奧田の減俸程の效も無い。人或は田尻子と岩谷松平とを、兩極端の相一致するものとする。性格は全く反對だが、變つた處で路を取つて居る。詰襟洋服で徒步するのと、赤い馬車に乘るのと一つの共通點無しとせぬ。同じく鹿兒島出身で、松平が一つ年上である。北雷の豆精飯と、松平の賑料理と、何れが國益になるか。若し田尻子に十二特別に爲す所無く、此れでも出來るやうな事をして何年も過ぎ、それで事が了つたならば、松平と比較せられる樣な事が無いとは云へぬ。折骨名物男なる田尻子が東京市長となつた上は、東京市及び全帝國民の希望に背かぬやうにあつて欲しい。子は有力なる後援者が有り、門弟の名ある者も多い。餘程便利なる地位に居る。事は奮發すると否とにある。最早爲すべき事を爲し、死んだも同じである年齡とて、老後の思ひ出に大働きを爲るならば、世界に於ける名市長と成るであらう。奮發する事が出來ず、年齡は爭はれぬものと云ふやうな事になつては何等云ふべき事が無い。然しそれでは餘りに惜しい。田尻子が東京市長として何の手柄があるか、今日の主なる問題の一つである。

▽新市長田尻博士

鵜崎鷺城

一

田尻稻次郎子が最近辭職理由書を發表して會計檢査院長を罷めると、俄かに世間の話頭に上り、更に東京市長に擧げられてからは益々評判男になつた。市長としての適任不適任は實際の仕事に着手し、少くも何等

かの結果を示した後に定まるのであるが、未だ何等の試に入らず、單に八箇月間空位となつた市長の位置を充したといふ丈けで、世間から非常な人氣を以て迎へられてゐるのは、其處に田尻子の强味があると共に氣苦勞も尠くない。

市長は他の職と違つて、市民全般の輿望の結晶したものである。全輿望の標的とまでは行かぬとしても、少くも多數の信用と寄託を双肩に負ふとすべきである。此の意味に於て成べく市會が全會一致で市長を選擧し、さうすれば形も好く、市長に推された本人も非常に心持が好い譯である。田尻子も得べくんば一人の反對なしに全會一致で擧げたかつた。子も亦た市長にならうとする以上それを望んだであらう。然るに銓衡委員の方ではいろいろ人の物色に行惱んだ結果、阿部浩氏を候補者に推し、市會の一派も氏を擁立した。是れは田尻子が未だ會計檢査院長を罷める前であつたが、其の後官を罷めて閑散の身になつたので、阿部氏を市長にするを好まぬ一派は子を擁立することになつた。最初から田尻子といふことであれば、恐らく何人の考へも之れに一致してイザコザなしに行つたと思はれるが、子が問題に上つた時は阿部派の方でも最早乘ッ引ならぬ程度にまで話が進んで居たから、縱令ひ内心では阿部氏よりも田尻子を好いとしたにせよ、阿部氏に對する義理やら行掛やらで、兩派の對立となつたのである。市會の兩派が妥協して一致の推薦をすることが出來なかつたのは遺憾であるが、當時の事情止むを得ないことであつた。

田尻子の對手としては阿部氏はズツト落ちる。固より氏は久しく地方官を經驗し、特に東京府知事にもなつたから、萬更市長に不向の人でない。存外テキパキ仕事をするかも知れぬ。蓋し氏はなかなか目先きが利き腕もあつて、隨分突込んでいろいろな細工をする。世渡の才がある丈けに幇間的の所もある。嘗て或る地方の屬官を勤めてゐるとき、伊藤が來て招待の宴を開くと、氏は伊藤の前で裸踊かステヽコを踊つて御機嫌を取つたのが元で引立てられ、其の關係から伊東巳代治の乾兒になり地方官時代は原系で通り、貴族院議員としては政友系の交友倶樂部に籍を置いてゐる。前市長の奥田博士も伊東と關係が深かつたから其の後任といふので、阿部氏の市長運動には伊東や政友會の人間が裏面から多少糸を引いてゐたやうである。手腕はあつても人格が餘り面白くない。人格の缺けた上に一種の辣腕があるといふのでは、却て險呑なやうな氣がする。尤も阿部氏が市長になつたからとて、必ず公職を利用して如何はしい態度振舞をすると言ふのでも無ければ、氏を推した一派に自分等の利益を計らうとする思惑があつたと言ふのでは無いが、餘り人受けの好くない待合などに關係のある人物を市長とするのは望ましいことで無い。阿部氏より勝つたものが如何しても見附からぬといふなら格別であるが、閲歷、人格、學識、經驗に長じた信頼すべき人物がある限、それを推すに越したことは無い。田尻子が市長に擧げられたのは事の自然なるものである。

折角市長を探しあてゝも、何日も疑惑を挾んで不安を感ずるやうでは面白くない。田尻子に限つては安心を置くことが出來る。其の點に少く

も先づ適任といふべきである。

二

田尻子は官吏、學者、教育家の三つを兼ね、官吏として四十年間の久しきに亘り、而も財政經濟家を以て始終したから、日本の財政經濟史には主要なる位置を占めてゐる。子は主として外國で學問を修めたけれども、元と帝大の前身たる南校に學んだことがあるから、大學とも歴史的關係がある。子は初め福澤の塾に一寸學んだことがあるが、明治初年鄕藩の貢進生に選ばれて入つたのが大學南校で、其の頃は同鄕人で銀行家として有名な園田孝吉を始め、小村壽太郎、杉浦重剛、齋藤修一郎等と同じ組にゐた。明治四年海外留學生に選ばれて米國へ行き、初めハートフォルト中學に入り、次いでエール大學に學び、そこで專ら財政經濟を修めたのである。前年エール大學から伊藤、金子、鳩山、田尻に名譽博士を贈つて來たとき、他のものは喜んで貰つたけれども子は、日本の博士號が一つあれば澤山だと言つて斷つたことがある。米國では相馬永胤、目賀田種太郎、駒井重格等と一緒で、明治十二年相携へて日本へ歸つた。

丁度其の頃は同鄕の先輩松方が大隈に代つて財務の衝に當つたときであつたから、歸京後直ちに大藏省に入つて權少書記官に任ぜられ、それから國債局長、銀行局長、主税局長を經て大藏次官に進んだ。二度次官になつたが、最初は第一次伊藤内閣のときで、大藏大臣は渡邊國武次に松方であつた。二度目は三十一年憲政黨内閣の後に第二山縣内閣が出來たときで、大臣は松方であつたと思ふ。子が大臣を援けて大に、働いたのは此の次官時代で特に日清戰爭のときは戰時財政を扱ひ、次いで困難なる戰後財政に力を盡し、其の他税務に公債事務に銀行事業の事に幾多の功績を殘してゐる。而も子の流儀として功を表面に衒ふやうなことは無く、いつも甘んじて縁の下の力持をした。

併し次官時代の大藏省は田尻の大藏省と言つて好い程に聲望があつて、次官の名に於て大臣の實を行ひ、歴代の次官中一番貫目と勢力があつた。阪谷でも添田でも子の指導の下に働いたのである。現大藏大臣の勝田氏を始め日銀副總裁の水町袈裟六、臺灣銀行頭取の櫻井鐵太郎、朝鮮度支部長官の荒井賢太郎、憲政會幹事役の若槻禮次郎、濱口雄幸なども、田尻子が大藏省を出てから次官局長になつたけれども、子の次官時代には皆な弟子格として使はれたものである。後に至つていろ〳〵な系統が大藏省に出來、政黨の勢力などが入つて官僚中政黨員になつたものもあるけれども、田尻時代には系統や事情の上に超越して、專ら人材本位で大學の俊秀を網羅する方針を取つたから、今日と違つて高等官の粒が揃ひ、何となく引緊つた所があつた。子が大藏省に貢獻した點は非常なもので、紀念銅像の一つも建てゝ好い位である。

三

田尻子が多年住み馴れた大藏省を去つて會計檢査院長に任ぜられたのは、明治三十三年頃であつたと思ふが、それから今まで殆んど十九年を經てゐる。是れより先き故渡邊昇が多年檢査院長の職にあつたが、最後に

違法問題を惹起して、議會で彈劾上奏案まで提出され、久しくゴタ〳〵してゐた。其の違法問題といふは臨時軍事費特別會計の決算を特設委員で檢査し、總會計の議決を經ずして檢査の結果を上奏した上に、院長の違法に反對した安川繁成以下四名の檢査官を馘首したのが惡いといふのである。そこで渡邊も終に辭職の止むを得ざるに至り、其の後に京都府知事の內海忠勝が任ぜられたが、直ぐ罷めたので田尻が行つたのである。

渡邊は維新以來の惰力で此の位置に進んだ老物で財政經濟の頭は少しもなかつた。內海に至つては尙更其の方の智識を缺いてゐた。我邦有數の財政經濟家たる田尻が帝國會計の檢査權を握つたのは最も其の人を得たもので、大臣にはなれぬし、他に持つて行場がないから檢査院に入れたといふので無く、予を適任と認めたからである。十九年間一つ職に膠着して倦まなかつた予の辛抱力も偉いが、一つは予に代るべき適材が無い以上、此の地位を動くことが出來なかつたのである。

會計檢査院長は直接財務の經綸を行ふのと違つて、多く地味な隱れた仕事するのであるが、予は從來の院長の如く何物の勢力にも制せられずして、獨立の權能を發揮し、若し內閣に不法支出があれば少しも假借しなかつたから、孰れの內閣も予の會計檢査振りには恐れを抱いてゐた。檢査院で會計決算が出來上れば、一應內閣に此の事を通知する習はしであるが、第一桂內閣のとき、田尻子は其の先例を破つて直ちに決算を奏上したので、首相の桂はヒドク面喰ひ、內閣書記官長を院長の許へ遣つて前例に反することを突込ませると、予は先例があらうが無からうが、自分としては職能に從つて合法の處置を執つたのだから、歸つて太郎冠者に此の通り言はつしやいと逆捩を喰はしたので、翰長もスゴ〳〵引退つたさうである。政府が人を洋行させる場合でも、經費の支出に間違つた點があれば容赦なく田尻から突込まれるので、桂の如きは後難を恐れ、別に政商に旅費を調達させたといふ話もある。コンナ調子で田尻は內閣に對して恒に隱然一敵國を爲すといふ形であつた。

予の閱歷と學識を以てすれば今迄に大藏大臣になつて然るべきであるが、一度も其の機會を得ずに官場生活を閉ぢた。或る者は予の奇骨が累を爲したのだといひ、或る者は薩派の一人であるから、十九年間會計檢査院に敬遠されたのだといひ、其の他月並みの頭でいろ〳〵予の一身を觀察するものがあるが、予の本領から言へば、大臣になるとかならぬとかは問題でない。特に予には政治系統といふやうな片寄つたものが無い。薩人と言つても京都の藩邸に生れ、予自身は芋武士と茶粥人種の間の子で、是れが本當の芋粥だと言つてゐる。初め松方に引立てられた形ながら、敢て兒分になつたのでは無く、今でも松方のことを頭の格好が惡いの、疒(やまいだれ)の附く物知りで痴者(ちしや)だのと、随分惡口を叩いてゐる。大隈とは縁家を一にして近い親戚であるが、昔から大隈が大嫌ひで、破れた五反風呂だの、チンバの飜だのと、何日も口汚く罵つてゐる。コンナ風で予は私の關係を結ぶとか附炎隨熱して上手に泳ぐとかいふことはしない流儀である。

予が會計檢査院に韜晦してゐる間に內閣が七八度も更迭し、一度は薩

擧の天下になつたこともある。併し古い友人の權兵衞が政治舞臺に立たうが、築地の大隈が飛出さうが、又た長州の勢力がドンナに變らうが、予は一切政治上の勢力消長とは無關渉で、公卿の門に拜趨せず、形勢の途に奔走せず、一世に超然として理亂不知、黜陟不聞、惟適之安といふ風であつた。

四

予は吏として如何なる場合にも最善を盡し、自ら何物をも求めんとしなかつた。學者としては財政經濟の權威で、今猶ほ歐米の新刊を讀んで新知識を養ひ、廣く且つ深く研究することに務めてゐる。予の『財政と金融』は財政經濟學の寶典になつて今猶ほ弘く讀まれ、學者の著述としては立派な産物である。教育家としては初め米國から歸ると、箕作秋坪の三叉學舍の一室を借りて財政經濟の講義をしてゐたが、其の後專修學校を設立して實用の學を教へ、此の學校を出て民間に活動して居るものは少くない。役人時代から東京大學早稻田大學の講師を勸め、今度市長になつたに就て總ての講師を辭したが、學者、教育家としても隨分貢獻する所が多い。嚴格に言へば氏の本領は、或は俗な役人よりも學者教育家たるにあるかも知れぬ。

予は自分に一つの主義を定めてコクメイに之れを實行する。古フロックコート、詰襟のジャケツ、海豚靴、竹皮包の辨當、照降構はずの徒歩主義—是等は昔から人口に膾炙したるもので、北雷といへば何人にも直ちに田尻博士の粗衣粗食主義と理解される程に有名であるが、是れは穴勝ち喰ふものも喰はず、着るものも着ずに金を貯める爲めでも無ければ、又た故ら奇矯詭行を衒つて自ら面白がつたり人を面白がらせる爲めでもない。予に限つてソンナ衒氣やヒポクリチカルな了簡は微塵も無い。昔から書生を愛して、一時は十人以上も予の家に寄宿したことがある。法學博士の松崎藏之助、大藏次官の市來乙彥、代議士の有森新吉等は元と田尻家の玄關に居て學問をした男で、其の他、予の助けに依て一人前になつたものは少くない。川崎造船所長をしてゐる松方幸次郎も暫く田尻家の粗食を喫つた一人である。學生が何か發明をしたとか、彼等の爲になる場合とかには金を出す。一概に金を惜む人で無く、又た人から物を贈られても筋の通らぬものは決して受けない。それ故に予の儉素は畢竟主義から來るのである。人間の眞氣即ち精神主義に由來して居るから、少しも人格に障らず、寧ろ北雷主義が予の爲めに高遠洒脫な人格を形作つてゐる。

それ故に自ら人を感化する力がある。此の感化力は大學南校時代からあつた。當時予は汚い風をして一心不亂に勉强するし、品行は方正であるし、同窓の學生も予に推服したから、何日も級長に擧げられて年の少い學生を監督した。特に大藏時代には予に依て一つの省風が造られ、予が大藏を去つて後も猶ほ北雷主義が殘つてゐたのは、如何に感化力の深いかが分る。會計檢査院長時代も在職期間の長かつた丈けそれ丈け一般に深く感化がゝんだ。今に東京市役所も田尻流に化されるかも知れぬ。

予は昔から洒落を言ふことが好きで、人と對談中にも、學校の講義中

にも、公會の席で講演をする時にも、口を突いて洒落が出る。多少威厳を損しはせぬかと思はれる程連發する。日本の學者仲間で洒落の一副對といへば子と和田垣博士で、人間の脫俗した所も似てゐる。和田垣氏は流石に文學の素養がある丈けに、其の洒落も幾分か藝術的に出來てゐるが、田尻子のは多く駄洒落である。一つ二つ見本を示せば、日本では無暗に正貨が流出して、兌換が殘るから、是れが本當に神(紙)の國であるとか、ゼントルマンにならずにゼニトラレマンになつては、我輩のやうに多知(田尻)でも懐は否零(稻次郎)に歸ると言つたやうな類である。

市長當選後或る人が行つて阿部派の話に及び、阿部浩氏は政友會の原が尻押をしたやうだと言ふと、子は頻に口をムグ〳〵さしてゐたが、「阿部は伊東巳代治だよ、原といふのはそれはアベコウベ(阿部浩)だよと、早速苦しい洒落にして了つたさうである。

子はユーモアの中に皮肉と眞氣とがあり、穩和飄逸親しむべき一面には謹厳狎れ易からざるものがある。世間離れがしたやうで却々種々な問題に注意し、世態にも人情の機微にも通じ、非常に常識が發達して學者的迂遠の弊に陷つてゐ無い。

五

後進の爲めに路を開き、殘軀を財政經濟に關する立法行政の研究と育英事業に投ずと言つて野に下つた早々、子が市長の任を承諾したので意外に感ぜられるが、そこが普通人と變つた所でもあり、又それ相當の理窟から來てゐるのである。

元來市長は自ら運動してなるべきではない。善い市長はさういふ事をしない。運動してなつた市長に碌なものは無い。京都市の檢擧事件なども畢竟運動で市長にならうとしたから起つたのである。其の代り若し多數の信頼を得て市長に選ばれた以上は、決して辭退すべき筋のもので無い。此の理由から子は案外無雜作に引受けたらしい。今一つは阿部浩などに東京市政を攪亂されては堪らぬといふ心配が子の決心を助けたのではあるまいか。

それ故に是れから仕事をする考へはあつても、市長を承諾するに就て何等の條件を持出さなかつた。子は條件などを附けて市長になるべきで無いとしてゐる。併し承諾したからには、何等かの抱負を持つて掛つたに相違ない。理窟は市會の多數が自分を推したからなつたと言つても、單にそれ丈けの考へでは引受けられるもので無い。今まで會計檢査院長として常に消極的の仕事許りしてゐたから、少し積極的の事をして見たいといふ希望があるとすれば、猶更無爲に過すべきで無く、少くも何事をかやつて見ようといふ腹がある。特に政府が自治制度の取調をするとき、子も之れに關係した一人であるから、市政に關する知識がある。然し東京市政は隨分面倒が多く、奧田時代に幾分か改まつたとしても、更に一層改める必要がある。上下水工事なり築港問題なり電車未成線問題なり其の他必要な仕事は多くあるが、如何なる順序で進むか、市長として考慮を要する。

子の性質として內務大臣にならなかつたからとて、それを遺憾に思は

ず、又た其の素志があつても今後大臣となるとは覺束ない。或る者は一市長以上の人物を以て市長になつたのを惜しい氣がすると言ふが、大臣若くは樞密顧問官たると東京市長たると何れが好いかと言へば、帝都の市政を預るのも面白い事業である。或は一大臣になるよりは却て名譽があるかも知れぬ。今迄の市長は尾崎でも阪谷でも奥田でも一度大臣を經驗し、大臣級の人物を必要とすることになつてゐる。田尻子は大臣の經驗こそなけれ、立派な大臣格の人である。今日市政の最も必要なる部分は市の財政であるが、此の點に於ては財政經濟の知識經驗ある子に期待する所が多い。

唯だ子の抱負は何の位であるか分からぬが、成績の如何は周圍の援助如何にも依る。人柄が人柄であるから今後市會との折合も滑かに行くと思はれる。初めから何の黨派にも關係なく、超然不偏の態度で行くに違ひないから、妙な仲間に取卷かれて細工される心配がない。完全を求むれば固より足らぬ所はある。然し縱令ひ多くを望まれぬにせよ、少くも市政を善くこそすれ惡くすること無く、何事か見るべきものがあらう。

▽田尻子爵の家系と閲歴

江森泰吉

「東京市長としての田尻子爵」を評するには、他に其人がある、私は事ろ後の評論家に正確なる資料を提供するの意味に於て、普聞未知の事歴を語らうと思ふ。

▼子爵は一身の經歷感想等に就ては決して口を開かれぬ、然るに付て珍らしくも其家系生ひ立に關して建懷されたことがある、夫れに據ると、子爵の先祖に田尻宇兵衞と云ふ人があつた、田尻家では此人を木樣樣々々と云ふて決して名を呼ばない、不幸貧にして夙く父母に別れ親戚に寄食する身となつた、偶々父の忌日に相當するので其親戚では法事を營んだ、スルト未だ幼少であるが肝心な當主が居ないので、大騷ぎして探すと川で釣をして居つた、親戚の人は「親の忌日に釣をする杯と云ふことがあるか」と叱つた處が、木樣樣は泣て曰く、「我貧家に栄はる空しく坐食するに忍びず、只少しでも貧家を煩はさゞらん事を期す、故に今斯の如し諒ふ恕せよ」と、斯くて木樣樣が成年の頃ほひに十八貫文の金を與へて世話する人があつた、即ち是れを以て商業を營み相應に基礎を作つた、併し何時迄商事に齷齪して居るのも詰らぬと云ふので、氏神の稻荷に盟を立て、今迄貯めた千兩箱を氏神の堂に積み若し此堂の根太が折れたら商人をやめて武士に成らうと決心して、段々と積上げた處が遂に根太が折れたので、茲に始て武士となつたのである。

▼木樣樣の子武兵衞氏即ち子爵の祖父は父と性質が反對に不羈磊落の人であつた、當時小笠原が無人島であつて船が近づくと暴風が起り鬼神が現はれて寄港する事が出來ぬと云ふ評判であつた、ソコデよし俺が征服せんとの好奇心からあらゆる備に就て兵法を研究し始め、自我を投じて

三百の兵を率ゆる用意をしたものである、斯かる始末で本様様の遺産全部を蕩盡し四十幾歳かで早世して仕舞つた。

▼武兵衛氏の没した時親類が集まつて、差當り葬禮も出來ぬ様であるから寧ろ此際財産の整理を爲さんと相談した所が、子爵の父治兵衛氏は「我に貯蓄あり忌中父の命を改むるは孝に非らず、財産の整理は早晩爲さゞる可らずと雖も、將さに忌の明くるを俟つべきなり」とて肯んぜなかつた、人々は部屋住の身に貯蓄のありやう筈が無いので怪んで質問せしに、治兵衛氏は豫て父の賓性を知るものから家運再興の必要を悟り、夙に今日の事あるを知り、即ち刀劍の拵へ方に托し其費用を請求するに際して三十金を請求すれば、武兵衛氏は刀劍は武士の魂なり宜しく五十金を費す可しと云ふて餘分に與へられた事が數回ある、夫れを貯蓄して現に數百金を藏せりとのこと、斯かる次第で葬儀も立派に執行され、財産も徐々と處分した所が、銃器火藥始め兵器は山の如く肥前忠吉の刀のみでも百三十口あつたといふ程である。

▼治兵衛氏は青雲に志して幾度か要職に就いたが、在職中亦耕を傭ふて海防に關する論策を口述編成し『海防彙議』と題する稿本を成就したが、安政二年京都留守居役を以て子爵が五歳の折任所に没したのである。

▼子爵十五六歳の頃ほひより天下の形勢を見、どうしても海軍を盛んにせなければいかぬと云ふので鹿兒島の開成學校に入學した、當時の制度で二級生になると長崎か江戸に遊學させられるのである、依つて二級生となつて長崎に行き半年ばかり居ると其頃江戸に福澤と云ふ英書の讀める大學者が居る事を聞き、ソコデ藩に請ふて江戸に出で福澤の塾に行つて見ると、どうも商人風儀で刀を挾んで通學するのを嫌ふ風が見えたので、他を尋ねて見ると今の高等商業學校の處にあつた開成學校に良い教師と外國人が教授して居る、ソコデ福澤翁に面會して今日迄の禮を述べ是れから外國人と話もし外國人の算盤をも習はんければならぬ、然るに夫れは塾では出來ないから此事を諒して下さいと事情を述べて開成學校に轉じたのである、開成學校に入つて見ると矢張り此學校も風儀が惡いので同窓生と大部論爭もした相な、兎角する内、海軍兵學校が段々整頓して練習艦も出來たので是れに入學した、然るに入學者が非常に多い、ロンナに海軍生が多いなら何も自分が海軍に入らずとも事缺くこともあるまい、寧ろ是からは萬國公法でもやつて見やうと心機一轉して、又もや其頃大學南校と改稱した開成學校に復歸したのである。

▼其當時政府から大藩は三人小藩は一人宛南校に入らしむ可しとの命令があつた、所謂貢進生と稱ふる者である、ソコデ子爵は藩の公用人に說て「貢進生は天下の秀才の集まるのであるから、藩からは最俊才を選ばなくてはならぬ、依て岡田孝吉、赤星彌之助、町田陽職を人選せよと建議した、然るに藩は赤星の代りに子爵を入選して米國に留學せしめたのである。

▼米國に行くと先づ紐育在の或學校に送られたが、此學校では小供扱ひにすると云ふのでニユブロンスウツキの大學の豫備校に轉じた、併しココの學風も思はしくないのでコネクチカツト州の教育掛理事のノルスロツプと云ふ人に逢つて學校の選擇を賴み、遂にハートフオルドの高等學

校に入つた、居る事一年にして留學生招還の議が本國に起つたけれ共、此儘歸朝した所で何等益無い事ではありケプロンと云ふ校長が大に同情して費用を出してやると云ふので依然在學して居つた、スルト一年程經てケプロン先生が病死した、然るにケプロン先生の屬して居る寺と其壇下の三四人がケプロン氏の世話して居つた人を見棄るのは情に非らずと云ふので依然子爵を保護されたのである、斯かる事情の下にハートフォルドの高等學校を卒へてエール大學に入つた。

▼エール大學に入つて見ると日本人で法律を學ぶ人が澤山に居る、鳩山和夫氏杯も其一人であつた、ソコデ子爵は例の流儀で是れはいけない、法律をやる人がこんなに多いなら、何も自分に是れをやるに及ばぬ、然るに經濟財政は一向やる人が無い、我終生の業此所にありと、玆に始めて決意して研究科迄修業し、明治十二年七月四日即ち合衆國獨立祭當日、ハートフォルドを辭して歸朝したのである。

▼米國を辭するに際して、子爵が米人に對する告別の言葉がある、「修永年の間言語に盡されぬ程の御世話になつた、如何にして是れに酬ゆる所あらん乎是れを知るに由なし、然るに我は日本人なれば直接諸君と米國に對して酬ゆる事は殆んど爲し得べからざる事に屬す、只日本の國家に盡す所を以て卿諸君に酬ゆる所あらんとす」との意を告げて歸朝の途に上つたのである、爾來春風秋雨玆に四十年、而して今や世界大に亂れて歐亞兩洲は正に修羅の巷にあり、中米治らず北米爲めに安からず、此時に方り直接戰禍を被らずして高枕安臥し得るは獨り我國あるのみである、併しながら「熟々帝國の現狀を觀るに財政經濟の不調甚しく、世道人心の頽敗亦有史以來曾て見ざる所也、今にして之が計をなさゞれば他日臍を噬むとも及ばざらんとす、余や不敏其器にあらずと雖漫然坐視するに忍びず、是れを以て骸骨を闕下に請ひ・・・・(退官理由)終身官たる會計檢查院長の椅子を自から擲ちて野處するに至つたのである。

▼最近の新聞紙上に二三知名の士が子爵を樞密顧問官として見ざるを惜いと評した記事を見て、私は「殘軀を財政經濟に關する立法行政の研究と育英事業とに投ぜんとす」と公表せる退官理由の一節をも讀まずして、漫に他の出處進退を論斷する不要意と無責任とに呆然たらざるを得なかつた、若し夫れ國家にして四十年間終始官場と學界とに貢獻せる子爵の功を錄せんとするならば樞密顧問官の榮職も決して過ぎたりとせぬのである、亦子爵にして單に晩節の完きを期するの意圖あらば、好むで財政の司法監督官を去るの必要は無いのである、去りながら國家の艱難と人心の弛廢を袖手傍觀するは臣子の分國民の義務に非らずとし、一身を挺して國家公共の爲めに時弊匡救の任に當らんと決心したのであらう、子爵が如何なる方法形式に於て此大志を決行するやは想ふに天下の一大偉觀にして必ずや一世の耳目を聳動するに足るものがあつたに相違ない、然るに突如として市長問題が起り、義の存する所水火尙ほ辭せざる平素の主張に殉じて遂に就職を決心するに至つたのは內心頗る迷惑せられた事と、其心事を解するものゝ想像に餘りある次第である。

▼要するに木條樣の刻苦精勵、武兵衛翁の不羈磊落、治兵衛氏の豪邁闊

到と、父祖三代の系統を承けたる子爵の血管には、とり〳〵に此三つの異れる性情が潜在せるかの如くに想はるゝ、而して學生時代の進止舉動、米國留學當時の決心と今次の退官の動機等を彼是照合考察して、茲に始めて子爵の眞骨頭を領解し得らるゝと信ずるのである、彼詰襟の服裝問題や徒歩や玄米論や豆粕飯の斡旋等、日常生活の片影を捉へて子爵の性格行藏を律せんとするが如きは、未だ以て倶に語るに足らぬ近眼皮相の見と斷ずるに憚らぬのである(七―四―一七……病床にて)

▽理想的の市長

法學博士　一市民

東京市長ほど六つかしい役所はない。強くてもいけなく、弱くては固よりいけない。小姑が多く、之を操縦する事頗る難しとせられて居るが、さりとて之に負ける位の人では初めから問題にならない。口喧しい市會議員の連中は、あれも不可ない、之も不可ないと大抵の人に滿足しないが、偶々之といふ人物の矢が立てらるゝ者があれば必ず向ふから斷はられる。從つて今日まで手腕聲望を兼ねたる第一流の人物がスラ〳〵と此地位に納つた例がない。名指して云つては氣の毒だが、大阪の池上市長と云つたやうな第三流所の辛辣な手腕家なら、やつてやれない事もあるまいが、お膝元の都だけに品格といふ事も大いに顧慮しなければならない。品格の點に於ては阪谷市長は最も適任であつたけれども、氏に市會議員を自由に操縦する丈けの強味が缺けて居つた。尾崎氏のやうにノラリクラリやつて居れば、三五年續け得ない事もないが、あれでは最早今日の市民は承知しない。故奥田市長は近來の名市長であるかの如く唱へられたけれども、あれ以上の人物を得る事が事實困難であるから止むを得ず彼を以て滿足したので、彼を以て理想的の市長とは誰も思つて居なかつたらう。彼に周密なる吏才なきにあらず、然し帝國首都の首長として、どれ丈けの經綸があつたか。形式を整頓するの才には富んで居つたが、内容を充實する頭の人ではない。畢竟彼は理想的の助役級の人物であつた。と云へば故人をケナスやうに聞ゆるが、ケナスのではない。東京市はあの位の人を助役に持つ位にならなければならないのである。併し兎に角彼は近來の名市長であつた。而してヤットの事で求め得た彼の薨去して以來、市長の人選は再び行惱んだ。例に依つて中野老人が氣の毒な程東奔西走してもどれもこれも駄目。止むなく手腕はあれども、兎角の評ある阿部浩氏に落ち着かんとした。阿部氏自身も亦極力暗中の飛躍を試みたやうである。而して容易に適任者を得難い事に諦めて居つた市民も、幾分不安の念を抱きつゝ阿部氏を戴く事に甘んぜんとするの風も見えた。處へ計らずも晴天の霹靂の如く田尻子爵の名前が突如として鳴り響いた。さうすると今迄のスッタモンダも忽ちにして收まり、市長問題も直ぐに定つて了つた。而して市民も亦多年探し艱んで居つた尋ね〳〵人に逢つたやうな氣持で非常な安心と信頼とを持つて此新市長を迎へんとして居る

のである。公平に見て田尻子爵は經歷聲望二つながら東京市長として何處へ出しても恥しくない人である。東京市は田尻子爵に於て、初めて必ず有せざるべからずして、而かも永く有し能はざりし底の理想的市長を迎へたものと云つていゝ。挺身此難局に當るを辭せなかつた子爵の行爲に對しては深く感謝の念に堪へないが、市民が此人に對して斯くも誠意ある信頼を捧げて居るのは、空前の出來事として我々の注意を要する所である。矢張り豪い奴が來れば小姑は文句を言はないものと見える。

◉田尻子爵の市長となつたのは實は其の會計檢査院長を辭した時からの豫定の行動であつて、一部の間には此内談が出來上つて居つたと想像せられないでもない。予は子爵の平常に徴して恐らくはさうであるまい、突嗟の間に極つたものであらうと思ふ。何故なれば彼には元來現今普通の官僚政治家に見るが如き策略といふものは露ほどもないからである。今日の事は今日きめる、三日も四日も後の事を今日からいろ／＼巧みに作り出すといふ事は彼の從來の經歷の何處にもない。且つ又彼は彼の能力の範圍内の事なら、どんな難局にも平然として立つといふ美徳がある。彼は成否を眼中に置かない。世評の毀譽褒貶を念頭に置かない。どんな六つかしい事でも全力を盡してやつて見る。やつて巧く行かなければ止むる迄の事である。折角やり懸けてシクジレば自分の面目に係るとか、他日伸びんとする地歩に妨げあるといふやうな事は全然眼中にない。一言にして云へば彼の眼中には所謂難局なるものはない。何の仕事も皆同一である。從つてやれといふなら何んでも引受けるといふ處に田尻の田尻たる所以が存在する。子爵は恐らく市長問題の相談を受けた時、特に之を困難な仕事だなどゝ考ふる暇あらずして突嗟の間に御信頼とあれば引受けませうとでも返答したらうと思はれる。

◉彼の從來の經歷を見るに、今日まで全然一本立で來た。彼は未だ何人にも頼らない。而かも何人からも重寶がられた。彼を引立てた人はあらう。けれども彼には親分がない。彼は何人にも何等求むる所はなかつた。彼のよつて以て立つ所は何人も犯す能はざる誠實と勤勉と手腕とである。從つて周圍を顧慮して旨く難局を切り抜けやうなどゝいふ事を考へない。東京市のやうな小姑の多い所では、寧ろさういふのは却つていゝかと思はれる。なまなか誰彼の意嚮を顧慮しては迚も思ふ通りの仕事の出來るものではない。彼が周圍の思惑に顧慮せざるの一例としては、大藏省の屬僚たりし時も、會計檢査院長として内閣に交渉する時でも、又或は學校の講堂や公開演説會の壇上に於ても人を呼ぶに敬稱を使つた事はない。大藏省の屬僚として彼は時の大臣の渡邊國武に向つて甚仙人の御意見は如何と尋ねた事がある。日本銀行に行つて時の總裁を高橋豚清と呼んだ。桂公に向つては太郎冠者、山本伯に向つては種蒔き、寺内伯に向つてはビリケン、こんな言葉は口を銜いて出る。之を好い事と褒めるのではないが、少しでも求むる所ある人の爲し得ざる所なるを知らねばならない。あれであれまで通つた所を以て見ると、彼の實力に餘程卓越非凡なるものが有つた爲めであると見なければならない。此調子でやれば流石の東京市も無論立派に切り抜ける事が出來るだらう。

⊙彼は勤勉の人である。經濟學に於ては已に一個のオーソリチーである。其外社會問題についても相當の意見もあれば、研究も積んで居る。從つて東京市長としても、彼には其地位に相應はしい經綸の蓄を已に有つて居ると見ていゝ。此點に於て現代の政治家中其儕を求むれば、器は小さいが仲小路農相などは稍々其類ひであると思はるゝけれども、彼のやうな口ばかり矢釜しくて大に求むる所ある人物とは、固より其軌を異にする。故に吾々は田尻市長に於て眞個市長たるの經綸を見るばかりで無く、又之を實現するの誠意と努力とを見る事が出來る。よしんば志と違ひ、中途にして其地位を退く事があつても、彼によつて一旦認められたる市長の地位には、必ずや多くの有益なる經綸が殘さるゝであらう。

⊙人として彼は實踐躬行の美德がある。自ら奉ずることの極めて薄いのは、彼の弊衣破帽が之を語つて居る。其癖彼は邸內の一隅に寄宿舍を作つて、常に十數名の書生を養ふ事數十年一日の如きは、之を知らない人が割合に多い。而かも彼は此等の苦學生を見る事全く賓客の如くである。僕婢に對してすら同儕の禮を以て接するのが、彼の家庭の規則であると聞いて居る。彼の倫理觀なり精神主義なりが、彼の經濟學上の蘊蓄又は政治的經綸ほど價値あるものでなかるべきは言ふを俟たない。時々發表する精神講話などを聞いても、內容は極めて貧弱でもあれば又陳腐でもある。唯彼の常人に傑出する所は、彼は其言ふ所を悉く身に體現して居る事である。之れ彼の聲望の彼の知る總てのものゝ間に重きを爲す所以である。先年彼の家庭より心得違ひの者を出したといふので彼の家庭を誹ずる者があつたけれども、之れ蓋し彼の罪にあらず、又彼の家庭の罪にあらずして社會の罪であらう。善良なる家庭より不良の子女を出す事が無いといふのは、善良なる家庭の多い社會に於て云ふべき事である。田尻家の往來する範圍內に、もう二三軒も同じやうな立派な家庭があつたなら、恐らく子女は其方向を誤まる事が無かつたらう。罪は田尻子爵の家庭を此意味に於て孤立せしめた社會に在る。

⊙兎に角彼は今日市民の多大の期待の中に市長の任に就いた。彼に對するほど市民は安心した事は無い、又信頼した事は無い。彼は所謂難局に對して平然たりしが如く、又此信頼と期待とに對しても、恐らく極めて冷靜であらう。予輩は此信頼や期待に對して、更に大に奮發するなどといふ月並の文句を云はない所に田尻子爵の面目を認めつゝ、例によつて平然として思ふ事をドン／＼やつて欲しい。斯くして彼が多年蓄積したる市內の蟠根錯節を切り開き、以て其經綸を行ふの端緒を開くを得ば、事の成否如何に拘はらず兎に角市民の幸福である。聞く所に依れば彼は市長の任に就くや直ちに公私諸學校に於ける講義を辭めたいといふ事である。之れ從來に例のない事である。彼は自分の說が最も多くの人に諒解せられん事を希望するの誠意からして、其名著「財政と金融」を一頁の印稅をも取らない條件で自分の思ふ通りに出版せしむると同時に、頼まれゝば何處の學校へも講義に出た。大藏次官になつても、會計檢査院長になつても學校の講義は未だ辭めた事はない。而かも講義に出る學校は東京に於ける殆んど總ての法律學校に亙つて居る。そして彼は一日も缺席した事がないのみか、嘗て一分も遲れた事はない。否な一時間の講義を四五分早く初めて二三分遲れて閉ぢる程であつた。之れ程熱心な學校の講釋を今度全部辭めた所を以て見ると、彼が東京市長の任を受けた決心の程が略ぼ窺はれないでない。東京市民は果して彼をして十分な經綸を揮はしむるだらうか。

評論

軍閥の外交容喙を難ず

法學博士　吉野作造

フリードリッヒ・ナウマンといへば牧師上りの政治家として、進歩國民黨の領袖として、威風堂々たる熱烈なる大雄辯家として、又深遠なる評論を以て常に社會の指導を怠らざる稀なる操觚者として夙に獨逸の政界に有名であるが、殊に最近は「中央歐羅巴」の著者として遠く我國にも其令名を馳せて居る、去年の十月九日彼が帝國議會に於て、獨逸の帝國主義運動に關する質問演説は、啻に之を聽く者に深刻なる印象を與へたばかりでなく、總て發表せられたる彼の演説の速記は一層大いなる感動を國の內外に與へたと言はれて居る。其演説は主として、彼の前海相テルピッチ等によつて創設せられたる祖國黨を攻撃せるものであるが、其要點は、同黨が帝國議會多數派の說、否國民多數の輿望を無視し、主戰說を標榜して國內に無遠慮に運動しつゝある事を攻撃せるものである。彼の云ふ所によると「……九一一四年以來獨逸は實に同一の政府組織の中に互に相軋轢する二個の中心勢力を有つ事になつた。一つはビートマン・ホルウエックの政府で、一つはテルピッチの政府である。而して、此兩派の乖離は官廳內にも軍隊內にも新聞界にも、否又實に全國民の間にも浸潤した……此二重政府制度の爲めに政務の澁滯を來たし、どれ丈け國家の損失を招いたか分らない……彼の祖國黨は、議會及び政府が最高軍事當局者の同意を得て一旦可決したる一九一七年七月十九日の講和決議に基く我外交政策に露骨に反對して居る。之れ實に、ビートマン・ホルウエック並びに其後任者の意思を無視するのみならず、又議會多數黨否な國民多數の意嚮を蹂躙するものではないか。議會に於ける決議の權威

を尊重するは我々の義務である。假令自己一人が此決議に反對でも一旦決議の出來上つた以上は協力一致の義務に服せなければならない。此協力一致の傾向には近頃社會黨ですら服して居るではないか……然るに祖國黨は議會の決議が何であらうが、國民多數の希望が何であらうが一向頓着する所なく、自分の思ふが儘に行動して居るのは之れ實に國民の權威に對する挑戰ではないか」と言つて、更に祖國黨が獨り七月十九日の講和決議に反對するの行動に出でゝ居るばかりでなく、正式なる政府以外の一個獨立の別天地を作り、軍權を背後に控へて自由勝手の行動に出でゝ居る事を最も痛烈に攻撃して居るのである。

　獨逸の政府が議會より來る所謂文治派の意見と、軍閥より來る所謂武斷派との意見との間に板挾みとなつて居る事は隠れもない事實である。去年の出兵以來、對露國政策に於ても獨逸の國論が此兩者の間に動搖した事は前號の出兵問題に關する論文の中にも之を說いた。而して軍閥の盲目的武斷主義が動もすれば政府の外交方針を左右するといふ事實の昨今最も著しい事も隠れもない事實である。而して、ナウマンの演說は已に半年以前に於て此事實を喝破して居る點に於て我々の注意を惹くものである。然し予輩の玆に彼の演說を引き來りし所以のものは只之に依つて獨逸政界の現狀を瞥見するの料とせんが爲めばかりではない。之に依つて又同時に日本今日の狀態に省みて深く國民の反省を求めん事を欲するが爲めである。何故なれば、事實の眞僞如何は姑く論外として、政府以外の政府、外務省以外の外交方針策源地存在の說が我國に於ても夙に喧傳せられて居つたからである。

　我國に於ける對外政策の大方針が外務省に依つて決せられず、又內閣其物に依つて決せられずして、元老其他の政府以外の先輩政治家の採決を仰ぐを常として居る事は今更ら云ふ迄もない。之は全然政治上の經歷と見識とを缺く人に依つて決せらるゝのでないからまだしも我慢が出來るとして、若しも此外に我國の外交政策が全然政治上の經歷と見識とを缺く特殊の階級から幾分でも左右さるゝの事實ありといふが眞ならば、我々は到底之を默認する事は出來ない。而して陸海軍省並びに參謀本部の一角が此點に於て多年國民疑惑の焦點となつて居つた事は事實の眞僞は兎も角も、我國の政界にとつて一大不詳事たるを失はないものである。

　單に最近に起つた二三の風說のみを列擧して見よう。

支那第一革命の時には軍閥は少くとも革命勃發の當初之に對して外務省と正反對の行動を執つたと言はれて居る。大隈内閣の或意味に於ては失政の一に數へらるべき日支交渉の第五項の要求も、もと軍閥の强要にかゝるといふ説もあつた。而して大隈内閣失脚の一原因をなした滿蒙問題の誤つたる解決策は、其責任の大部分は之を軍閥の献策に歸せねばならないと多數の國民は確信して居る。外交政策殊に對東亞政策に就いては對歐米外交とは異り、國が近い丈けに萬一の場合に對する準備といふ事も考慮の中に入れて置かなければならないから、從つて軍閥と打合せをなすの必要に迫らるゝ事が少くない。それ丈け軍閥は又此種外交問題に容嘴し得る事になるが、從來日本の對東亞政策の大部分は帝國の國防的見地から解決するを要する種類のものが多かつたゞけ、主として軍閥の意見に聽くべき必要が多かつた。それ丈け軍閥の意見は事實上外交政策の決定に重きをなす。之は事實上止むを得ない現象であるが、併し之は最近適當の度を超え、軍閥が餘りに勝手な、軍事上の見地のみから立てた無謀な献策を政府に迫るので、いろ〳〵國家全體の上に苦痛と損失とを與へたといふ事實もないではない。斯くして外交問題の決定に對しては軍閥の干渉を抑へざるべからずとするの議論は最近に於ける國民一般の要求であつた。軍閥が果して斯くも横暴であつたかどうかの事實は姑く之を爭はない。唯國民は何人か假に軍閥に對する威望を備ふるものが出て、一度彼を抑へて欲しいといふ事を熱望した事丈けは疑を容れない。之れ寺内内閣の出現がいろ〳〵の點に於て國民の不滿を買つたに拘らず尙此意味に於て一部の人の其前途に多少の希望を繋げた所以である。而して寺内内閣が此點に就いて果して國民の希望に副ふたかどうかは一個の大いなる疑問である。最近にも對東亞策のいろ〳〵な問題に就て又國民中軍閥の外交權容嘴を難ずるものゝあるのは之れ難ずるものゝ誤解に出づるものであらうか。

軍閥が外交政策に關して横暴を振舞ふのは一面に於て外務當局の無能を意味しないではない。併し乍ら如何に外務當局に有爲の才能を缺けばとて、世界の大勢に通ぜざる、殊に戰爭を以て職業とする軍事當局が外交方針の決定に與る事は大いなる弊害といはんよりは寧ろ大いなる危險といはなければならない。天に二日なきが如く國家の政務は一定の系統ある組織の下に統一せられなければならない。偶々ナウマンの演説を讀

んで彼の獨逸政界に加ふる所の批評が又我國の現狀にも適切なるものあるを思ふて玆に之を假つて國民の反省を促さんとしたのである。

今日の戰局は如何に落ち着くか

法學博士　吉野作造

三月廿日過ぎを以て初つた西部戰場今期の決戰はどう落着くであらうか。今の處獨逸の攻勢に出でゝ居る事、又獨逸が着々敵を壓迫して居る事は疑ふべくもない。此勢を以て進めば結局獨逸の勝利に歸するやうに思はるゝけれども、唯我々の注意せねばならぬ事は之が一國と一國の戰爭でない事である。一國同志の戰爭でも後方物資の供給には多大の困難を感ずるを常とするが、今度のやうな總ての大國の參加して居る戰爭には、敵味方とも直接戰爭に必要なる所謂軍需品の供給は自國以外に供給の途がない事を見逃してはならない。從つて例へば戰爭の續行其物を可能ならしむる砲彈の供給にも限がある。あれ丈けの宏大なる戰線であれ丈け猛烈に攻擊して居るのであるから、さう永く攻勢の續けられる譯のものではない。聞く所に據ると、砲彈の製造能力は今日英國は每一日約四十萬發、佛國は廿五萬發といふ事であるが、敵國獨逸に就いては詳細を知り難きも、多くも四十萬發を出でないだらうといふ事である。して見れば此製造能力に於て獨逸は決して英佛を凌駕するものではない。而して之れ亦或專門家の說に據ると、今度の攻勢を開始する以前獨逸の蓄へたる砲彈數は二千萬發を超ゆる事あるまじといふ事であるから、結局問題は二千萬發を何日に費ふか、又其極つた日數の中に獨逸は果してよく英佛に致命的打擊を與へるや否やに歸する。致命的打擊を與へ得ずして砲彈の蓄が盡きたのでは、今日の十里二十里の前進も結局何の役にも立たない事になる。而して從來の例によると大々的攻勢は一箇月以上に涉つた例しはない。全然想像ではあるけれども、今度の攻勢も永くて二箇月か一箇月半のものであらうといふ事であるから、つまり獨逸が本誌の世上に公けにされた頃、どれ丈けの功果を收めたかによつて問題は極るものであらう。北部に於てもつと有効に英軍を壓迫せざる限り、戰線膠着の說

の傳へらるゝのも亦止むを得ない。獨墺軍が再び伊太利の北部を席卷して同國を全然無抵抗の狀態に陷し、南方より佛蘭西の虛を脅すの策に出でないのを以て見ると餘り餘力もなさゝうに見える。蓋し伊太利の工業能力の殆ど全部は北部に集中して居るから、北部を占領するに成功すれば卽ち伊太利を全然無能力ならしむる所以である。四月央前對伊攻勢近きにありとの報道あつて而かも尙未だ其實行の報道に接しない。

英國には今や徵兵令を愛蘭に施行するの決定をなせし爲め、少からず内部の動搖を來たして居るけれども、尙ダルビー卿を駐佛大使に任じ、ミルナー卿を陸軍卿に擧げ、更にチャムバレンを軍事内閣に招來する事によつて對獨決心の志益々牢きを示して居る。佛蘭西に於てもクレマンソー内閣の小搖ぎもせざるは以て厭くまで戰ふの志の國民に毫も衰へざるを證明するものである。況んや米國の今や大いに英を皷して戰備に汲々たるものあるに於ておや。聯合國は今度の戰爭に於て尙一層最後の目的に突進するの決心を强めて居るものと見なければならない。

之に對する獨逸の決心も亦昨今非常に盛なるものあるを認めなければならない。一月央の御前會議以來軍閥の意見勝を占めて獨逸の政策に面目を一新せしものあるは已に人の知る所である。去年以來多年の節を屈して政府が卒先して企てゝ居つたプロシア選擧法改正案を、二月廿一日の議會があべこべに否決し去つたが如きも、同國保守黨の武斷的意氣が如何に作興して居るかを語るものである。之を内部の動搖に對する官僚軍閥の最後の反動と見るの說が誤なしとしても、兎に角獨逸今日の政府が空前の決心を以て現在の戰局に對して居る事は疑を容れない。

此際に方つて敵國に取つて唯一の欠缺はチエルニン伯の辭職によつて一先づ解決を告げた墺國宮廷の内情の暴露である。去年の春墺匈國新皇帝が、密かに獨逸を賣つて佛蘭西と單獨講話を結ばんとの陰謀を企てた事は、端なくもチエルニン伯の出現によつて暴露した。之が聯合國を離反せしめんとする一場の惡戲にして獨逸官憲の使嗾に出づるものとするのは固より愚にも附かぬ幼稚なる推測である。吾人は之によつて墺匈國の内部が如何に戰亂に倦み、速なる平和を欲するの念强きかを思ひ、而して其極竟に獨逸に裏切つて單獨の行動に出でんとした事を見て、獨逸彼自身が如何に愕然として驚いたかを推測せねばならない。露西亞が今日の

やうな狀態になつた以上、墺太利の戰爭繼續熱が半ば冷却すべきは當然であるのみならず、三月十日前後の電報に維納ブタペストの兩市に大ストライキが起り勢頗る猖獗を極め、而して之れは露國過激派の思想の影響が少からずあるとの報道を觀ても、內部動搖の怖るべき種が醞釀せられて居るといふ事が分る。それ丈け政府に取つては戰爭繼續の政策を遂行する上に大いなる危險を感ぜざるを得ないであらう。チエルニン伯の辭職を導いた事件の結果、獨逸の思惑を顧慮せる墺國政府は、俄かに舊大臣を斥け、之に代ふるに親獨的大臣を以てし、一見獨墺の關係は雨降つて地堅まるの感なきにあらざるも、而かも獨逸に對する墺國の忠誠は、獨逸が墺國を抑へ得る力の存續を條件とするものなる事を考へねばならぬ。故に若し今日多くの政局批評家が指摘するが如く、獨逸が聯合國側に負ける事がないまでも、若し國民をして期待せしめたるが如き成功を贏ち得ずして不得要領に攻勢を中止せねばならぬ事になり、爲めに去年の暮に見たるが如き大騷擾を現出するが如き事あらば、獨逸國內を鎮定する丈けの力は之を失はないとしても、墺太利や土耳共をして我命を奉ぜしむる丈けの餘裕を示す事が出來るだらうかに多少の疑なきを得ない。聯合國側の內部の結束が日に日に鞏固を加ふるに反し、獨墺側の內部の結束は一に繫つて獨逸の對墺土强制力にありといふの事實は、實戰場裏に於ける獨逸側の優勝に係らず、我々の密かに獨逸側の爲めに憂慮する點である。

米國の對露政策の成功

大山郁夫

歐露及びシベリアが、將來に於て列國の利權獲得運動の競爭地帶となるべきことは、今より推測するに難からざる所である。されば現今西部戰線に於ける戰爭遂行の事業に沒頭して、また他を顧みる遑もない筈の歐洲列國も、不思議にも對露問題に多大の注意を拂つて、油斷も隙もない有樣である。而して一時我國の出兵問題の熾に燃燒して居た際に、之に對して頗る煮え切らぬ態度を示した米國は素より、獨墺を牽制する目的のために我國の出兵を切望した英佛までが、嚴重に

之に關する我國の行動の性質の範圍を限定し、之をして露國民保護のための出兵たらしむべく、露國侵略のための出兵たらしむべからずなどいふ聲言の下に、巨細の點に渉つて我國のシベリアに於ける行動の上に監視抑制の眼を向けんとしたことは、今日尚ほ世人の記憶に新たなる所のものである。斯の如き事は一方に於ては、一般には露西亞全體に關する――特別にはシベリアに關する諸問題が、如何に列國間に重要視せられて居るかを語るものであると同時に、他方に於ては、我國が容易ならざる侵略的企圖を抱いて居るのではあるまいかといふ疑念が、我友邦間にさへ流布して居る事實を反映するものである。

　我國が侵略の意思を諸外國に疑はれつつあるとは、今は隱れもない事實であるが、而かも事の玆に至つた所以は、我國が現今軍閥內閣の支配の下に在る事實のみに依るのでもなければ、我國の一部の論客の不謹愼なる言論のみに依るのでもなく、但しは又、我友邦の得手勝手の解釋のみに依るのでもない。勿論是等の事實は相集つて、此結果を生むに與つて力らあつたものであることは、また疑ふべき餘地のないことであるが、併しながら我等が遠く眼を放つて××××を中心とする××一帶及び×××××××の空を眺むる時は、我等は是等の事實以外に、我國を列國の群疑の間に投げ入るるに至つた最も直接なる動機を看取することを得るのである。我等は今玆にそれが何であるかを明言することが出來ないのを遺憾とするものであるが、縱し我等が之に關して固く口を噤ぐとしても、それは露國の新聞紙を繙讀するものには、誰れにでも直に知れる筈のものである。斯の如く我國に關係ある重要事項が外國に知れ渡つて居る場合でも、本國に於て之を公言することが出來ないことがあるのを思へば、我等は名だけでも立憲國を稱する國に住んで居る樣な心地がしないが、是は將來國民の奮起に依つて出來るだけ速に改むべきものであると言ひ得るのみであつて、此瞬間の問題としては何として見やうもないのは遺憾である。

　それは兎も角、最近數個月に於て、對露政策上最も顯著なる成功を收めたものは、獨逸と米國とであつて、殊に後者を以て最とすることだけは、些かの危な氣なしに確言することが出來ると思ふ。蓋し獨逸は露國との單獨講和に依つて、自國の東境に接壤する諸小國及び露國沿海州の一部に確固たる地歩を占めたのみならず、更にその將來の經濟的發展のため、將又その

東方政策のために、測るべからざる程の有利なる諸條件を提出し、終に盡く之を獲得することに成功したが、この成功が露國側の任意の讓歩に依つて得られたものでなく、その堅甲利兵の閃きを以て威嚇して總に得られたものであつた。而してまた獨逸が該單獨講和に依つて贏ち得たる諸條件をば、將來自國の利益のために十分に利用し得べきや否やは、少くとも二箇の前提の完成するや否やに懸つて居る。所謂二個の前提とは、第一、該講和條約の一方の當事者たる過激派「政府」が將來永續的にその政權を保持すること、及び第二、獨逸が優勝者としてでないまでも、失敗者としてでなく戰爭を終結に導くことである。この二個の前提が完成する時は、獨逸が右の講和條約に依つて得たる有利なる條件を縱横に活用し得ることは謂ふまでもないことの樣であるが、併し仔細に考察すれば、その場合に於ても尙ほ一事の獨逸の自由行動を多少の程度に於て阻害するものがある。それは何であるかと問ふまでもなく、露國をして對獨墺講和の交渉に於て殆んど忍ぶべからざる讓歩に出づるを餘儀なくせしめた獨逸の軍國主義は、單に過激派の極端に敵視する所となれるのみならず、同國に於ける民主主義の勝利が齎らし來つた專制政治の羈絆よりの解放の歡喜に醉へる一般露國民が、決して好感を以て之を迎ふる能はざること即ち是れである。凡そ是等の事實は、獨逸の對露交渉上の成績を以て、無條件の成功を以て許すべからざる素因を構成して居るものであらねばならぬ。

之に反して米國の對露政策は、一は米國の國家組織が新露西亞のそれを合致して居るために、一は米國の當局者の措置の宜しきを得たるために、何等の强壓を用ひずして、極めて自然に成功を收めたことは、恰も渠成つて水臻るが如き悠揚の觀を呈し、且つそれが單に過激派の歡心を買つたのみならず、同時に過激派以外の露國民の同情をも共に贏ち得たがために、その効果も無限に永續すべき可能性を示して居るのである。かの大陽と風神との競爭を主題とせる童話に於て、旅人をしてその上衣を脫がしめたものは一陣の狂飆にあらずして、却て煦々たる和光であつたとある譬喩は、最も適切に獨逸と米國との最近に於ける對露政策上の差異に適用し得られるものであると思はれる。それと同時に、獨逸を學んで而かも獨逸の擧げた効果を收め得なかつたは愚か、只單に殆んど露國民全體の反感を買つたに止またのは何國であるかといふことも、直ち

に判斷し得られるのである。

米國のシベリアに於ける活動は、嚮きにその遣露使節ルート氏の赴任した時代より始まり、當時米國の資本家の間に、シベリアの利權に向つて無慮三十億弗を投資すべく合意せられたと傳へられた。爾來米國は露國の望む儘に、その無限の資力に依つて、鐵道材料を始め、各種の機械を惜まず提供し、シベリア各地の利益と交換して居る。斯くて米國人が現在シベリア各地に於て進んで投資又は獲得しつつある利權の重なるものは、鐵道敷設、又は鐵道借款、船舶業、鑛山採掘事業、森林伐採事業、並に各都市の電氣、水道、道路等の事業に關聯するものであるとの事である。又最近に於ては、米國はアラスカに無線電信局を設置し、ウォッシトン及びモスコー間を連絡する遠距離無線電信を開通することをさへ計畫して居ると傳へられて居る。

右は最近の情報に據つて記述したものであるが、此內どこまでが事實であるかは、遽かに確知することが出來ないにしても、兎も角米國がその對露政策上に於て收め得たる利權の如何に莫大のものであるかは、容易に窺知することが出來るのである。

米國の收め得た所の如き大成功は、第一には同國民と新露西亞國民との間の精神的共鳴に因るものであつて、第二にその報道機關の科學的精確を有することに負ふものでもあらうが、第三にはその當局者が比較的政治上の傳統的偏見に囚はれざるがために、新局面の轉換に對する觀測及び判斷を誤らなかつたことに基くことが極めて多いものであると思ふ。而して報道機關の不精確と、當局者の偏見及びその結果としての判斷の誤謬とは、我國の外交の上に於ける最大病弊の全部でなくとも、その重要部分を構成して居るものであることは、殊に之に關聯して注意して置く必要がある。

米國政府が常に實業家や學者などを外交當局者に任命することは、我國の舞踏第一主義の「専門外交家」の嘲笑の種となつて居た所であつた。筆者も自分の事を白狀すれば、此點に關する米國政府の遣り口を嘲笑しないまでも、それを不思議がつて居た一人であつた。筆者は曾て獨逸留學中、ある機會にミュンヘン市に於て、プリンストン大學の數學教授ファイン博士に遭つたことがあるが、丁度その時は、此篤學の好紳士に對してウイルソン大統領から駐獨米大使になる樣に勸誘して來て居たと聞かされて、一驚を喫したことすらある。當時ファイン博士は此申込を拒絕したので、その

任命はジェラード氏の頭上に落ちた。その後筆者は、同じくプリンストン大學の教授なるヴァン・ダイク博士といふ有名なる宗教家、文學者、兼美術批評者が、和蘭公使（或は記憶し違へて居るかも知れぬ）かに任命せられたことを聞いた時、これはこれはと思つたこともある。けれども其後歐羅巴各地を巡歷して、我國の多くの外交官が、無能な癖に無暗に傲岸であつて、駐在國の言語での會話は覺束ないながら、そのエチケットだけには通じて居るかも知れないが、孰れにしても邦人と外人との不滿若しくは非難を共に完全に併せ得て居ることの多い實況を目擊するに及んで、始めて所謂專門的に訓練せられたる外交家の價値如何を疑ふ樣になつた。その後歸朝以來、或る宴席に列し、霞ヶ關の一官人が、一時ウィルソン大統領の下に於て國務卿の地位を占めて居たブライアン氏の素人外交の脫線振りを鼻うごめかしながら嘲罵して居るのを聞いた時には、一種の反感にさへ襲はれた。そして此頃になつては最早素人外交及び玄人外交に關する幻想（イルージョン）が全然消失し盡くしたことを覺えるのである。

時代は變つた。そして自然陶汰の理法は、個人の上にも、社會の上にも、國家の上にも、曾て見ざりし程

の强度と速度とを以て、其威力を逞しうしつつあるのだ。（七―四―二二、大阪にて。）



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醫學士 森繁吉先生
ドクトル 竹中繁次郎先生
醫學士 佐藤得齋先生
醫學士 高橋政秀先生
ドクトル 近江湖雄三先生
醫學士 杉村可宗先生
醫學士 井上溫先生
保健主事 伊藤尚賢先生
共編

通俗 疾病大字典

定價六圓

通俗醫學の書に乏しからずと雖も苟も疾病療法に關する一切の最新知識を網羅する一大辭典に至りては實に本書を以て嚆矢とす、古來四百四病の稱あれども本書に至りては採錄する所實に千有餘病、總紙數一千有餘頁、各疾病每に先づ原因を示し次ぎに症候を說き最後に最新最善の療法を公開す、而も各科悉く專門大醫の執筆に成り懇切周到にして平易簡潔、本書一部を備ふるは卽ち各自の家庭に大醫を常聘するに均し、本書一度出でて深遠玄妙なる醫術の奧秘は天下萬人の前に公開せられたり、如何なる素人も本書によりて安全なる自己の醫師たるを得べし。

育兒書類

◉瀨川醫學博士述 **病兒及虛弱兒の養育法** 定價金八十錢 郵稅八錢

◉瀨川醫學博士述 增補訂正 **實驗上の育兒** 上卷定價金六十錢 下卷定價金七十五錢 郵稅各八錢

◉豐福醫學博士述 **小兒傳染病の話** 上卷定價金十五錢 下卷定價金十五錢 郵稅各貳錢

◉唐澤醫學博士述 **小兒病の話** 定價金十五錢 郵稅金貳錢

◉衞生新報社編纂 **兒童健康增進法の話** 定價金十五錢 郵稅金貳錢

蘆花 德富健次郎著

みゝずのたはこと

（七十四版） 縮刷定價一圓 郵稅十二錢

批評抄

（東京朝日）現代の最もポピュラーなる文筆を代表する唯一の人の作として讀者を喜ばしむるに足る。（時事）どの頁を開きても面白く何れの章を繙きても倦む事を知らざるは本書の特色なり。（國民）一讀正に神往き魂飛ぶの感なくばあらず。（東京日々）自然に宿る人生の力、人生に働く自然の力が氏が獨特の象徵に富む觀察と集注力ある筆致とに示し、興味趣味併せて著者の人に交感せしむ。（萬朝）飄逸として生活に忙殺せらるゝ都人寒村僻地の農民の爲に向上の伴侶たる可し。（讀賣）筆つきは更に地味な重々しさを加へて居る。（中央）一度著者の筆に載る時は路傍一縷の草、一握の土悉く無韻の詩となつて無限の敎訓と眞理を傳ふ。（二六）作家の筆は年と共に惑はざる境に達してゐる。（東京每日）淸新の文字、純潔の生活讀者を魅了せざれば已まざらむとす。

永井荷風新作

小說 腕くらべ

定價一圓廿錢 郵稅八錢

文章の流麗は西鶴紅葉と拮抗すべく着想の優美はレニエーを思はしめ描寫の赤裸々はモオパッサンに比すべきもの此荷風先生の腕くらべ藝者の表裏寫し得て餘す無し。

內外文豪美辭名句叢書

- 夏目漱石美辭名句集
- 尾崎紅葉美辭名句集
- 高山樗牛美辭名句集
- 三宅雪嶺美辭名句集
- 德富蘇峰美辭名句集
- 森鷗外美辭名句集
- トルストイ美辭名句集
- ニイチエ美辭名句集
- ゲエテ美辭名句集
- イブセン美辭名句集
- ツルゲネーフ美辭名句集
- ダスタエフスキー美辭名句集
- 樋口一葉美辭名句集
- 曲亭馬琴美辭名句集
- 德富蘆花美辭名句集
- 近松巢林子美辭名句集
- 國木田獨歩美辭名句集
- 幸田露伴美辭名句集
- 大町桂月美辭名句集
- 坪內逍遙美辭名句集

全廿冊 定價各冊十八錢 郵稅各冊二錢

發賣元 東京市銀座通（新橋際） 振替東京二〇〇〇番 **新橋堂** （電話新橋一九九一）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

内藤鳴雪先生
高濱虚子先生
河東碧梧桐先生
佐々醒雪先生
和田曼子先生
池内如翠先生
野上臼川先生
山崎樂堂先生
坂元雪鳥先生
外數氏
共述

謠と能のかげぐち

中判洋裝一冊
四百六十八頁
正價金壹圓
送料金八錢

謠曲を會得する爲に

謠曲の眞精神を知るは謠曲上達の第一義也、而も眞に是を知るは能役者又謠の師匠に非ずして、眞に是を愛する識者なり。

能樂を理解する爲に

能役者は其演者にして理解者に非ず、愛能家の修養として傾聽すべきは能樂識者の言也、各曲につき具體的の說明を聞け！

文學を享樂する爲に

能樂謠曲の藝術的價値は如何、是を感受し享樂すべき道は如何俳人歌人文學者能樂批評家等により微細に語られたるを讀め。

日本の藝術の爲に

時に抱腹的の滑稽あり、時に嚴肅襟を正す底の痛論あり、すべて是れ日本の眞の藝術の爲に、深甚なる同情と興味とに依る。

趣味の向上の爲に

本書は謠上達の爲に、能の見巧者となる爲に、將又一切の日本藝術を了解して、高き趣味の人となる爲に作られたるもの也。

發行所 東京日本橋區鐵砲町六番 振替東京一五〇五六番 (電話神田八四五番) 磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

（信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す）



序幕

第一場　葛西ヶ谷北條家別邸中門前

時は貞應三年八月初旬、處は鎌倉葛西ヶ谷附近、屏風山の麓の、北條家の別邸である。此邸は貞應二年の秋――丁度彼の承久の大亂の鎮まつた翌年――の新築で、大倉郷の上邸とは、滑川一筋を隔てゝ、さしわたし僅かに一町餘り、奥庭つゞきで自由に往來が出來るやうになつてゐる。

此別邸の奥庭には、ゆたかに小富士山や屏風山の裾が取入れてあるので、其一部はさながらの深山幽谷であつて、そこには主人公の好みに成つた和唐折衷の、質素な座禪堂などがある。

主人公の北條右京の權の太夫義時は、ことしはもう六十二歳である。彼れは、去る貞應二年の夏、重い傷寒を病んで以來、それはやがて治つたが、病後の衰弱が甚しく、とかく健康が勝れないので、侍醫の行蓮法師の勸によつて、修禪をはじめ、專ら此別邸に住み、一時は大分恢復の體であつたが、昨年の秋以來、またわるくなり、兎角褥に親みがちなので、勿論出仕などはえせず、庭内の漫歩さへも極めてたまさかで、起きたり臥たりといふ日が多かつた。

先妻の「呉羽の方」と呼んだのは、十九年前に沒した。現在の夫人は、彼の承久の亂のはじめに京都の守護職を勤めてゐて、宮方の不意討に遭つて、勇ましい戰死を遂げた故伊賀の判官光季の妹で、名は榮子、「伊賀の方」と呼ばれてゐた。其腹に出來た長女は一條宰相の中將藤原の實雅に嫁し、次の男子は義時の第五男で、三浦駿河守義村を烏帽子親として、四郎政村と呼ばれ、ことしはまだ十六歳で、やつと元服したばかりであつた。

義時が、靜養の爲に、別邸に移つてからも、伊賀の方は上邸に留まつてゐたから、義時が朝夕の看護は、主として二老女と一少年の手に委ねられてゐた。老女の一人は、義時が江間の小四郎時代からの附人、故亘理の平六兵衛尉の後家で、ことしは七十五歳、「亘理の婆」といふのが其通り名であつた。又、一人は、先妻呉羽の方の姪で、齡は四十五六、故岳島右近の妻であつたが、これもとうに――姉の在世中に――夫に死別れ、それ以來、「右近」といふ通り名で、北條家の侍女頭を勤めて、現在に及んでゐるので、二人とも一族間には――奥方

の關係者以外に對しては——中々威權が有り、殊に別邸一切の事は、此二人が切盛りしてゐた。

一少年といふのは、名を深見の小三郎といふまだ十八歳の侍童あがりの美少年で、十三四の時分から主人公の傍去らずである。これは、つい四年前に頓死したまでは、「執權職の執權」とさへ唱はれて威を振つてゐた義時が無二の腹心、深見の三郎二郎致興の伜である。父三郎二郎は、其頓死後に、種々の罪跡が俄に露顯し、領地は悉く沒收せられ、遺族までも嚴罰を蒙つたが、ひとり小三郎だけは、特別の沙汰で赦され、今も尙仕へてゐたのである。十八歳ではあるが、まだ元服は濟まさないでゐた。

當時、義時の長男、武藏守泰時(四十一歳)は、京都守護の爲に、彼地に赴任してをり、義時の姉の、例の政子の尼御臺は、ことしはもう六十八歳であつたが、尙矍鑠たるもので、年少の將軍藤原の賴經の後見をして、隱然鎌倉幕府の政柄を握つてゐるとも見えてゐた。

そのころ、北條一家の外で、重きを置かれてゐた故老はといふと、第一に大江の廣元入道覺阿、次は三浦駿河守義村などであつたが、伊賀の方との關係上、一部の瞻望の的となつてゐたのは、其兄の伊賀の式部の丞光宗と其婿の宰相中將藤原の實雅であつた。

以上は、此序幕第一場當時の歷史的背景の概略である。

ところが、貞應三年八月七日の午後四時頃の事である。主人公義時は、此十日ばかりは、とかく病褥に親しんでゐたのであつたが、其日は聊か快いので、奥庭の座禪堂あたりまで漫歩するといひ出し、老女らの止めるのも聽かず、庭内へ出たところが、病ひが俄に發作して

卒倒し、暫くは正氣に戻らなかつたので、邸内は上を下への騒ぎ。折から奥方伊賀の方も、此十餘日餘り、持病の爲に、床に就いてをり、長子の泰時は滯京中で不在なので、一段の狼狽。が、幸ひにして侍醫の行蓮法師が程なく馳け附けて手當に及んだので、發作はやがて難なく收まつた。けれども、一時は此珍事を傳へ聞いて、八方より馳せ附ける夥しい見舞客の爲に、別邸の門前は市をなしたが、戌の刻(午後八時)も過ぎて、七日の月がもう既に傾く頃となつては、おひおひに引取り、今は、伊賀の方の實兄、式部の丞光宗、同實子四郎政村、同女婿、宰相中將藤原の實雅、侍醫の行蓮法師などが居殘つてゐるのみである。

中央よりはやゝ下手寄に中門があつて、其上、下は築地。中門内の上手には邸の一部の屋根が見え、それから下手へかけては庭つゞきの間近の、松杉の繁茂した山々が重疊して見えてゐる。上手の前寄には、左右へ大きな根を張つた三抱へもあらうといふ樟の大きな幹だけが見えてをり、それから上手の奥へかけては大小の雜木の立木。それから、中門のずつと下手の奥には、袖塀を隔てゝ、侍ひ所の建物が見える。其前の方にも大小の立木。

中門の少し上手に――築地ぎはに――椎か何かの立木の幹が二本。其二本の立木に馬が二頭繋いである。一頭は實雅の乘馬で、一頭は光宗のである。それから樟の根がたには、二人の從者が凭れかゝつて熟睡してゐる。一人は實雅の從者の甲で、一人は光宗の從者、川西の小丹次(二十五六)である。

中央には、其他の伴待の從者、乙、丙、丁の三人が下手へ向いて不規則に立並

び、當別邸の老僕、加持の藤内（六十五六）と小童の砂王（十二三）とが、ちようど中門の前の處に、彼等と向ひあつて立つてゐる。藤内は箒を、砂王は馬柄杓を入れた手桶を提げてゐる。

藤内　はい／＼。いかにも、もはや戌の刻は過ぎましてござるが、御主人がたのお立までには、まだ中々お手間が取れませうず程に、いづれも嘸御空腹でござらう。あの侍ひ所に附いて右へお廻りなされると、お臺盤所の直こなたに大溜りがござる。あれにて夕餐をおしたゝめなされ。これはお老女がたのお心入れでござる。……さア／＼、ござりませ、ござりませ。

乙　それは千萬かたじけなうござる。……（丙丁を見返り）では、いづれも、お振舞にあづかりませうか？

丙　いかにも、さやういたさう。……（丁、乙に）さ、ござれ／＼。

ト甲、乙、丙揃つて下手へ入る。

藤　（三人を見送りて）まづ、これで、人間の始末だけは附いた。さて、これからが（ト厩に向つて）おぬしたちだ。なんぼ畜生でも、明るいうちから食はず飲まずの立ちん坊ぢやア可哀さうだ。……砂王どん、こいつらをも早うお厩へ伴れて行つて、何か振舞つてやらつしやい。

トこれにて砂王、繋いである一疋の馬の端綱を解き、それを引立てつゝ、手桶を

片手に提げて、上手へ入る。其間に藤内は他の一疋のを解きながら、四下を見廻して

・どうだ！ この、汚い物を取散らしたことは！ 何にしろ、俄の騒ぎで、入りかはり立ちかはり、お大名衆が駈け附けさつしやつたので、御門前も、御門内も、まるで軍場のやうだつたが、やつと是れでかたづいた。……ちよつくら此邊だけでも掃いておかうか？

と箒を取り直す。此内、上手の奥にて、砂王の聲にて

唄「方も方にさふらふよ。
時も時にさふらふよ。
　たんだ一字ちがうた！
まアさとまアさ、まアさとまアさ。
まざ〳〵ッと物の怪！
　たんだ一字ちがうた！
物の怪や物の怪ッ！
　たんだ一字ちがうた！

と歌ふ聲が聞える。此唄の節は、さつと狂言小唄のそれに似てゐる。中にも囃子言葉の「たんだ一字ちがうた！」の柏子は、狂言の「でん〳〵むゥしむし！」の

藤　それである。（忌々しげに）えゝ、また始めやがつた！（ト上手の奥に向つて）これ〳〵！ その唄は止めだ、止めだ！

ト このうち砂王、空手で上手から戻つて來て、ふつと樟の根がたに眠つてゐる二人を見附ける。

砂　やア！ まだ爰に二人だけ殘つてゐらア、お家來衆が！……（ト傍へ佇つて見て）あゝ、よく眠込んでゐらア！

ト これにて藤内も目を附け

藤　お、いかさま！……起さつしやいよ。

ト 砂王ずつと近寄つて呼ぶ。

砂　もし〳〵！ もし〳〵！……（ト一寸ゆすぶつて見て）中々起きないや。

藤　ぢや、よし〳〵。……ぬしは、此馬をば引張つてゆかつしやい。

ト 馬を渡す。砂王それを牽いて、又上手へ入る。藤内は眠てゐる二人の傍へ往きゆすぶつて

おい〳〵！……これさ〳〵！

ト これにて小丹次と甲と一しよに目を覺まし、共に大欠伸をする。

小丹　あゝ！ ついぐつすりとやつたと見える。あゝ、ねぶたい〳〵！

甲　（改めて欠伸しながら）あゝ〳〵！ わしも同じくでござります。何にせい、昨夜の今夜でご

ざりますよつてに。

　　と藤内二人の皃を見て

藤　おゝ、だれかと思つたら、中將さまの御家來衆と甥の小丹次か？　若いだけに宵まどひだなう。あはゝゝゝ！

　　ト小丹次は目をこすりながら

小丹　だつて、叔父貴、けふで三晩ぶッつゞきの夜深しのお伴だ。ゆうべなんかは夜が明けッちまつた。

藤　何？　三晩ぶッつゞきの夜深しだ？　それぢやア眠たいのも道理だ。あはゝゝゝ！　おい！　もうとうに戌を過ぎたぞ。嘸腹が空つたらう。さ、早うお溜りへ往つて、お振舞にありつかつしやい。

甲　それははや、かたじけなうござります….（ト正面を見て）はてなア！　お乗馬は何處へ往たか？

藤　なアに！　畜生だつて可哀さうだからなう、今あつちへ引張つてつて、飼柴を振舞つてるところだ。

甲　いやも、それはかさね〴〵かたじけなうござります….（ト小丹次を見返り）それでは一しよにお振舞にあづかりましよかいな？

小丹　いや、どうか、おれに介意はないで。おれは昨夜で懲りたから、けふは十分詰込んで來た。まだ何も欲しかアない。

甲　さよか？　では、わしは御厄介になつて來ませう。

ト甲は下手へ入る。此間藤內は、上下を箒で掃いてゐる。小丹次は又一つ欠伸をしながら

小丹　叔父貴、今夜はほんたうに寢耳に水の大騷ぎだつたなう。それでもまア、思つたよりア御輕くッて濟んで、ようござつたなう。

藤　うん。おれもなう（ト尙掃きながら）一時は如何なることかと氣を揉んだが、御典藥の行蓮どのが、早速に駈け附けてござつたので、お手當がよう屆いて、まづ大事にもならなんだが、何分一昨年の御大病以來、よかつたり、わるかつたり、二年ごしのお煩ひだ。お齢も既う六十二だ。御自分ぢや既う大概癒つた氣でござらつしやるさうなが、心が弱り切つてござるといふから心配だ。

小丹　それに、あの、奥方さまの御病氣も、此二三日は滅切おわるいと見えて、俺のとこの大將や宰相さまは、きのふも一昨日も、宵からお上邸へ詰ッ切だ。昨夜なんざア夜明しだ。

藤　はてな！　（ト箒を止めて）此間うち、大分御不加減だとは聞いてはゐたが、それほどだとは知らなんだがなう。……（ト頭を一つ二つ振つて）あゝ、どうも少べい善くないことが續き過ぎる。（ト獨り言のやうに言つて）それに附けても氣にかゝるのは、あの、子供らの歌やアがる唄だ。

小丹　え？　唄？　あの、「まざ〳〵ッと物の怪!!　たんだ一字ちがうた！」といふ唄かい？

藤　さうよ。（ト掃き殘しを掃き寄せながら）何となく氣味のわるい唄だ。さうでなくつても、老公さまの今度の妙なお煩ひは、禁廷さまをお三方までも流し物にさつしやつた罰だの、祟りだのと、世間で言ひ觸らしてゐる處だからなう。

小丹　さう言やア、老公さまは、（ト一寸聲をひそめて）随分若い時から、沒義道な事をなすつた人だといふから、何かの報いかも知れないや。とにかく妙なお煩ひだなう。あんな偉い、膽ッ玉の据わつたお人が、今ぢやア半時とおちついては能う眠らつしやらんばかりでなく、怖ろしく邪推深くならつしやつて、夜は、あの二人の御老女と小三郎どのの外は、だアれもお傍へは寄せさつしやらんと言ふぢやアないか？

　ト藤内は、それには答へず、少し間をおいて

藤　とにかく、氣むづかしくならつしやつたには相違ない。何にしろ、困つたもんだ。

　ト言ひ〳〵掃きじまふ。

小丹　それに、あの、御別居以來、奥方とのお間柄も、一段と不味いらしいなう。一町半とは隔たつちや居ないお別第だのに、奥方がお見舞なされるのア、一月に一度か二度ぐらゐだと言ふぢやアないか？

藤　さア、（ト箒の根がたへ、小丹次と並んで、腰をおろしながら）大きな聲ぢやア言はれんが、つい半月ばかり前に、久しぶりで奥方がござつた時にも、何だかいざこざがあつたやうだし……（トいひかけて）あゝ！　あの奥のお庭に、お座禪堂が出來た當座は、大分お加減も御機嫌もよかつたがなア！……

ト獨り言のやうに言ふ。

小丹　若しこゝで、老公さまに萬一の事でもあつたら、跡は如何なるだらう？

藤　さア、それが心配だ。第一、執權職のお跡目からが、あの武藏守泰時さまと、定つてゐるやうでもあれば、ゐぬやうでもあるからなう。

小丹　なるほど。

藤　ところで、その泰時さまと奥方の伊賀の方さまとはなさぬ仲だ。

小丹　なるほど。

藤　だから、泰時さまの世になりやア、御當人はもとより、實のお子の、あの四郎政村さまも、お婿の宰相實雅さまも、おのしのとこの大將も、おのづと今ほどにア幅の利かないことになるからなう。

小丹　なるほど。

藤　ゆうべも一昨日も（トいひかけて一寸考へ）お三人で夜深しの相談といふなア、事によると……

トいひかけたが、急に口を噤む。

小丹　え？

藤　いや、考へて見りやア、お跡目の事や何やかや、氣が揉めてならない筈だ。言はゞ、あの牧の方さまと、同じやうな廻り合せだ。

小丹　牧の方さまといふのは、御先代時政公の、二度目の奥方のことだらう。たしか、謀反

藤　か何かたくらんで、それが露れて、自害をさつしやつた人だらう？　その方だ。（ト昔を憶ふやうに）あの時の一味は、お婿の平賀右衞門の佐朝雅さま。實のお子の名が政範さま。其時分、相模守さまといつたのが、なさぬ仲の今の老公さま。……（トいつて、口の内で）方も方、時も時。まさとまさ。全くたつた一字ちがひだ！

小丹　え？

ト此途端、向う（花道）より醫師紀河の矩秀（四十歳位）、旅裝束にて、急がしげに出で來り、すぐに中門へ入らうとして、忽ち藤内を見附け、立ちどまる。

矩秀　や！　これは〳〵、藤内どの！　先づ以て御同樣に大慶至極の儀でござりましたなア！・實はなア、われら、藥草採り集めのため、今日箱根路へと志し、既になア、あの大磯近うまで參つたる處、宿元からの早飛脚によつて、老公さま御容體俄に御變動と承つたので吃驚仰天、すぐさま取つて返しましたことでござるが、先づ以て速かなる御回春は、大慶千萬！　さて〳〵、御高運な儀で、いやもう、重疊々々！　御同前に、祝著至極の儀でござつた。……お！　どなたかと存じたら、伊賀さまお館の、小丹次どのか？……お見舞のお侶でござるな。ではまだ御主君には、御當邸に御座なされますな？

小丹　はい。さやうでござる。

矩　いや、それは重疊！　多分さうあらうと存じてまゐつた。上首尾々々々々！　どれ、早速お目にかゝつて參らう。御免下され。

ト矩秀そは〳〵と急いで中門内へ入る。

小丹　相かはらず氣ぜはしない男だ。

藤　肉身の兄弟ちゆものは爭はれんものだ。おぬしは記えちやアゐまいが、あの男の兄は紀河の宗近といつて、よう似たあわて者の醫者であつたが、慾をかはいて、牧の方さまの御謀反に一味して、とう〳〵命を玉なしにしてしまつた。

小丹　さういや、あの男も、この二三年こつち、頻つて俺のとこのや伊賀の方さまに取入るやうだが、つまり御典藥にでもならうといふ慾張からだらう。

藤　いづれ、そんなこつたらう。……（歎息して）あゝ、なぜ人は身の分限を守らんで、又しても〳〵慾をかはくか！……が、下々の者が慾で身を誤るのも道理がい。上の上の禁廷さまさへ——じつとしてござれア何の事もないのに——一昨年のあの御謀叛。その結局が、あゝしたお氣の毒な、勿體もないお身の果だ。唐にも天竺にも例のない、空おそろしい事だ！　禁廷さまを、しかもお三方まで島流し！……あゝ、どうかこれッきりで、何事もなければよいが！……（トいつて、半分口のうちで）まさとまさ。時も時。……

小丹　……全くたつた一字ちがひだ！

小丹　え！（ト藤内の顏を見返つて）どう？　何が？

ト此途端、上手の奥にて、又砂王の聲にて

唄「まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ〳〵ッと物の怪！
　たんだ一字ちがうた！
物の怪や物の怪ッ！
　たんだ一字ちがうた！

藤　えゝ、いま〳〵しい奴だ！　又あの唄を歌やァがる。……（ト上手に向ひて）これ〳〵！
止め、止め！　その唄はやめだ〳〵！

ト大きな聲にて叫ぶ。唄止む。藤内は溜息をして

あゝ、氣にかゝることだ！

ト此うち上手より砂王、馬柄杓で空の手桶を叩き、拍子を取りつゝ、又歌ひつゝ出で來る。

砂　唄「方も方にさふらふよ。
時も時にさふらふよ。
　たんだ一字ちがうた！
まアさとまアさ、まアさとまアさ。
まざ〳〵ッと物の怪！
たんだ一字ちがが…………

前　えゝ、まだ歌やアがるか？　その唄は止めだちふに！　堪忍してくんな！

　ト飛びかゝつて砂王の襟上を捉へてこづく。

砂　(泣面になりて)あゝ、痛い／＼！　堪忍してくんな！

小丹　これさ、叔父貴！　そんな手荒なことを。

　ト小丹次中へ入り、よろしく止める。藤内とゞ砂王を突き放す。砂王つんのめつて膝を突き、膝頭をすりむいたらしく、ワーッと泣き出す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第二場　同別邸内、奥の一室

正面の上手寄五間の間の中央一間は妻戸。其上下二間宛は壁。折り曲つて上手一帯は蔀格子を下して在り、又、下手へ折り曲つたる奥寄の二間程は正面と同様の壁、前寄の二間程は帳（壁代）を垂れ、人物は屢ゝそれを褰げて往來する。其帳の下手は廊下口。正面の二間程は蔀格子を下し、ずつと下手の見切は妻戸。こゝからも折々人物が出入する。

爰に、正面奥の妻戸前に、深見小三郎（十八歳）まだ元服せざる童形の拵へにて、妻戸の掩ひになるやうな態度にて此方向きに端坐し、今奥へ行かうとしてゐる紀

河の矩秀を留めてゐる。矩秀は、やゝ斜に後ろ向きに立身。二人とも既う大分激昂してゐる體である。

時刻は前の場のすぐ次。よき處に燈臺一脚。他には何等の調度も見えない。

矩　はて、お退きなさい。お通しなさい。光宗さまに是非ともお目にかゝらねばならん急用がござるのだ。お通しなされ！

小三　いゝや、老公さま御容體お大切の折柄でござります。お取次を承りをる手前に、只一應の御挨拶もなく、御病間へ推參めさるは不躾でござる。お控へなされ！

矩　はて、餘人ならば存ぜんことだが、自分は奥方伊賀の方さまのお引立を蒙りをるお抱への醫師でござる。御容體伺ひの爲には、隨分御病間へも推參いたす。はて、お通しなされと申すに！

小三　いゝや、通されません。其伊賀の御方さへも、御遠慮遊ばされて、お取次なしには、御病間へはお通りなされません。殊に、只今、お傍には、天下無双の名醫、御典藥の行蓮どのが附添ひをられまする。かた〳〵以てお手前などが推參めさるには及びません。御無用でござる！

矩　何だと？……（ト開き直って）これは異なことを申される。……成程、行蓮どのは天下無双の名醫でもござらう。が、それを何の爲に持出すのだ？……ちよこ才な！

小三　（くわっとなって）ちよこ才とは！　何がちよこ才でござる？

矩　はて、それがちよこ才だ。……これ、なんぼ御寵愛を蒙つて、大寺の見衆並に幅が利

小三　けばとて、あんまり増長しめさると、父御三郎二郎どの同様、はじめの榮華は末の零落、みじめな身の果となりますぞよ。

矩　(眞蒼になつて)やア！　大寺の兒衆並に御寵愛を蒙つてとは、聞棄てにくい。何が兒衆並でござる？

はて、兒衆並でなからうか？　お手前ことし幾歳だ？　もう十八よりやア少くはあるまい。それに何だ？　元服もせず。……えゝ！　その生白い面附を見るたびに胸氣がわるくなる。奥方とのお仲たがひも、つまりは、おぬしらから起つたことだ。……ちよこ才な！

ト　いひすてゝ、つッと通りぬけて、奥へ行かうとする。途端に入れ代つて、小三郎は矩秀の袖を控へる。

小三　いゝや、お待ちなさい！……奥方とのお仲たがひも、手前らから起つたこととゝは？　さ、其譯を承りませう。

ト　涙聲になつて、せき込んで、身をふるはせてゐる。

矩　えゝ！　おはなしなさい。

小三　其譯を承らんうちは離しません。

矩　しつこい！　何のかのと、御用がおくれる。離さつせい。……えゝ、離さつせいといふに！

ト　立廻りになる。とゝ、矩秀は手荒く小三郎を突離し、すぐに妻戸を開けて、奥

へ行かうとする。

途端に、義時の侍醫、行蓮法師(五十七八)小坊主(十二三)一人を從へ、老女右近(四十五六)垂髪、小袿、に送られて出る、出逢ひがしら。

行蓮　ほい！　これは紀河どのか！

矩秀　や！……これは行蓮どの！　これは〳〵、粗忽千萬！　御免下され。

ト矩秀へ追ひ縋らうとした小三郎を押し隔てつゝ

右近　(しづかに)小三郎どの……此體は？

ト小三郎が何か言はうとするうちに

矩秀　いや、なに、これは物でござる。つい、その、いさゝか取急ぎましたので……いや、心せきにござれば、眞平御免下され。

ト矩秀はそこ〳〵に會釋して奥へ入る。行蓮と右近とは、それを見送つて、不審の思入。右近はやがて小三郎を見返り

右近　小三郎どの、御典薬どのへ、いつものお茶を。

トわざと席をはづさせる。

小三　心得ました。

ト下手へ入る。右近會釋して行蓮を上座に着かせ

右　改めて伺ひまするが、老公さまの御容體はいかゞにわたらせられまする？　もはや甚うお氣づかひ申し上ぐる程でもござりますまいか？

行　されば、何分にも、近ごろ不思議のお病痾でござるゆゑ、かんまへて御油斷は相成りませぬが、あゝした御卒倒、御氣絶は、御疲勞の餘りとて、間〻あること、さしあたつての處、強ち御懸念にも及びますまい。したが、先頭も聊か申しおいたる通り、病邪およそ六種のうち、とりわけ座禪不調、鬼病、業病の此三つは、醫師の力、藥餌の力ばかりでは覺束なうござる。座禪の不調は專ら座禪によつて治すべく、鬼病は神咒法力を恃むべく、さて又業病には、何よりも先づ奇特の御懺悔こそ肝要でござる。われら、一昨年以來、頻つて禪機の御修行をお勸め申したは、畢竟そこを存じてでござつた。お加持、お祈禱の儀は、もとより御如在のあらう筈なし。只心がゝりは第三種のお業病でござる。前世に餘んの善業あれば、庸醫も能く重患を治し、前世に餘んの惡業あれば、如何なる靈藥の力を以ても、かりそめの少病だに、之を治すること甚だ難しうござる。

右　では御當症は、あのお業病ぢやといふお按撿でござりますよな？

行　されば、かの不思議なお譫語といひ、いよ〳〵募らせらるゝ御不眠といひ……

　　ト此時、小三郎天目に抹茶を盛り、臺に載せ、捧げて出る。

小三　お茶をめしあがられませう。

行　これはかたじけなうござる。……（ト受取りて半分ほど飲み）時に、過日も申しおいたれば、よもや御病人にお茶を參らせらるゝやうの儀はござるまいな？

小三　はい。其後は、いかやうに仰せられましても、決してさし上げませぬ。

行　(うなづきつゝ飲み了りて)まことに、此物は、命を養ふの仙藥、齢を延ぶるの妙術、山谷これを生ずれば、其地神靈たり、人倫これを採れば、其人長命はなりとさへござれども、御不眠などの爲には大の敵藥。かんまへて御無用でござるぞ。

小三　其お言葉に附きまして、甚だ卒爾ながら、手前が聊か承りたい儀がござりますが‥‥

ト言ひさして躊躇する。

行　何事でござるの？

小三　あの、日頃深く酒を嗜みまする者が、茶の毒に中り、頓死いたすなどと申すことがござりますか？

行　(言下に)さやうな儀はふつに存ぜん。既に前將軍家實朝公御不例の折、先師榮西禪師がこれは只御宿醒の餘りと按撿しまゐらせ、淸茶一椀を獻じめされたる處、忽ちに御平癒の先例がござる。すなはち茶は寧ろ酒の毒を解する妙藥。なにゆゑ然樣の儀をたづねめさる？

小三　さア、豫て其儀をば承りをりましたものと相見え、亡父三郎二郎事も、生前、大酒の後には、必ずのやうに茶を眼用いたしをりましたが、ある朝――卽ち臨終の前の日の事でござりましたさうな――例の通り、一椀の茶を啜ると間もなく、身心激しく惱亂いたし、わづらふこと僅た半時ほどで相果てました。全く茶毒の爲す所と、其際紀河の矩秀どのは申されたとやら承りましたが、何とも以て不審に存じまして‥‥

トいひかける。

行　あゝいや、いかな清茶の妙用も、多年累積の激しい酒毒に對してはな。……

ト いひかけたが、俄に思ひ出したといふ風に

おゝ！　すぐさま尼公さま御許へ參上仕るべきお約束であつた。……では、お免下されｏ

ト急に席を起つ。右近も小三郎も席を離れて見送らうとする。

あ、そのまゝく。

トとゞめて、行蓮は、小坊主を從へて、下手へ入る。

小三郎は一旦起ちかけて又坐り、じつと思案に沈んでゐる。

右近は立つたまゝ、思入あつて

右　小三郎どの、これへ。

ト上手へ戻りて、座に着き、四下へこなしあつて

丁度よい折柄ゆゑ——只今の卿の申されたことを聞くに附けて——ちと折入つて知らせておきたいことがござる。……もそつと近う。

ト小三郎膝を進める。右近思入あつて、

これ、卿も、父御致興どのゝ最期をば、定業でないと疑うておぢやの？　いゝや、隱すには及びませぬ。疑ふのは道理千萬！

ト更に膝を進めて

さうして、若し定業でないと定り、下手人が分つたら、父御の敵が討ちたいか？

ト小三郎は、俯向いたまゝ、身を顫はせつゝ默つて泣いてゐる。

おゝ、無念なは道理！　其筈、其筈。で、其下手人に、大抵目星が附いてござるか？

トこれにて小三郎、尙俯向いたまゝ、小聲にて

小三　只、あの、紀何の矩秀の擧動を、如何にも不審なと存じまするばかり。……

トいひさして、涙を拭ふ。

右　はて、あの男なんぞは木偶も同然。どこにどんな木偶つかひが……

トいひさして「あゝ、ついうつかり言つた」といふ思入あつて、口を噤む。小三郎よろしく思入。

右近は歎息して

あゝあ！　一時は老公さまの御名代とまで時めき、懷ろ刀とも噂され、世人に怖れられなされた、あの、三郎二郎どのゝ嫡男と生れなされた卿が、ほんにまア夢のやうな落ちぶれやう！　父御の頓死にかてゝ加へて、思ひがけないお咎め。一族を擧り、殘らずお處刑。たつた一人殘つた卿だけが、不思議の幸運。老公さまの御寵愛受け、けふまでは人々にも羨まれてござつたが、こよひのやうな御重體が續くとすると、以後は用心せにやなりますまいぞよ。

トしみ〳〵と言ふ。此間も小三郎は、俯向いて泣いてゐたが、此時顏を擧げて

小　と、おつしやるわけは？

右　（又あたりへこなしあつて）卿は、父御三郎二郎どのは、なにゆゑ・お咎めをお受けなされた

か、其仔細をお知りやつてゞござるか？

　　　　ト小三郎漸く涙を收めて

小三　くはしい事は存じませぬが、攝津の國の地頭代とかを承りました前後から、次第に私曲の振舞募り、お館を笠に被て、暴威を振ひ、下の者を虐げ、身分不相應の驕りに長じ、剰へ、長江、倉橋二ヶ庄の事について、後鳥羽の院さまの御寵姫龜菊とか申す白拍子をさんざんに侮り辱め、それが原にて本院さまの御逆鱗甚しく、遂に去る承久二年の、あの御大亂にも及びましたとやら。それやこれや、重ね〲の、公け私しの曲事が、お咎めの本とやうに承りをりまする。

　　　　ト語り了りて、又涙に暮れる。

右　いや〲。まだ其外に謂れがある。

　　　　トこれにて小三郎きつと顏を擧げる。右近じつと其顏をながめて

こなたの心根がいぢらしい。打明けて話しませう。……其頃、京都の守護職であつた伊賀の左衛門の尉光季どの、また其弟御の式部の丞光宗どのと卿の父御とは、久しい以前から、犬と猿との仲らひ。随つて意趣意恨もかさね〲。兄御最負の、あの伊賀の御方が、何かにつけて、老公さまへ、父御をば讒訴三昧。畢竟は、御方がお腰入前からの御功臣であるだけに、伊賀家一族の爲には、目の上の瘤。それに、先の奥方吳羽の前——わらはの伯母——の氣に入りであつたといふのも彼の人達には——わらはも同様——不興の種。なればこそ、まだ何のお咎めもなかつたうちに、父御の、あの

奇怪な死方は、たれが目にも非業の最期――毒殺――としか思はれぬ。のみならず、死後には、思ひがけぬ寝耳に水の御成敗。所領地悉く召上げられ、妻子眷族までも嚴しいお刑罰。それさへあるに、其召上げられた所領地を、そのまゝ殘らず、伊賀家一族へ下されたといふも、不審の至り。……

ト此間、小三郎よろしくこなし。次第に激昂する思入よろしく

小三　では、父致興の御勘氣は、あの伊賀の方御兄妹の……

トせき込んで問ひかける。

右　(上手を見て)あゝ、これ!……

ト此時、上手妻戸口より一條宰相の中將藤原の實雅(二十七八歳)立烏帽子、狩衣、先に、四郎政村(十六歳)烏帽子直垂、つゞき、小童蜂王(十三四歳)紙燭を持ち、案内して出る。

右近、小三郎はこれを見て席を退りて迎へる。右近うや／＼しく手を突きて

これは／＼! もはや御退出でござりまするか?

ト蜂王は小三郎に向ひて

蜂王　小三郎どの、只今老公さまお目ざめにて、其許をお召にござりまする。

小三　はッ。心得申した。……(ト人々に向ひ)御免下されませう。

ト小三郎は蜂王と共に會釋して、上手の妻戸口へ入る。最前の天目は、臺のまゝ、一隅に殘してあること。

右　（實雅に向ひて）其後の御容體は、いかゞにいらせられましたか？

實雅　されば、お目ざめ後の御氣色いかゞにやと、ひそかにお案じ申してをつたが、一向に變はらせられた御模樣もない。此上は、ひたすら御疲勞の募らせられぬやう、心して御介抱めさるゝが肝要でござらうぞ。

政村　あの亘理の婆は、まだ御所から退つてはまゐらんか？

右　はい。まだでござりますが、もうやがて罷り歸るでござりませう。嘸かし尼御臺さまにも、早速の御平癒を聞し召しまして、御安心遊ばしたでござりませう。

實　安心と申せば、伊賀の御方にも、折から、お引籠り中の事とて、御自身にてお見舞の出來ぬだけに、ひとしほお心づかひばしなされておはさうず。いざさらば、すぐさま、お本邸へ罷り越して、くはしい御模樣をばお知らせ申すことゝいたさう。……政村どの、そのもとは？

政　では、それがしも、兄上と御一しよに。

　ト二人起ちかける。此時、右近下手を見て

右　あゝ、もし！　ちやうど、亘理どのが退つて見えられました。

　ト下手より老女亘理（七十五歳）出る。齢には似ず矍鑠としてゐる。

政　おゝ、お婆！　今噂をしてをつた處ぢや。尼御臺さまも、定めし御安堵遊ばしたであらうなう。

　亘理は下手に着席して、よろしく會釋する。

亘理　はい〳〵。殊の外のおよろこびにて、尚此上とも油斷なう、折角御看護申し上げますやうとの御仰せつけにござりました。……つきましては、ちやうどお二方さまお集りの好い折柄――尼公さまの別してのお傳言をば、只今申し上げまする。お聽き下されませう。……(ト聲をひそめて)尼公さま内々の御仰せに、執權夫婦の仲らひ、近來とかく睦じからぬやに聞き及ぶ。別第とはいへ、滑川たゞ一筋を隔て、はづか一町あまりにも足らぬ處に住ひながら、二年ごし病痾に惱む夫を、此中は絶えて看護をだにせぬといふは事實歟？　まことならば、けしからぬ事ぢや。さやうの事より、ともすれば、種々の流言の起る習ひ。汝立歸らば、榮子をはじめ實雅、政村へも篤と此旨を申し傳へて、かんまへて不祥の噂ども立てさせぬやうに心させい。承久の大亂このかた、天下は靜謐なれど、思はゞ、油斷大敵。血族の者内輪にて爭ふときは、忽ち外々の侮りを招くといふ格言がある。北條一家の安危存亡は、取りも直さず、日本全國の安危存亡ぢやといふことを忘るゝな、と此尼が言うたと一同へ申し聞かせい、との、くれ〳〵の御仰せ附けでござりました。

ト此間、實雅と右近とは、頭を垂れて、只默然として聽いてゐる。政村は深く感じたる思入。

政　おゝ！　おつしやりつけの趣き、きつと承つた。ちやうど今、兄上と御一じよに、母上の御許へ參らうと思うてゐた處ぢや。……兄上、では、直に參りませう。

實　(うなづきて)いかさま。さやういたさう。

ト二人席を起つ。

右　では、お見送りを。

ト右近は亘理へこなしあつて、共に起つ。

實　あゝ、それには及ばん。

亘　いえ〳〵、せめてお廊下先まで。

ト二人附いて、四人ともに下手へ入る。暫く空舞臺。天目は尚殘されたまゝになつてゐる。

やがて、上手妻戸口より伊賀の式部の亟光宗（四十五六）、烏帽子直垂、先に、紀河の矩秀、片手に硯箱を捧げ持ちて、うそ〳〵と從いて出る。

光宗　（四下を見て）むゝ！　だれも居らん。……ちやうど幸ひ。その、料紙、硯を。

ト席に着く。矩秀もよろしく上下へこなしあつて、座に着き、硯箱を光宗の傍らへさしおく。光宗はすぐに硯箱を開きて、墨を磨りかけながら

矩秀、おのしはあの容體を如何思ふ？

矩　お脈體を伺ひませんゆゑ、しかとしたことは申しあげかねまするが、お顏色といひ、お息づかひといひ、所謂死相がもう既に現れてをりまする。迚も此末十五日とはお持ちこたへはむづかしからうかと存じまする。

光　（磨つてゐた墨の手元を一寸とゞめて）先がさう見え透いてゐるとすると、早急にやらねばならんかな。……（ト又墨を磨りかけて考へ）おれはこれから本第へ往つて――多分宰相も、もう

參つてゐるであらうから——何かと打合せをしておく積りだが、おのしは此——今ちさに認めるから——一通を、急いで弟の朝行と光重へ屆けてくれ。さうしてそれが濟み次第に……（トいひさして）とはいへ、もう何時だらうの？

矩　まだ亥の刻が、やつと廻つたぐらゐでござりませう。

光　では、それが濟み次第に、おのしも本第の奥方の居間へ來てくれ。まだいろ〳〵賴みたい事があるから。

矩　委細承知仕りました。

ト光宗は筆を執りあげ、二三行書きかけて、又暫く考へ、半分獨り言のやうに、とぎれ〳〵に

あの泰時めは……强ち恐るゝにも足らんが……卒となつて、最も荷厄介なのは、あの尼どのだ。……ことに、手筈のまだ整はんうちに、あの婆さまに出しやばられたが最期、何もかも水の泡どころでなく、輕くッて流し物、重ければ、一同が命の種なし！……といつて、荒療治をした日にやァ、たとひ事は成つても、第一に、身內、外様、諸大名の思はく。……何にしろ、故二位どの以來、源氏三代の動かぬ礎と、此何十年間、築きあげて來た——女に附き物の——あの不思議な人望と勢力とが怖ろしい！

ト半分は矩秀へ、半分は獨り語のやうに言ひ〳〵、時々筆を走らせ、書面を書いてゐる。

此以前、小三郎、奥より戻り來り、すぐに妻戸を開け、つッと入らうとして、急

に身を退り、そつと妻戸を閉め、たゞ細目に少し開け殘して、內の樣子を窺ふ。
之より先、紀河の矩秀は、光宗の獨り語の中頃に、片隅に在る天目に目を附ける。さうして、最初は、何氣なくそれを手に取つて弄つてゐたが、とゞ偶と思ひ附いたといふ風に、膝を進めて、光宗に向ひ、小聲にて

矩　もし！　もし！　式部の丞さま。

光　（尙筆を走らせながら）何だ？

矩　もし！　（ト天目を見せて）これをお用ひになりましては、いかゞにござりませうな？

ト此時、下手より亘理の婆と右近とが連立つて戻り來り、これもすぐに內へ入りかけて、急に身を退り、互ひにこなしあつて、壁代の陰から、窃かに內の樣子を窺ふ。

光宗は、筆を止めて、天目を見て

光　といふのは？

ト矩秀よろしくこなしあつて、小聲で

矩　あの深見めをやりましたのと、同じ配劑が、一ち手輕さうに存ぜられますがなア。

ト光宗思入あつて

光　あの婆アさまをか？

矩　さやうで。

光　どうして飲ませる？

矩　やつぱりお茶に限りませうかな？

トあとは手眞似にて飲む眞似などいろ〳〵。三方、三人、同時に、さま〳〵の思入、こなし。

* * * * * * * * * *

第三場　伊賀の方の居間

上手には、斜に上段の間。これは伊賀の方の寢所。其前一面に簾が垂れてある。正面奥、中央三間の間は壁代、其うしろには總板敷の、廣々とした入側。壁代の上下には柱、上手の柱から寢所までの間一間餘は壁、其壁際には二階厨子。それから少し下手へ離れて古風なる鎧櫃。

壁代の下手の柱から更に下手へ一間餘も壁。それから斜に折り曲げて、一間半程の間も壁。此壁に添うて三段に設置つたる白木の神棚。式の如く新薦を敷き垂れてある。最上段には白幣と明鏡とを安置し、供物、燈明など、いづれも式の如く、据えてある。よき處に、神酒の瓶子二箇、其一には紅色の紙を、其二には藤紫色の紙を末廣に卷き立てゝ、栓の代りに挿してある。

神棚の下手の壁の見切柱からは、更に直角に下手へ折れて一帶に蔀格子の下りた

る次の間。其下手の突當り(見切)は妻戸。
こゝに、上手、上段の間の前に、伊賀の方(四十二三)、垂髪、小袿、假病にて引籠りをる體。假病ではあるが、仔細あつて、つい二三日前まで殆ど斷食ともいふべき難行をつゞけてゐたゆゑ、顏色憔悴して實の病人のやう。髮附などもみだりがはしうなつてゐる。其下手、やゝ奥へさがつて實雅、やゝ前寄のよき處に政村すまひ、談話なかばの體。
時刻は前の場のすぐ後、(午後十一時ごろ)。よき處に燈臺一脚。

政　もう其通り、尼御臺のお耳にさへ入つた程でござりますゆゑ、母上と父上とのお仲たがひの事は、今はもう誰れ一人知らぬ者はござりませぬ。それのみならず、其お仲たがひの原因は、當北條家の跡目相續の事について、父上と母上との御意見が合はぬゆゑぢやなぞと、下々まで、頻つて噂いたしをりますげな。それもこれも、所詮は、母上が父上と御別居なされて、こよひのやうな折にさへ、お見舞もなされませぬゆゑでござります。北條家の安危は、天下の安危ぢや、とおつしやりました尼御臺のお言葉もござりますゆゑ、明日は、どうぞ、曲げても父上をお見舞なされて下されませ。

ト政村思ひ入つて言ふ。少し間を置いて

伊賀　(しづかに)世上の取沙汰や尼御前の申さるゝことなぞを、さう氣にするには及びませぬ。尼御前も、昔は女將軍とまで唱はれなされた男まさりでもあつたのぢやが、取る齡には勝たれぬと見えて、めつきりと目に立つ此二三年このかたの老惚れやう！　畢竟

例の泰時が可愛さの依怙贔負からのお世話燒ぢや。一々取上げるには及びませぬ。……政村、實は、今日までは言ひませなんだが、そなたも既う十六歳、――幸ひ、實雅どのも同席ゆゑ――こよひは、改めて、萬一の時の覺悟をば申し聞けておきまする。よう聽いておきめされ。……尼御前の言葉までもなく、當北條家の盛衰が、取りも直さず、日本全國の治亂盛衰の基ゐでもあればこそ、わしが此二年ごしの心づくし。いかにも、その噂の通り、わしは、あの泰時を跡目といふことが大の不承知でござるのぢや。……こゝをよう合點しておきや。……これが太平無事の世でもあらば、あの泰時のやうな、意地のない、似而非賢人に家國の大事を任せてもおかれようけれど、例の先年の、あの禁廷の御謀叛だけは、幸運と、難なく治まつても、兵馬の頭領たる肝腎の將軍家は、あの通りの木偶人同然。それを操る執權職の父御義時どのまでが、以前とは打つて變つたあの容體。さなきだに、武家にも、領家にも、野心を弓のやうに引き絞つて、隙もあらばと覘うてゐる者の多い折から、今若し再度の御謀叛でも起らうものなら、此鎌倉は直にも滅亡。ほんに、今こそは、當北條家の安危存亡の分れ目でござる。生中に、あの、世に後れ、智慧絕れのした尼御前などの差出口がなく、又あの泰時の仁義立なぞがなくば、三上皇さまをさへ幽謫めまゐらせた當家の威勢を以て、天が下を一みじきに靡かすのも强ちむづかしいことではなけれど、心がゝりは、父御が萬一の曉に、是非とも建直さにやならぬ其新館の造營の最中に、內輪同志の氣込が揃はず、剩へ、肝腎の大黑柱があの腰弱どのなぞであつたならば、どうして、四方內

外から崩れかゝる大津浪のやうな、天下の動亂が防がれませうぞ？　泰時などの眞似をして、似而非仁義立をする時節ではない。父兄に成り代つて、きつとした覺悟をせにやならぬ時でござるぞ。

　トよろしく思入あつて言ふ。政村は始終うつむいたまゝ、じつと默つて聽いてゐる。

實　（政村へ思入あつて）まことに、母上の仰せらるゝ通り、今の世に人の頭たらんとする者は、先づ威が無うては叶ひませぬ。將は大を誅するを以て威となし、小を賞するを以て明となすとござる。されば一人を殺して三軍震るべくば之を殺し、一人を賞して萬人悅ぶべくば之を賞す。殺は大を貴び、賞は小を貴ぶの道理。彼の先年の大亂の砌りなども、老公が先蹤なき英斷を施しめされたればこそ、朞月ならずして天下靜謐。又、故源二位どのゝ如きも、常に、克く忍びがたきをば忍び、克く斷ずべきをば斷ぜられたればこそ、威武忽ちに一天下に光被し、ともかくも、前後三代に亙る榮華をば閲せられた。即ち、公の覇業は、其人德と機運とに因るとは申せ、かたはらまた、克く忍び、克く斷ぜられたが爲でもござる。……政村どの、母上の只今のお言葉は、つまり、此道理をば仰せらるゝのであらう。人を殺すも、人を安んずるが爲ならば可也とは古人の金言。慈悲、仁義、溫順は、いづれも有りがたき德行ではござるが、時と場合とを辨へねば、却つて身を誤り、家國をも誤る基ゐでござるぞ。

　トわざと遠廻しに說諭する。政村は尙俯向いたまゝ、默つてゐる。

伊賀　（政村へ思入あつて）政村、あれを見やれ。（ト正面下手の神棚へこなしあつて）あれなる正八幡大菩薩は、鶴ヶ岡のを移したのぢや、と他人には言うてゐれど、實は故郷佐伯の郷の氏神。そなたの爲には祖父上、伊賀の守朝光どのゝ信仰なされたをば縁起に、二年このかた此居間の裡に勸請しまゐらせて、日夜心願を籠むるには、深い理由のあること。……あの神前の瓶子の紙の、紅ゐは平、藤紫は藤原。いふまでもなく、我家即ち佐伯氏の姓は藤原。此實雅どのも同じ姓。又、北條は平なれば、そなたは紅ゐ。其紅ゐと藤紫の、色濃かに、末長かれ、と、とりわけ、此十日あまり四日の間は、我身を責めて、精進潔齋、腥さを絶ち、穀類をも十が一に減じ、毎夜、人の寐しづまる夜半を俟つて、ひそかに庭井戸の水を浴び、一心不亂となつて祈つたところ、ほんに、信あれば、驗ありとか、不思議や、きのふけふは、何處ともなく聲あつて、何くれとなく、未來の事どもをば告げさせらるゝ、其中にも「もはや源氏の世は亡び果てたり、行末は、ひとへに藤原と北條平の世の中なるぞ！」と紛ふ方もない、まざ／＼とした神のお告げ！……

トさながら今現に其聲を聞いてもゐるかのやうに、じつと目を瞑ぎ、一寸語を絶ち、しばらく瞑想に耽るかとも見えた。が、やがて又目を開いて、

政村、……そなたの身の務めは、返す／＼も、重うござるぞ。父御の身には、何時、どのやうなことがあらうも知れぬ。今から、覺悟してゐねばなりませぬぞ。

トじつと思入あつて言ふ。

政　御教訓は、一々よう會得いたしましてござります。かんまへて忘れぬやうにいたしまする。……(トいつたが、暫くもぢ〳〵して)しかしながら、母上さま、わたくしは、まだどうも、先刻聞いたことが氣にかゝつてなりませぬ。御病氣のせいで、父上には、とりわけ此頃は、何事につけてもおそろしうお僻みなされまするげな。父上に由ないお疑心を起させ、不快な思ひをおさせ申さぬ爲ばかりになりと、母上、どうぞ、明日は、お見舞ひなされて下されませ。

ト思ひ入つて言ふ。これにて伊賀の方漸くうなづき

伊　よし〳〵。それほどにいやるならば、其中に見舞ひもしませう。氣づかふには及びませぬ。……

ト此時、九つ(十二時)を知らせる鐘の音が聞える。

しかし、いつの間にか、甚う夜が深けました。もう、九つでもあらう。そなたは、もはや寢間へ往んで、お寢みなされ。

政　では、お先へ寢みまする。御機嫌よろしう！……兄上、御免下されませ。

ト政村會釋して、下手妻戸口より出て行く。

トすぐに正面の壁代を褰げて式部の丞光宗出る。伊賀の方見て

伊　おゝ、兄上か！

實　これは！(ト席を讓りて)いつの間に？

光　とうに參つたが、話中ばの體ゆゑ、わざと差控へてをつた。(ト席に着きて)老公の容

體は、思つたよりもわるうござるぞ。矩秀は、此末、長うて十五日とは持つまいやうに申してをる。いづれ、あの行蓮坊からも、委山の容體を京都の泰時方へ申し遣すでもあらうから、多分、夜を日に繼ぎ、晩くも十數日以内には、彼仁立歸り參るに相違ない。さすれば、たゞちに跡目相續の披露沙汰ともなるであらう。此上は、もはや便々としてはをられませんぞ。

實　して、御邊の御分別は？

光　されば。……昨夜も申した通り、京都表は、亡兄光季の緣故によつて、既に十二分の手配りが致しあれば、たとひ泰時にどのやうな不慮の準備がござつたとした處で、前後内外からの挾擊によつて、難なく取挫ぐ所存でござるが、さしあたつての一つの難儀は、あの尼御前。眞先に、しやにむに兵力を以て幽閉めるといふ荒療治が上策歟？　或は例の天目へ抹茶と何との等分の調合役を、あの矩秀めへ再び申し附けたものであらうか？　そこはまだ、いづれとも、決しかねてをる。

トこのうち實雅思入あつて

實　いや。毒藥をお用ひの儀は御無用になされ。大義には親をも滅するの喩なれば、——つい只今も、あの政村どのへ、それにつき、何かと異見を申し試みたとでござるが——すなはち家國の爲に、撥亂反正を望むときには、隨分共に思ひ切つたる殘忍をも餘儀なく忍ばねばならぬ習ひではござれども、苟も利世濟民を口に唱へて、天下の主たらんと志す程の者は、たとひ誤つて殘忍不仁の惡名をば蒙るとも、卑怯臆病の誹りを受

伊　　光　伊

けて、人君たるの徳をきづつけ、下萬民をして歸服に迷はしめるやうなことを致して
は相ならん。民をして懼れ憚らしむるとも、憎み、危み、又は賤蔑ましむるやうなこ
とを致してはなりません。卽ち、時機と手段とは、毎に心して擇ばねば相ならん。毒
害に至つては、所詮、世を怕れ人を憚る所謂賊子奸臣らの隱慝、卑怯な、淺ましい所
爲でござる。その儀は、かまへて御無用になされ。

トきつぱりといふ。伊賀の方思入あつて、靜かに

實雅どのゝ其見識も道理ぢやが、それよりも、すべて事は、見事に手際ようとこそ心
掛けるのが第一でござる。手際さへ見事なれば、五逆罪とても、現世では、强ち罪と
はなりませぬ。氣味のよい程に大膽な、目覺しい惡人は、却つて世の人に崇められま
する。……兄上、鳥さへも起つ跡は濁さぬ譬。後へ累ひを遺す様な小細工は不手際。
あの深見の一條以來、ちと內證事に立入らせ過ぎたあの粗忽者の矩秀を、又ぞろ斯う
した一大事に使ふのは考へ物。……(トいひさして)それはさうと兄上。夫義時の餘命、
もう十五日限りとは、あの矩秀の按檢ばかりではなく、行蓮坊もまた、しかとさやう
申しましたか?

いや、行蓮坊の按檢は、例の如く、只重體とばかり。卒倒氣絶は間々あることゆゑ、
それは强ち懸念に及ばぬといひ、別段日限などは申さなんだ。

(うなづきつゝ)さもござりませう。(ト靜かに言って)宵に此知らせを聞きました折、例の一
心の祈念によつて、夫の此容體の變動はさしたる事でないと察してゐました。兄上、

先　　伊

若し其十五日を過ぎて、夫が尚存命であつて、あくまで頑なに、泰時を跡目にと言ひ張つたならば、何となさるゝ？　病みほうけてゐる父を、恩義はあつても何の科もない舅を、政村なり、實雅どのなりが、理不盡に幽閉めては、何ぼう家國の爲とはいへ、順逆の道理が立ちますまいがな？　尼御前よりも此始末をば如何なさるゝ？　あの知秀なんぞの淺はかな按檢が、何の當になりませうぞ？

ト冷かに言ふ。二人ぐつと詰る。

いかさま！　こりや聊か不覺であつたわい。只管事を擧ぐる手配りにのみ心を奪はれ、既に先刻矩秀に申しつけて、弟どもへ密意を傳へさせ、すなはち、一昨夜の打合せの如く、豫て墨打だけは致しおいたるあの三浦の義村に、いよ〳〵一味の臍を固めさする魂膽までも講ぜさせ申したが、例の氣短か、先走り過ぎて、つい其肝腎の事には思ひ及ばなんだ。……（ト一寸眉を顰めたが）なれども、事こゝに及んでは、もはや順逆なぞを論じてゐる所でない。臨終を俟つにも及ばん。速かに事を擧げうぞ。

いや、暫く。（トしづかに止めて）あながち然う急かずともの事でござる。夫が直にも落命せば卒知らず、尚存命である限りは、成るべく事を穩便に取計らふのが此方の得。やつぱり、此間中の申し合せの通り、も一度わらはから、改めて屹度談じて、天下晴れた讓り狀を、政村へ宛てゝ、夫に書かすのが最も上策。尼御前を幽閉めたり、泰時の下向を妨げたりする事は、其上での手筈なり、軍略なりでがなござりませうぞ。

トこれにて實雅思入あつて

實　母上の其御案は、至極妙策とは存ずれども、既に先頃の御對面さへも、空しくお言葉爭ひに終つたとやらに承る。こよひの御變動あつて後の御容體では、ます〳〵老公のお心は僻みませう。随つて、御疑念もます〳〵深く、迚も其お談しは纏りますまい。

伊　いや、なう、先日は、夫の心を引いて見るため、わざとあの泰時をば非り、また、前將軍家時代からの內證事のいろ〳〵、——あの深見とわらはとの外には、知る者のない密事——をば言ひ立て、わざと手強う、正面からばかり、談じて見たのでござつたが……今思へば、柔よく剛を制すの譬、涙こそは女の第一の武器であつたを、下手に出なんだのはわらはの誤り。……が、それはまアともかくも。……其折の夫の樣子やら、口吻やらから、偶と思ひ附いたことがあつて、此頃中の勤行で瘦せ衰へてゐるのを幸ひ、其身支度のための此假病。

ト靜に意味ありげに言ふ。

光　ふむ！……われらはまた、言ひ爭ひをした不機嫌ゆゑの、假病とばかり存じてをつたか。……して、其思ひ附といふは？

伊　(冷靜に)此二三日このかた、しきりに子供らが歌ひあるく奇怪な謠がございますが、お二人は御存じか？

光　さういへば、「何とやらして物の怪」とか、……

實　「たんだ一字ちがうた」とか、……

光　歌ひあるくのをば、いかさま、聞いたことがある。

伊　光　伊

「方も方、時も時、……まさとまさ、まさとまさ、……まざ〳〵と物の怪、……たんだ一字ちがうた」といふあの謠の心を、こなたは何とお讀みなされましたぞ？

いや、一向に心附かん。

ト伊賀の方少し容を改めて、極しづかに、おちついて

先日、政村へ跡目讓りの事を、立入つて夫に談ずるうち、例の深見の事に及び、やがて其因みで、あの牧の方母子、其婿右衛門佐朝雅、稻毛の入道、畠山父子などを、又、それよりも先に、二代將軍賴家どの、比企、仁田の一族などを、うま〳〵計略を以ておとしいれられたのを手はじめに、あはよく和田の一族をも滅し、又前將軍家右大臣どのをも、あの公曉どのをも、同じ手で、上手にかたづけてしまはれた其內證事の一々を、わざと數へ立てゝ見たところ、面の色が次第に變つて、如何にも堪へがたさうな苦悶の樣子。なれども、それは、事の露顯を怖るゝよりも、ある不思議な心の鬼に責められてをらるゝ苦みと、見て取つてのわらはの案じ。……それゆゑ、一昨日、內々にて、既に取寄せておいたものがござる。

ト徐かに席を起ちて

もし！　此方へ。

ト燈臺を携へて、先に立ち、正面の壁代を上手へ褰げ排けて、廣い入側とも見るべき總板敷の次の間へ出る。光宗と實雅とは不審げの思入あつて從いて行く。

此板敷の向うには一間の妻戶があつて、其上下には蔀格子。尙其蔀格子の外には

式の如き簀の濡縁があつて、一面に欄干を取附け、又妻戸の直前には三段の階子があつて、其處から庭へ下りるやうになつてゐる。

板敷へ出ると、伊賀の方は、燈臺をよき處に据ゑておいて、膝まづき、光宗と實雅とを見返り。

伊　上手に祕し隱してをられたゆゑ、わらはさへ、はじめの程は、一向に心附きませなんだが、夫が生れ附いて忌み嫌ふ此一品。……其一品を種に。

トいひつゝ、板敷の一部の板を擧げ、床下から一箇の瓶を取り出し、板敷の上へあげ、其蓋を取る。

ト光宗は、すぐに瓶の中を覗いて見て

これは！

ト此途端、實雅聞耳を立てゝ

實　暫く。……何か、床下にて怪しげな物音がいたすー

光　何？　床下で？

ト實雅は急に燈臺を引寄せて床下を覗く。同時に光宗は正面の妻戸を開く。これにて庭の一部が見渡される。けれども七日の月は既うとうに落ちてしまつた後ゆゑ、向うは只植込が黒ずんで見えるばかりである。

ト光宗は、きつと庭上を透しながめて、何物をか見附けたらしく

光　曲者ッ！

ト一聲大きく叫ぶと共に、忽ち階子を躍り下りて、姿を消す。其曲者を追つかけたのらしい。

實雅は妻戸口から庭の方へと燈臺をさし出した。伊賀の方は。これより先、瓶の蓋を元の通りにして、起ち上り、實雅の後ろに立ちて庭の方を見やる。二人とも暫くは後ろ向のまゝで、同じ姿勢を保つてゐる。

* * * * * * * * * * *

幕

伊賀の光宗は左衞門尉光季の弟なり。伊賀の二郎左衞門尉と稱す。建保の末侍所司五人を置く、光宗は其一たり。承久の初め、政所執事に遷り、後朝官を授けられて式部の丞となる。初め、北條義時、光宗の妹を娶つて後妻となし、政村及び女を生む。女は參議藤原の實雅に適す。故を以て實雅を召して幕府に侍せしむ。元仁元年義時疾篤し。泰時六波羅に在りて未だ還らず。義時の妻、光宗と謀つて賴經を廢し、實雅を立てゝ將軍となし、政村を以て執權となし、而して光宗兄弟威福の柄を操らんと欲し、光宗弟朝行、光重と密かに將士に結ぶ。義時卒す。流言あり、曰く武州（泰時）京師より還り、將に諸弟を殺さんとすと。人々危懼す。泰時還るに及びて、鎌倉騷擾す。光宗兄弟屢〻三浦義村の家に至る。道路頗る怪となす。又義時の妻の居所に聚りて、共に誓ふ。泰時頗る之を知る、然れども置いて問はず。旬餘にして近國の兵驟かに至り、殆ど城市を塡む。政子夜潜かに義村の家に至りて之を論ず。義時謝して之を知らずとなす。政子色を作して詰責す。義村申ぶるに誓言を以てす。既にして政子賴經を奉じて泰時の家に徙り、數日にして議決し、實雅を逐ひ光宗の邑五十二ケ所を奪ひ、其舅二階堂行村に屬して之を囚へしめ、遂に信濃に幽す。云云。　（大日本史、北條九代記、本朝通鑑、讀史餘論、其他）

第二幕

第一場　北條家別第の奥庭

小山の裾を天然の姿のまゝに取入れて、わざとらしからぬやうに設置つたる奥庭の一部分で、正面は一段小高くなつてをり、さうして其やゝ下手には、二度ほどなだらかに折れ曲つた緩勾配坂がある。上手にも、下手にも、前の方には、小山のだらしない裾が流れ出したやうに出つ張つてをつて、そこには大小雜多の立木。それから又、ずつと上手寄の、松や杉の立木の間には、其奥の谷間への降り口、これも餘り急な勾配にはなつてをらぬらしい。すべて其邊には、雜草にまじる萩、すゝき、その他の秋草。それより下手へかけての一帶は、すぐに深い、廣い凹地に臨んでゐるのらしく、向うに松杉の繁茂した山々が間近く見え、更に間近には同じく松其他の木の梢だけが見える。

上手の、谷間への降り口の傍には、枝振の面白い大きな松が一本、其根元に茅葺の四阿風の休息所。其あたり一面に、野生の萩や秋草が、今を盛りと咲き亂れてゐる。

前の幕の四日後で、陰暦八月十一日である。時刻は今の午後二時過。やゝ薄曇りの空模樣。

老女亘理が指圖をして、侍女甲、乙、丙、めい／＼箒を持ち、四阿の界隈を掃除してゐる。甲と乙とは、今丁度上手の降り口から掃除しつゝ上つて來るところである。

亘理　(杖であちこちの叢を叩き廻りながら)やれ／＼！　やれ／＼！　これでもうようござらう。…・お太儀々々々！　これほど念入に掃除しておいたなら、よもや出をることではあるまい。あゝあ！　しかしながら、御病氣の故とはいへ、何かとまア、お嫌ひなさるものが殖えたことぢや。…・(ト甲、乙に向ひて)そつちの方は、もう大事ござらんかな？

甲　はい。もう大丈夫でござります。

乙　たつた一疋、ぼんの蚯蚓ッ子のやうなのがをりましたが、すぐに彼方の谷の方へ追ひおとしてしまひました。

亘理　だれも長蟲を好く者はないとはいへ、どうしてまア、昨日けふのやうに、お厭がりなされることやら？　(トつぶやきながら、下手へこなしあつて)もう程なくお越しでもあらう。さ、ぬしたちは、揃うてお迎ひに往つてござれ。

三人　はい／＼。かしこまりました。

ト侍女甲、乙、丙は揃つて下手へ入る。亘理は草臥れたといふこなしあつて、四阿の縁端に腰をかける。此時、上手の降り口から、加持の藤内と砂王とが登つて來る。藤内は箒を提げて先に立ち、砂王は朱塗りの曲彔を脊負つて上つて來る。

亘理　(見て)　おゝお！　藤内どの！　お太儀でござつたなう。又さふらふ、例の、俄のお思

[illegible]　五　[illegible]

ひ立で、さつきふなお庭のお掃除やら、お堂のお掃除やら。嘸、骨が折れましつらうなう。

何の、何の！….（とつぶやきつゝ、砂王と共に四阿の下手へ廻つて）めつきりとお心よいやうには承つてをりましたが、それにしても、お堂でお座禪をなさるほどの、もうそんなお元氣でござりますか？

いや／＼。お心よいとはいへ、まだ／＼お重體でもあり、つい此間、あゝした御變事のあつた間際でもあり、とりわけ昨日けふは、御典藥の他行中でもあれば、萬一の時、取り返しが附かぬゆゑ、一同が强つてお止め申したれど、先だつて行蓮どのが、座禪不調とやらがお煩ひの原ぢやと申されたとかで、此頃のお氣むづかしさ、一旦斯うとお言ひ出しなされては、いつかなお聽入れなさらばこそ、けふは今から夕かたまで、あの谷のお堂内で、お座禪を遊ばす筈。

はれやれ！　先度にも懲りさつしやらず。….とにかく、けふは、たんとお歩かせ申してはなりませぬ。そんな事かとも存じましたゆゑ、お堂の曲彔を持つて參じました。あれへお乘せ申して、お堂まで、みんなで舁いで行くことにいたしませう。（トいひつゝ砂王の持つて來た曲彔を見返り）ほい！　つい、お茵を持つて來るのを忘れた。….砂王どん、もう一度お堂へ往つて、あれを取つて來て下され。

トこれにて砂王うなづきつゝ、すぐに上手の降り口から降りて行く。亘理は此間何か思ひ出して、ひそかに泣いてゐたが、とう／＼こらへかねたらしく、

なう、藤内どの！　あゝあ！　長命はすまじいものでござる。老公さまの御容體、此頃の内外の御模樣、世上の有樣、何やかや見るにつけて、思ひ出さるゝは、三十もう九年のむかし。驕る平家は、あの西海の波濤に沈んで、前の右大將さま御武運めでたく、六十餘州なびかぬ隈もなく、此鎌倉表に御座所をお奠めの折のめざましさ！　譬へば、大あらしの其後で——散り殘つた斑々雲なんぞは何のその——大空一ぱいに檜扇のやうに金色の後光をおッぴろげて、あの和ぎわたる海づらに、ぐん〳〵と昇らつしやる大日輪さまのやうなとはあのこと！　夫平六兵衞どのは、其頃まだお血氣盛りの、若殿小四郎さま、今の老公さまのお傅役。其緣につながる冥利で、伊豆の片田舍から、此鎌倉のお館へ、一足飛びの御奉公。それからはとん〳〵拍子。月毎に、年毎に、びつくりしつゞけの御當家の御繁榮。まア、何處まで伸びて行く御威勢やらと、喜んだのはむかし！　花の眞盛りは、どうやら旣う見てしまうたやうに思はれて、あゝあ！　此浮世があぢきなうござる。

ト泣く。藤内もこれを聞き、萎れてゐたが、同感して

あゝあ！　御道理なお述懷でござります。今のお言葉を聞くうちに、わしが眼にも遠い昔の有樣が、まざ〳〵と、湧いて出ますわい！　石橋山の御初陣には、わしも三つ鱗のお旗下に加はつて、お侶に立ち、又檀の浦の合戰では、ともかくも手柄の眞似ごと、はじめて大殿さまのお言葉をいたゞいた時の其うれしさ！……あゝ！　二十臺のあの時分でさへ、その親御さま優り、萬人優り、智慧者よ、勇者よ、どこまで膽ッ玉

耳藤耳藤

が太いか、底の知れぬ軍師よ、と評判のお館さまが、御老病の故とはいへ、つい此間、半年ぶりでお見上げ申した其お後姿の見すぼらしさ！　いや、お姿ばかりぢやない。承れば、夜は時々、女子供のやうに、おびえたり、うなされたりさつしやるとやら。又、物もあらうに、蛇なんぞを怖がらつしやるとは！　あゝ、それほどまでに衰へさつしやつたか？（トいひつゝ、鼻汁をすゝつてゐたが、やがて）こりやいよ〳〵只事ぢやアない。（ト獨り言のやうにいつて）あゝ、それにつけても氣にかゝるは……（ト一寸四下へこなしあつて、聲をひそめて）わしは、此お第の内で、遠からぬうちに、何事か起りさうに思はれてなりませぬ。……

え!?

めんようなは、あのお本第で、此間中、三晩も續けて、何やら夜ふかしの御密談。…

といふのは（ト覺えず乘り出して）あの奥方のお居間に於て？

はい。光宗さまと宰相さまと、いつも定つてお三方。…

（ずつと聲をひそめて）何ぞ聞き出いたことでもござるか？

さア、御變動のござりました、あの夜さりの子の刻過ぎ、どうも氣にかゝつて眠られぬゆゑ、お裏門から、ついふら〳〵、橋を渡つてお庭つゞきを、行くともなしにお本第の、あの奥庭の枝折戸口。見ると、掛金が脱してある。けぶだな、と思ひながら、つい我知らず、二足ほど蹈込む途端に、奥方のお居間の邊で、「曲者ッ！」と呼ばつたけたゝましい一聲！　疵持つ足！　自己が事かとおッたまげて、逃出さうとする其脊骨へ、

耳　砂　・　義

昏闇を駈けて來て、ぶッつかつた一人の曲者！　はッとけしとんで、此方は平伏る、
そいつめは、てつきり此お別第へ、走り込んだに相違ないのが、又一つの不審。・・・
して、その、曲者の年輩は・・・
トいひかける途端に、砂王、手に唐錦の大きな茵を捧げながら、上手の降り口を
駈け上りつゝ、下手を見やつて
あゝ〳〵！　もう老公さまがお越しでござりますぞ！
ト呼ぶ。これにも二人は話を止め、起ち上り、出迎への準備をする。藤内は砂王
の持つて來た茵を曲泉へ敷く。
此時、下手より右京の權の太夫義時（六十二歲）、長わづらひの上、つい四日以前
の一變動のため、又一しほ衰弱したる體にて、半月ほど前に剃つたまゝらしい坊
主頭の髮の胡麻鹽も鹽の方がずつと多く、髭は殊に白く、共にぢゝ汚く長びた
まゝの蒼白な顏色。長直垂の上に五條の袈裟を掛けて、右手には杖を携へ、左は
小三郎の肩にかゝり、右からは老女右近に腰を支へさせ、一足引のやうにして、
徐かに出で來る。つゞいて小童蜂王、義時が戒刀を捧げて附添ひ、侍女の甲は藥
湯を盛つたる天目を臺に載せて持ち、同じく乙、丙もその後に從ふ。
下手のだら〳〵坂近く來ると、義時は息切れがしたらしく、術なげに
まて！　まて〳〵！
ト喘ぎながら言ふ。

小三　はッ。

　　トこれにて一同歩みを止める。

義　一寸休む！　一寸！

　　ト尚喘いでゐる。

右　はい／＼。かしこまりましてござりまする。

　　ト此時、坂の少し上手に膝まづいて迎へてゐた亘理は藤内を見返り

亘　藤内どの、あのお曲彔を。

藤　はい／＼。心得ました。

　　ト藤内は急ぎだら／＼坂を登つて、四阿の前の曲彔を持つて來て小三郎に渡す。小三郎それを坂のやゝよき處へ据ゑる。右近、亘理ら介抱して義時をそれへ掛けさせる。

　　ト義時は、尚幾らか喘ぎながらも、あちこちを見渡しつゝ、やがて心地よげに

義　閉籠つてばかりゐては、むすぼうれてならぬ心も、斯う蒼う高う廣々とした空の姿、涯もなう見渡さるゝ山々谷々の景色をば詠むると、さながら洗ひ去られたやうに心地よい！……あゝ！　まことに、音塵寂爾たり、消息宛然たり。一味蕭條として趣向すべきなし。……あゝ！　つい先刻までは、水の涸れ盡きかけた泥池の水際で、喘いでゐる鮒か鯉かなぞのやうな氣持であつたが、此けしきを見、此松風の音を聞くと、大湖へでも出たやうに、暢び／＼するわい！　はゝゝゝ！

[illegible]

ト淋しく、併しながら心地よげに笑ふ。

久かたぶりのお歩行ゆゑ、いかゞにやと、一同お案じ申してをりましたが、一向にお疲れも見えさせられませぬ其御容體。その御様子ならば、程なく御本復遊ばすこと〻、ほんに〳〵、お嬉しう存じ上げまする。

（機嫌よげにうなづきつゝ）時が來て、病魔が漸く離るゝ歟、或は行蓮の調劑が不思議の効をば見する歟、きのふおとゝひの二夜さは、此二年ごし曾て覺えぬ快眠！　ぐつすりと我を忘れ、夢も安らかに、全く生き返り、生れ變つたるやうな心持ぢや。壯年血氣の昔より、幾たびと知らず、生死の間に出入し、備に艱難辛苦を嘗め、功名手柄の悦び、計略の合期した氣味よさ、或は富貴榮華の歡樂、皆ほど〳〵には得い遂げても來たが、未だ曾て此病來の、眠られぬ苦しさに優る辛さは知らず、又、きのふけふの此心地よさに優る嬉しさは覺えなんだ。あゝ！　時あつて三日食はず、破れ薦に冱寒を忍ぶ、穴の中、橋の下の、あのあさましい乞食非人さへも、しば〳〵連夜の熟眠をば貪るといふに、一月の中只一夜も、二時と續けては、うなされぬ夢をば結び得ぬ其苦しさ！……

ト　いふ間にも、いかにも堪へがたげな苦悶の色が面上に浮ぶ。さうして其不快な追懐に心を奪はれたかのやうに、暫く言葉を斷絶れさせたが、やがて又我に返つて

あゝしかしながら、けふばかりは、それをば拭ひ去つたやうな心地よさぢや！……天

外の青山も其色寡く、耳畔の鳴泉も其聲空し、とは、斯うした氣持でもあらうかい？
はゝゝゝゝ！

ト又淋しく笑ふ。此間、藤内は、下手に膝まづいて、頻りに落涙を拭つてゐる。
義時はきつとそれに目を付け、不興げに眉を顰め、し

やい、藤内！　なぜ泣く？……汝はなぜ泣くのだ？

トこれにて藤内は涙を收め、じつと義時の顔を見上げて

藤　お殿さま！　ちやうど半年お見上げ申さなんだうちに、思つたよりは、甚うお窶れなされましたなア！　あの、豐後の國のお野立では、敵方の夜討の怖ろしさに、其一晩だけは、只の一人だつて寢たものはござりませんだに、こなたさまばかりは高いびき！又、あの和田合戰の晩だつても、若殿さまをはじめ、まんじりともさつしやらなんださうなに、たつた一人平氣で眠つてござつたとかいふお前さまが、長のお煩ひの故とはいへ、只今のお言葉！　あゝあ！　甚くお弱りなされましたなア！　此の上は御養生が專一でござります。……なアもし！　そのお體で、お座禪なんぞは、とんでもないことでござります。慮外ながら、まアま、お見合せなされたがようござりませうぞ。

ト苦々しげに言ふ。此間に義時の機嫌よげな表情はだん／＼消え、中ごろ憤々としたらしかつたが、さすがにじつとそれを制へて、わざと冷かに

義　むやくしい事を申す奴だ！　ずつと快いから出て來たのだ。行蓮といふ醫師が付いてをるわ！……　たはけめ！

ト此「たはけめ！」は、半分口の内で言つた積りであつたらしいが、大分手強く言ひ放つたので、耳の近くない藤内にも徹へたらしく、少々むつとしたといふ思入で

藤　もし、殿さま！……成程、手前は痴人でもござりませう。が、手前は大痴人でも濟みまする。日本六十餘州の總元締をさつしやりますお方に、何かの手ぬかりや間ちがひがあつた時分には、只「たはけ！」では濟みますまいぞよ。つい此間も、あんなお間ちがひ！　生身の、しかも煩うてござるお體であるからには、何時、どんな事があるか知れたもんぢやござりませんのに、それだのに……

ト いひかける。義時はこらへかねて、しかし靜かに

義　何だと？　では、汝は、主の身に、何か不祥な事が起るのを望むか？

藤　何のお前さま、とんでもない！　望みなんかはいたしません。けれども、うつかり輕はづみな事をなされて、何事か起つたらどうなされます？

義　（冷笑して）起つたら起つた時だ。

藤　いや、事が起つてしまつてからでは……

ト藤内は段々興奮して來る。右近と顔を見合せてゐた亘理が口を挿む。

亘　あ、これ、藤内どの！

藤　いや、起つてからでは、何にもなりませぬ。何事もないうちの御用心が肝腎でござります。もし！　何よりも先に……

亘　藤内どの！

藤　お家のお跡目を、ちやんと定めて置かせられませ。さうでないと……

右　藤内どの！

　ト大きく呼ぶ。これにて藤内口を噤む。此間義時は、だん／＼癇が高ぶつたらしく、全身を神經的に顫はせてゐたが、やつとそれを制して、せゝら笑つて、

義　汝らの指圖を俟つおれか！……たはけめ！

　ト口だけは冷かに言つたが、顔も身もぶる／＼と顫へてゐる。けれども飽迄も平氣を裝つて、正面を切つてゐる。

　ト藤内は、じつと義時の樣子を見つめて、情けなげな愁ひ聲で

藤　成程、天下の智慧者と敵方にさへ褒められなされたこなたさまでござります。手前なぞが、かれこれ申すがものはござりますまい。なれども、あれほど安心して、御自分の手足のやうに思つて、お使ひなされた、あの、深見の三郎二郎どのでさへ、あゝした不心得を……

　ト言ひかけたが、ふつと小三郎のゐるのに氣が付いて、口ごもり

いやなに、あゝした仁は格別としても、結句、あんまり御自身の智慧袋ばかりを恃みにさつしやらん方がようござりませうぞよ。とにかく……

耳　藤内どの／＼！

藤　とにかく、お體をも、お家をも、折角お厭ひなされたが、ようござります。

耳　これさ、藤内どの！

ト きつと言ふ。これにて藤内一寸亘理を見返り

藤　いや〳〵、かういふ時にでも申し上げんけりや、お目にかゝる折がございません。……もし、殿さま！……

ト又何か言ひかける。義時は、それにかまはず、つと曲彔から起たうとしてよろめく。右近、小三郎あわてゝ抱きとめ

右　あゝもし！　おあぶなうございます。

義　大分寛いだ。……座々、座禪堂へ。

ト歩み出さうとする。亘理それを止めて

亘　あゝもし！　お歩行では、ちと御無理でございませう。まゝ、そのまゝでいらせられませ。わたくしども一同で、そのお曲彔もろとも、お舁き上げ申しませう。そのまゝお膝を組ませられませ。……これ、小三郎どの、こなたは、お前へ廻つて、後ろ手でお曲彔を、……藤内どの、こなたはお背後から。女中がたは、それ、右と左りを。

ト これにて義時は、曲彔の上で胡座をかく。小三郎は前から後ろ向きに、藤内は背から、砂王をはじめ侍女、甲、乙、丙は左右よりそれを助けて舁き上げる。戒刀持の蜂王は其後に附添ふ。一同だら〳〵坂を登りて四阿の前を過ぎ、降り口へ向ふ。右近、亘理も從いて坂を登り

亘　ようござるかの？……しづかに〳〵！

右　すぐお後から參じまする。

右亘　御機嫌よろしう！

　ト會釋する。一同降り口を降りて行く。ト亘理は右近を四阿へ請じつゝ

亘　それでもまア、案じたよりは、お元氣なので、やつと安堵致しました。それはさうと、(ト聲をひそめて)　昨夜は折わるう人目に妨げられ、承りかけて、つい其まゝになつたあのお話、氣にかゝつてなりませぬ。幸ひに人もなし。あの後をおつしやつて下され。

右　いづれ、あの小三郎どのからも、直接に御密訴申さるゝでもございませうが、今日となつては、もはや猶豫のならぬ鼻の先の一大事。實は、あの御變動のあつた晩、お互ひに瞥と見たあの二人の怪しい素振。なれども、言葉が確とは聞えませなんだゆゑに、證據なく、氣がゝりながら、お互ひに、言はず語らず。然るところ、一昨夜夜ふけて後、小三郎ひそかに來り、駭き入つたる密告。……(ト四下へこなしあつて)もし！　その仔細は……

　ト亘理の耳に口。暫くさゝやく。

亘　(驚いて)えゝ！　ではあの夜さり、小三郎どのが、あのお床下に忍び込んで……

右　あ、もし！……間遠なので、ようは聞えなんだれども……

　ト又耳こすり。

亘　すりや、あの、やつぱり……毒薬を……

　トいひかけるのを右近は手で制して、又暫く耳こすり。亘理はうなづきつゝ聽了りて

亘　まア！　おそろしい！……此上は一刻も猶豫はならん。何よりも先に、京都にござる武藏守さまへ、早飛脚を以て、此事をお知らせゝにやなるまい。いや〳〵、先づそれよりも先に、尼公さまへ此事をば……さうぢや。……それは、わしが此足で、これから直に。……したが、後の事も、あの小三郎どのばかりでは心元ない。藤内どのゝ律儀が祟つて、大分御機嫌を損じた折から、あんまり驚し申してはなりませぬ。そこはこなたからよい鹽梅に。かういふうちも心がゝり。ともかくも、まア、早うお傍へ往つてゐて下され。

右　はい〳〵。合點でござります。

ト右近は急ぎ上手の降り口から降りて行く。

亘　あゝ、心が急く〳〵！　泰時さまへの早飛脚はだれに吩咐けたものであらうか？……いや〳〵、それもこれも、尼公さまへ申し上げた上でのお指圖。……さうぢや。

ト身づくろひして、杖を忘れ、だら〳〵坂を走りおりようとして心附き、取つて返し、杖を取り、再び駈けおりようとする。此途端、上手の降り口より藤内をはじめ、侍女、甲、乙、丙及び蜂王、砂王(小三郎だけを除き)皆々戻つて來る。

藤　あ、もし〳〵！　亘理どの〳〵！

ト呼ぶ。

亘　おゝ！　もうお行がはじまりましたかいの？

藤　いえ、まだでござりますが、お召になるまでは、小三郎どのゝ外は、退つてをれとい

ふお吩附でござりました。

巨　さやうか？ では、こゝで休息めされ。お太儀でござつた。わしは少許急ぎの御用が出來たによつて‥‥

ト いひさして、そのまゝ行かうとする。此時藤内は下手を見て

藤　おゝ、おめづらしいことだ！ あれへ奥方さまがお越しでござりますぞ。

ト 巨理も下手を見て

巨　おゝ、成程。‥‥ても、ま、折のわるい！

ト 口の中で言つて、餘儀なげに立ちどまる。

藤　（下手を見やりながら）まだお氣色がわるいかして、成程、お顔色もめつきりとわるく、お窶れなされて、お運びも甚うお太儀さうだ。

ト つぶやきつゝ、皆と共に、だら／＼坂を降りて、出迎への心がまへをする。

ト 下手より奥方伊賀の方、垂髪、小袿、被衣をかぶり、病後の體よろしく、二人の侍女、小柴（二十五六）、田毎（十七八）に左右から介抱をさせ、尚一人の女の童に錦の茵を持たせて、伴れて、徐かに出で來る。

巨　（うや／＼しく會釋して）これは／＼！ まだ御不加減のやうにも承りをりましたに、恙せられましてか、思ひがけないお渡り。お祝ひ申し上げます。‥‥さ、まづ／＼、あれへお越し遊ばされませ。

ト 巨理は又先に立ちて坂を登りて、四阿へ伊賀の方を請ずる。藤内と甲、乙、

の三侍女及び蜂王、砂王は坂下に殘り、他はすべて四阿附近に集ふ。

伊賀　（四阿の前に立ちどまりて、靜かに、おゝやうに）館にも、けふは別してお心よいとあつて、久しぶりに御修禪ぢやと聞いたゆゑに、見舞かた／＼、氣保養に來ましたが、館には、もはや御上堂なされたかいの？

はい。今暫くは、お人拂ひといふお吩咐でござりまする。

伊　おゝ、それは！……では、暫くの間、この四阿で待ちませうか？……

トこれにて侍女、女の童心得て、四阿の緣に持參の茵を敷く。伊賀の方はそれに腰をおろしながら

亘理には、其後は久しう逢はなんだか、いつも健勝で、めでたいなう。

亘　おかたじけなうござります。お庇をもちまして。

伊　幾歳になりやつたかなう？

亘　七十五歳にござります。

伊　夫の平六兵衞が存命ぢやと、ことしは幾つであつたかなう？

亘　丁度、八十……四歳になりませう歟？……

ト答へつゝも、氣のせく思入よろしくあつて

さて、えゝ、まことに、甚だお慮外ではござりますが……

トいひかける。伊賀の方は、其以前から、とうに亘理のそは／＼した樣子に目を附けてゐたが、わざと氣の附かぬげに、悠長に

伊　それも其筈歟！　あの平六兵衛は、夫義時どのゝ附人、‥‥まだ江間の小四郎でござつた頃からの無二の腹心、かたへ離ずの郎黨。十年一日のやうなといふ古語はあるが、これは五十何年間、ふつに變らぬ奉公振！‥‥

トいひつゞける。亘理はいよ／＼氣の揉める思入よろしくあつて

亘　えゝ、まことにお慮外ではござりまするが、わたくしは、あの、いさゝか、取急ぎまする御用向がござりますゆゑ‥‥

ト又いひかける。これより先、伊賀の方の足元から、二尺あまりの一疋の蛇が這ひ出し、やがて土手から低い地面の方へ、する／＼と滑りおり、だん／＼下手へと這つて行き、丁度此時、甲、乙、丙三侍女の足元へ近づく。

甲　（はじめて氣附いて）あれい！

トけたゝましく叫んで飛び退く。乙、丙も同時に

乙、丙　あれい！！

ト叫んで逃げる。砂王、蜂王も

砂、蜂　あゝ、蛇だ／＼！

ト騒ぐ。皆々驚く。藤内は持つてゐる笞で蛇を逐ふ。此途端、又一疋、伊賀の方の足元から這ひ出す。女の童目早く見つけて

女童　あれ！　こゝにも！

トこれにて小柴、田毎

小、田　おゝ！（トいひつゝ）しッ〳〵!!
ト逐ふ。皆々驚いて、又そちらを見る。此以前、伊賀の方ぎッくりして懐をおさへる。藤内と亘理と三侍女とは、互ひに顔を見合せて「どうして蛇が出て來たらうか？」と不審の思入、こなし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第二場　奥庭谷間座禪堂

天然のまゝでは、淺い、平凡な峽たるに過ぎぬ處を、多少の人工を施して、何さま、一かどの深山幽谷らしく設置ひ、兼ねて往來、登降の便宜をもよくしたる凹地。上手、下手、正面とも、見える限りの處は、概して松杉の生ひ茂つてゐる山の腰や山の裾の景色。ずつと下手に、此凹地への降り口が、岩組の間に見え、又正面奥の上手寄には、一筋の絲のやうな瀧が見える。

此凹地の中央に一棟の座禪堂。唐、宋いづれとも附かぬ支那風、和風折衷の白木造り。三間四方。正面の三間は、眞中に九尺四枚の疊み扉、これは悉く明け放し、殘る左右の四尺五寸づゝは火燈口式の格子窓を取り附けたる板羽目。側面も、背面も、同じ式。内部は一面の甃。堂の周邊にも、甃。二段の低い石段。此石段も

四面一様に取附けてある。

前面の軒先には喚鐘。

堂内の中央、やゝ奥の方に文珠大士を奉安したる龕。其前に、燈明及び供へ物をするための大小二脚の卓子。其脇に香爐臺。更にそれよりも前の方、よき處に、二疊敷ほどの禮盤。小さい方の卓子の上には、侍女と蜂王とが持參した品々――天目の藥湯と戒刀――が載せてある。又、禮盤よりも上手、やゝ前寄には、前の場の曲彔、茵を敷いたまゝ。其すぐ傍に義時。義時は、つい今がたまで曲彔に掛けてゐたらしいが、此瞬間には酷く激昂した顏色で、やゝ斜に下手へ向いて、突立ち、右手に高く杖を振上げてゐる。其すぐ下手、義時と扉との間に膝まづいて、頻りにそれを止めてゐるのは、老女の右近である。小三郎は、更に其下手の前寄に、卽ち扉の外の閾の上に平伏して、しきりに詫びてゐる體である。

右　如何やうな不埒な儀を、小三郎が申し上げましたかは存じませぬが、まゝ暫く、暫く！どうぞまア！暫くお待ち下されませ！

義　えゝ、とめるな。邪魔するな。……どけ〳〵！……無禮至極な奴だ。ぶちのめしてくれる。……えゝ、どけといふに！

右　あゝ、もし！お慮外ではござりますが、ともかくも其仔細を、どうかまアわたくしに、一應仰せられて下さりませ。承りました其上では、決してお止めは致しませぬ。……まア〳〵！

義　小　義

トこれにて義時は漸く振上げてゐた杖をおろし、しきりに喘ぎながら

此數ヶ月以來、曾て覺えなんだ快眠によつて、めづらしくも頭燃が熄み、心の安靜をば得たるゆゑ、久しぶりにて座禪を試み、けふこそは無念無想の別境に、神を遊ばせうと、限りなく樂みにしてをつたものを！……藤内めが、おのれ！……恩に狎れて私意を挾み……讒訴三昧をいたしをる！　おのれ、親に似た小才覺な、不所存な、無禮な……

ト疊みかけて言はうとしたが、あんまり激昂したゝめ、息を切らせて、頻りに苦しげに喘ぐので、右近はさま〴〵に介抱し、やつと和めて曲彔に腰をおろさせる。此内小三郎は泣きながら

讒訴三昧とは、お情けないお言葉でござります。只今も申し上げました通り、其折、其場に行き合はせましたは、わたくしばかりではござりませぬ。右近どのも、又あの亘理どのも、たしかに見たと申されます。其言葉の一々は、間遠ゆゑに聞えませなんだが、紀河の矩秀が「あの深見めを云々」と申しましたことだけは、決して相違ござりません。

やい！　病みほうけて、此義時の目が昏んだとでも思ひをるか？「深見を云々」といふ、其一言にばかり拘泥りをるので、汝の心の底が見え透くわい！　察するところ、父の所領地を奪られたのが無念さに、伊賀家一族をば敵と怨み、それで讒言を構へをるのであらうか？

小　存じゐよりませぬことを仰せられまする！　どうしてわたくしがそのやうなことを……

義　いゝや、言ふな。かねぐ\父三郎二郎の頓死に疑念を抱き、随つて種々の臆測を試み、或は、奥はじめ光宗らが、豫め謀つて陥れたことのやうに、邪推しをりはせぬかと疑つてゐたが、……さやうな根性では、予をさへも怨みかねまい！　此恩知らずめが！

小　（きつと興奮した顔を擧げて）それはあんまりなお言葉でござります！　お怨みに思ひまする程ならば、とうにお怨みを申しまする。なれども（トいひかけて、泣きながら）十四歳以來の御高恩を思ひまするゆゑ……

　　トあとをいひかねて歔欷をする。

義　（更に目を險しくして）何だと？　とうに怨む？……其譯を言へ。……

　　ト小三郎尚默つて泣いてゐる。

　いや、其譯を言へ。

　　ト小三郎泣きながら、少しく顔を擧げて、怨めしげに

小　父一人のお咎めは、是非がないとも存じまするが、所領地悉く召し上げられました其上に、……随分お館のお爲には御奉公も仕つたと承りをりまするに……何も存ぜない妻子眷族の末までも……

　　トいひかける。右近氣を揉み

右　あ、これ、小三郎どの！　小三郎どの！

　　トきつと叱るやうに言ふ。これにて小三郎默る。此間、義時はじつと小三郎を見

詰めてゐる。右近は更に形を改めて義時に向ひ

小三郎が只今の、聊爾千萬な失言は、何卒お聞棄下されませう。小三郎に限りましては、お讒言を申すとか、お怨みに思ひまするとか、さやうな不所存が、かつふつ、ござりませうとも存じませぬ。又、あの矩秀の申しましたる儀を、どう不行屆に言上いたしましたかは存じませぬが、矩秀があの夜さりの擧動には、何かと不審の事共のござりましたとだけは、亘理も、わたくしも、たしかに認めましたのでござります。……（トいつて、小三郎を見返り）これ、小三郎どの、あのお本邸での顚末をも、もう委しくお申し上げなされたか？

小　いえ、まだそこまでは、申し上げませぬのでござります。

右　あれを申し上げいでは、お疑ひ遊ばすが御道理。先夜わしに知らせなされた通り、有りのまゝをお申し上げなされたがようござらう。……御前、お聽き下されませ。あの夜さり、矩秀が手眞似や耳打にて、光宗さまへ密々の談しの模樣、何とも以て合點參らず、亘理も、わたくしも、心元なう存じましたゆゑ、實は、わたくし一存にて、此小三郎に、内々にて申し含め、萬一の用心のため、御邸内を窃かに見廻らせましてござりまする。……さ、その後はこなたから。

ト小三郎へこなし。これにて小三郎に改めて義時を拜して

小　御邸内を見廻りますうち、ふと小耳に挾みました其夜のお本第のお會合のことが、何となく心に掛り、我知らず、お庭を離れ、つい、あの橋を渡り、お本第の裏門口から

奥庭づたひ、やがて奥方のお居間に近づき、……もしお咎めを蒙らば、一命棄つるまでと覺悟を定め……窃にお床下へ忍び入れば、ちやうどお密談の眞最中。間違ながら、とぎれ／＼に、漏れて聞えまする奥方のお聲、實雅さま、光宗さまのお言葉。……たしかに近々に、容易ならざるおくわだて。……尚もくはしく聽取りませうと存ずる折から、俄の物音。上から颯と刺す火影に、見咎められては一大事と、あわてゝお庭へ飛んでいで、一さんに迯出しまする其背後に、「曲者ッ！」といふ光宗さまのお聲！あぶないところを暗に紛れ、立歸つてござりまするが、……其折洩れ聞きました斷片的のお言葉によつて、容易ならぬ御大事と心得まして、かやうにお訴訟に及びましたのでござります。

ト此間に義時の表情いろ／＼に變り、だん／＼耳を傾ける。けれども尚半信半疑の體で、默つてゐる。

右　畢竟、小三郎の曲事は、わたくしの由ない心添から起りましたことでござりますれば、何卒お咎めはわたくしに課せ附けられまして、彼れが申し上げまする事共をば、尚とくとお聽取遊ばしますやう……

トいひかけるを義時は不快げに手にて制して

義　措け／＼！……えゝ、措けといふに！

トきつといふ。

右　はゝ。

義　予は座禪をする。二人とも、呼ぶまでは、退つてをれ。……今聽きかけた事は、後に又訊ねる。……退れ！

ト靜かに言ふ。

右、小　はッ。

ト義時は曲彔を離れ、香爐臺の方へ歩み寄らうとしてよろめく。右近急ぎ立寄りて介抱する。義時は、後ろ向のまゝ、手でそれを制しつゝ

義　よし〳〵！……構ふな。……（トいつたが、急に見返つて）暫くはだれも來ることならんぞ。

右　はゝ。

ト曲彔に敷いてある茵を取つて禮盤の上に敷き、軒先の喚鐘の撞木を取りおろして來て其傍に置き、やがて

では、御覧下されませう。こゝにお撞木をばおきまする。御用の折にはお喚鐘をお打ち下されませう。

ト會釋して扉の外へ出で、尚此時までも俯向いてゐた小三郎を促して先に立ち、石段を降り、ちやうど此時香を焚きつゝある堂内の義時へ思入よろしくあつて、徐かに下手へと進み、やがて坂道を登りて、二人ともに姿を消す。此内に義時は香を焚き了りて、見返り、一寸堂の外へ思入あつて、やがて禮盤へ上らうとして、既に一足を踏み掛けたが、半分口の内で

義　不埒な奴だ！無禮千萬な奴だ！主に對して指圖がましく……下郎の癖に！

ト險しい目附をして、きつと下手を見やつたが、忽ち目を瞑り、しづかに禮盤に上り、茵を二つに折つて尻に敷き、式の如く結跏趺坐することよろしく、手を結んで臍下に安んじ、二三度深呼吸をしてゐたが、程なく不動不言となる。

ト見るうちに、そろ〳〵顔面神經が働きはじめる。

すると、目を瞑つたまゝ、小聲で

光宗とあの實雅とが……(トいひかけて暫く間を置き)いや、讒言とばかりは思はれん。現に右近があゝ言ふ。……(ト又暫く無言)繼子の泰時の世となつては、何事も儘にならん。……だから、政村に跡を繼がせて……(これまでは小聲でつぶやいてゐたが、急に思ひ當つたことがあるらしく、少しく聲を高めて)さういへば、現に此間、彼女がおれに對つて……

ト俄にぎよつとした思入で、目を開き、急に左右前後を見返り、

何時!……

トいひかけると共に膝を崩し、急に起上つて、後ろの小卓子の上の戒刀を窃と取つて引附け

決して油斷はならん!

と小聲で口早に言ひ足したが、やがて又坐に着き、

が、親に似て、中々執念ぶかい、僻んだ根生もある奴。……うつかりとは信ぜられん。……氣取つたかも知れん。……(ト手を組んで考へ)まさか乃公がさせたとは思ふまいが……

……

ト言つて、俄に愕然として、我に返つたといふ思入

あゝ！　雜念！　雜念！

ト急に目をふさぎ、膝を組み直し、又二三度深呼吸をして、半分口のうちにて

諸法皆是因緣生、困緣生故無自性、無自性故無去來、無去來故無所得、無所得故畢竟空、畢竟空故是名磐若波羅密、南無一切三寶、無量廣大、發阿耨多羅三藐三菩提、納慕簿伽伐帝、鉢刺壞波羅躬多曳、怛躬他、室姪曳、室曬曳、室曬曳、室曬曳……

ト唱へつゞける。

第三場　座禪堂の背後

堂の背面の扉は閉ぢたまゝになつてゐる。此處にも、前面のと同樣の低い石段が取附けてある。

正面にも、上手にも、下手にも、ほゞ前の場の背景と似たりよつたりの、松杉の生ひ茂つた山の腰や山の裾が見渡され、ずつと上手奥の險阻な岩組の間には、わざと險しく設置つたらしい降り口が、大きな木立越しに見えてゐる。此降り口を降り切つた處に、そこに自然石をころがしたまゝの石橋、其下は細い石淸水の流れ。其邊、小笹、雜草、蔓物等が生ひ茂つてゐる。それから、ずつと前寄のやゝ

上手にも岩組、そこに自然のまゝの泉があつて、淺い井戸の形をなしてゐる。此泉の末も、前の流れへ落ちて行くらしい。

伊賀の方は、侍女の小柴と田毎とに介抱せられて、上手の險しい降り口を降りて來る。田毎は伊賀の方の被衣を持つてゐる。やがて石橋を渡り了ると

伊賀　病後に、久しぶりで歩いたせいか、ちつとばかりの此坂路が、けふは、ことの外、大儀なやうに思はれた。

小柴　そのお筈でござりませうとも。こちらのお道路は、あちらの御本路とは異ひまして、わざと深山とやらのやうに、險しうおしつらひ遊ばしたのでござりますもの。御病後の事ゆゑ、嘸お疲れでござりませう。ちつとまアお休息遊ばしませ。お館さまには、まだ／＼お座禪の最中でもござりませうほどに。

田毎　ほんに、さう遊ばしませ。おからだに障りましては、おわるうござります。

伊賀　いや／＼、それには及ばん。すぐに行きませう。……したが、お氣むづかしい折から、そなたゝちが附いてゐてはわるい。用があらば呼びませう。今の、あの、二本松の邊に控へてゐや。

二人　はい／＼。かしこまりました。

ト伊賀の方、田毎へ「かつぎをこちらへ」とこなし。これにて田毎は被衣を伊賀の方へ渡し、小柴と共に會釋して、元來た坂路を登りて、姿を消す。

ト伊賀の方は徐かに左右を見廻し、やがて懷ろへ手を入れて、何物かを探る思入。

ト其襟元から大小三疋の蛇がによろ〳〵と鎌首を出す。それを見て一寸思入、すぐに指の先で輕く其頭を叩いて引込ませ、同時に上手前の泉に目を附けて、徐かにそれへ立寄り、おのが顏姿を水鏡に映して見ることありて、うなづき、やがて既う大分斜になりかけた午後の日光を厭ふらしく、かつぎを被りつゝ、そろ〳〵堂に近づき、石段を上り、堂の側面に出で、火燈口式の窓口から、そつと內部の樣子を窺ふ。

第四場　元の堂內

前の場の通り、義時は、瞑目して、禮盤の上に結跏趺坐してゐる。が、顏面神經は絕間なくぶる〳〵と顫動してゐて、心の中は落ちついてゐないらしい。その顫動も、はじめは顏面だけであつたが、見てゐるうちに、それが全身に及ぶ。次の獨語は、或部分は只の自問自答であるが、或部分は辯疏のやうでもあり、叱咤のやうでもあり、或部分は疑惑の歎息でもあり、或部分は懊惱の呻きでもあり、或部分は夢の裡でうなされてゐるが如くである。恐怖、悔恨、猜疑、憂悶、心の苦み、肉の疼み、種々雜多の感情が混淆になつて其心中に洶湧し、往來し、衝突してゐるらしいのが、じつと瞑目はしてゐるが、其顏面表情に、歷々と見えてゐる。

義

で、其言葉の調子も、はじめは低くもあり、緩くもあり、ねごとのやうでもあるが、やがてそれが高くもなり、急にもなる。

それは是非に及ばなんだのだ。……天下は天下の天下だ。天下の安危には易へられんわい！……馬鹿ッ！……けれども、あの折、○○みづから出陣せられなかつたのが此方の幸運だつた。怖しいのは、人心の微妙な作用だ。……決して侮れん。……だから、泰時が——餘計な事に！——途中から引返して來て、「若し御親征に逢つたら、如何しよう？」と聽きに來た時……其時、乃公がさう言つた。「まさか、鸞輿に向つて弓を引くわけにはいかん、……けれども……」

トいひかけたが、俄に愕然として我に返つて

あゝ！

トいふと共に、急に崩れかけてゐた形を直して、半分口のうちで

內空外空、內外空、空々、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、散空、無變異空、本性空、自想空、一切法空、不可得空……

ト唱へ〳〵。次第に沈默し、二三分間は不動不言でゐたが、やがて又我知らず、半眼に目を開いて、苦悶の表情をして、情けなげな聲で

あゝ！　あゝ！　隱岐の小島！……○○このかた○○として○○○○つゞいて來た……天子だ！

ト思はず此末の一語を大きく手強く言つた自分の聲に駭いて、我知らず目も口も

くわつと開けて、正面を切り、いはゞ物におびえたやうな表情をしたが、やがて
又我に返つて怖い貌をして

何を馬鹿な！……○○なぞは有らう筈はない。……同じく○○だ！　乃公でなくて、どうして此亂世が治まる？……馬鹿なッ！

ト言つて、居丈高になりかけたが、やがて其怒らせた肩をおろして、又じつと目を瞑つた。が、一分と經たぬうちに

が、必ずそれを、口實に、吊ひ合戰なんぞと言ひたて……

ト又暫く間をおいて、目を瞑つたまゝで

今こそ勢ひに怕れて蟄してはゐるが……いや、たしかに怨んでゐる。……まさか、あの一族だけは……大丈夫だらう。……あいつをあれだけ手なづけておいたから。……よもや？……

トまでは小聲で穏かにつぶやいてゐたが、やがて堪へがたげな苦悶の表情をして、頭をぶる〳〵と顫はせたかと思ふと、又目をくわつと開いて

あゝ！　あゝ！　此四十年來、心血を絞り、骨々を碎きみじいてまで、やつと築きあげて來た此北條の家の地盤も、おれが目を瞑ると一しよに、忽ちぐわら〳〵と崩れてしまふのか？……あゝ千仭の功も！……あゝ！

ト額に手を加へて暫くは無言で、苦悶してゐたが、やがて如何にも草臥れたらしく、歎息して

あゝ！　疲れた！……あゝ、あゝ、おれも疲れた！……あゝ、あゝ果しもない心づかひ！　それだのに、一人として役に立つ奴はない！　一人として此苦みを知つて、片腕となつてくれる奴がない！……あゝ！　あの深見……三郎二郎！

　トふといひかけたが、忽ち苦い顔をして口を噤み、やがて又太い溜息をして

あの泰時は……あゝ！　あれはまたあんまり！……

　トいひさして又力なげに歎息して

あゝ！　疲れた！　疲れた！

　ト如何にも意氣地なく、ぐたりとなり、やゝ暫く術なげに喘いでゐたが、漸くにして

いや／＼！　いや／＼！（トいふと共にきつとなつて）何をいつてるのだ！　何を考へてゐたのだ！　あゝ！　又しても怠隙！　妄念！（と目を瞑つて）生死苦樂！……大無常！……大無常！

　トいひ／＼、取り亂してゐた形を改め、後ろの龕の方へ向き直る。さうして恭しく合掌禮拜して、極小聲で

南無文珠大菩薩！　南無文珠大菩薩！　我此昏蒙何の時にか醒めん！　願はくは、あゝ、願はくは、大慈悲を垂れ、大般若を頒ち下したまひて、我此昏蒙の苦を拔かせたまへ！　救はせたまへ！　南無文珠大菩薩！　南無文珠大菩薩！……

　トだん／＼聲を低め、とゞ無言になつて祈り、やがて向き直り、更に結跏趺坐し、

瞑目したが、二三分すると、こんどはこくり／＼と居眠りをはじめ、幾度も禮盤から轉げ落ちさうにしては驚き醒め、又何事か口の内で唱へ／＼してじつとなる。かと見るうちに、又もこくり／＼。やがて又驚き醒めて、唱へ言を繰り返す。そのうちに又もや顔面神經が顫へ出して來る。すると、小聲で、斷續的に

賴家の死んだのは、いふまでもなく……實朝も……公曉も……（ト暫く間を置き）繼母をおとしいれた上に、現在の實父をも幽めたなんぞと……

トいひかけて又暫く默つてゐたが、急に何か不安を感じたらしく

いや／＼、義村とても――手なづけてはおいたが――油斷はならん。……それにあの……實雅！……家柄が家柄だけに……（トきつと何か思ひ當つたことがあるらしく）どうも本當らしい！　光宗と彼れと……紀河の矩秀……紀河の……（トいひさして、溜息を吐き）さうだ！　あの時、圖らずも、あの宗近めの毒藥を奪ひ取つたのを幸ひに……牧の方の陰謀の裏を掻くため……（トいひかけたが）可哀さうだつたのは弟……政範！

トいふと同時に、一種名狀しがたい苦悶の表情をして、目を開き、情けなげに

あゝ！　政範！

トいつて、悲しげに首をうなだれ、暫くの間無言でゐたが、又急に何か思ひ出したらしく、眉をひそめて

此間、あの蜂王めが、庭を歌つて歩いてゐた奇怪な唄！……それから、此頃中、二度まで續けて見た、あの厭アな夢！……まさとまさ！……雅と雅、政と政！……方！……

…時！……全くたつた一字ちがひだ！……まざ〳〵と物の怪……あゝ！　物の怪！…
…祟り……死霊の！

ト忽ち悚然としたる思入。

ト座禪の膝は、もうとうに崩れてしまつてゐる。

これより先、義時が頻りに「南無文珠菩薩！」を繰返してゐた時分に、堂の背面の扉が音もなく開けられて、伊賀の方が、脱いだ被衣を小脇に抱へて、そろ〳〵と龕の下手へと廻り出でて、じつと義時の様子を窺つてゐたが、此時しづかに前の方へ歩み出る。

時刻はまだ午後の四時過なのだが、こゝは樹木の繁茂してゐる上に谷間であるから、傾きかゝつた日光は、もう殆ど直接には映してゐない。随つて、堂内の如きは、もう大分うす昏い。で、一週間以上の難行で、今だに衰へてゐる伊賀の方の相貌は、如何にも重病人らしく、蒼白くも凄くも見られる。

さて、義時は、我知らず後ろが見られるやうに感じたらしく、先づ窃と上手の奥を見やり、やがて龕の背後を窺ひ、次第に下手へと其目を轉じた。ちやうど此途端に、伊賀の方が、下手の奥から廻り出でたので、義時の臆病げな其目は、はたと伊賀の方の顔と出逢つた。義時は眼球が飛出すかと思ふほどに目を瞠つて、覺えず禮盤の上に突立つたが、忽ちよろめいて蹈みはづし、よろ〳〵と二足三足、上手の前寄へとたぢろぎ、そのまゝのめるかと見るうちに、ちやうど手に觸る曲

彔を力杖にして、辛と踏み止まつた。さうして進みもせず、退きもせず、石の像のやうになつて、じつと伊賀の方の顔を見詰めてゐる。

ト伊賀の方は、如何にも病んで疲れてゐるらしい力ない聲で、しづかに、とぎれ〱に、

伊　わが夫、御免下されませ。……もうお行は果てましたか？

トいひつゝ、禮盤の下手へ進み出でゝ、一寸膝まづいて、

思うたよりも早いお快氣……ほんに悦ばしう存じまする。

ト此間に、義時は、だん〱我に返り、もう既に恐怖の表情は跡なくなつたが、尚頻りに焦々するらしい心を、じつと自ら制して、辛うじて落ちつき、曲彔に腰をおろし、むづかしい貌をして、不興げに默つてゐる。

ト暫く間をおいて、伊賀の方は又言葉を繼ぐ。やつぱり力なげな聲で、時々術なげに息を吐いて、とぎれ〱に言ふ。

お行の妨げをせまいため、わざと案内をばさせませいで、卒爾にお見舞申しました。若しお機嫌に叶はなんだら、どうぞ慮外をばおゆるされませい。……わらはも、あの翌る日から、持病が起つて、此間中は、枕に就いてばかりをりましたが、……けふは餘儀なく申さねばならぬ事があつて、お見舞かたがた參りました。

ト義時は心が落ちついたらしいが、尚むづかしい顔をしたまゝで、

義　ふむ！　餘儀ない大事？　といふのは？

伊　餘の儀でもござりません、我家の跡目相續の事について……

　ト いひかける。義時はぎつくりして、また忽ち沈着が破れかけて

義　え？　又あの、此間の相談か？

　ト いひつゝ不興げに顏を背ける。

伊　(苦しげに、靜かに) いかにも、あの事に就きまして。家國の爲には、申しにくいとも申さねばなりませぬ。……幸ひ一旦は御平癒あつたとは言へ、もはやお齡の上の、かうした御容體であるからには、――現に四五日前のやうな不慮の事もあつて見れば、――かんまへて安心はなりませぬ。家のため、また天が下のためをおぼしめすなら、今の間にこそ後々の事をも、とくと指圖しておかせらるべきでござります。これは既う已に先日も、一わたりは申し上げましたことなれども、けふは取りわけ、曲げても申さねばならぬ仔細あつて……

　ト 息苦しげにいひかける。これより先、義時の面上に、次第に猜疑、憎惡、憤怒などとも解釋せられる表情が交代したり、混淆したりして現れ、其都度、義時は目をけはしくして伊賀の方の顏をきつと見詰めてゐたが、此時もう堪へかねたらしく、はらただしげに、

義　それで、……どう指圖しろといふのだ？

　ト 聲の調子は低いが、手強く、口早に、むしろ反撥けるやうに言ふ。けれども伊賀の方は、やつぱり前と同じ調子で、

伊　さア、先日も申した通り、和田の一族が亡びて後は、由緒なり、權勢なりの、直に我家に次ぐものは、先づあの三浦の一黨ばかり。彼等を巧手に用ふれば、末長う無二の身方、我家國の柱石ともなるべきなれども、若し野心を抱かせたら、我夫亡き後には片時も安心はなりませぬ。豫て我夫にも、其處に御用心あつたればこそ、あの義村をば政村の烏帽子親とはなされたのでござりませう。わらはが、世の思はくをも顧みず、政村を是非お跡目にと望みまするも、畢竟は、あの義村の心をば攬らんため。是れぞすなはち我北條家安泰長久の大計にござります。或は、我實子可愛さの女心、身勝手ともおぼしめすまいものでもなけれど‥‥

トいひかける。

義　(皮肉に)では、さうでないといふのか？

伊　はて、おほせでもないことを！

義　(手強く)虚言を吐け！

伊　え？

義　剛慾をかはきをるな！

伊　え？　我夫！　何といはせられます？

義　(向き直つて)乃公を欺すことが出來ると思ふか？

伊　え！

義　(睨みつめて)やい！　乃公が目を瞑るのをば俟つて、あの實雅を將軍とし、政村をば表

伊　義

に立てゝ、兄の光宗に執權の實を握らせ、自分は尼御臺の役をしようといふ陰謀であらうが！

トきつと言つて、ふつと手に觸る戒刀を、殆ど半無意識に左手に掴んで、禮盤の上に居丈高になる。

まア、思ひがけない！ 疑ひにも事を缺いて、てもまア！あんまりな、あさましい、その‥‥

トいひさして、後は言へないといふ風に、泣く。

（それをじつと見おろし、睨みつめて）いゝや、それに相違ない。此四十年來、乃公の‥‥（ト喘ぎながら）密事を悉く知つた者と言つては、あの深見三郎二郎たつた一人の外にはなかつたが、その深見めが、あの公曉の事からして、乃公の手にも負へぬ程に増長をしつて‥‥

トいひかけると、むら／＼と過去の事が思ひ出されて來たらしく、じつと向うを見詰めながら、

すてゝおけば、何をしいだしをるか圖られんので、手早く彼奴をかたづけるために‥‥（トいつたが、太い息を吐いて）あゝ！ 女と小人！‥‥つい何もかも知らせてしまつたのが乃公の誤りであつた！‥‥

ト急に伊賀の方を見返つて、

そこへ附け込んで、強もてゝ跡目を取らうといふのだな！

トきつといふ。

まア！　何といふ……情けない……そのわるずゐ！……

ト、いひさして、わざと取亂して泣く。之より先、義時が「どう指圖しろといふのだ？」と叫んだ頃に、下手の降り口へ深見小三郎がそろ〳〵と降りて來る。さうして伊賀の方の「先日も申した通り、云々」の白の間に、堂の下手の側面の石段を上つて、よろしく思入、そこの火燈口式の窓口に寄りそつて、內の樣子を窺つて居り、此時、義時の此言葉を聞いて、大いに驚く思入あり、尙息を殺して聽いて居る。

いゝや、さうだ。きつとさうだ。やい！　それを乃公が怕れると思ふか？　おのれ！乃公の密事の有りつたけを、何處へなりと、だれになりと、披露しをれ！　吹聽しをれ、うぬ！……一〇〇〇〇をも物ともせぬ義時だ！　三〇〇をも島流しにした義時だぞ！　天上天下、此義時に刄向ふ者があるか？　うぢむしめが！

ト戒刀を左手に摑んだまゝ、まるで病苦などは忘れてしまつたやうに、猛然として禮盤の上に突立つ。此間、伊賀の方は、如何にも弱々しく力なげに、毯の上に突伏して、泣きながら、

（ます〳〵苦しげな息づかひて）あさましい其疑ひを晴らすため、……所詮、いはいでは叶はぬことゆゑ、……今いうた表立つた仔細の外の、餘儀ない理由を言ひませう。……

（ト喘ぎながら）政村をば跡目にと願ふのは……ゆめさら生さぬ仲の子を疎み、生みの子

義　伊　義

を世に立てたいなんぞといふ、さうしたさもしい慾心でない證據は‥‥

ト苦しげに息を繼ぎながら、

此間からの、わらはのわづらひ。‥‥その原は‥‥さる怖ろしい‥‥死靈の祟り！

トこれにて義時はぎつくりしたる思入。

え！

トいふと共に、突立つてゐた威嚴のある姿勢が、又淺ましく崩れかける。伊賀の方は、きつとそれに目を附けたが、又忽ち病苦を裝ひ、なやましげに喘ぎつゝ、

これ、御覽なされ、わらはの此五體の衰へを！　わらはも、我夫と同じ樣に、とりわけ此十日このかたは、夜毎のやうに、其死靈に祟らるゝ、身の惱み、心の惱みに‥‥眠られねばこそ此衰へ！‥‥（ト苦しげに息を繼ぎて）政村を跡目にと願うたは、ひたすら其死靈をば和めうため！‥‥なれども、はじめは、心の迷ひかとも疑ひ、中頃は父や兄の名に恥ぢて、有りのまゝには言ひ出しかね、今も今とて、わざとこしらへて申したゆゑ、御不興の上にその疑ひ！‥‥

ト又泣く。義時はまだ突立つたまゝではあるが、前の居丈高の擬勢は脫けて、

死靈とは？‥‥死靈とは、何の死靈？

ト半信半疑の體で、伊賀の方をきつと見下しつゝ言ふ。

ト伊賀の方は、尙俯向いたまゝ、はじめは泣聲で、低く、とぎれ／＼に物を言ふ。其中に、それが、だん／＼と調子高になり、モノトナスな、しやがれた、物すご

伊

い聲に縺つて行く。

淺ましや！　悲しや！　怨めしや！　かけし年ごろの大望の、人の爲に謀られて、うたかたの、跡なく消えしだにも怨めしいに……何の科もない可愛し子をば、あの花のやうなわく子をば、人手にかけて、非業に失うたる其怨み！　いつの世にかは忘らるべき！　魂魄永く此土に留まり……

トだん／＼言ふことが物すごくなると共に、伊賀の方の表情もそれにつれて變化し、とゞすつくと起つ。これにて義時悚とした思入、思はずたぢ／＼となる。ト伊賀の方は、又忽ちばたりと倒れ、如何にも苦しげに身を悶え、我手で胸元をおさへながら、聲だけはやはり物すごい幽靈聲にて、

只一字のみ異なつたる、同じ呼び名の緣に牽かれ、無慚に破れし前生の、その妄執をらさんため……

トこゝまではしやがれたモノトナスの聲で言つたが、又急に持前の伊賀の方の泣き聲に戻つて、苦しげに喘ぎながら、

夜毎にわらはの夢枕に、あさましい姿を現し、……政村と生れ換つた政範に……此家の跡目を讓らばよし、若しそれをさへ拒むならば……

ト苦しげに喘ぎつゝ言ひさして、又頻りに身悶えし、忽ち又前のしやがれ聲に戻つて、

もしそれをだに拒むならば、見よ／＼今に、おのれ、怨めしい極重惡人！



ト伊賀の方又すつくと立ち、義時をきつと睨みて、

今に其報いを見せてくれん！　まづおのれが後添ひの……此女めを！　これを見よ！

ト伊賀の方又ばたりと倒れ、はげしく身悶えし、敷皮の上を轉げ廻つて苦む。義時我知らず其そばへ寄らうとする。此うち伊賀の方の小袿は脱げ落ちる。夏衣裳の肌薄なれば、轉げ廻るうちに、袖口、襟元のみだりがはしくなるにつれて、腕、胸元など折々あらはになる。ト一疋の蛇が二の腕に巻き附いてゐるのが見える。さうしてそれが、突然鎌首を立てゝ義時に向ふ。義時はびつくりして、小聲で

義　あ！

ト叫んで後ろへ退る。これと同時に、伊賀の方の頸にも一疋の蛇が纏ひ附いてゐるのが目に附く。途端に、伊賀の方の裾からも、又小さい奴が一疋這ひ出し、義時の足元へ近寄る。で、義時はうろたへて避ける拍子に、それを踏む。トすぐに其足首に巻き附く。これにて義時は、身悶えして、とゞそこへ卒倒する。

ト蛇は悉くいづこへか逃げてしまふ。此間、伊賀の方は、氣絶したやうにもてなして、じつとしてをり、脱げた小袿の蔭から、そつと頭だけ擡げて、義時の様子を窺つて、よろしく思入。

此以前、小三郎は、窓の外にて、始終の模様を見てをり、驚く思入よろしく、此時さすがに捨ておきかねたといふよりも寧ろ本能的にといつたやうな風に、傍の扉を開けて走り入り、先づ義時を抱き起し、よろしくこなしあつて、ふつと後直

小

ろの卓子の上の藥湯に目を附け、それを取り、やがて義時に飲ませ、介抱することよろしく、小聲にて、

御前！　御前！

と呼ぶ。義時やう／＼息を吹返す。けれども一寸目を開いて見て又閉ぎ、術なげに喘いでゐる。

此うち小三郎は、卓子の上の撞木に目を附け、手早くそれを取り、軒先へ走りいでゝ、喚鐘を打鳴らす。

伊賀の方は、尚もとの通り、突伏したまゝでゐる。

程なく、堂の背後からは小柴と田毎、又下手の降り口からは右近が、共に急ぎ足で駈けて來る。

幕

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

かくて打出でぬる又の日、思ひがけぬ程に、泰時ただひとり鞭をあげて馳せきたり。父胸打騒ぎて、「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたの掟などをば、仰の如く其心をば得侍りぬ。若し道のほとりにも、計らざるに、辱けなく鳳輦を先立て御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに參り合へらば、其時の進退いかゞ侍るべからん。此一事をたづね申さんとて、ひとり馳せ侍りき」といふ。義時、とばかり打案じて、「かしこくも問へる男かな。其事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦を切りて、偏に畏まりを申して身

を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵を賜はせば、命を捨てゝ、千人が一人になるまでも戰ふべし」といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。云々。（增鏡）

同日（承久三年六月八日）戌の刻、鎌倉に雷あり、右京兆の館の釜殿に落つ。疋夫一人之が爲に侵され畢んぬ。亭主（義時）頗る怖畏し、大官令禪門（大江廣元入道）を招きて之を示合し、武州（泰時）等の上洛せるは朝廷を傾け奉る者なり、而して今此怪あるは若し是れ運命の縮まる瑞歟とありければ、禪門云はく、君臣の運命は皆天地の掌る所なり。倩ら今度の次第を案ずるに、其是非天道の決斷を仰ぐべく、全く怖畏の限りにあらじ。就中此事は關東の佳例たる歟。文治五年、故幕下が藤泰衡を征せられし時にも、奥州の軍陣に於て、霹落ち訖んぬ。先規なり。故らに筮あるべし、とありければ、親職、泰貞、宣賢寺、最も吉なるの由、同心して之を占ふ。云々。

三日（貞應二年十二月）丑の刻、奥州の御亭に光り物あり。仍て即時に大倉の藥師堂に於て御祈を始められ、神馬を鶴ヶ岡に奉らる。又七座の招魂祭あり。云々。（以上吾妻鏡）

第三幕

第一場　義時の寢所

正面の上手寄五間程の間は、上段の間風に設置つたる義時の寢所。（こちらから見ると、舞臺面全體がやゝ漏斗狀に見渡される裝置）。其奥の見切、四間の間には一面に壁代を垂れ、其壁代の兩端の柱から上手へかけてずつと斜に三間程の間は同じく壁代。又下手へ斜に同じ間數の間は壁。

上段の間の直前は、一帶に落間。上段の間と此落間との間には簾が降るやうになつてゐる。（漏斗狀の裝置ゆゑ、此落間は、上段の間の框の邊では五間程だが、舞臺端では、六七間になつてゐる。）

此落間の上手には、上段の間の壁代と準へに、斜に簾が降されてある。其簾の上手に板敷の長廊下の一端が見える。其長廊下の正面は板羽目。

又、落間の下手には、上段の間の壁と準へに斜に降されてある簾を隔てゝ、奥へ細長くなつてゐる次の間。其奥の突當りには妻戸。それから下手の奥寄の方の見切は板羽目、前寄の半分は蔀格子。

上段の間の中央に、義時、幾枚か重ねて敷きたる敷蒲團の上に疊み上げたる寢具に靠れて、苦しげに肩で息をしてゐる。右近、其下手に坐りて、藥湯の準備をし

てゐる。

よき屛風、脇息、厨子、藥餌の調度、燈臺など。落間のやゝ下手に、加持の藤内、斜に義時の方へ向いて、膝に兩手を置き、頭を垂れたまゝ、思案に暮れてゐる體。それよりも更に下手の前寄に、小三郎、これも頭を垂れ、兩手を膝に突いて、澁面を作つてゐる。此落間にも一脚の燈臺。次の間には、蜂王と砂王とが、双六盤を間に置いて、双六をしてをり、侍女の甲、乙、丙が其周圍に坐つて、それを觀てゐる。いづれも夜伽の體なのである。こゝにも一脚の燈臺。時刻は前の幕と同日の午後九時頃。

義　(凭れて、俯向いたまゝで、力の無い聲で) 右近！　右近！

右　はツ！

ト傍へ進む。

義　(同じ態度のまゝで) まだ、婆は、歸つて來んか？

右　はい。……まだ、退つて參りません。

義　御所へ往つたにしては、手間が取れる。　どうしたのだらう？

右　ほんに、どういたしましたことやら！　しかし、もう程なく、立歸りますでござりませう。……お白湯でもさし上げませうか？

義　不要！　不要！

トいひつゝ呻く。右近は摺り寄つて介抱する。

此うち、落間にじつと控へてゐた藤内、少しく頭を擧げて、義時を仰ぎ見て、一寸思入あつて、聊か膝を進めて、

藤　押返して、お願ひを申し上げまするは、お慮外ではござりますが、どうかその、せめてお次の間で、お夜詰をいたしますることだけなりと、許してお遣し下されませ。何がまア御機嫌にさはりましたやら存じませんが、十四の年から十八の今年まで、人幾倍の御寵愛を受けてをられた仁だけに、俄の御勘當が、一段といぢらしうござります。どうかまア、お次でお夜詰をいたしますることだけは‥‥

トいひかける。これより先、義時は煩げに、頭をぶる／＼させて、小聲で、「默れ！默れ！」と俯向いたまゝで、二度ばかり命令したが、耳の近くない藤内には聞えぬかして、尚も喋舌りつゞけるので、きつと頭を擧げて、

義　えゝ、うるさい！‥‥默れ！

ト一喝した義時の顏の色は、前の場のそれよりもずつとわるい。殆ど血の氣がないやうにも見える。藤内は口を噤む。同時に、義時は下手にゐる小三郎に目を附けて、不快げに、

あゝ！　まだ！　(トこはい顏をして、右近に)なぜ小三郎めを退げん？‥‥目通りは叶はん。‥退げッちまへ！

ト焦立たしげにいふ。

右　はッ。‥‥これ、藤内どの、かうしたお不加減の折に、しつこうお願ひ申すのは、な、

却つて不爲になりまする。いづれ、機を見て、わたしらからも。まゝ、ともかくも、小三郎どのを。（トいつて、特に小三郎にも）な、小三郎どの！

ト呑込ませる。これにて藤内は思入あつて、小三郎へよろしくこなし。小三郎は、無言にて、義時はじめ右近、藤内へ會釋して起ち、徐かに次の間へ出で、何か沈思しつゝ、突當りの妻戸を開けて出て行く。後に藤内は、手を組み、頭を垂れ考へ込んでゐる。

これより先、義時は、また寢具に靠れ、首を垂れてゐたが、

義　小三郎めは退つたか？

ト俯向いたまゝでいふ。

右　はい。退出いたしてござります。

義　（同じ態度のまゝで）藤内はをるか？

右　はい。あれに控へてをります。

義　（少しく顏を擧げて、下手を見て）藤内！

藤　へい〳〵！（ト膝を進めて）何か御用でござりますか？

義　若黨共によく吩附けて、（ト嚴格な聲で）あの小三郎めの擧動に氣を附けさせろ。

藤　へい〳〵。かしこまりましてござります。

ト義時は、此命令をした爲に、息を切らせて喘ぐ。右近は介抱しながら、

右　どうやら甚うお術なさうな。やつぱりお横のはうがよろしうはござりませぬか？

ト義時無言にてうなづく。右近かひぞへして、仰向に臥かし、寢具を被せかける。

義　(仰向になつてゐて)右近、奥は、あれから、如何した？

右　はい。あの……あれからあの、何でござりました。全くお正氣があらせられませんやうでござりましたので、早速紀河の矩秀を呼びに遣はしまして……

義　(不快さうに)あゝ、矩秀！

右　いろ／＼と御介抱申し上げましたところ……

義　あゝ、もうよし！　もうよし！……措け／＼！……今は……聞きたうない！　聞きたうない！

ト口早にいつて顏を背ける。これにて右近口を噤む。

一同暫く無言。次の間では尙双六の勝負を續けてゐる。

ト義時又苦しげに呻く。右近が急ぎ介抱しようとすると、義時は喘ぎながら、

婆は、まだ、歸つて來んか？

右　はい。まだ……退つて參りません。

ト義時は本意なさゝうに、

義　あゝ！……

ト太い溜息をしたが、又暫く無言。やゝあつて又、

右近！

右　はい／＼。

義　暫時眠りたい。簾をおろしてくれ！　そこの簾を！

右　かしこまりました。

　ト徐かに上段から落間へおりて、次の間の方へ向いて、小聲で、

侍女たち！　侍女たち！

　ト呼ぶ。これにて侍女、甲、乙、丙、

侍女　はア。

　ト小聲で答へて、落間へ入り來る。

右　しばらく御寢なるほどにの。……

　トよろしくこなし。これにて甲、乙、丙は徐かに上段の間にあがり、右近の指圖に從つて、調度をかたづくることありて、とゞ正面の簾をおろし、右近と共に落間へおりる。右近は、

では、御機嫌よろしうお寢み遊ばされませ。

　ト會釋して起つ。侍女らは元の次の間へ退る。此間、藤内は、手を組んだまゝ、何か心配げに考へ込んでゐたが、右近が落間の上手に住ふと同時に膝を進める。

藤　でもまア、こんなことで濟んで、ようございましたなア。つい此間の今夜といひ、肝腎の力綱の行蓮どのは他行中といひ、ま、どうなることかと案じ抜きましたが。……

　トいつて、あたりへこなしあつて、聲をひそめて、

右　藤　右　藤　右

一體まア、けふは、どうなされたのでござりませう？あの通り甚いお元氣でござらつしやつたのに。何かまた奥方さまと、爭論でもさつしやつたのでござりませうかな？

さア、眞先に其場へ駈け附けたあの小三郎どのさへ、……何にも知らぬ……といふのが不審。

されば、……（ト考へて）思ひ餘つて、つい、とんだお慮外を申しあげて、御機嫌を損ねたは此藤内。それだのに、其藤内にはお咎めがなくッて、あのお氣に入りの小三郎どのを、御勘氣（ト又考へて）といふのも不審。

小三郎どのゝ目の色が例になく……（ト考へて）血走つてゐるのも、……一つの不審。

掃除のよう届いた筈の、あのお庭の、しかも四阿の中から……（ト考へて）蛇が這ひ出して來たのも不審。

それに、あの小三郎の御密訴のやうにもなく、何氣なげに取りすました、あの奥方の、お見舞ぶりも不審の一つ。

トいつたが、きつと向うを見て、

それにつけても、あの亘理どのは、なぜ遲いか？一刻も早く御所のお模樣が聞きたいのぢやに。……あゝ、何かと氣の揉めることばかり！……

トいつたが、藤内の方へ向き直つて、

藤内どの、とにかく、こよひは、油斷がなりませんぞ。さしづめ、若黨衆に吩咐けて、四方の御門をば固めさせて下され。

藤 心得ました。手前もさう思つてをつた所でござります。では、早速に手配りをいたしませう。御免下されませ。

ト藤内は、右近に會釋して、次の間へ出で、妻戸口から出て行く。やがて右近も起ち上つて、上段の簾際に立寄り、内を窺ふ思入あつて、うなづき、すぐに次の間へ出て、侍女らに、

右 どうやら御安眠遊ばしたやうぢや。急にお目ざめにもなるまい。わしは、ちよとお表へ往つて來ます。その間、暫時、おぬしたちに賴みましたぞや。

皆々 はい〳〵。かしこまりましてござります。

ト右近は妻戸口から出て行く。侍女らはよろしくこなしあつて、又双六をはじめる。こんどは、砂王、蜂王は觀る方へ廻り、甲と乙とが双六盤に相對する。

四つ（午後十時）の鐘が鳴り渡る。

燈臺の火影が、——三ケ所とも、——段々暗くなりはじめ、上段の間のが眞先に、次に落間のが、其次に次の間のが消える。

* * * * * * * * * * *

第二場　夢の裡の幻景

燈火が昏くなりはじめると同時に、四方が朦朧となつて來て、遂に眞昏闇となる。其うちに、奥の方にて、遠く陣貝、陣太鼓の音が聞え、鬨の聲が聞え、それが次第に近くなるにつれて、正面の簾の中が夜が明けてゆく時のやうに、だん〳〵明るくなり、とゞ月夜ほどの明るさになる。

トそれと同時に、以前の簾のうち、と思はれるあたり一ぱいに一の幻景が展開される。それは、京都の、法皇の御所の正門前の景であるらしい。

中央よりはやゝ下手寄の、ずつと奥に、遙かに院の御所の檜皮葺の正門が、たかゞ五尺ぐらゐの高さになつて見えてゐる。其上手、下手は、式の如き築地なのだが、こちらから見ると、それが正門を項點にして漏斗狀に左右へ、ぐつと斜に開いてゐるので、前面に大きな空間が出來てゐる。其廣々とした空地にも、また築地の內外にも、樹木などは、只の一本も見えてゐない。

此景が、まるで幻燈畫のやうに眞正面へ現れると同時に、上手で、男女老若の哭き叫ぶ聲々が、陣鉦、矢叫び、鬨の聲なぞと混淆になつて聞える。

ト上手から大勢の男女老若が、こけつまろびつして、逃げて來る。(それは、以前落間のあつたあたりで、上段の間の直前が、いつの間にか、都大路に變つてゐるのらしい。)其老若の多くは殿上人である。衣冠の者もあれば、束帶姿の者もある。緋の僧衣の老僧もあれば、五つ衣の官女もあり、立烏帽子、風折もあり、尼もあり、童もある。地下も、雜式もゐる。

これらが、こけつまろびつして逃げて來る後からは、夥しい鎧武者が、武器々々を揮り翳して追つかけて來る。

で、一同は、右往左往に逃げ惑ふ。ころぶ、突倒される、踏みにじられる。切殺される者も尠なくない。見る／＼、其多數は血みどろになる。

早い話が、土佐、住吉の古い軍繪卷中の內裡攻めか何かの一枚に魂が入つて、活きて働くのかと思ふやうな、慘しい活畫圖である。

暫くして群衆も、鎧武者も、追ひつ追はれつして、左右へ散つてしまふ。

ト遠くの御所の門內から、一群の鎧武者が繰り出して來る。馬上の立烏帽子の武者は、其大將らしい。遠いから、いづれも二三尺ぐらゐの身長に見える。

つゞいて四方の坂輿――例の屋形を取りはづしたの――を雜式が舁いで出る。其脇には、殿上人らしいのが二人、僧が一人附添つてゐる。其後からは、又鎧武者の一群。

此行列は、門からずつと斜に、上手の前へと徐々と練つて行き、やがて見えなくなる。

トだん／＼四下が昏くなりはじめ、遂にまた眞昏になる。

ト思ふうちに、又だん／＼明るくなりはじめる。

見ると、いつの間にか、すぐ前の處――以前落間のあつた邊――は杉並木の景に變つてしまつた。さうして其杉並木は、大抵梢が見えない程に丈が高く、隨つて幹も――上手寄のなぞは――中々太いのであるが、それが、中央から上手へかけては段々密接

して立ちならび、下手の方は、ずつと疎らに生えてゐるので、奥の方が透いて見える。で、御所の正門や上手の築地が、尚先刻のまゝ、殘つてゐるのが見える。

ト男女の悲しげに泣く聲が下手の方で聞えて、やがて女御らしい貴婦人と女房一人、女童一人、立烏帽子の公家一人、品のよい尼一人、都合五人が、泣く〳〵下手から出て來る。さうして、上手を見て、急ぎ並木の蔭へ隱れ、共に上手を指さしなどして泣いてゐる。

ト上手の奥で、いかにも哀しげな雅樂の音色が聞え、それにつれて、立烏帽子や風折をかぶつた鎧武者共が、多くは長卷を携へて、列を正して練り出して來る。其うち、馬に乘つてゐるのは大將分らしい。其後から雜式が四方の坂輿を舁いで來る。殿上人らしい二人と一人の僧とが、泣く〳〵附添つて出る。さうして其後には、第二の鎧武者の群が續く。

ト前の五人づれが、こらへかねたといふ風に、並木の蔭から驅け出して來て、輿へ縋る。武者らが驚き怒り、こはい目附をして、これを逐ふ。

此騷ぎの末ごろ、輿はもう下手へ入つてしまひ、第二群の、殿の武者共も旣う殆ど下手へ消えかけるといふ時分に、又も向うの御門内から第二の同じやうな行列が練り出して來るのが、並木ごしに見える。さうして、それもまた、前のと同樣に、斜に上手の前へと練つて行つて、やがて見えなくなつてしまふ。

ト又も並木の上手で、前と同じやうな哀しげな雅樂が聞えて、そこから前のとそつく

り同じといつてよい一群の行列が繰り出して來る。眞先が四五人の鎧武者、其中の一人は騎馬。そのあとから四方の坂輿。又そのあとからも鎧武者の群。輿が並木の中央まで來ると、下方から、又も最前の五人が驅け出して來て、前と同じやうに輿に取縋らうとする。又無慚にも逐ひ散らされる。

ト又も奥の正面の御所から、第三の、同種、同形式の行列が繰り出して來る。やがて前景に於ても、前々のと全く同一樣の現象が展開される。それが又、同一樣の手續きで、無慚に逐ひ散らされる。

ト見るうちに、又も眼界が少しづゝ昏くなりはじめる。遠景の御所の門や築地が模糊となつてしまふ。

トどゝゝゝ、どうッ／＼と凄じく打寄せる高浪の音が聞えて來て、並木の奥に、遙かに一の離れ島を浮べた荒海の景が現れ、並木のすぐ後ろの荒磯から先刻の坂輿らしいのを三臺までも載せた船が、今ちやうど漕ぎ出でつゝ、其島の方へと進んで行かうとしてゐる。

ト次第に浪の音は薄れて行つて、絶えて、古風な神樂の鳴物が聞える。見ると、いつの間にか下手寄の杉並木は跡形もなく消えてしまつて、そこに小山の裾らしい小高い芝生が見え、又中央から上手へかけての並木も、最も太い三四本の幹だけを殘して、

其他はなくなり、その代りに、大きな、高い、幅廣な石段の、裾の方三分の一ばかりが見えてゐる。

ト下手の小山の蔭から二人の鎧武者がうそ〳〵と出て來て、何か囁き合つて、あたりを見廻し、人待ち貌である。すると、太い幹の間から、烏帽子直垂の、四十年輩の、一癖ありげな武士が、前後に氣を配りながら出て來て、何か前の二人へ合圖らしいことをする。ト二人は忽ち見返り、すぐに其傍へ行く。武士は二人へ何か言ひ含める。二人はすぐ上手へ入る。武士は一人殘つて、手を組み、何か考へてゐる。

ト上手の石段の上からだれやら降りて來る。はじめは、沓を穿いた足と奴袴だけが、妙に目立つて見える。實際、一二分間は、其足が石段の上の方に生え附いたやうになつてゐる。其うちに徐り〳〵動き出す。降りて來るにつれて、それは衣冠姿の立派な殿上人だといふことが分る。いよ〳〵地上に降り立つのを見ると、それは八九年前の――即ち全盛時代の――義時なのである。右手には儀式用の、黄金造りの御劍を捧げてゐる。

前の武士は、義時を見ると、すぐに驅け寄つて、何事をか報告するらしい。義時は大やうにうなづいて、捧げてゐた劍を、竹片でも棄てるやうに、路傍へ抛げすてる。

ト此途端に、ちら〳〵と雪が降り出して、見る〳〵大ぶりになる。其間に、いつの間にか、下手へ大きな石の鳥居が出來る。

ト上手の奥から又も神樂の音色が聞えて來る。すると、義時は、きつと上手へ思入あ

つて、武士へ何事をか耳打して、やがて二人とも鳥居の下手へ身を隱す。

程なく、上手から、石段の前を横切つて、一人の年の若い、緋の僧衣を被た端麗な僧が出て來る。やつと十八九でもあらう。それが鳥居近くへ來ると、義時と武士とは、急いで出迎へ、武士は如何にも恭しく、義時はにこやかに、敬禮する。僧はそれを喜んでゐるらしい。

そのうちに、義時は、何か武士に耳こすりをして、自分は例の幹かげへ入つてしまふ。ト武士は居殘つて、僧の袖を引張つて、石段の下まで連れて行き、上の方を指ざし、頻りに何か囁くらしい。ト僧は切齒扼腕して、くやしがる。武士は四下を見廻し、義時が棄てゝ行つた先刻の劍を拾つて、それを僧に渡す。僧はそれを受けとり、うなづいて、武士と共に、例の太い幹の蔭へ隱れる。

ト雅樂の、何となく悒鬱な音色が、上手の奥から聞えて來る。さうして、それにつれて、石段の上から、又だれか降りて來る。義時が降りて來た時と同じく、最初は沓と袴の裾とだけが、暫時固着したやうになつて石段の上の方に見えてゐる。其うちにそれが動き出す。降りて來るにつれて、それは東帶姿の人と衣冠姿の人であることが分る。よく見ると、それは前將軍實朝と文章博士の仲章なのである。仲章は手に御劍を捧げてゐる。

二人が地上に降り立つた其途端に、前の僧が――いつの間にか、白裝束の下に腹卷といふ公曉禪師の打扮になつて躍り出で、只一刀に實朝を斬斃し、返す刀で仲章をも刺殺

し、すぐに實朝の首を打落し、それを刀の先きに貫いて、高く捧げ擧げ、嬉しげに何か叫ぶらしく、天を仰いで大きく口を開く。

ト最前の武士が、拔足して、其うしろから忍び寄つて、只一刀に其腹を脊から前へと貫く。其切先が下腹の前へ三四寸がた突き出たのが、まざ／＼と見える。公曉はすぐ斃れてしまふ。

此間、雪はます／＼降りしきつてゐる。

武士は、公曉の斃れたのを見て、につたりと思入して、つか／＼と下手へ行かうとしたが、どうしたか、俄に苦み出して、雪の中へ倒れ、七顛八倒するうちに、口から夥しく韓紅ゐの血を吐く。

此うちに雪は全く降り止み、あたりが又だん／＼昏くなりはじめる。ト何處ともなく、平家琵琶の撥音が聞えて來る。

やがて四方がまた次第々々に明るくなる。三本の太い幹だけは元の通りに殘つてゐるが、鳥居はいつの間にか無くなり、其代りに、そこに池の水際らしいものが現れて、其邊一ぱいに眞菰だか菖蒲だかゞ生えてゐる。

悶え苦む武士と公曉のらしい死骸とだけは、元の處に殘つてゐるが、他には人の影もない。勿論、雪の跡形もない。

それから、上手の石段もなくなつてしまつて、そこには池に臨んでゐる釣殿めいた建

物が見え、燈火があか〳〵としてゐるので、そこの簾越しに、琵琶法師の影が透いて見える。

平家の撥音は尙つゞいてゐる。明月が中天に冴えてゐる。ト太い幹の蔭から、義時が――立烏帽子に水干、附太刀といふ打扮で――出て來る。

此時、血を吐いてゐた武士は苦しさに堪へぬらしく、水でも飲まうとするのか、這つて池の方へ行く。義時は徐かに其後に從いて行く。ト武士は、苦みながら、ふとそれを見附けて、怨めしげに見上げる。義時は、すぐに片脚を擧げて、武士を池の中へ蹴込んでしまふ。ぱつと水煙が立つ。

途端に撥音が止んで、ボーンといふ梵鐘の音が聞える。

義時は又徐かに上手へ歩み戻つて、公曉の死體らしいものを抱起す。見ると、それは公曉ではない。直垂を被た十四五歲の美少年の死骸なのであるが、これも口元から襟へかけて、鮮紅ゐの血が夥しく流れてゐる。毒でも飲んだのらしい。じつとそれを見詰める義時の貌には、一種の苦悶の色が浮んでゐる。やがて抱いてゐた手を離し、死骸を元の通りに倒しておいて、そのまゝ下手へ行きかけたが、さすがに忍びかねるといふ風に、又戾つて來て、再び死骸を抱き起す。

釣殿の燈火は之より先に消えてしまつてゐたが、此時その眞昏な釣殿の中で、悲しげにワーッと哭く女の聲が聞える。義時はそれを聞くと、ぎよつとした思入で、急いで例の幹の蔭へかくれる。

ト上手から四十六七とも見える一人の女房が、被たる衣裳もみだりがはしく、黒髪を振りみだし、全く狂氣の體で駈けて來て、少年の死骸を見ると、そのまゝひしと抱きついて、天を仰ぎ、地に伏しまろびて、慟哭するらしい。不思議に其聲は聞えない。或は頬摺をしたり、抱きあげたり、或は抱いたまゝ駈け廻つたり、暫くは前後不覺の有樣であつたが、とゞ奮然として突立ち上り、懷劍を拔き放つて逆手に持ち、目をいからせて、あちこちを見廻すは、我子の敵を搜すのであるらしい。其うちに、此狂女の目が、幹の蔭に隱れて、じつと樣子を窺つてゐる義時の目と、ぴたり出逢ふ。ト狂女はすぐに懷劍を振り閃めかして、まるで夜叉のやうな勢ひで、其幹陰へと突進する。義時は駭きあわてゝ、三本の幹の周邊を、幾たびも廻つて逃げる。狂女は其後を追ひ廻る。

此うちに、空には黑雲がはびこつて來て、月は隱れ、あたりが又昏くなる。やがてどカリ〳〵と雷光がして、雷が段々近く鳴り渡る。

どこへ隱れたか、義時の姿は見えない。狂女はます〳〵猛り立つて、物凄い形相をしてあつちこつちと搜し廻つてゐる。見ると、狂女の相貌は、いつの間にか、正眞正銘の、怖ろしい夜叉のそれに變つて、其振亂した黑髮は、毛が數十本づゝ縺れ固まつて、太い針金のやうに波を打ちつゝ逆立つてゐるが、よく見ると、それがいづれも蛇となつて鎌首を擡げ、紅ゐの舌を吐いてゐるのである。のみならず、今は懷劍を持つてゐない左右の手の、其十本の指も、それも悉く長々と延びて、蛇のやうに、うねり〳〵と

波を打つて、さうして其先の方は、やはり鎌首を擡げて、赤い舌を閃めかしてゐる。

上手の釣殿も、いつの間にか、薄昏い山蔭の、物凄い卵塔場に變つてしまつた。樟だか欅だかの大きな枝々が掩ひかぶさり、小笹や雑草や蔓物やが彌が上に生ひ茂つてゐる中に、幾つも〳〵五輪が立並んでゐるが、中にも一際目立つ中央のは、高さが五尺程もある。尚よく見ると、此卵塔場はおそろしく廣く、例の三本幹の背後の方までも續いてゐる。そのあたりずつと一面に同じ陰森な山かげで、さうして小笹や茅が生ひ茂つてゐる中に、殆ど無數と言つてよい程の多數の五輪が、其頭だけを見せてゐる。さて鬼女は、義時を捜しあぐんで、又も三本幹の背後へと廻り入つたが、そのまゝ姿が隱れて、暫くは出て來ない。

ト上手の卵塔場の最も大きな五輪のうしろへ、義時が突然その姿を現す。顔色が俄に甚しく憔悴して、急に六つ七つも齡を取つたらしく見える。もう酷く疲れ果てゝ、足元がよろ〳〵してゐる。大きな五輪につかまつてやつと其前へ廻つて出る、と旣う息が切れて堪へられぬらしく、そこに在る竹の花筒を抜いて、其水を飲まうとする。ト其花筒から、だしぬけに青い火がひら〳〵と燃え上る。驚いてそれを投出すと、大五輪が音もなく壞れ倒れて、そこに白衣亂髪の、一個の、氣高い、しかしながら何ともいへない怖ろしい顔色をした貴人の姿が髣髴として立現れ、きつと義時を睨みつめた。其十本の指はやつぱり悉く蛇と化して鎌首を擡げ、くれなゐの舌を閃かし、駭いて迯



げかける義時の首筋元を目がけて飛びかゝるのである。

義時は、こけつまろびつして、三本幹のうしろへ逃げようとすると、無數の五輪の頂點が、いつの間にか、悉く髑髏に變つてをり、さうして其中の最も大きい三つ四つは、其空洞の目の穴や鼻の穴から、ひら〳〵ひら〳〵と青い鬼火を吹出してゐる。全體の數は實に無數で、見渡す限り、みんな髑髏で、實際どこまで續いてゐるのか分らない程である。

で、義時は、又取つて返し、こんどは下手の池の方へと逃げたが、やがて息が切れて、いよ〳〵一歩もあるかれぬらしく、やつとの事で池の端へ這ひ寄り、眞菰がくれの水を辛うじて手で掬つて飲まうとする。

ト池の中からも青い火が陰々と燃え出し、義時が愕いて逃げ退かうとすると、其鼻の先へ、同じく池の眞菰の中から、およそ十疋ばかりの蛇が同時に鎌首を振立てつゝ飛びかゝる。ト見るうちに、白衣亂髪の、怖ろしい顏色の男が、眞菰の中から、半身を現す。前の蛇は其男の指の先なのであり、また其男は、先刻血を吐いて死んだ武士なのである。

これと同時に、例の二本幹の間からは、鬼女が又姿をあらはす。數十疋の蛇に化して蠢く黒髪を逆立てつゝ、また左右の手を高く擧げて働かせて、十疋の蛇を躍らせつゝ、耳際までも裂けたる紅ゐの口を開き、今にも此方へ驅けて來さう。

上手の卯塔場の方からも、先刻の貴人の怨靈らしいのが追つ掛けて來る。

義時は、怖れ戦いて、一生懸命に逃げようとするらしいが、どうしても腰が立たぬらしく、只いたづらに身悶えして、踠き苦しむ。

此途端、風とも雷とも地震ともつかぬ一種のおどろ〳〵しい物音がして、忽に見る限りの處が眞昏になつてしまふ。其昏闇の中で、物すごい呻き聲が聞える。

* * * * * * * * * * *

第三場　元の義時の寢所

其昏闇が又だん〳〵明るくなると、元の寢所なのである。

簾は依然として下されてあつて、落間のやゝ上手には、老女の亘理が、侍女の甲を敵手に、つい今がたまで双六をしてゐたらしく、甲は双六盤の脇に突伏して眠つてをり、亘理も盤に片肱を突いて、こくり〳〵居眠つてゐる。次の間には人影が無い。

上段の間の中で、義時がうなされて呻く聲が聞える。

其聲に驚いて、亘理はつと目を覺す。トすぐに侍女の甲をもゆり起しておいて、自分は急ぎ簾を褰げて內に入り、義時を介抱する。侍女の甲も續いて上段の間に近寄り、先づ悉く簾を捲き上げる。

亘　もし！　もし！　お夢でございます。お夢でございます。お目をお覺しなされませ。

ト起す。義時は尚夢中の體で、跳ね起き、四肢を踠き、五體をふるはせて悶える。亘理はそれを背ろからじつと抱き止めて、

亘　お夢でござります。お氣をたしかになされませ。もし〳〵！お夢ぢや！お夢ぢや！

ト子供を諭すやうにいふ。義時はやつと目を開き、亘理の顔をじつと見て、情けない聲で、

義　おゝ！　婆か！……婆！　あゝ！

ト子供に還つたやうな聲で言つたが、やがて太い地聲に戻つて、喘ぎ〳〵呻いてゐる。

亘　おゝ！　では又、お術ないお夢をば御らうじましたか？

トいひ〳〵、脇息によりかゝらせて脊を擦りつゝ「それ、お藥湯を！」と侍女の甲へこなし。心得て、甲は傍らの厨子に備へてある藥瓶より藥湯を天目へ注ぎ、それを亘理へ渡す。

さ、お藥湯をば、さ、お一口めしあがりませ。

ト義時に飲ませる。これにて義時やつとおちつき、目を開き、あたりを見廻し、やがて侍女を見て、亘理を見返り「彼女を彼方へ！」とこなし。亘理心得て、その通り、甲へこなし。甲はすぐに落間へ降り、次の間へ出で、やがて突當りの妻戸口より出て行く。此間、亘理は始終義時の脊を擦つてゐる。

義　（脇息に俯けしたまゝで）まだ誰れかをるか？

亘　いゝえ、もうだアれもをりません。

トこれにて義時は溜息をして、太い聲で、

義　あゝ！……くるしかつた！……(ト喘ぎながら) 此二年このかた……隨分たび〳〵、厭アな夢も見たが……。

トいひかけたが、だしぬけに、

あ！

ト叫んで、抱いてゐる亘理の手を振拂つて、居ながら二尺ほども跳び退つた。で、亘理は膽を潰して、

亘　ま！　どうなされましたぞ？……もし！

ト追ひすがつて義時の貌を覗く。ト少し著ちついて、

義　そゝ、それは何だ!?

ト氣味わるげに下手を指さす。亘理はそれを見て、ずつと下手へ膝を進め、やがて簾の紐の切れて落ちてゐるのを見附けて取りあげ、

亘　これでござりますか？……(ト義時うなづく) これは、お簾の紐の切れて落ちたのでござります。

トいつたが、一寸思入あつて、やがてそれを懷中へをさめる。此間に、義時は自身で脇息を引寄せて、靠れる。ト亘理は寢具を其脊へ被せ掛ける。

亘　これでよろしうございますか？……（と坐に着きて）最前は、よつぽどお術なさうにござりましたが、どんなお夢をごらうじましたのでござります？

ト　これにて義時は靠れて俯伏したまゝ、溜息をして、

義　此間も、同じ夢を、二度見た。……それと、不思議にも、八九分がたまでは同じであつたが、……只此間と異つてゐるのは……（ト一つ喘いて）今夜は、予の大嫌ひの、蛇めが出て來をつた！……髪の毛も、指の先も、何もかも蛇になつて……さうして死んだ奴らが出て來て……

亘　えゝ！？

ト　義時は溜息をして、亘理を見返り、靜かに、とぎれ〳〵に、

義　伊豆の北條にをつた時分……あれはたしか、予が六歳の時だ。……蛭が小島で、蛇に脚を卷かれた！……あれから予は、蛇が嫌ひになつた！……おのしは、女に似合はず、氣丈で、その蛇を鎌で切つて離してくれた。……あゝ！　あの時分は！……

ト　遠い昔をなつかしむらしく、低く靜かに語る共聲は、例になく、一種のやさしみを帶んで聞えた。

亘　ほんに、あの時分は、まだもう、ねつから、おいたいけでいらせられましたつけが……

トまでは言つたが、つい一度に、いろ〳〵の記憶が込みあげて來て、胸が一ぱいになつたらしく、亘理は急に口を噤み、顔を背け、澁面を作つて、無言で、しきりに義時の脊中ばかり擦つてゐる。

トやゝ暫くして、

義　婆！

亘理は、やつと涙を隱して、

亘　はい〳〵！

ト義時は默つて喘いでゐる。

もし！　何か御用でございますか？

義　婆！　物の報いとか、祟りとかいふことは……あるのかなう？

亘　え！

ト我知らずぎよつとした體で、すぐには答へかねたが、やつと氣を鎭め、分別して、物しづかに、

さア、隨分あるものでございませうけれど、それはその、御身分柄にもよりまする。何の！　夢は五臟のお疲れぢやとやら申します。お氣になされるには及びませぬ。……ちと又お脊中を擦りませう。

ト義時のうしろへ廻り、又脊中を擦る。二人とも暫く無言。

此時、落間の上手の簾の彼方——長廊下口——へ深見の小三郎が姿をあらはす。目に殺氣を帶んで、腰に小さ刀を佩び、拔き足して近づき、簾際にひたと身を寄せて、内の様子を窺つてゐる。

義時は、尙脇息に俯伏したまゝで、

義　婆！

亘　はい／＼！

義　おれが死んだ後は、……どうなるだらう？……此鎌倉は、如何なるだらう？

トいひ了ると、息苦しげに微かに呻く。

亘　まア！　何をおつしやられます？　そんな滅相なとがござりまして、どうなりませうぞいな？……よしんば、萬々一の事がござりましたにせい、泰時さまがいらせられます。尼公さまがお息災でいらせられます。何のお氣づかひなさることがござりませうぞいな！

義　いや／＼！……姉も既う六十八だ。先達て見舞に來てくれた時に、さう思つた、あゝ、姉も衰へたと！……ひどく涙脆くなつて、さうして愚癡つぽくもなつた。……もう長くはあるまい！……

トいつて、苦しげに二つ三つ喘いだが、急にびくりとして、顔を擧げ、不安らしく口早に、太い聲で、

義　婆！　あの小三郎めの事を、藤内によく吩咐けたか？

亘　はい。右近から確と申し附けおきましたげにござります。……（トいつたが、不審さうに）が、どうしてまアあのお氣に入りの小三郎が、俄にお勘氣を蒙りましたことやら？　どうかまア、かうした御不加減の折も折、お手不足でもござります、――日頃の忠勤にめんぜられまして、――明日にもなりましたら、どうかまアお勘當をば……。

トいひかけるを目貌で遮つて、

義　（やゝ性急げに）おのしまでか、そんな迂濶な！……（トまでは口早にいつて、一つ喘ぎ、太い溜息をして、しづかに）あいつは油斷がならん。決して油斷がならん。……深見三郎二郎の伜だ！

ト呻くやうに言ふ。

亘　（不審さうに）でござりますればこそ、あれは、常不斷のやうに、父子二代御恩をば受けましたに、父三郎二郎があゝしたお咎めを蒙るやうな不埒を働き、まことに濟まぬことゝ申してをりまする。

義　婆！おのしは知らんでもあらうが、（トきつと亘理の顔を見て）その三郎二郎は、……實は、われが殺させた。

亘　えツ！

ト驚く。小三郎も、きつとこなし、覺えず小さ刀の欛に手をかける。

ト義時は、いはゞ、以心傳心的に、それを感じたかの如くに、

義　や！

トいつて、體をびくりと躍らせる。

亘　（驚いて）もし！どうなされました？

義　（きよと〳〵して）だれか、そこいらへ、來たやうだ。怪しい物音がした。

亘　（こなしあつて）はて、だアれも……何事も……ござりませんが……

義　いや〳〵。……どうも何か來たやうだ。……見て來てくれ。

亘　はい〳〵。かしこまりました。

ト亘理落間へおりる。小三郎あわてゝ姿を隱す。亘理は、上手の簾の陰をも、次の間をも、とくと見廻りて、戻つて來て、

なアんにも、仔細ござりません。……御安心なされませ。

又うしろへ廻りて脊を擦る。これにて義時安心の思入。うと〳〵と眠る體。二人とも暫く無言。

ト義時は又忽ち苦しげに呻き、譫語のやうに、

義　あゝ！　あゝ！　重い！　……あゝ！　苦しい！　あゝ！　重い〳〵！

ト呻きつゞける。

亘　何がさうお重うござります？

義　何だか、おそろしく重いものが、脊中や胸の上に載つてゐるやうで……術ない！　術なうてならん！　あゝ、重い〳〵！

トやつぱり譫語のやうに呻きながら言ふ。

亘　その重い物をば、みィんな、おろしておしまひなされませ。婆が戴きますほどに。(トやさしくいつて)さア〳〵、おろしておしまひなされませ。

トうしろからじつと抱きかゝへて、子供をあやすやうに言ふ。

義　(力の無い聲で)婆！

亘　はい〳〵。何でございます？

義　今になつて考へると……（と微かに喘ぎながら）あんまり酷いことをした。……おれはあんまり……酷いことをした！

トこれにて亘理はじつと思入あつて、返辭を躊躇したが、やゝあつて

亘　なアんの！　お前さま！　そりやみイんな、お家のため、お政道のために、なされましたことでござりますもの！　何の、そんなこと、お前さま！

ト慰めつゝ脊中を擦る。

義　もうちやうど……五十六年になる。一日もかはらず、同じやうに、眞實を盡して奉公してくれるのは、おのしばかりだ！　婆！　全くおのしばかりだ！

亘　ま、お冥加もないお言葉でござります！　勿體なうござります！……

トばかり言つて、涙聲になる。途端に義時は又急にびくりとして、きつと身を起しかけて

義　や！　だれか來たやうだ！

トきよとつくのを、亘理は和めて、しづかに

亘　いえ／＼。だアれも參りはいたしません。だアれも。……また些とお横におなりなされませ。お横に。

トやがて義時を臥す。二人とも又暫く無言。

ト義時は又うと／＼と眠るらしい。亘理は、其寢貌をつく／＼と見おろしてゐたが、とゞこらへかねて泣く。途端に、義時は、一寸目を開いたらしかつたが、す

ぐに臥返りして、ぐつと顏を背けてしまふ。

ト亘理は、もう居たゝまらなくなつたか、少し下手へ退り、袖を口にくはへて、聲を忍びつゝ泣く。

暫くすると、義時は、又急に半身を起しかけて

義　婆！　婆！

ト事ありげに呼ぶ。

はい／＼。

ト急ぎ涙を隱し、あわてゝ傍へ行く。

義　（しやがれた聲で、やゝ口早に）右近も、藤内も、こゝへ呼んでおいてくれ。

亘　はい／＼。かしこまりました。

義　（力ない聲で）女でも、右近は、力がある。……武藝にも長けてゐる。……早く呼んで來てくれ。

亘　はい／＼。

ト起つて、すぐに落間へ降りる。

義　まて／＼！

亘　はい／＼。

ト落間でかしこまる。

義　すぐ戻つて來てくれ。（ト心細げな聲で言つて）それまでは、あの女共を、爰へ呼んでおい

てくれ。

亘　はい〳〵。

ト亘理は次の間へ出で、妻戸口より出て行く。すぐに入り代りて、侍女乙、丙出で來り、

乙　お殿さま、お簾をおろしませうか？

義　（仰向に臥たまゝで）擧げとけ！　擧げとけ！

乙　はい〳〵。

ト乙、丙は落間の下手よき處に佇ひ、やがて双六盤を引寄せて、對ひ向ひ、双六をはじめる。

九つ（午後十二時）の鐘が聞える。

双六をしつゝ、乙、丙は居眠る。

ト上手の廊下ロ――簾の彼方――へ、小三郎が、前と同じ態度で、再び窺ひ出で、侍女らの眠つてゐるのを見すまして、そつと落間へ蹈込む。やがて先づ、すぐそこに在る燈臺の火を吹消し、拔足して上段の間の方へと進み、じつと義時の寢息を窺ふ。やがて、小さ刀の鞘を拂つて、上段の間の框へ右の足を蹈みかける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第四場　伊賀の方の居間

すべて第一幕第三場の通り。時は前の場とほゞ同刻。

中央のやゝ上手寄に宰相實雅。其下手に式部丞光宗。更に其下手の前寄に紀河の矩秀。伊賀の方は、下手の奥の神棚の前に、脊を此方へ向けて坐り、身動きもせず、じつと默禱してゐる。

實　(矩秀に)では、政村は、再度義村どのの方へ罷り越したに相違ないと申すのか?

矩　で、ござりませうかと心得まする。お別邸をお出ましになりましたのは、まだ暮れ果てません頃とやら承りました。それからすぐさま、尼公さま御許へ御參入と承りましたゆゑ、早速御所へ參上仕りまして、伺ひましたところ、とうに御退出にて、三浦さまお邸へとの仰せでござりましたので、すぐさま三浦さまお邸へ駈け附けますると、再度御所へとのお答へ。又ぞろ御所へ取つて返しますると、ちやうど只今退出めされた、多分お別邸が、さもなくば、再度三浦さま方へ、とのお言葉に附きまして、そのまゝ又お別邸へ伺ひましたるところ、お見えになりませぬ。さすれば、一定、三浦さまお邸に、とは存じましたが、あまりお知らせが遲はりましてはと、一先づ立歸りましてござります。

光　はて、合點のゆかんことだ。何故さうあッちこッちを廻り歩いてをるか? 察すると

ころ、右京兆の容態を心配のあまり、例の尼御前の取越苦勞から、世話燒が嵩じての奔走沙汰でもあらうかい！　しかし、義村方と居どころが定れば、もはや尋ねるにも及ばん。身共自身これから參る。……實雅どの、此上は寸刻の猶豫も無用でござる。既に妹に於ても、異議は無いと申す。短兵急に事を發し、眞先に御所を圍んで、こよひのうちに、しやにむに尼公と將軍家とを人質に取つてしまふのが肝要でござる。身共は、これより直樣、義村方へ罷り越し、否應なしに、出陣の致さする。貴殿にも、時を移さず、御出陣下され。さしづめ、あの廣元入道の邸をばお取卷き下され。

實　げに、機會は逸すべからず。しからば立歸つて、すみやかに其手配りを致すでござらう。しかしながら、御邊只ひとり、不用意にて、義村方へお出向あらんことといかゞあるべき？　先日以來、ほゞ同意らしい返答でもござつたれば、よもやとは存じ申すものゝ、從來も、彼仁の去就に就いては、やゝもすれば、いかゞはしい噂もござつた。彼の同族たる和田一黨の謀反の際にも、又彼の公曉どのゝ一條に就いても――、よしそれは、變心、裏切ではないにもせよ、――言はゞ、二股、鼠色、どちら附かずの疑ひもあつたる仁。しかれば、うかと單身にてお出向あらんは……

トいひかけるを光宗とゞめて

光　いや、その懸念ならば御無用。實は先刻、此矩秀から、かの奧庭にての一伍一什を聞くとそのまゝ、多分かやうな段取にもならうかと存じて、屈竟の家の子共――いづれも場數の剛の者――十餘人に、內々申含め、直垂の下に物の具して、後より窃に、當

本邸の裏手の杜まで參り居るやう申し附けおいてござる。多分、もはや參着しをらうと存ずる。彼等を引連れて參る上は、大丈夫でござる。何よりも、時がおくれては事の破れ。すぐさま御用意なされ。

實　さほどのお手配りがござらば、……ではそれがしは、これよりすぐさま。

ト起ちかける。此時、伊賀の方默禱を了り、坐つたまゝにて、此方に向ひ

伊　あ、もし！　暫く。……かりそめならぬ大事の出陣。幸ひの此神酒。

トいひつゝ、例の紅ゐと藤紫の卷紙を挿したる瓶子二箇を、白木の三寶に載せたるまゝ、神棚より取りおろしつゝ

さらぬだに、武門の守り本尊であらせらるゝ正八幡大菩薩は、とりわけ、我家の氏神にておはしませば、其御冥護を祈りまゐらせて、互ひに酒盃を取りかはし、こよひの門出をば祝ひませう。

光　おゝ、それは、時に取つてのよい思ひ附だ！　それ、早く〳〵！

トこれにて伊賀の方、神前の供物の中より洗米を盛りたる土器を取りて、其洗米を他の器へ移し、それを別の白木の三寶に載せ、前の瓶子のそれと共に、左右の手に捧げ持ちて、徐かに實雅の上手へ廻りて、前寄の自己が例の席に着きて

伊　さ、めでたう祝うて、實雅どのから。

トこれより實雅を主座として、光宗、伊賀の方、三人の間に土器を取交すこと。伊賀の方、紅ゐの卷紙を挿したる瓶子を取りあげて、酌をする。三人の間の取交

せが濟むと、伊賀の方は、下手に離れて控へてゐる矩秀へ思入あつて、光宗に向ひ

兄上、あの矩秀は、例の深見の一條以來、引きつゞき、何かと骨折。いはゞ、家の子も同樣のもの。ちやうど此席に居合せたましたのを冥利に、あれへも其神酒のお流れをば。

矩　はッ。

ト光宗うなづき

光　やい、矩秀！　進め。　酒盃をくれる。

矩　はッ。

ト席を進む。伊賀の方、藤紫の卷紙を插したる瓶子を取りて、矩秀が受けたる土器へ神酒を注ぐ。矩秀それを飲むこと。それが濟むと、伊賀の方は光宗に向ひ

伊　兄上、大切の御出陣に、そのお姿のまゝでは、どうやら御不覺のやうでもある。幸ひ、あそこに、父上のお形見の、あの腹卷。

ト上手の壁際の鎧櫃へこなし。

光　おゝ！　いかさま。……定めし父尊靈にも、喜んでお許しなさらう。……矩秀、あれを。

矩　はッ。心得ました。

ト矩秀、鎧櫃を光宗の傍へ運ぶ。光宗すぐに蓋を開け、腹卷を取りいだし、同時に直垂を脱ぎ、着川の支度にかゝる。矩秀手傳ふ。此うち實雅は

實　では、それがしは、一足先へ。……御免下され。

ト會釋して席を起ち、下手へ廻る。

伊　實雅どの！

ト呼ぶ。

實　（立ちどまりて）は。何か御用でござるか？

伊　めでたい凱陣を……（トいひさして、じつと實雅の貌を見て）待ちまするぞ。

トしんみりと言ふ。實雅は、只元氣よく

實　やがて程なく。……御免下され。

トすぐに下手の妻戸を開けて出て行く。伊賀の方は、そのまゝ其後影を見送つてゐる。

此うちに、光宗は腹巻を着し了り、其上へ元の如く直垂を被て、太刀を佩くことなどあつて、伊賀の方に

光　なう、おこと！……大丈夫、政村は、義村が館にとは存ずるが、萬一にも行違つて立歸らば、尚とくと教訓めされ。又、如在はござるまいが、早速郎黨共に吩咐けて、當第は、上下ともに、きつと嚴重にお固めなされ。……では、われらは、これよりすぐに義村かたへ。

トつか〳〵と下手へ行きかける。伊賀の方留めて

伊　あ、もし！　月夜なれば、表門からは人目の憚り。殊に、家の子たちは裏門口との今

のお話。……すぐ此庭口から。

ト正面の奥へこなし。

光　むゝ。

トうなづきて戻る。

伊　矩秀、それ、御案内。

矩　はッ。

トいつたが、彼れは、どうしたか、此少し前から、切りに胸苦しげにしてゐたのであつたが、此時それを忍んで、辛うじて起たうとして、忽ちよろ〱とよろめく。けれども辛と踏みこたへて、正面の壁代を上手へ褰け排け、板敷の次の間へ出で、眞向うの妻戸に手を掛け、それを左右へ開かうとしたが、もういよ〱堪へられなくなつたらしく、其手を離し、たぢ〱とうしろへよろめき、ばたりと壁代の傍へ倒れて身を踠き、苦み悶えてゐたが、それはほんの暫時で、やがておとなしくなつてしまふ。息が絶えたのらしい。

之より先、光宗は、すぐ矩秀の後に附いて、壁代の傍まで進んだのであつたが、此體を見て駭き、覺えず馳け寄つて介抱しようとした。が、伊賀の方が、急に手を擧げて之を制め、意味ありげに目まぜをしたので、何か仔細のあることゝ呑込み、息が絶えてしまつたまでは、たゞじつと突立つて、見おろしてゐた。

伊賀の方も、同じく立つて、斜に見おろしてゐた。

矩秀が全く動かなつてしまふと

光　(伊賀の方を見返りて) これは!?

　ト説明を求め貌に言ふ。けれども伊賀の方は其問には答へないで、しづかに

伊　兄上、事は....(トいひかけて、じつと光宗の顔を見つめて)成就するとおぼしめすか?

光　(いよ〱いぶかしげに) え? 事とは?....今夜の、この、旗擧の事か?

伊　(しづかに) いかにも。....おそらく、事は破れましたぞ。

光　え?....とは又なにゆゑ?

伊　さア....

　トいひながら、徐かに元の席へと歩み戻る。光宗も餘儀なく、共に、二三歩歩み戻つたが、やがて立ちどまつて、伊賀の方の座に着いたのを、けゞんな貌をして見おろしてゐる。伊賀の方は座つたまゝ、それを見あげて

實は、此事の成否の心元なさに、最前もいつもの通りに、一心不亂となつて、大菩薩に祈念を籠めましたるところ、例の如く、夢現に、夫義時は餘命翌をも俟たず、また、此企は今宵の中に露顯し、破るゝ、と何處ともなく微かな御聲は、疑ひもなく神のお告げ!....兄上、此上は、豫めお覺悟なされて、事いよ〱破れたらば、父上のお名に恥ぢぬやうに、――我家の名折れにならぬやうに、――見事な、お手際な御最期をなされませ。どの道、潔いお覺悟が肝腎でござりますぞ。(トいつて、じつと思入あつて)今の矩秀の言葉で察すれば、政村は、もうとうに、敵方の人質となつたに相違ない。

ト靜かに、しかし蕭然と獨り言のやうに言つて目を瞑ぐ。光宗は、此間、其貌を、
不審さうに見詰めてゐたが、此時

光　さては、……政村の行くへをば氣に痛んで、……心配の餘り……

ト いひかけて、覺えず歎息して

あゝ！　日頃の、男まさりも、大膽な肝魂も、……あゝ、さすがは女氣！　一大事の
際に臨んで、……こりや、妹！……どうかしめされたな？

ト伊賀の方は尙默つて瞑目してゐる。で、光宗は、又も矩秀の死骸の傍へ歩み戻
り

それにつけても、合點のゆかぬは、……この矩秀の爲體！

ト又きつと伊賀の方を見返りて

若しやおことが？……

ト探るやうに言ふ。

ト伊賀の方は目を開きて、

伊　さア、……

トいひながら徐かに席を離れ、

內證事を知り過ぎた其うつけ者。

トいひつゝ徐かに光宗の居る方へ歩み進みて

事が成就しても、行く〳〵は邪魔物。破れたら尙の事。たれ憚らず、有る事、無い事、

光伊光

尾鰭をつけて、あしざまに言ひ觸しあるくは必定ゆゑ……

　ト いひさして、矩秀の死骸に指さし

ま、ごらんなされ、ほんにまア、不思議な、この、藥の效能！　十九年のむかし、左馬助政範が飲んだのは、すなはち此毒藥ぢやと夫の話。只少しの苦みにて、汚くるしい血も吐かず、すや〳〵と眠るが如き此死樣！

　ト じつと矩秀の死貌を、會心げに、見つめてゐる。で、いよ〳〵光宗は、これは氣が狂つたのかと思つたらしく、太い溜息を吐いて、情けなげに

妹！

　ト 只一語言つたが、あとは言ひかねて悵然としてゐる。これにて伊賀の方は振返り、光宗の情けなげな貌を見ると、これも

兄上！

　ト 只一語、沈痛な聲で呼んだつきり、互に一二分間じつと無言で、貌を見合せてゐる。やがて、光宗は、手早く廚子の上の驛路を取つて激しく振鳴らす。

　ト 程なく侍女の田毎が、急ぎ足に、下手から入つて來る。

（それを見るや否や）それ！　奥方を介抱せい！　身共は心が急く。後を賴むぞ！

　ト いふや否や、妻戸を押開いて、庭上へ躍り降りる。

扉が左右へ開くと、十一日の、落ち方の月の冴え渡つてゐる庭の面の一部が見える。但し光宗の姿は、すぐに見えなくなる。

ト伊賀の方は、駭いて、けゞん貌してかしこまる田毎を、しづかに制して

伊　はて、わしが如何したのでもない。急病で、矩秀が頓死したのぢや。……あの死骸をあちらへ。

ト壁代かげの死骸へこなし。

田　はゝ。

ト起ちかける。

伊　あ、これ！……まだ其外に、大切な用事がある。……こゝへ。

ト傍近く呼び寄せて、小聲に

別第の事が氣かゝる。人目にかゝらぬやうにして、そつと、あの奥庭づたひに。……な。……

ト正面の奥へこなしあつて、何事をか、更に聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。

田　はい〳〵。……はい〳〵。……はい。心得ましてござります。

ト呑込み

では、御免遊ばしませ。

トいふや否や、急ぎ甲斐々々しく身支度して起ち、先づ手早く矩秀の死骸を板敷の下手へ運び了り、すぐに戻つて來て、開けはなしてあつた妻戸口より庭へ降り、これも忽ち姿を消す。

此以前、伊賀の方は、二階廚子の傍らに座して、錠の下りてゐる部分を開けて、

何やら書類を幾通か取り出すことあつて、此時、それを一纏めにして手にし、起ちあがる。

途端に、やゝ遠くにて、頻りに陣貝を吹鳴らす音が聞えはじめる。伊賀の方、きつと聞き耳を立てる。其陣貝の音がだん〳〵殺氣を帶んで來る。ト何處ともなく鬨の聲のやうな夥しい人勢が――これもやゝ遠くにて――聞える。其中に陣太鼓の音も聞えて來る。

ト下手の方俄に騷がしく、侍女の小柴が、血相を變へて、妻戸を開きもあへず、駈け入り、膝まづいて

小柴　申し上げます。大變でござりまする！

伊賀　（おちついて、しづかに）何事ぢや？

小柴　式部の丞さまには、先刻お庭口からお立歸り遊ばしまする處を、豫て、あのお裏門口に待ち受けをられました御所がたのお討手のために、ちやうどあの杜の傍で、激しいお働きの後、お囚人におなりなされましたさうにござります。つい只今かた承りますれば、豫てあそこには、御家來衆がお待ち受けの筈でござりましたげなが、其人達は、其前に、途中でお召捕になつたとやら申します。そればかりではござりませぬ。御謀叛露顯とござりまして、中將さまにも、最前こなたよりお歸りのお途中、大江さまのお手にて、やつぱりお召捕になりましたさうにござります。

ト息つぎあへず語る。

伊　（やはり靜かに、しかし緊張した調子で）政村は？

小　四郎さまには、將軍さまや尼公さまと御一しよに、亥の刻頃に、大江の入道さまお館へ、窃かにお移り遊ばし、其後、三浦さまをはじめお大名がた御一同、おひ〳〵御陣立をなされて、かなたへお詰切のやうに承りをりまする。

ト伊賀の方これを聞き了りて、しづかにうなづき

伊　よし〳〵。……小柴、わしは少し頭が重うてならぬによつて、ちつとの間寢みたい。太儀ながら、寢床をしつらうてたもれ。

小　はい〳〵。……かしこまりました。

ト言つたものゝ、合點がゆかぬといふ思入。やがて起つて、上手の簾の内——上段の間——へ入る。

此間に、伊賀の方は、下手の神棚の前に座を占めて、先刻の書類を燈明の火にて燒くこと。燒きじまふと、起つて厨子の方へ行きかける。

途端に、此時まで明けはなしてあつた正面奥の妻戸口へ、侍女の田每が半身を現したのが、なほ冴えてゐる月の光で見える。ト見るうちに、もう板敷へ駈け上つて

田　御方さま！　御方さま！　大變でござります！　大變でござります！

トけたゝましく呼びながら、駈入つて來て、今ちやうど厨子の前に立ちどまつた伊賀の方の前に膝まづいたが、二の句を繼ぎかねる程に息を切らせてゐる。

伊賀の方は、きつとそれを見おろして

伊　（しづかに、低く、併し緊張した調子で）御臨終か？

田　（なほ喘ぎながら）はい。……（トいつたが、又一つ息を呑んで）今日、御勘當の上、お目通りをお遠ざけになりましたあの深見の小三郎が、どうして、いつの間に、御寝所へ忍び入りましたやら、お寝息を窺うて、短刀にてお脈元を刺し貫き、すぐにお落命でござりました。

トこれにて伊賀の方も、さすがにびつくりした思入にて、思はず座りして、

伊　その小三郎は？

田　たつた一足おくれて立戻られました亘理どの、右近どのが、それを見るより走り入つて、すぐさま其場にてお取押へに相成り、御誅戮なされましてござります。

伊　では、わが夫をば、父三郎二郎の仇敵と怨んでの爲業ぢやな？

田　はい、御意の通り、最初はさやう申し立てましたげにござりますが、御老女がたが、「科あつて御成敗になつた親の爲に、大恩ある御主君を仇敵と怨むとは道理知らず」、とお叱りになりしところ、「朝廷の爲に、天に代つて、逆臣を誅するのぢや」とやら、最期に申し立て、絶息れましたさうにござります。

ト此間、伊賀の方は、じつと瞑目して聽いてゐたが、やがて

伊　硯箱を。

トこれにて田每は起ちて、上手の廚子の方へ行く。其間に、伊賀の方は、しづか

に、併しながら手早く、傍らの三寶に載せてある瓶子――藤紫の巻紙を挿したる方――と土器とを取りあげて、神酒を注ぎ、すぐに飲乾して、元の通り三寶に載せて遠くへ押し遣ること。此うちに田毎は厨子から硯箱を取りおろして、持つて來る。

之より先、小柴は上段の間の簾を悉く捲き上げる。寢具其他よろしくしつらひあること。

此時、小柴は、田毎と並びて、伊賀の方の下手にかしこまり

小　お寢床をしつらひましてござりまする。

ト此間に、伊賀の方は、ほんの七八行宛らしい書面をさら〳〵と二通認め了り

伊　お丶！　太儀であつた。……（書面を巻きて、結び封にして）ほんの暫時寢みたい。半時も經つて醒めなんだら、遠慮なう起してたもれ。……

トいひつゝ徐かに起ち、すぐに上段の間へ上る。田毎と小柴とは貌を見合せて、不審と不安とを混交にしたといふ思入。

小柴！　この簾を。

トこれにて、二人とも起ちあがりて、簾をおろすこと。

やがて二人は、ずつと下手へ來て、貌を見合はせ、殆ど同時に

小　田毎どの！

田　小柴どの！

ト小聲で言つたが、上段の間へ思入あつて、ずつと寄り、互ひに聞えぬ程の聲にて何か語り合ひ、そのたびに驚く思入よろしく、更に上段の間へ思入、こなし。とゞ、うなづきあひ、再び上段の間の方へ行かうとする。

途端に、下手の方又俄に騒がしく、やがて四郎政村を先に、老女亘理、急ぎ足にて、妻戸を開きつゝ駈け入る。

政　(急いたる調子で)これ、母上は何處においでぢや？

ト小柴、田毎は、あわてゝ膝まづき、敬禮して

小　これは／＼！　いらせられませ。只今あの、一寸御寢なつてゞござります。

政　なに？　此一大事の折からに、御寢なつて？……

亘　ではまだ何事も御存じないのでござりますか？

小　いえ／＼。何もかもようごぞんじでござりまする。

亘　あの、ようごぞんじで？　(トいつたが、一寸聲をひそめて)あの、老公さま御他界――御變死――の其事をも？

田　はい。つい只今、申し上げましたばかりでござりまする。

亘　えゝ!?　それでは若しや？……(トあわてて)四郎さま、それ、それ！　ともかくもお寢間の様子を！

トこれにて政村、血相を變へて、簾を褰げ、上段の間へ駈け上る。　亘理もつゞく。トすぐに簾のうちにて

政　母上！　母上！……ヤッ！　母上には！

亘　やヽ！　こりやもうとうに！……これ、おもとたち！　おもとたち！　お簾を〳〵！

　ト これにて小柴、田毎、急ぎ上段の間に駈け寄りて、簾を捲き上げること。
　ト 伊賀の方は、寝具の上に、仰向に、安らかに、横になりて、さながら眠つてゐるやうにして、死んでゐる。少しも悶え苦んだ跡はなく、聊かも取亂した體もない。枕元に、先刻の結び文が二通置いてある。

政　(泣きながら) 尼御臺にお縋り申した效あつて、母上のお命乞ひが叶うたゆゑ、取るものも取りあへず、騒け附けて參りましたに、母上！……母上さま！　早まつたことをなされましたなア！

　ト 泣く。亘理も泣きながら

亘　お髪の毛の、たゞの一筋でも亂れてはをりませぬ。まるでまア、やすく〳〵と、お眠り遊ばされていらせられるかのやうな此お貌附！……おゝ！　こゝに何やらお書置らしいものがござります。
　ト 二通の遺書を取りあげて
もし！
　ト いひつゝ政村に渡す。政村は、泣く〳〵、先づ一通の結びを解いて、讀むことありて

政　たつた十行にも足らぬ此短いお書置のうちに、殘る限もないお言ひ殘し！……何もか

亘　小田小　亘

も、御自分ひとりでお引受けなされての此お覺悟！

　トいつて、片手で目をおさへて、又暫く泣いてゐたが、やがて別の一通の結びをも解いて、一寸讀んで見て

これは、そちらへ。

　ト亘理に渡す。亘理はすぐにそれを讀んで見て

おゝ！　これはお侍女たちへの……

　トいひさして、すぐ上段の框の下で泣いてゐる小柴、田毎へ渡しながら

年ごろの御奉公をお美めなされての、お慈悲のお言葉。

　ト此時、政村は、前の書置をも亘理へ渡し、又死骸に縋りて泣く。

　此うち小柴、田毎は、渡された一通を、互ひに取り交しつゝ讀んで、泣きながら

數なりませんわたくしどもにまで……

このやうなお情けぶかいお言葉！

お遺物のことまでも……

　トあとをいひかねて、聲を合せて泣く。此間に、亘理は涙を拭き〳〵、書置を讀み了りて

あゝあ！　お立派な、お手際な、お見事な御臨終！

　トいひ終つて又涙を拭ふ。

幕。

禁無斷興行

承久の亂後、二年を隔てて、元仁元年六月十三日、義時死す。(六十二歳)。「東鑑」に曰く「日ごろ脚氣の上霍亂にて、いよ〳〵危急なりしかば、若君に申して、今朝寅の時に出家して死す。昨朝より彌陀を唱へて怠らず。外縛(げばく)の印を結び、念佛十遍の後終る。順次往生といふべし」と。「保暦間記」には、近習の小侍ひの爲に刺し殺されしと見ゆ。一説に、近侍に深見三郎といふ者あり。始め彼れが父數ケ所の地頭たりしに、罪ありて殺さる。其三人の子は流されき。年經て赦されて、長子三郎近侍となる。父の罪をも贖ひ、又弟をも召仕はれんことを思ひて、夙夜すること五年に及びしかど、一所をも賜はず、又弟をも赦さざりしかば、怨みて、其病ひに乘じて刺したるを、亘理平太といふ者七十餘歳なるが、侍ひに在りて押し隔てしかど叶はず、義時は刺されぬ。深見をば亘理討ちけりともいふ。(讀史餘論)

「本朝通鑑」にも曰く「義時近侍有二深見三郎者一、其父嘗爲二數邑之宰一、好レ色極レ驕以二淫樂一爲レ業、飲宴爲レ常、故私斂二公稅一、家累二千金一、義時聞レ之、糾二其罪一而誅レ之、放二流其三子一、三郎者其長也、歷レ年赦レ之、擧二三郎一爲二近侍一、三郎欲下贖二父罪一乞中弟赦上而仕二義時一太勤、日夜侍レ之不怠、如レ此五年、然義時不レ與二一邑一、初請レ赦二其弟一而未レ果、三郎恨レ之、及二義時疾一、窺二其隙一刺レ之以稱レ報レ讐、亘理平太、年七十餘、在レ傍欲レ隔レ之而不レ能、三郎遂弑二義時一、亘理追殺二三郎一、北條氏忌レ之、稱二疾卒一云。


此の新らしきマスコット
オノト
を祝福せよ！
然らば成功は與へられん！
New Mascot!
ONOTO
萬年筆用
アテナ・インキ
金參拾錢
オノト萬年筆
無飾金七圓
飾付金八圓
以上
送料各金拾貳錢
東京日本橋區
丸善株式會社
大阪心齋橋筋
京都三條通
福岡上西町
仙臺國分町

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ヘフディング著

早稲田大學講師 北昤吉譯 （新刊）

現代哲學

第五・六編

近世哲學史

コペンハーゲン大學教授ヘフディング氏は文藝批評家ブランデス氏と共に丁抹の生める世界的驚異たる二大偉人なり。ヘフディング氏の『近世哲學史』二卷は筆を文藝復興期に起し十九世紀の末葉に至るまでの歐洲近代思想の發達を辿れるものにして、其の渉獵する文獻の多方面なる、其の同情する範圍の廣濶なる、其の解說の明快なる、其の筆力の暢達なる、渠れが之に依りて世界の學界に雄視する所以決して偶然ならざるを見る。歐洲文明の合流地、近代思想の大寶庫——啻に本書を外にして他に多くを求むべからず。譯者は哲學史の良書なく殊にカント以後の思想發展を知るに由なき我が國の現狀を思ひ、刻苦勉勵する正に三年、本書を譯して我が學界の缺陷を塡補せんとす。苟くも歐洲近代思想の流源に遡つて現代の思潮を理解せんとする者は先づ本書を讀まざるべからず。惟ふに原書の價値は譯者の努力と相俟つて我が思想界に何物かを裕與せずんば止まざらん。

背皮上製全二冊 壹千四百餘頁
正價 各金貳圓貳拾錢
郵税 各金拾貳錢

既刊

現代哲學第一 ベルグソン著 金子桂井共譯
創造的進化
背皮製全一冊 正價二圓廿錢 郵税十二錢

現代哲學第二 ヒルン著 本間久雄譯
藝術之起源
背皮製全一冊 正價一圓八十錢 郵税十二錢

現代哲學第三 ニイチエ著 金子馬治譯
悲劇の出生 善惡の彼岸
背皮製全一冊 正價貳圓廿錢 郵税十二錢

現代哲學第四 シラー著 田制佐重譯
プラグマティズム
背皮製全一冊 正價貳圓廿錢 郵税十二錢

發兌 東京牛込早稲田 振替一一二三番 **早稲田大學出版部**

（賣捌）東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂 大阪盛文館、名古屋星野文星堂、其他

信用なき店舗及び怪しげなる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　京橋區西紺屋町　良明堂
同　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立誠堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年四月廿八日印刷納本
大正七年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　管谷憲治
印刷人　高木西三

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co.. Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す